

深谷市

しん や しき ひがし ほん ごう まえ ひがし

新屋敷東・本郷前東

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

- III -



(第2分冊)

1992

目次

序
例言
凡例

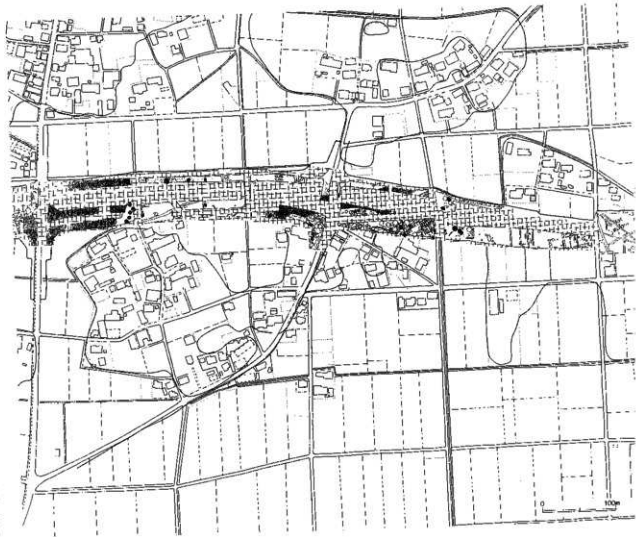
(第1分冊)

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	新屋敷東遺跡の調査経過	3
3	発掘調査の方法	5
II	遺跡の立地と環境	6
III	調査された遺構と遺物	14
1	縄文時代後・晩期の遺構と遺物	21
2	古墳時代第Ⅰ期の遺構と遺物	77
3	古墳時代第Ⅱ期の遺構と遺物	125
4	古墳時代第Ⅲ期の遺構と遺物	175
5	古墳時代第Ⅳ期の遺構と遺物	243
6	古墳時代第Ⅴ期の遺構と遺物	289

(第2分冊)

7	古墳時代第Ⅵ期の遺構と遺物	391
8	古墳時代第Ⅶ期の遺構と遺物	501
9	奈良・平安時代の遺構と遺物	567
10	中・近世の遺構と遺物	633
IV	自然科学的分析—土師器の胎土分析—	658
V	考察—古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡—	667

写真図版



第339図 古墳時代第Ⅵ期の新屋敷東遺跡

7 古墳時代第Ⅵ期の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の概観

新屋敷東遺跡の集落は、引き続き同様な展開を示し、各住居跡は、さらに細かな単位群に分けられるようである。調査範囲内では、とくに大形の住居跡や特殊な建物跡は確認されていない。しかし集落は、緩やかだが確実に変貌している。大変革期である第Ⅶ期への序章となっている。そこでは河川跡が、前段階と同様に集落の諸機能に大きく関わっていた。整然とした竪穴式住居跡の配置はさらにばらけ、それまでの東端と西端に集中する傾向が見られる。

一方食器は、有段口縁杯の漸移的で緩やかな変化を示す。甕は胴部がさらに薄く削られ、大形鉢も各住居跡に見られる。

各地で前方後円墳が姿を消し、古墳時代も大きな曲がり角を迎えるこの段階。北武蔵の各集落では、まだ構造的な質的転換は見られず、僅かに集落の立地を移すに過ぎない。あくまでも第Ⅵ期は第Ⅶ期への漸移的段階なのである。

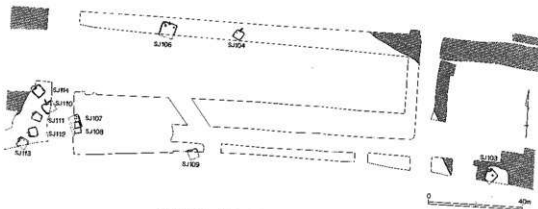
■集落の構成 確認された竪穴式住居跡は、25軒である。第V期の5群から、7群へと変化する。集落内部の竪穴式住居跡が、占地の移動等をもとに、集落構成を僅かに変化させたと思われる。東からグルーピングを行えば、第1群(88・90・91・92・93・94・95)第2群(96・97・98)第3群(99・100)第4群(101・102)第5群(103)第6群(104・106・109)第7群(107・108・110・111・112・113・114)となる。あくまでも各竪穴式住居跡の構築場所の近接によって、グルーピングしたにすぎない。しかし各単位群の構成は、少数化しているようであり、またきわめて大きな竪穴式住居跡も見られない。

■竪穴式住居跡 完掘できた住居跡が多くなってくる。とくに大形の住居跡は見られないが、竪穴式住居跡の平面形態及び規模によって、三つのタイプの抽出が可能である。①大形の竪穴式住居跡(89・90・92・97・102・103・106)②長方形の竪穴式住居跡(91・101・111)③小形の竪穴式住居跡(95・96・98・99・100・104・109・107・108・110・112・113・114)である。とくに第7群が、小形の竪穴式住居跡のみで構成される。このブロックは、後にも先にもこの段階以外は、竪穴式住居が営まれなかったことは重視すべきであろう。

■カマド カマドを調査した住居跡は、19軒に及び最多である。短煙道・長煙道のカマドが、ともに確認されている。短煙道は、第102・106号住居跡のみである。長煙道は、第89・90・91・92・95・96・98・100・101・103・104・109・110・112・113・114住居跡で確認されている。圧倒的に長煙道が多い。カマドの構築補強材として甕が、袖ばかりではなく、天井部の一部にも使用されている。長煙道のカマドのなかには、第98号住居跡のように110cmもあるカマドも存在する。

■煮沸具 煮沸具は、甕と大振りの鉢形土器である。前段階とあまり大きな変化はない。下膨れの甕はみられなくなり、肩部を斜めにヘラケズりする長胴甕が、大量に生産されている。第90・91号住居跡では、使用済みの甕をカマドの補強材として転用していた。

第91号住居跡からは、大量の煮沸具が、出土している。甕36・壺6・小形壺6が、床直の状態出土している。カマドと反対側の東南の隅に、まとめられた形で確認された。とくに竪穴の埋没過程の一時期に、集中して投棄されたのではなく、出土状態からは、少なくともこの竪穴式住居の機能と、関連させて考えなくてはならない。



第340図 古墳時代第VI期遺構全体図(1)

■食膳具 有段口縁環は前段階に引き続き、食膳具の中心を占め、隆盛を誇る。口縁部の構成は、やはり2段だけで第V期に比べると小振りになっている。C類とした小振りの底部から大きく開くタイプの環が、目立ってくる。器面の黒色処理や、口縁部の段の表出手法は、継承されていたと考えられる。

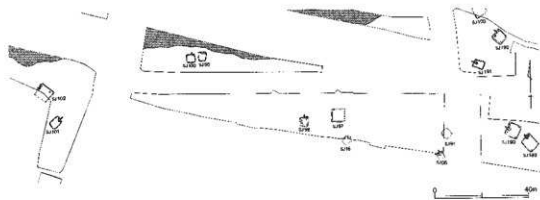
■貯蔵具 貯蔵具としての明瞭な甕・壺は、第90・91・100・104号住居跡を除いてみられない。全体から見れば数量的には少ないが、2～3の単位群に一個体の割合で見られることは、注意しておく必要がある。

■捏ね鉢 穀物を碎き、粉化させ、これを練りあげるための器と思われるものが、数点出土している。底部が厚く、器肉も厚い鉢形の器で、須恵器・土師器共に見られる。須恵器は、第89号住居跡から、土師器は、第100号住居跡から出土している。内面の底部分がとくに荒れており、凹凸が激しい。使用方法やそのほか不明な点が多いが、こうした土器が、集落の土器組成のなかにあることは注意しておく必要がある。

■須恵器 先の捏ね鉢、第91・106号住居跡の坏身、第92号住居跡の坏蓋、第94号住居跡の高坏、第97・110号住居跡の大型壺など、各住居に一点あれば良いほうである。

■比企型坏 武蔵の国でも、荒川以南の比企地方から多摩地方にかけて、広く分布するいわゆる比企型坏は、有段口縁環と相前後して登場する古墳時代後期の特徴的な土器群である。有段口縁環の分布する地域では、全くといってよいほど見られない。口縁部外面及び内面を、真赤に彩色する食膳具が特徴的で、有段口縁環の黒色処理技法とは排他的である。ただし各集落に1・2点まま搬入されているものがあり、両者の交流の一端を知ることができる。新屋敷東遺跡では、とくに第97号住居跡から典型的な比企型坏が出土している。

■編物石 編物石は、第V期に比べ各住居跡でまとまって出土している。第92号住居跡では22個、第98号住居跡では13個、第89号住居跡では19個、第90号住居跡では11個、第91号住居跡では11個となっている。とくにまとまって第1単位群に編成された竪穴式住居跡から出土していることは、注意しておく必要がある。



第341図 古墳時代第VI期遺構全体図②

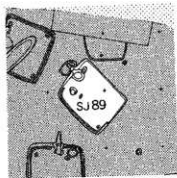
第148表 古墳時代第VI期住居跡一覧

No	住居跡規模				方				貯蔵穴	備考		
	真物長さ	短軸長さ	短辺深さ	形状	短軸長さ	短軸幅	右軸長さ	左軸長さ			形状	幅
89	4.93	6.25	0.43	長方形						2.40		キ-259
90	5.62	5.50	0.32	正方形	1.25	0.45	0.75	0.83	C類	3.30		キ-260
91	4.18	3.30	0.34	長方形	0.94	0.30	0.65	0.70	C類	1.80		ヒ-302
92	5.05	4.73	0.25	長方形	1.18	0.29	0.71	0.80	C類	2.30		セ-261
93			0.41	正方形								シ-262
94			0.30	正方形								ミ-265
95	3.18		0.50	正方形	1.19	0.33			C類	1.20		キ-265
96			0.38	正方形	0.91	0.43			H類			ユ-271
97			0.20	長方形								メ-272
98	3.70	3.60	0.20	長方形	1.20	0.33	0.70	0.55	C類			メ-275
99	3.80	3.40	0.38	長方形								ヒ-282
100	3.60		0.40	正方形	0.78	0.43			D類	1.10		モ-283
101	4.78	3.63	0.66	長方形	1.43	0.23	0.47	0.58	C類	1.85		メ-292
102	6.35		0.13	長方形						2.90		シ-293
103	5.13	4.28	0.12	長方形	0.53	0.42	0.61	0.89	B類	2.50		セ-302
104	3.67	3.60	0.05	正方形	1.38	0.48	0.49	0.32		2.65		ヘ-308
105												イ-312
106	6.95		0.17	長方形	0.50	0.31	0.62	0.70	A類			ヘ-328
107			0.10	長方形								ス-331
108			0.27	正方形								セ-331
109	4.23		0.13	正方形	0.75	0.31	0.92	0.78	C類			モ-323
110	4.45		0.28	長方形	1.05	0.33	0.73	0.79	C類	0.70		シ-334
111	3.86	2.98	0.14	長方形	0.31	0.39	0.56	0.51	A類	1.80		ス-334
112	3.77	3.75	0.36	正方形	0.56	0.30	0.54	0.74	B類			セ-334
113	4.25	4.15	0.31	正方形					B類	2.30		モ-335
114	4.42	4.04	0.29	正方形	0.46	0.40	0.70	0.66	A類	1.50		イ-334

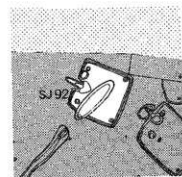
(2) 遺構各説 一遺構構築段階一

第89号住居跡（調査時C区19号住居跡）

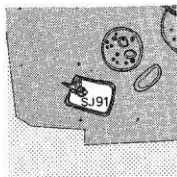
キー259グリッドに位置する。重複関係はみられない。全体像の分かる貴重な例である。住居跡の規模は、長軸4.93m、短軸6.25mを測る。掘り込みの深さは、43cmである。壁周溝は、北・西辺にみられるが、他のところにはみられない。柱穴は確認されていない。カマドの右側に貯蔵穴がみ



第342図 位置図



第343図 位置図



第344図 位置図

られる。円形の小さな貯蔵穴で、掘り込みも浅い。

カマドは、北壁右よりに確認されている。袖については明瞭ではなく、確認することはできなかった。細い煙道が、緩やかに壁外に延びている。詳しい土層断面図が残されておらず、詳細を知ることができなかった。

出土遺物は、土師器杯・甕・甔・短頸壺・こね鉢・須恵器こね鉢などがある。

第90号住居跡（調査時C区18号住居跡）

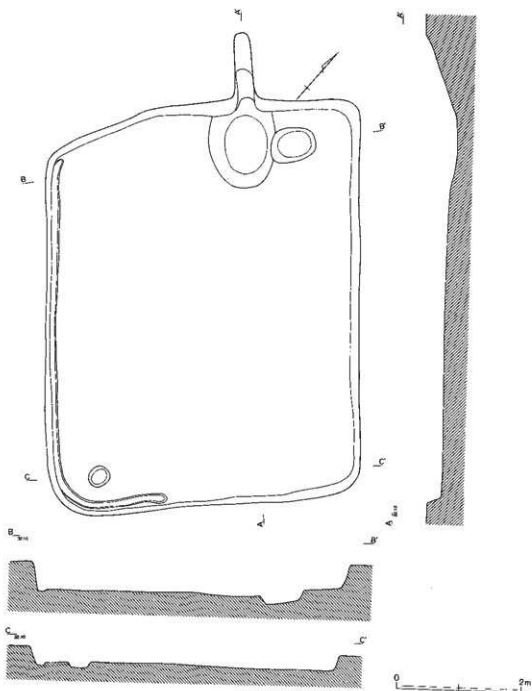
キー260グリッドに位置する。重複関係は全くみられない。規模は、長軸5.62m、短軸5.50mを測る。掘り込みの深さは32cmである。重複遺構がなく、単独に確認された住居跡であり、全体像の知れる数少ない例である。壁周溝は、北辺のカマド部分を除いて完周している。床面には、各隅の部分に柱穴が確認されている。但し大きさも小さく、あるいは補助柱穴の可能性もある。カマドの右側には、貯蔵穴がある。横長の楕円形で、やや深めの貯蔵穴である。

カマドは、西辺に接し、右よりに構築されている。左右の袖は大変長く、地山掘り残して造られ、壁外へ袖の長さの1.5倍程度の煙道が延びる。燃焼部には、焼土と炭化物の堆積層が認められ、焚き口部は広く造られている。被熱痕跡も確認された。燃焼部はやや掘り込みが認められる。燃焼部から煙道へは、徐々に緩やかなスロープを描きながら、煙り出し穴へと続く。住居跡内の覆土の堆積状況から、カマドが一旦崩壊してから、堅穴部分へ土砂が入ったことが分かる。

覆土が、地山の堆積層と近似していて検出が困難であった。出土遺物は、土師器杯・高杯・甔・甕・壺・短頸壺等がある。

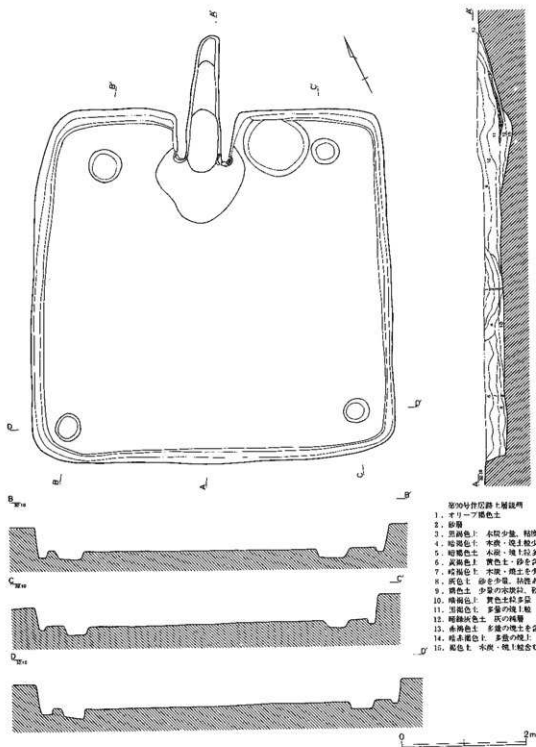
第91号住居跡（調査時C区13号住居跡）

キー262グリッドに位置する。重複関係は、みられない。調



第 345 図 第 89 号住居跡

発掘工程の関係から、東西半分づつ調査しなくてはならなかったため、資料上の欠陥がある。住居跡の規模は、長軸4.18m、短軸3.30m。掘り込みの深さは、34cmと深い。壁周溝は、カマドの部分を除いて全周している。明確な柱穴は、確認されていない。カマドの右側に貯蔵穴が確認されている。円形の貯蔵穴で比較的深い。



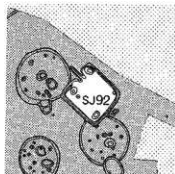
第90号住居跡土層説明

1. オリーブ褐色土
2. 砂層
3. 黒褐色土 木炭少量、粘灰質
4. 暗褐色土 木炭・炭土粒少量
5. 暗褐色土 木炭・炭土粒多量
6. 黄褐色土 黄色土・砂を含む
7. 暗褐色土 木炭・炭土を少量
8. 褐色土 砂を少量、粘灰あり
9. 褐色土 少量の炭灰粒、砂質
10. 暗褐色土 黄色土粒多量
11. 黒褐色土 多量の炭1粒
12. 暗緑灰色土 灰の粘層
13. 赤褐色土 多量の炭土を含む
14. 暗赤褐色土 多量の炭1
15. 褐色土 木炭・炭1粒含む

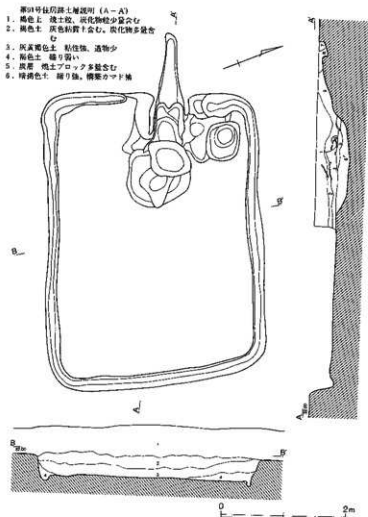
第 346 図 第90号住居跡

カマドは、西側右よりに確認され、比較的袖の長いカマドである。袖の長さの1.5倍程度の煙道が付く。燃焼部から煙道にかけて一段高く造られ、徐々に立ち上がっていき、煙り出し穴の部分で垂直に立ち上がる。煙り出し穴は垂直に掘られ、煙道部分よりも深い。

遺構がまばらに存在していたため比較的順調に進められた。出土遺物は、土師器環・短頸壺・甕がある。とくに甕は多量に出土している。



第347図 位置図



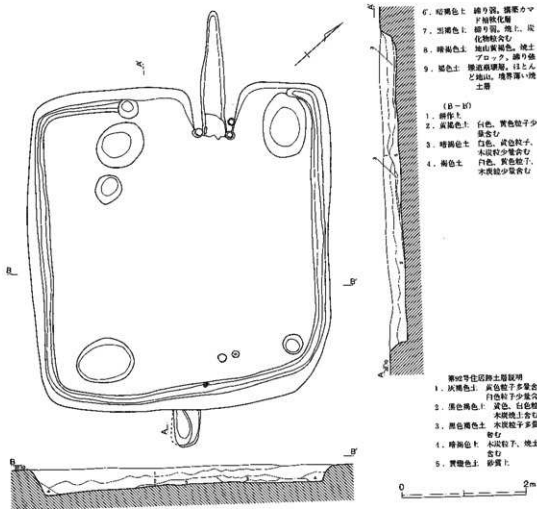
第348図 第91号住居跡

第92号住居跡（調査時C区12号住居跡）

セー261グリッドに位置する。重複関係は、第2・3号住居跡よりも新しい。全体が調査された数少ない例である。住居跡の規模は、長軸5.05m、短軸4.73mを測る。掘り込みの深さは25cmである。壁周溝は、カマド側の壁を除いて完周している。床面には、6か所の緩い落ち窪みがみられる。しかし柱穴と考えられるものはなく、唯一カマドの右側に存在する緩い窪みが、貯蔵穴と思われる。

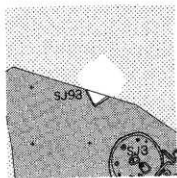
カマドは、右よりに構築されている。左右の袖は細長く、地山崩残して造られ、壁外へ袖の長さの1.5倍ほどの煙道が延びる。燃焼部は、やや狭い。燃焼部の火床は、深く掘り込まれており、煙道部へは、緩い段をもって立ち上がっていく。煙道部の幅は、燃焼部の幅とそれほど変わらず延びており、煙り出し穴で緩やかに細くなっている。

遺構の確認は、他の遺構の重複が少なく、順調に進んだ。



第349図 第92号住居跡

第92号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・甔・甕・須恵器
環蓋などがある。



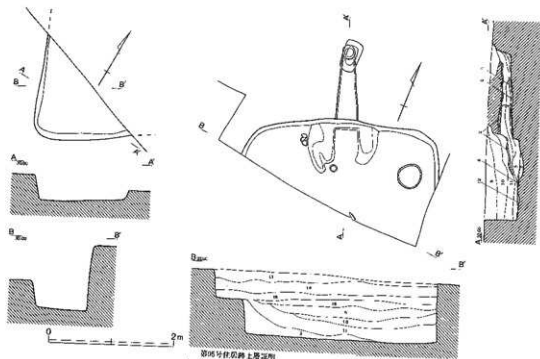
第350図 位置図

第93号住居跡（調査時C区17号住居跡）

ン-262グリッドに位置する。重複関係は、調査区域内では
みられない。北側の大半が調査区域外になっている。規模は、
不明であるが、掘り込みの深さは41cmほどある。壁周溝・貯蔵
穴はみられない。

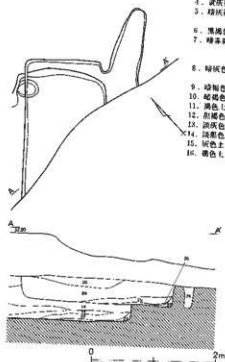
カマドは、確認されていない。

遺構が、調査区域の際に位置しているため、全体像が全く分
からなかった。



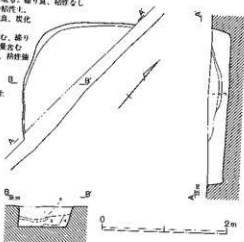
第95号住居跡上層説明

1. 黄褐色土 コームを多量含み、細り貝、粘粒多
2. 赤褐色土 粘土による焼土
3. 淡灰褐色土 粘土を少なだローム層、細り貝、粘粒多
4. 暗灰褐色土 粘土をごく少量含み、粘粒土層、細りやや貝、粘粒多
5. 黒褐色土 腐敗な粒下から成る、細り貝、粘粒多
6. 暗赤褐色土 コームを含む粘粒土、細り貝、粘粒多、炭化物少量含む
7. 暗褐色土 粘土層を少量含む、細り貝、炭化物少量含む
8. 暗褐色土 粘土層を少量含む、細り貝、炭化物少量含む
9. 暗褐色土 焼土、赤褐色土、粘粒多
10. 暗褐色土 粘粒多
11. 褐色土
12. 赤褐色土 炭化物多
13. 淡灰色土 粘粒多、細り土
14. 淡褐色土 粘粒多
15. 褐色土 粘粒多
16. 褐色土 粘粒多



第96号住居跡 I 層説明

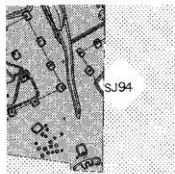
1. 暗褐色土
2. 灰褐色土
3. 褐色土
4. 黄褐色土



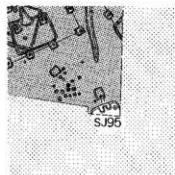
第96号住居跡土層説明

20. 暗褐色土
21. 褐色土
22. 褐色土
23. 淡褐色土
24. 褐色土
25. 淡褐色土
26. 褐色土 炭化物
27. 灰褐色土

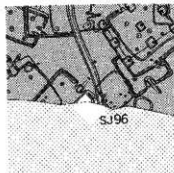
第 351 图 第 93・94・95・96 号住居跡



第352図 位置図



第353図 位置図



第354図 位置図

第93号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・小形鏝である。

第94号住居跡（調査時C 2区14号住居跡）

ミー265グリッドに位置する。重複関係は、第5号獨立柱建物跡よりも古いと考えられるが、調査区域内では、明確に重複関係をとらえることはできなかった。規模は、不明であるが、掘り込みの深さは、30cmである。壁周溝・柱穴は、検出されていない。なお床面の全面に敷物状の炭化物が検出されている。

カマドは確認されなかった。

第94号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・須恵器環・高坏脚部の破片である。

第95号住居跡（調査時C 2区12号住居跡）

キー265グリッドに位置する。重複関係は、みられないが、標道の先端と煙り出し穴の部分が、最近の掘乱によって壊されている。住居跡の大半が、調査区域外にあるために全容がつかみづらい。住居跡の規模は、長軸3.10m、短軸—1mを測る。掘り込みの深さは、52cmである。壁周溝・柱穴は認められない。貯蔵穴が、カマドの右よりに確認されている。円形の浅い貯蔵穴である。

カマドは、北辺やや右よりに確認されている。袖やや長く、その2倍程度の煙道が延びている。燃焼部はやや広く、火床面もやや深く掘り込まれている。燃焼部から煙道へは、段をもって構築されている。煙道は、クランク状に構築され、煙道部より低く掘り込まれた煙り出し穴に通じている。煙り出し穴は、垂直に掘り込まれていたらしい。袖部分は、地山掘り残し。

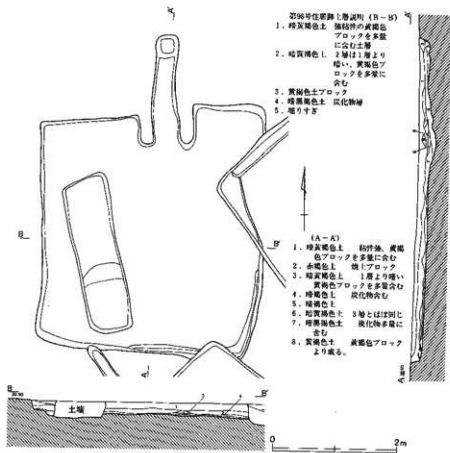
覆土は地山と全く区別がつかず、調査区域のきわであったことが、遺構の精査に困難を極めた。

第95号住居跡の出土遺物は、土師器環である。

第96号住居跡（調査時C 2区44号住居跡）

ユー271グリッドに位置する。重複関係は、第13号住居跡よりも新しい。遺構の大半が、調査区域外となっているため、詳しい情報はつかめていない。住居跡の規模は、不明であるが、掘り込みの深さは、38cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。

カマドは、東辺に確認されている。きわめて短い地山掘り残しの袖である。燃焼部と煙道部の区別がさほど無く、緩やかに細くなっている。そのほか明瞭な施設はみられない。



第355図 第98号住居跡

他の遺構と大変重複が激しく、調査は難行した。

第96号住居跡に伴う出土遺物は、土師器坏である。

第97号住居跡 (調査時C 2区101号住居跡)

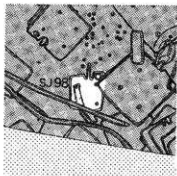
メー272グリッドに位置する。重複関係は、第117号住居跡よりも古く、第7・12・36・69号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は不明だが、掘り込みの深さは、20cmである。壁周溝は、完周すると考えられる。柱穴は認められない。

カマドはみられない。

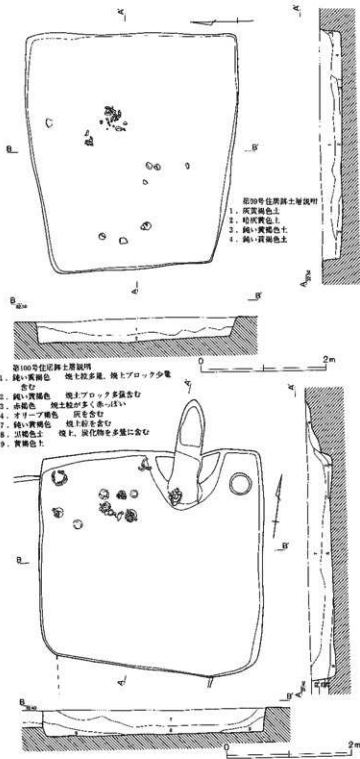
出土遺物は、土師器坏・高坏・須恵器甕口縁部などが出土している。

第98号住居跡 (調査時C 2区92号住居跡)

メー275グリッドに位置する。重複関係は、第119・136号住



第356図 位置図



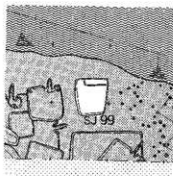
第357図 第99・100号住居跡

居跡よりも古い。住居跡の規模は、長軸3.70m、短軸3.60mを測る。掘り込みの深さは、20cmである。壁周溝は、南辺・東辺の一部にしか認めることはできない。柱穴は認められない。焼失住居跡であったため、覆土中にレンズ状に薄い炭化物が堆積していた。

カマドは、北辺やや右よりに確認されている。袖部は、地山崩り残してやや長く造られ、袖部の2倍程度の煙道が延びている。燃焼部はやや狭く、幅がそれほど変わらないまま煙道は延びる。煙り出し穴は、ピット状に落ち窪んでおり、煙道部構築の作業工程が分かる。燃焼部の火床面もやや深く掘り込まれている。燃焼部から煙道へは、緩い傾斜をもって造られており、低く掘り込まれた煙り出し穴に通じている。煙り出し穴は、垂直に掘り込まれていたらしい。

重複遺構が多いなかでは比較的順調に調査できた遺構である。なお西側に近世の土壌が1基ある。

第98号住居跡の出土遺物は、土師器杯・短頸壺・斐・甌・鉢・鉢・小形甕などである。



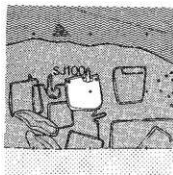
第 358 図 位置図

第99号住居跡（調査時C2区40号住居跡）

ヒ-282グリッドに位置する。重複関係は、みらない。全体のプランは、良好に検出された。住居跡の規模は、長軸3.80m、短軸3.40mを測る。掘り込みの深さは、36cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。

カマドも構築されておらず、煮沸形態については不明であるが、本来存在していなかったのであろう。極めて特異な住居跡といえよう。

第99号住居跡に伴う出土遺物は、土師器坏・甕である。



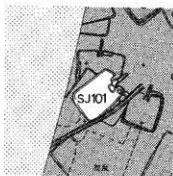
第 359 図 位置図

第100号住居跡（調査時C2区38号住居跡）

モ-283グリッドに位置する。重複関係は、第39・52号住居跡よりも新しい。全掘できた数少ない例である。全体のプランは、明確である。住居跡の規模は、長軸3.60m、短軸3.40mを測るが、掘り込みの深さが短く、40cmしかない。壁周溝・柱穴は、確認できなかった。カマドの右側には、円形の貯蔵穴がある。小形の浅い貯蔵穴である。

カマドは、北辺右よりに構築されている。煙道部はやや短く、袖の長さとはほぼ等しい。燃烧部はやや狭く、ほぼ等しい幅で煙道に続く。袖部は長く、地山掘り残して構築されている。焚き口部は凹み、燃烧部から煙道へは段がある。煙道は緩やかに傾斜して煙り出し穴へと続く。

第100号住居跡に伴う出土遺物は、土師器坏・鉢・甕・小形甕・短頸壺などがある。



第 360 図 位置図

第101号住居跡（調査時B区14号住居跡）

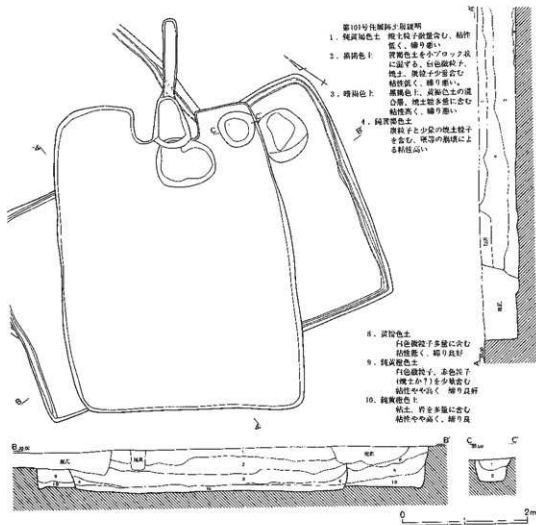
メ-292グリッドに位置する。重複関係は、第29・45・81号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長軸4.78m、短軸3.63mを測る。掘り込みの深さは、66cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。貯蔵穴が、カマドの右側に造られている。やや楕円形の比較的深い貯蔵穴である。

カマドは、北辺のやや右よりに構築されている。地山掘り残しの短い袖のカマドで、煙道は、その2倍くらい長い。燃烧部も決して広くはない。それよりも狭い煙道が細長く連続している。焚き口部分に浅い凹み状の部分の確認される。

重複遺構が激しく、調査は難行した。

重復遺構が激しく、調査は難行した。

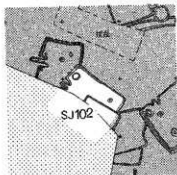
第101号住居跡の出土遺物は、土師器坏・鉢・甕・壺がある。



第361図 第101号住居跡

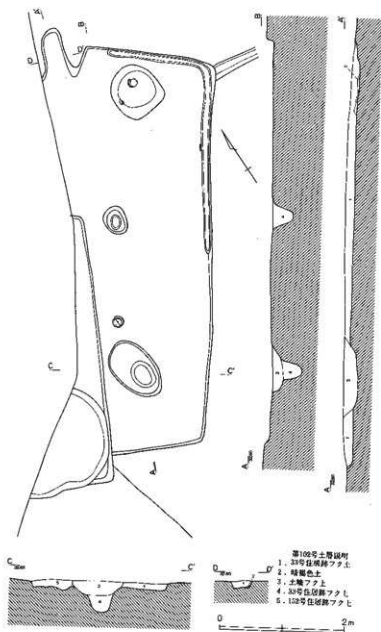
第102号住居跡 (調査時B区9・10号住居跡)

シ-293グリッドに位置する。重複関係は、第28・58号住居跡よりも新しい。住居跡の大半が調査区域外となっている。住居跡の規模は、長軸6.35m、短軸—mである。掘り込みの深さは、13cmである。壁周溝は、東・北の部分に僅かに存在しているに過ぎない。いくつか確認されているが、本住居跡に伴う柱穴は確認されていない。



第362図 位置図

カマドは、北辺に確認され、袖部・煙道部ともに大変小規模なカマドである。煙道は、僅かに壁外に延びるだけである。燃焼部は狭く、焚き口部は、明瞭な凹みが見られない。



第363図 第102号住居跡

第1次構築のカマド、北側が、第2次構築のカマドと考えられる。第1次構築のカマドは、煙道部分しか残っておらず、袖は第2次カマドの構築時に取り除かれたのであろう。第2次構築カマドは、やや短い袖部分と、同じ長さの煙道から構成されている。煙道部分と燃焼部分の幅は、さほど変化がなく構成されている。袖は地山掘り残してある。

第103号住居跡の出土遺物は、土師器環・鉢・短頸壺・甕・甕である。

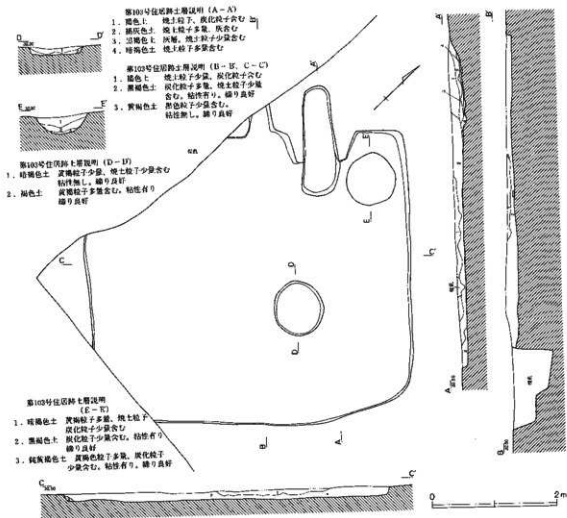
重複が激しく、また調査区のきわに遺構が存在するため、確認に難行した。

出土遺物は、土師器環のみである。

第103号住居跡（調査時B区16住居跡）

モー302グリッドに位置する。重複関係はみられない。南側は調査区域外であり、西側は、谷状地形によって侵食されている。住居跡の規模は、長軸5.13m、短軸4.28mを測る。掘り込みの深さは12cmしかなく、平面プランがからうじて知るに過ぎない。壁周溝・柱穴は、確認されていない。貯蔵穴が、カマドの右側に存在する。薄い円形の貯蔵穴である。住居跡の中央に円形の土壌が確認されているが、住居跡との重複関係は不明である。

カマドは、西辺に2基確認されており、南側が

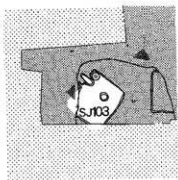


第364図 第103号住居跡

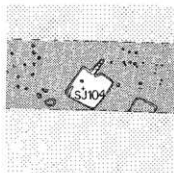
第104号住居跡 (調査時B区43号住居跡)

へー320グリッドに位置する。重複関係は、みられない。直角が、調査区域外である。住居跡の規模は、長軸3.67m、短軸3.60mを測る。掘り込みの深さは、5cmである。壁周溝・柱穴は、みられない。北側の中央付近に小さな穴があいているが、これは柱穴ではない。カマドの右側に貯蔵穴がある。比較的深く、円形の貯蔵穴である。

カマドが、東辺左よりにみられる。左袖はやや短い、右袖は長い。煙道はその袖の2倍程度はある。燃焼部は狭く、火床はやや掘り凹められている。燃焼部から煙道部にかけては、水平に推移し、緩やかに煙り出し穴に向かう。



第365図 位置図



第366図 位置図

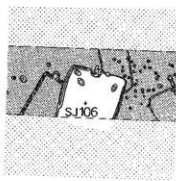
狭い調査区域ながらほぼ完掘できた。

第104号住居跡に伴う出土遺物は、土師器・甕・鉢である。

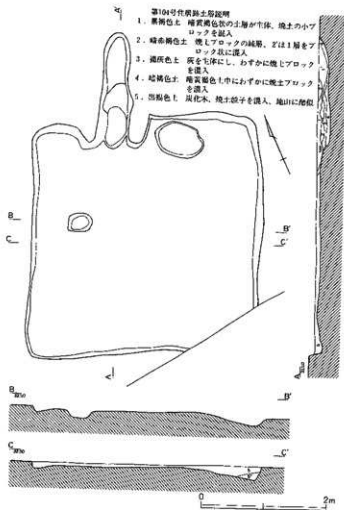
第105号住居跡

(水道管付設立ち会い調査)

は—332グリッドに位置する。重複関係は、全くわからない。調査区域外だが、17号国道深谷バイパス敷地内に深谷市で水道管を付設の際に立ち会い調査した。50cm幅のトレンチにカマドの断面が確認され住居跡とした。



第368図 位置図

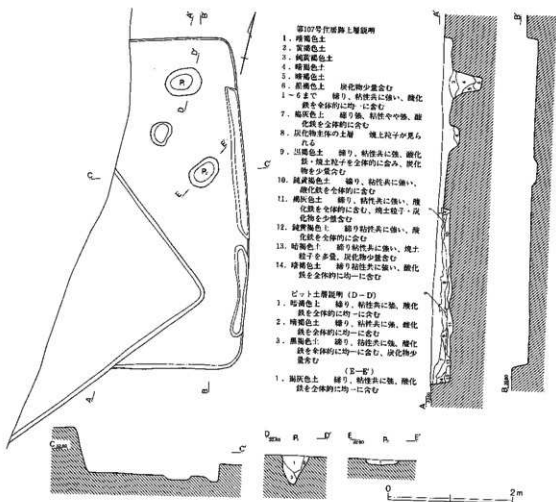


第367図 第104号住居跡

出土遺物は、土師器鉢があるだけである。

第106号住居跡 (調査時B区46号住居跡)

へ—326グリッドに位置する。重複関係は、第48・85号住居跡より新しい。遺構の南側が調査区域外となる。住居跡の規模は、長軸6.35m、短軸—mを測る。掘り込み深さは、17cmである。壁周溝は、カマド側の壁で一部分途切れているが、他は全周すると考えられる。柱穴は、カマド側に一対確認されており、調査区域外にこれと対になる形で存在するであろう。貯蔵穴が、カマドの左に確認されており、やや楕円形の比較的浅い

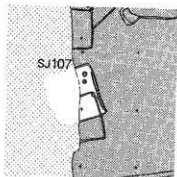


第370図 第107号住居跡

る。規模不明。掘り込みは、10cmである。床面に小さな柱穴はいくつか存在するが、はたしてこの住居跡に伴うものか疑わしい。壁周溝は、東壁に途切れながら存在するに過ぎない。

カマドは、確認されなかった。

出土遺物は、土師器の小破片のみである。



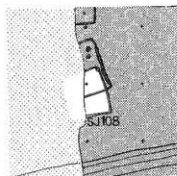
第371図 位置図

カマドは確認されていない。

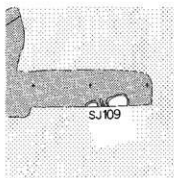
第108号住居跡 (調査時B区36号住居跡)

セー331グリッドに位置する。重複関係は、第107号住居跡よりも新しい。西側が、調査区域外となっている。住居跡の規模は、不明である。掘り込みの深さは、28cmと深い。柱穴・壁周溝は、確認されていない。

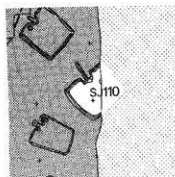
重複遺構の存在から、遺構の確認は困難を極めた。
第108号住居跡の出土遺物は、土師器の小破片のみである。



第372図 位置図



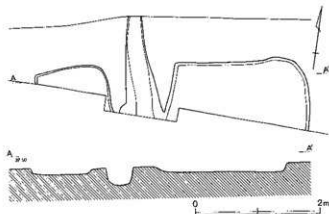
第373図 位置図



第375図 位置図

第109号住居跡（調査時B区27号住居跡）

モ—323グリッドに位置する。重複関係は、調査区域内ではみられない。南側は、調査区域外である。北側のカマド煙道の一部が試掘トレンチによって壊されている。住居跡の規模は、長軸4.23m短軸—mである。掘り込みの深さは13cm。最近の擾乱によって大分痛め付けられている。壁周溝・柱穴は確認さ



第374図 第109号住居跡

れていない。

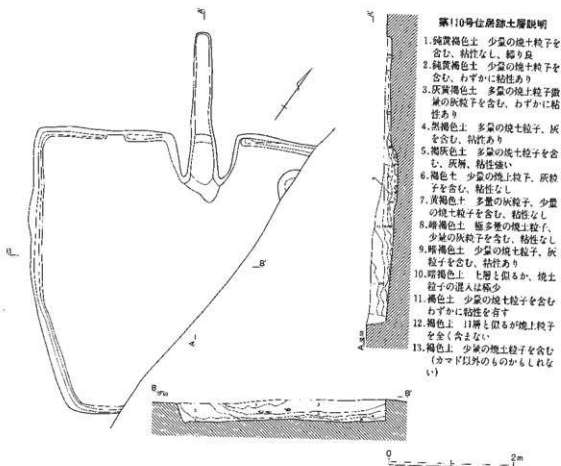
カマドは、北辺左よりに確認されている。地山掘り残しの袖で、細長い煙道がこれに取り付く。燃焼部の空間は狭く、やや狭くなりながら煙道に続く。煙道と燃焼部の床面には、あまり明瞭な段差等はなく、緩やかに続いているに過ぎない。

調査区域が狭く、遺構の確認には難行した。

第109号住居跡の出土遺物は、土師器杯の小破片のみである。

第110号住居跡（調査時B区24号住居跡）

ン—334グリッドに位置する。重複関係はみられない。東側が調査区域外である。住居跡の規模は、長軸4.45m、短軸—mを測る。掘り込みの深さは28cmである。壁周溝は、北側の一部で途切れるが他の部分は完周している。柱穴は確認されていない。カマドの右側に貯蔵穴が存在するが、そのほとんどが調査区域外となっている。

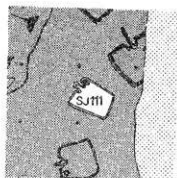


第 376 図 第110号住居跡

カマドは、北辺に確認されている。袖は長く、地山掘り残しでつくられ、袖の長さの2倍ほどの細長い煙道がこれに続く。燃焼部は狭く、火床もそれほど深くまで掘り込まれていない。燃焼部から煙道部へは、緩い段をもって立ち上がっており、煙道は水平に長く続く。

遺構の確認・精査は、比較的順調にいった。

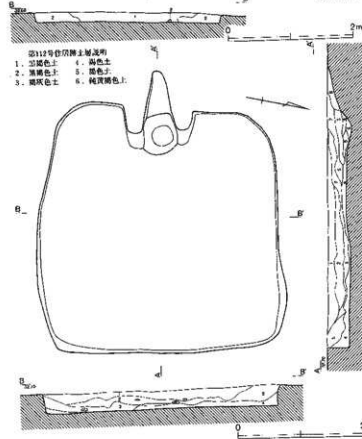
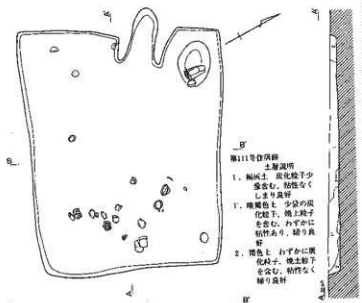
第110号住居跡の出土遺物は、土師器杯・甕・甔・長頸壺・鉢・須恵器大甕である。



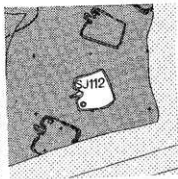
第 377 図 位置図

第111号住居跡（調査時B区25号住居跡）

スー334グリッドに位置する。重複関係はみられない。単独に調査された貴重な例である。住居跡の規模は、長軸3.86m、短軸2.98m。掘り込みの深さは14cmである。壁周溝・柱穴は、確認されて



第378図 第111・112号住居跡



第379図 位置図

いない。貯蔵穴が、カマドの右側に確認されている。円形のやや薄い貯蔵穴で、土器等が確認されている。

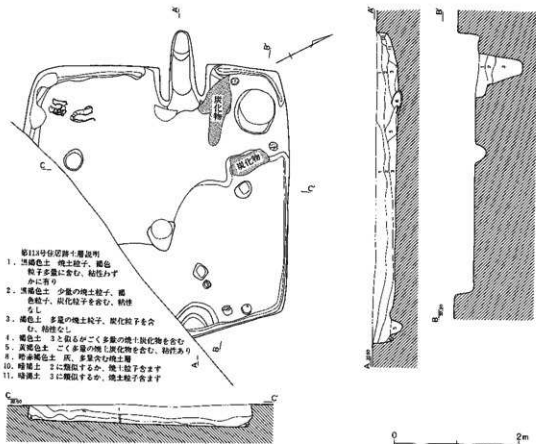
カマドは、西辺右よりに確認されている。地山掘り残しの袖は、短く、これとはほぼ同じ長さの煙道がごく僅か壁外に延びている。燃焼部は広く、緩く傾斜しており、煙道との差は明瞭ではない。

第111号住居跡に伴う出土遺物は、土器器坏・短頸壺・鉢・甌・壺・甕など豊富な資料がある。

第112号住居跡

(調査時 B区26号住居跡)

セー334グリッドに位置する。重複関係は、みられない。住居跡の規模は長軸3.77m、短軸3.75mを測る。掘り込みの深さは、36cmである。壁周溝・柱穴は、確認されていない。



第113号住居跡平面図

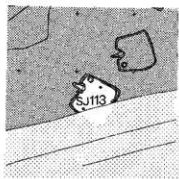
1. 黒褐色土 焼土粒子、褐色炭粒子多量を含む、粘性わずかに有り
2. 黒褐色土 少量の焼土粒子、褐色炭粒子、炭化粒子を含む、粘性なし
3. 褐色土 多量の焼土粒子、炭化粒子を含む、粘性なし
4. 褐色土 3と似るがごく多量の焼土炭化物を含む
5. 黄褐色土 ごく多量の焼土炭化物を含む、粘性あり
6. 暗赤褐色土 灰、多量穴む焼土層
7. 暗褐色土 2に類似するか、焼土粒子含まず
8. 暗褐色土 2に類似するか、焼土粒子含まず
9. 暗褐色土 2に類似するか、焼土粒子含まず
10. 暗褐色土 2に類似するか、焼土粒子含まず
11. 暗褐色土 2に類似するか、焼土粒子含まず

第380図 第113号住居跡

カマドは、西辺左よりにみられる。地山掘り残しの袖は短く、煙道は、この袖の長さとはほぼ等しい。燃焼部はやや広く、火床面が、ややへこんでいる。煙道部は、緩やかに傾斜しており、煙り出し穴に向かう。燃焼部と煙道部とは緩い段によって区切られている。

調査区域内では、稀にみる全掘できた住居跡である。

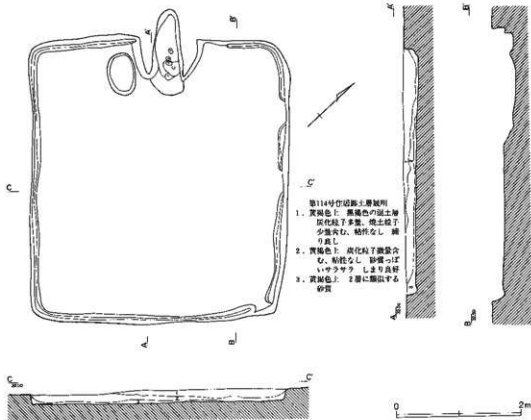
第112号住居跡に伴う出土遺物は、土師器杯・高杯・短頸壺・甕・鉢・壺などがある。



第381図 位置図

第113号住居跡（調査時B区32号住居跡）

モ-335グリッドに位置する。重複関係は、調査区域内ではみられない。南側は、調査区域外である。住居跡の規模は、長軸4.25m、短軸4.15mである。掘り込みの深さは31cm。壁周溝は、東壁の一部分を除き全周している。柱穴は、カマド側に二本確認されている。小さな柱穴であり、柱を支

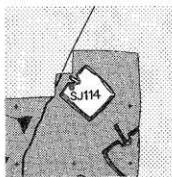


第382図 第114号住居跡

えられたか疑問が残る。カマドの右側には、やや大きめで深めの貯蔵穴が造られている。円形のビット状の貯蔵穴である。カマドと反対側には、いわゆる5番目のビットがある。半円形の緩い落ち込みで、馬蹄形に固い土手状の部分がめくっている。

カマドは、北辺右よりに確認されている。地山掘り残しのやや長い袖で、幅広の煙道が付く。燃烧部の空間は広く、やや狭くなりながら煙道に続く。煙道と燃烧部の床面には、あまり明瞭な段差等はなく、緩やかに続いているに過ぎない。煙り出し穴の部分で急激に立ち上がりと思われる。

第113号住居跡の出土遺物は、土師器杯・鉢・短頸壺・甌・甕などである。



第383図 位置図

第114号住居跡 (調査時B区23号住居跡)

い-334グリッドに位置する。重複関係はみられない。住居跡の規模は、長軸4.42m、短軸4.04mを測る。掘り込みの深さは20cmである。壁周溝は、北壁の一部で途切れながら完周している。柱

穴は確認されていない。カマドの左側に貯蔵穴が存在する。浅い円形の貯蔵穴である。

カマドは、西辺に確認されている。地山掘り残しの袖はやや長く、短い煙道に続いている。燃焼部はやや広く、ハの字状に煙道部へ続く。燃焼部はやや深く掘り込まれており、煙り出し穴へは緩やかに立上って行く。

遺構の確認・精査は、比較的順調にいった。

第114号住居跡の出土遺物は、土師器環・甕である。

(3) 遺構各説 一遺物出土状態一

古墳時代第Ⅵ期の遺構で、遺物の良好な出土状態を保っている遺構について次に記す。

第90号住居跡

カマドの周辺に、遺物が集中する傾向がみられた。

(カマド) カマド内部に小形甕2点、大形甕2点が、轟めくように確認されている。カマド内部の土器の掛られ方を推定する上で、重要な資料といえよう。なお胴下半部や上半部のみの甕は、まぐさ部分にカマド構築材として使用されている。

(カマド脇) 左袖に接して環類と脚付短頸壺が、散漫な状態で出土している。とくに脚付短頸壺は、北壁にへばりつくように出土している。全て上向きである。

(床面) 北西の柱穴の上方から大形壺の胴下半部が出土している。柱穴の縁でしかも柱穴に流れ込むように確認されている。東の中央には、高坏が横倒しの状態で確認されている。

第91号住居跡

カマドと住居跡の東半分に遺物が集中する顕著な傾向がある。

(床面) 東半分の床面に、大量の煮沸具を中心とした遺物が出土している。とくに東南の角には、大形壺を中心として甕・鉢・短頸壺がまとめて出土している。全て正位に置かれた状態で出土している。他は全て甕・壺類で占められている。

(カマド) 両方の袖に甕が、転倒した形で据えられ、まぐさ部分に甕を横位にしたものを掛けている。燃焼部分には、全く煮沸具はみられない。

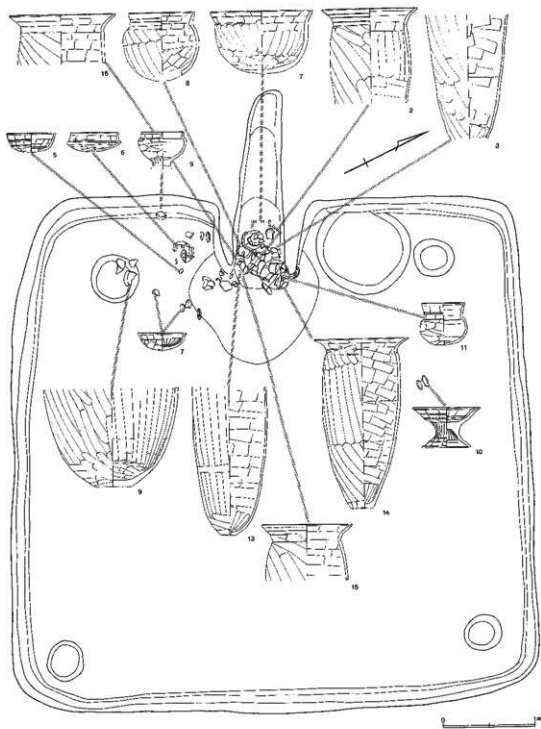
(貯蔵穴) 貯蔵穴内には、小形甕が、口縁部が斜め下の状態で確認されている。

第92号住居跡

カマドの周辺に遺物が、集中する傾向がみられた。

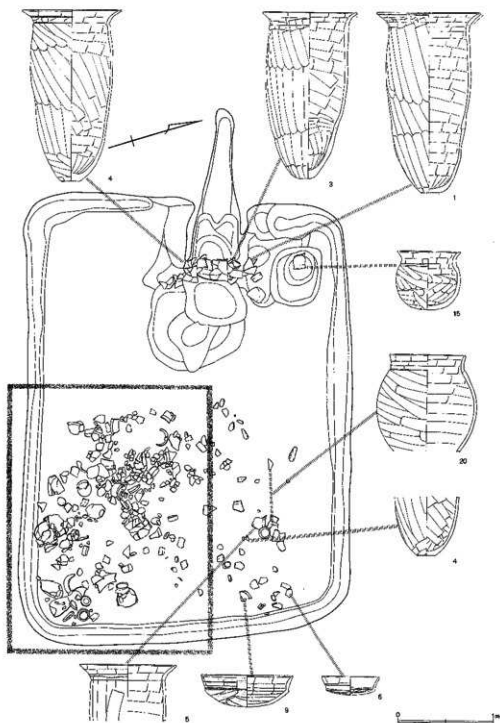
(壁ざわ) 東壁のきわには、形態の異なる環が2点、北側の1点は正位で、他方は倒位で確認されている。

(カマド) かまどの内部には出土遺物がみられなかったが、カマド袖芯材として、右は甕2つが倒位に、左は甕1つと甕が倒位にされて使用されていた。

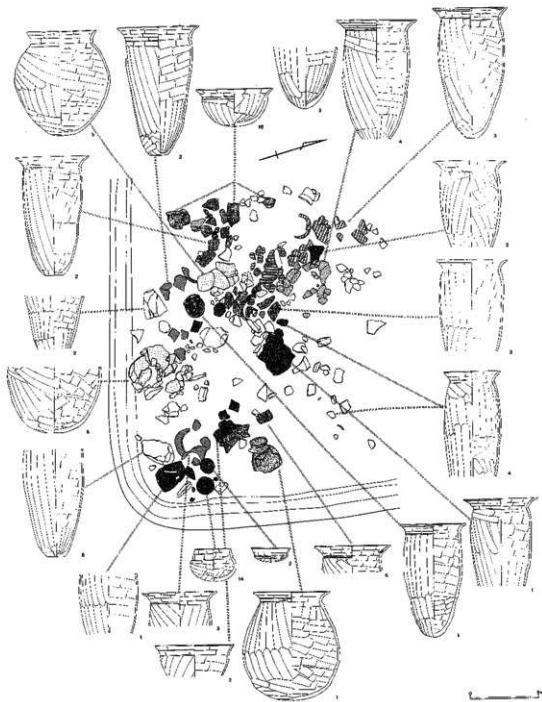


第 384 図 第90号住居跡遺物出土状態

(カマド脇) カマド脇には顕著な遺物がみられなかったものの、カマドの前方に破砕された状態で須恵器坏蓋がみられた。

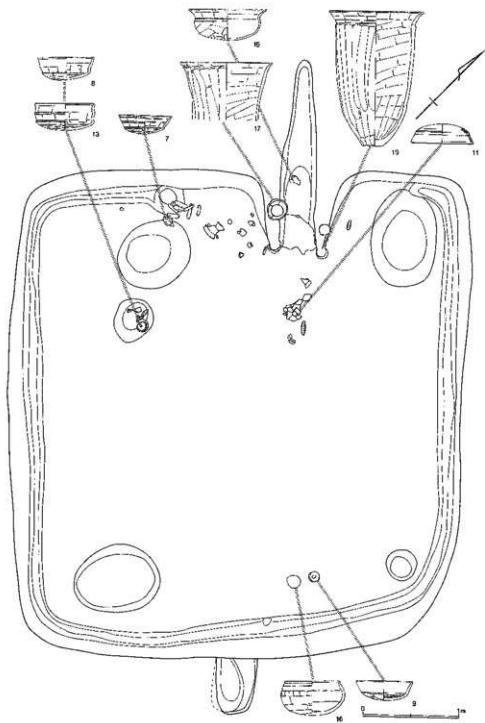


第 385 图 第91号住居跡遺物出土状態1)



第 386 図 第91号住居跡遺物出土状態(2)

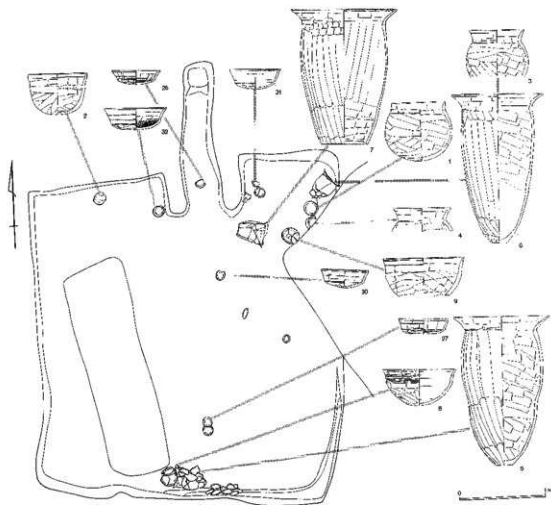
(貯蔵穴) 貯蔵穴内には、出土物がみられなかったが、貯蔵穴の縁に、坏が1点落ち掛った状態で確認されている。



第 387 図 第92号住居跡遺物出土状態

第98号住居跡

(壁ぎわ) 南壁のきわに編物石とともに甕が横倒しのまま出土している。北壁のきわには、小形



第388図 第98号住居跡遺物出土状態

壺がやや離れて、横位になって確認されている。東壁に接して、甕・小形壺・鉢・甌が、横転した状態で出土している。甌は、カマドと関わりのある出土状態ではなかった。

(床面) 床面中央には、坏が1点正位のまま出土している。

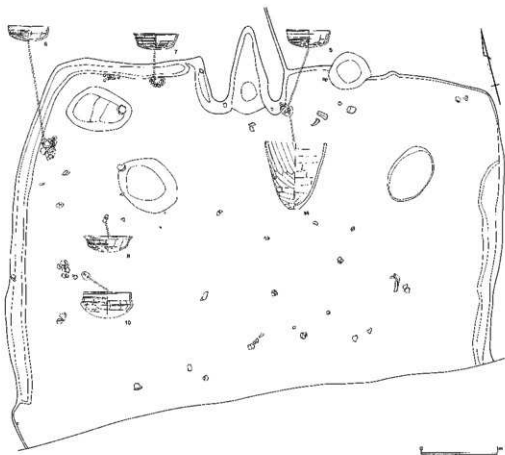
(カマド) カマド燃焼部に坏が、1点伏せた状態で出土している。やや浮いている。

(カマド脇) 袖の先端の左右に、各1つずつ坏が正位に置かれている。

第106号住居跡

(壁ぎわ) 西壁と北壁の縁に坏が各1点、両者とも破砕された状態で正位に出土している。

(カマド脇) 右袖に接して坏が、甕の中に挿入された状態で確認されている。ただし甕は、胴下半のみが検出されているにすぎない。正位である。



第 389 図 第106号住居跡遺物出土状態

(床面) 西壁よりに坏が2点、破砕された状態で出土している。

第111号住居跡

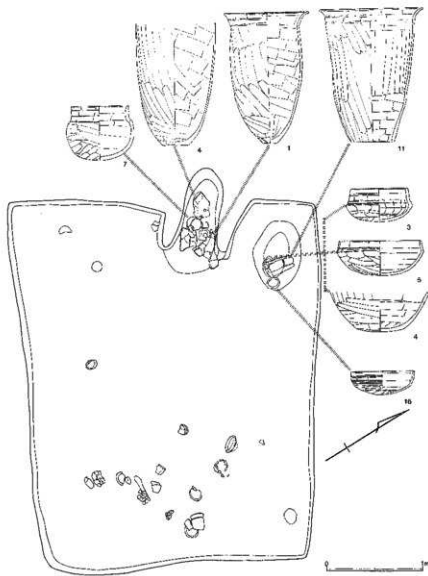
カマドと貯蔵穴の部分に、顕著な遺物の出土状態をみることができる。

(カマド) カマドに煮沸具を掛けたままの状態、遺物が確認されている。甕2点は、燃焼部に前後に並べられ、その間に短頸壺が掛けられた状態である。全て正位に確認されている。

(貯蔵穴) 貯蔵穴内には、遺物はみられないが、貯蔵穴の縁に、坏が3点並べられた状態で出土しており、その上には、大形甕が載っている。さらにその隙間は、大形甕の破片が埋めていた。ただしこの土器は、全て貯蔵穴の中央に向かって、ずれ込んだ状態で確認されている。

第113号住居跡

(壁ぎわ) 東の壁ぎわ、5番目のピットの周辺に小形甕・小形甕・坏が各1点ずつみられ、坏は正位、小形甕は横位、小型甕は倒位の状態でそれぞれ出土している。西壁ぎわに甕5点・甕1点坏1点が集まって確認されている。それぞれ横位になって確認されているのだが、南西隅の甕のな



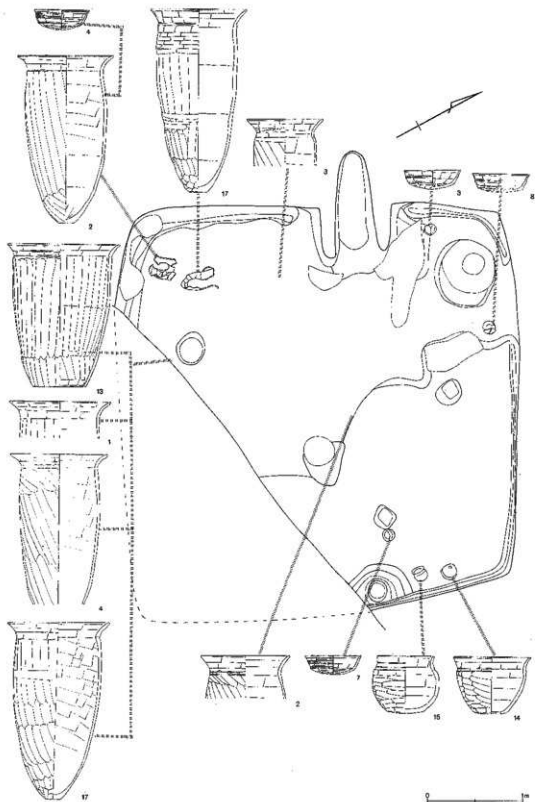
第 390 図 第111号住居跡遺物出土状態

かには、坏が入っていた。北壁のそばには、坏が2点離れて正位のまま確認されている。
住居跡の中心部やカマドの周辺部には、確認することができなかった。

(4) 遺構各説 —カマドと煮沸土器—

古墳時代第VI期のカマドと、煮沸にかかわる土器の関係について述べる。

古墳時代第VI期のカマドの確認された住居跡とその構造については、すでに述べたが、17軒のカマドについて詳細が分かっている。



第 391 图 第113号住居跡遺物出土狀態

第90号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの燃焼部に伏せた形で、鉢形土器が出土しており、長胴甕が架けられた状態で出土している。また燃焼部の横架材として、3点の長胴甕が、袖の芯材として左右各1点づつ長胴甕が使用されていた。支脚は出土していない。

404-14は、長胴の甕で肩部に粘土と焼土の塊を付着している。この付着帯から下、底部にかけては、被熱痕跡が明瞭にみられる。内面には、粘土付着帯に当たる部分に粒状の付着痕跡が筋状に残っている。また胴下半に斜めに、この粒状の付着痕跡が確認される。カマド燃焼部の横架材として使われている。

404-12は、長胴の甕で底部が欠損している。外面の口縁部直下から胴部下位にかけて、被熱痕跡が明瞭に観察できる。また内面の胴中位以下に底部にかけて粒状の付着痕跡を確認できる。カマド右袖の先端に、芯材として伏せて使用されている。

405-2は、長胴の甕で胴下半が欠損している。肩部に粘土と焼土の塊の付着が確認でき、この部分以下に被熱痕跡が確認できる。しかし内面にはこれらの痕跡はない。

405-1は、長胴甕で胴下半を欠損する。外面の口縁部直下から残存する部分まで被熱痕跡が確認されている。内面には、やはり口縁部の下から粒状の付着痕跡が確認される。

404-15は、長胴の甕で胴下半を欠損している。肩部以下に被熱痕跡が確認されている。

405-8は、大形の鉢である。肩部に被熱痕跡が帯状に巡る。内面には、粒状の付着痕跡が口縁部の下から底部にかけて残る。

404-13は、長胴甕で口縁部を欠損している。底部を除く胴部に被熱痕跡がみられ、内面には、下から1/3程度のところに底部を除いて粒状の付着痕跡がみられる。

405-3は、長胴の甕で底部と口縁部を欠損している。外面には、胴部の一部を除き全面に被熱痕跡が確認できる。内面には、胴下半に粒状の付着痕跡が確認できる。

405-9は、大形の甕で胴部下半のみ残存している。外面いっぱいには被熱痕跡がみられ、内面には、粒状の付着痕跡が確認できる。

第91号住居跡

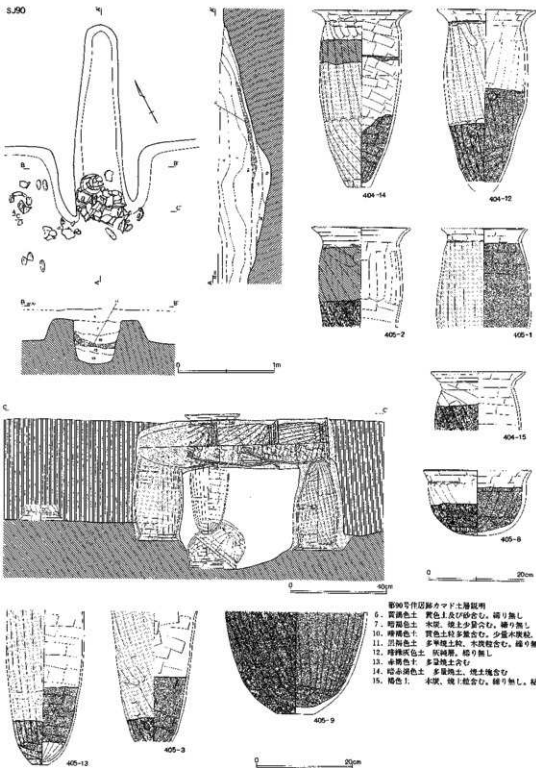
カマドは、長煙道である。燃焼部の横架材として長胴甕が、3個使用されている。住居跡に伴う煮沸痕跡等の残る土器は、新屋敷東遺跡で最大の30点確認されている。

407-1は、長胴の甕である。肩部に粘土と焼土の付着痕跡が確認されている。また胴下半に、被熱痕跡が確認できる。内面には、粘土・焼土の付着痕跡に対応して、筋状に粒状の付着痕跡がみられる。また胴下半にも再び粒状の付着痕跡が確認できる。燃焼部の横架材として使用されている。

407-2は、長胴の甕である。外面の胴下半に、斜めに被熱痕跡が確認されている。この位置と対応するように内面には、粒状の付着痕跡がみられる。

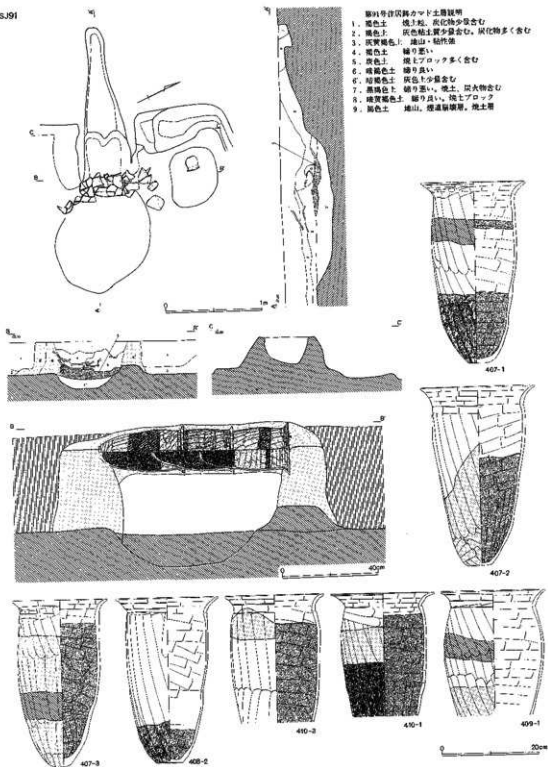
407-3は、長胴の甕である。胴部下位に帯状に焼土と粘土の付着痕跡がみられる。これを覆うように肩部から底部にかけて被熱痕跡が確認されている。内面には、口縁部の下から底部にかけて粒状の付着痕跡がみられる。燃焼部の横架材として使用されている。

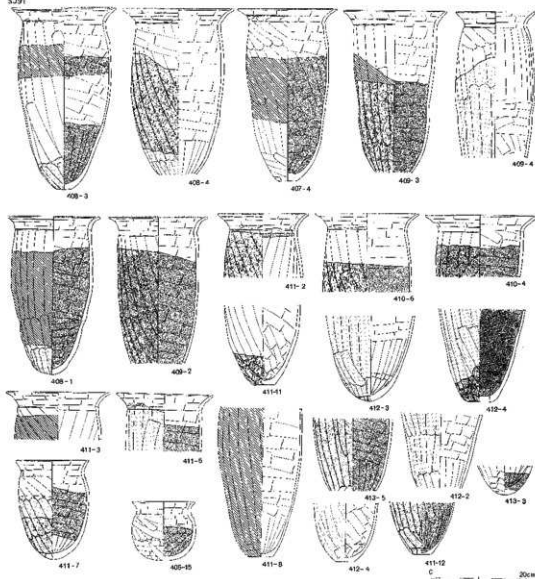
408-2は、長胴の甕である。外面の底部付近に、被熱痕跡が確認されている。この位置と対応



- 第90号住居跡カマド土層説明
- 6. 黄褐色土 黄色土及び砂含む。織り無し
 - 7. 暗褐色土 木炭、焼土少量含む。織り無し
 - 10. 暗褐色土 黄色土粒多量含む。少量木炭粒。焼土含む。
 - 11. 赤褐色土 多量焼土粒。木炭粒含む。織り無し
 - 12. 暗褐色土 灰燼層。織り無し
 - 13. 赤褐色土 多量焼土含む
 - 14. 暗赤褐色土 多量焼土。焼土塊含む
 - 15. 褐色土 木炭、焼土粒含む。織り無し。粘状面平有り

第392図 第90号住居跡カマド・遺物出土状態





第394図 第91号住居跡カマド・遺物出土状態(2)

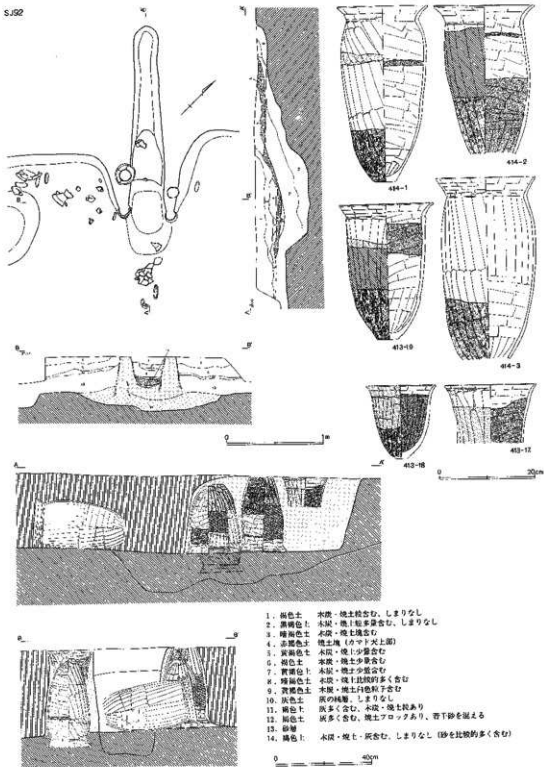
するように内面には、粒状の付着痕跡がみられる。

410-3は、長胴の甕で胴部下半が欠損している。外面の肩部に、拵状に被熱痕が確認できる。内面は、口縁部の下から残存部いっぱい、粒状の付着痕跡がみられる。

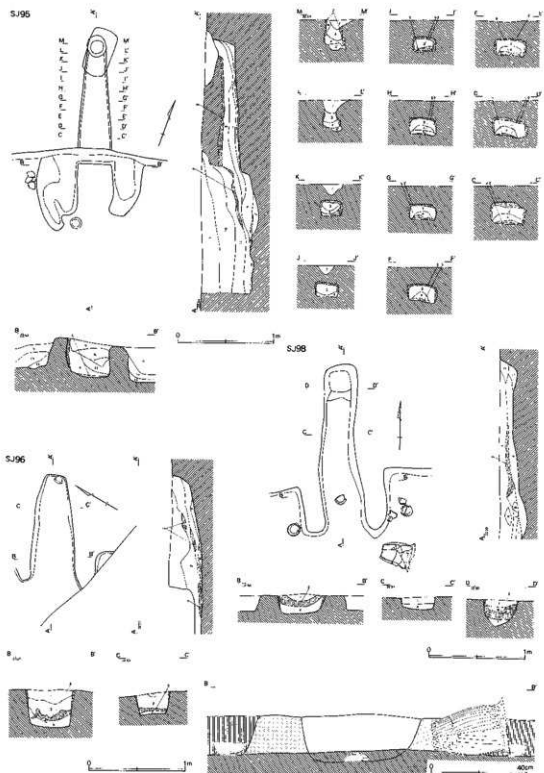
410-1は、長胴の甕で胴部下半が欠損している。やはり外面の肩部に被熱痕が確認できる。また内面には、口縁部の下から残存部いっぱい粒状の付着痕跡がみられる。

409-1は、長胴の甕で胴部下半が欠損している。外面の肩部に、拵状に被熱痕が確認できる。内面には、付着痕跡等は確認されていない。

408-3は、長胴の甕である。外面の底部付近に、被熱痕跡が確認されている。また肩部には、粘土・焼土の付着痕跡が確認された。この位置と対応するように内面には、肩部と胴下半に、粒状

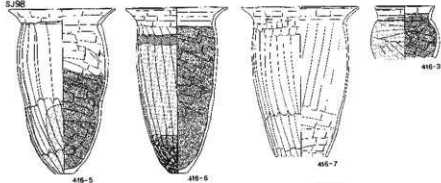


第395図 第92号住居跡カマド・遺物出土状態

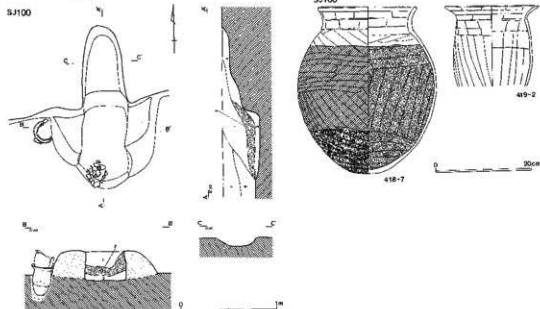


第 396 图 第 95・96・98号住居跡カマド・遺物出土状態

SJ98



SJ100



第95号住居跡・カマド土層説明

- 1 暗赤褐色土 ローム多量に含む 粘性上から成り、 $\phi 1.0\text{mm}$ 程度の微土塊少量含む 埴り良好 粘性強
- 2 暗赤褐色土 炭灰により焼上化し、埴り非常に良好
- 3 暗赤褐色土 $\phi 5.0\sim 20.0\text{mm}$ 程度の塊土とロームを含む 埴り、粘性良好
- 4 暗赤褐色土 3層よりロームを多量に含む
- 5 暗赤褐色土 燃焼時の灰と思われ、 $10.9\times 20.0\text{mm}$ 程度の炭化物を含む 埴り差 粘性なし
- 6 灰色土 燃焼時の灰と混ざる 埴り弱 粘性なし
- 7 暗灰褐色土 $\phi 1.0\sim 3.0\text{mm}$ 程度のローム含む 埴り良好 粘性強

第98号住居跡・カマド土層説明

- 1 暗赤褐色土 粘性強 赤褐色ブロックを多量に含む
- 2 赤褐色土 焼土ブロック
- 3 暗赤褐色土 1層より軽い赤褐色ブロックを多量に含む
- 4 暗褐色土 炭化物を含む
- 5 暗褐色土 炭化物含まない
- 6 暗赤褐色土 3層とほぼ同じ
- 7 暗赤褐色土 炭化物多量に含む

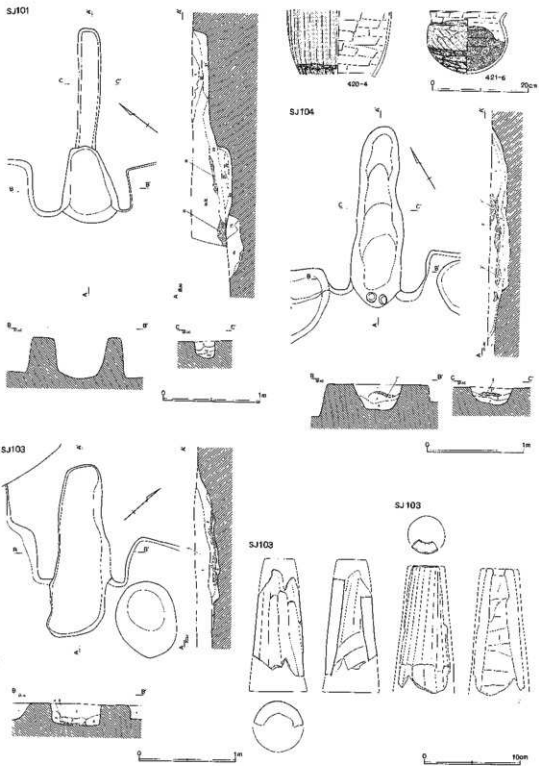
第96号住居跡・カマド土層説明

- 1 灰褐色土 粒子粗 炭化物を含む 粘性強
- 2 灰褐色土 粘性強 赤褐色土 焼土粒子を含む
- 3 灰褐色土 粘性弱 粒子の粗い砂質 灰砂層 焼土粒子を含む
- 4 灰褐色土 3層より粘り強い灰質 粘性弱 粒子細かい
- 5 暗赤褐色土 炭化物を含む 粘性弱 粒子粗い
- 6 暗赤褐色土 焼土が砂質化したもの 粘性 強
- 7 灰褐色土 焼土粒子と粘性の強い粒子が強い炭化物粒子を多量を含む 灰ブロック含む

第100号住居跡・カマド土層説明

- 1 にぶい灰褐色土 微土塊多量 焼土ブロック少量含む
- 2 にぶい灰褐色土 焼土ブロック多量含む
- 3 赤褐色土 焼土塊が多く赤っぽい
- 4 オリーブ褐色土 灰を含む

第 397 図 第100号住居跡カマド・遺物出土状態



第 398 図 第 101・103・104 号住居跡カマド・遺物出土状態

の付着痕跡がみられる。

408-4 は、長胴の甕で底部が欠損している。外面の肩部から下にかけて被熱痕が確認され、さらに底部付近には、焼土の付着もみられる。内面にはこの痕跡がない。

407-4 は、長胴の甕である。胴部中位に焼土・粘土の付着痕跡が確認されている。内面には、胴部上位から粒状の付着痕跡がみられる。カマドの横架材として使用されていた。

409-3 は、長胴の甕で底部が欠損している。外面の肩部に、帯状に粘土と焼土の付着痕跡が確認できる。内面には、粒状の付着痕跡が、胴部中位以下に確認できる。

409-4 は、長胴の甕で底部付近を欠損している。外面の胴上半部に、被熱痕が確認できる。底部付近に、被熱痕跡が確認されている。内面には、付着痕跡等はみられない。

408-1 は、長胴の甕である。外面の肩部から底部付近にかけて粘土・焼土の付着痕跡が確認できる。さらに底部付近は、被熱痕が確認されている。内面には、口縁部の下より、粒状の付着痕跡が確認されている。

409-2 は、長胴の甕で底部が欠損している。肩部から残存する部分にかけて、焼土の付着痕跡が確認されている。内面には、この位置に対応するように粒状の付着痕跡がみられる。

411-2 は、長胴の甕で胴下半が欠損している。外面の肩部から残存部にかけて、粘土の付着をみる。内面には、口縁部直下に帯状に粒状の付着痕跡が確認できる。

411-11 は、長胴の甕で底部付近のみ残る。外面の底部付近に、被熱痕が確認されている。内面にはこの痕跡がない。

410-6 は、長胴の甕で胴下半が欠損している。胴部中位に焼土・粘土の付着痕跡が確認されている。内面には、この位置と対応するように、粒状の付着痕跡がみられる。

412-3 は、長胴の甕で底部付近。外面の胴下半に、被熱痕が確認できる。内面には、付着痕跡等はみられない。

410-4 は、長胴の甕で胴下半を欠損している。外面の肩部から残存部にかけて、被熱痕が確認できる。内面には、外面に対応するように、粒状の付着痕跡が確認されている。

412-4 は、長胴の甕で胴部上半が欠損している。外面には、底部を除き被熱痕跡がみられる。内面には、全体に粒状の付着物を確認できる。

411-3 は、長胴の甕で胴中位以下は欠損している。口縁部を除き、焼土・粘土の付着痕跡が確認されている。内面には、付着痕跡等はみられない。

411-5 は、長胴の甕で胴下半を欠損している。外面の口縁部直下から、残存部いっばいに、被熱痕が確認できる。内面には、肩部に対応する位置に、粒状の付着痕跡が確認されている。

411-7 は、小形の長胴甕である。外面には、肩部に帯状に被熱痕跡がみられる。内面には、底部と肩部以上を除き、粒状の付着物を確認できる。

406-15 は、短頸壺である。内面の肩部以下に、粒状の付着物を確認できる。

411-8 は、長胴の甕で胴中位以下。外面には、全体に焼土・粘土の付着痕跡が確認されている。内面には、付着痕跡等はみられない。

413-5 は、長胴の甕で胴下半のみ。内面に、全体的に粒状の付着痕跡が確認されている。

412-2は、長胴甕で、胴下半部のみ。外面に被熱痕がある。内面には何もない。

413-3は、長胴の甕の底部である。内面の底部のごく僅かの部分に、粒状の付着痕跡が確認されている。

412-4は、長胴甕の底部である。外面に被熱痕跡がみられる。内面には付着物はない。

411-12は、長胴甕の底部である。内面に粒状の付着物がみられる。

第92号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの構築材として、左右の袖に長胴甕が使用されていた。右袖に2個体、左袖に1個体使用されていた。

414-1は、長胴の甕で胴中位に被熱痕が帯状に確認されている。内面には肩部に筋状に粒状の付着痕跡が確認されている。カマド左袖の先端に使用されている。

414-2は、長胴の甕で底部が欠損している。外面には肩部を中心に粘土・焼土の付着痕跡がみられる。内面には胴下半と、肩部に粒状の付着物を確認できる。カマド右袖の奥に使用されている。

413-19は、長胴の甕である。外面の胸部には、帯状に焼土・粘土の付着痕跡が確認されている。またこれを覆うように、被熱痕跡が残っている。内面には肩部に帯状に、付着痕跡がみられる。カマド右袖の先端に使用されている。

414-3は、長胴の甕で底部を欠損している。外面の胴下半に、被熱痕が確認できる。内面には付着痕跡等はない。

413-18は、小形の長胴甕である。外面いっばいに被熱痕跡が残る。内面には口縁部直下から粒状の付着物を確認できる。

413-17は、長胴の甕で、胴下半を欠損している。外面の肩部以下に被熱痕が確認される。内面にはこの被熱痕と対応する位置に、付着痕跡が確認できる。左袖の壁よりに埋め込まれていた。

第95号住居跡

長煙道のカマドである。煙道が天井部まで良好に残っていたので、煙道部を壁側からスライスするように断面調査を行なった。その結果、カマド煙道が方形に近い断面を、最後まで保っていることがわかった。これは、カマド構築にあたって四角く構築する概念のあったことを意味する。

第96号住居跡

長煙道の保存状態のやや悪いカマドである。カマドに関係した遺物等は確認されていない。

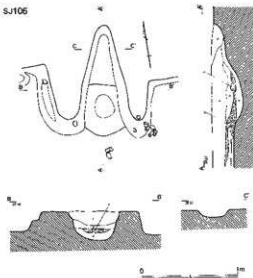
第98号住居跡

長煙道の保存状態の悪いカマドである。カマド内から1点坏が出土している。支脚に使用されていた可能性もある。他にカマドに、直接関わる遺物は出土していない。

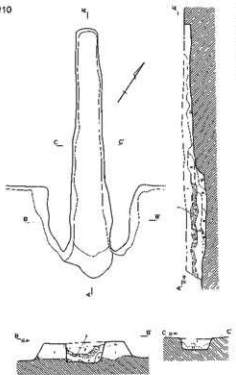
416-5は、長胴の甕である。外面には、胴下半に斜めに被熱痕跡が確認できる。内面には、胴部中位以下に粒状の付着痕跡がみられる。

416-6は、長胴の甕である。外面には、肩部に帯状の焼土・粘土の付着痕跡が確認された。またここから底部を除く胴部全面には、被熱痕跡が確認されている。さらに内面には、口縁部直下から底部にかけて、粒状の付着痕跡が確認されている。

SJ106

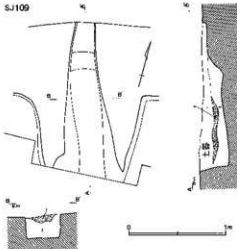


SJ110



- ア 赤焼土
イ 黄土
ウ 増築土
- 微量の焼土粒子含む
ほぼ地山と同じ
微量の焼土粒子含む

SJ109



第101号住居跡・カマド土層説明

19. 浅黄褐色土 灰褐色の粘土が主。糊りやや重
20. 赤褐色土 焼土が主。他に19層の土が少量混入。焼土層及び炉遺跡の天井部崩落によると思われる
21. 黒灰土 灰層。焼土。灰粒が少量含む。糊り強
22. 暗赤褐色土 熟をうけた焼土だが硬くなく。粘り高。灰粒が少量含む
23. 灰褐色土 21層に類似。多量の焼土混入
24. 赤褐色土 焼土。灰が主。灰も多量に混入。糊り強。粘り高
25. 黄褐色土 加山の黄褐色土がベース。焼土。灰少量含む
26. 暗赤褐色土 23層がベース。焼土多量に含む。多量の灰粒を含む
27. 明灰褐色土 地山を主。灰。焼土少量含む。糊りやや重。粘り高

第102号住居跡・カマド土層説明

1. 褐色土 焼土粒子。灰化粒を含む
2. 黒灰褐色土 灰多量の焼土粒子。灰を含む
3. 黒褐色土 灰層。焼土粒子少量含む
4. 暗褐色土 焼土層に多量に含む
5. 暗灰褐色土 焼土粒子。灰。少量含む
6. 暗褐色土 焼土粒子少量含む。粘り強。糊り有

第104号住居跡・カマド土層説明

1. 黄褐色土 粘り強。黄褐色土層が主。焼土ブロック混入
2. 暗赤褐色土 焼土ブロックの粘り強。土は1層をブロック状に混入
3. 灰褐色土 灰を主。少量の焼土ブロック混入
4. 暗褐色土 粘り強。黄褐色土中に。微量の焼土ブロック混入
5. 黄褐色土 灰化土。焼土粒混入。池田に類似する

第105号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 細かい暗褐色土塊が混入。焼土ブロック少量混入
2. 赤褐色土 焼土ブロック。黄褐色土少量含む
3. 黄褐色土 灰化土。灰褐色土。焼土粒子少量混入
4. 暗赤褐色土 茶褐色化した焼土ブロック少量含む。黄褐色土多量含む
5. 暗褐色土 暗褐色土中焼土ブロックを混入

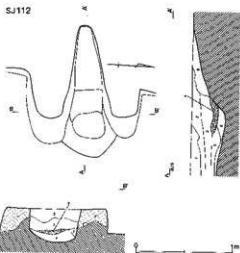
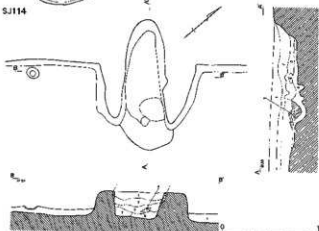
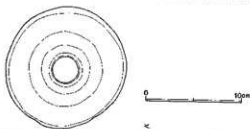
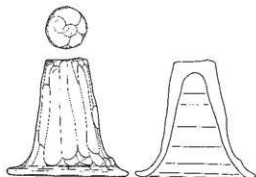
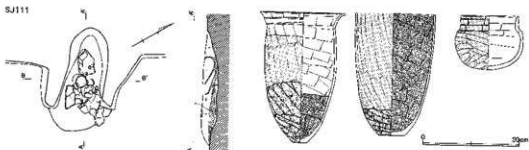
第109号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色砂質土 粘り強。糊り強 (φ2-3mmおよびφ4mmの焼土塊) 多量含む
2. 暗褐色土 砂質土。粘り強。糊り強。約2-0.3mmの焼土粒子 φ2mmの焼土塊多量含む
3. 暗褐色砂質土 粘り強。糊り強。φ1-2mmの焼土塊のすきかきを含む

第110号住居跡・カマド土層説明

1. 黄褐色土 少量の焼土粒子を含む。粘り強。しりしり良好
2. 黄褐色土 少量の焼土粒子を含む。おすかに粘り強
3. 灰褐色土 少量の焼土粒子。少量の灰粒を含む。おすかに粘り強
4. 黄褐色土 多量の焼土粒子。灰を含む。粘り強
5. 黒灰土 少量の焼土粒子を含む。灰層。粘り強
6. 黒土 少量の焼土粒子。灰粒を含む。粘り強
7. 黄褐色土 多量の焼土粒子。少量の灰粒を含む。粘り強
8. 暗褐色土 熟をうけた焼土粒子。少量の灰粒を含む。粘り強
9. 暗褐色土 少量の焼土粒子。灰粒を含む。粘り強
10. 暗褐色土 土層と異なる焼土粒子の混入は極めて少ない
11. 黒土 少量の焼土粒子を含む。おすかに粘り強

第 399 図 第106・109・110号住居跡カマド・遺物出土状態



第111号住居跡・カマド土層説明

1. 褐色土 少量の焼土粒子 炭化粒子を含む
2. 暗褐色土 多量の焼土粒子を含む 粘性強
3. 褐色土 微量の焼土粒子を含む 粘性強
4. 暗褐色土 極微量の焼土を含む

- 1' 褐色土 1と類似するが、微量の焼土混入
- ア 赤褐色土 焼土

第112号住居跡・カマド土層説明

1. 黄褐色土 少量の焼土粒子を含む
2. 褐色土 微量の焼土粒子 炭化粒子を含む
3. 褐色土 多量の焼土粒子 少量の炭化粒子を含む
4. 黄褐色土 多量の焼土粒子 少量の炭化粒子を含む 灰層
5. 暗褐色土 少量の炭化粒子を含む 焼土層
6. 褐色土 微量の炭化粒子を含む
7. 黄褐色土 少量の焼土粒子を含む
8. 赤褐色土 少量の焼土粒子を含む

- ア 暗褐色土 微量の焼土粒子を含む
- イ 焼土ブロック

第114号住居跡・カマド土層説明

1. 黄褐色土 少量の焼土粒子、第3層粒子を含む 粘性多く、しまり良好
2. 褐色土 少量の焼土粒子を含む、粘性多く、しまり良好
3. 暗褐色土 多量の焼土粒子、炭化粒子を含む、やや粘性有り、ガリガリ
4. 暗褐色土 多量の焼土粒子 少量の炭化粒子を含む 粘性やや有り
5. 褐色土 極めて多量の焼土粒子炭化粒子を含む おおまかに粘性有り
6. 暗褐色土 所層 多量の焼土粒子を含む、粘性強い
7. 暗褐色土 第3層に似るがより多くの焼土粒子 炭化粒子を含む
- ア 暗褐色土 焼土
- イ 黄褐色土 灰層?

第 400 図 第111・112・114号住居跡カマド・遺物出土状態

410-7は、長胴の甕である。なんら付着痕跡等は確認されていないが、カマド右袖の先端部に横倒しの状態でみられた。

416-3は、小形壺で底部を欠損している。外面には、肩部以下に被熱痕跡が確認できる。内面には、やはり同様の位置に粒状の付着痕跡がみられる。

第100号住居跡

長煙道のカマドである。残存状態は良くない。カマドに関係した遺物は、僅かに418-7の甕の破片が、焚き口部で確認されただけである。

418-7は、球胴の大形甕である。肩部以下胴部下半まで粘土と焼土に付着痕跡が確認されている。この付着痕跡以下底部まで、被熱痕跡が確認されている。内面肩部以下には、粒状の付着痕跡が確認されている。

419-2は、長胴の甕で外面にはなんら痕跡はみられないが、内面に粒状の付着痕跡がみられる。

第101号住居跡

長煙道のカマドである。保存状態は余り良くない。甕が1点出土している。

420-4は、甕の胴部で外面の全体に被熱痕跡が確認できる。内面にはなにもみられない。

第103号住居跡

長煙道のカマドである。保存状態はきわめて悪い。ただしカマド支脚が2点出土している。両者とも中空の土製支脚で、外面を細かくヘラケズリし、内面を横方向にヘラケズリを行ない削り落している。

421-6は、短形壺で、胴中に被熱痕が帯状に確認されている。内面には、肩部以下に粒状の付着痕跡が確認されている。

第104号住居跡

長煙道のカマドである。保存状態はきわめて悪い。焚き口部に坏が2点出土している。

第106号住居跡

短煙道のカマドである。保存状態はきわめて悪い。袖部に数点の土器片が確認されている。

第109号住居跡

長煙道のカマドである。保存状態は悪い。

第110号住居跡

長煙道のカマドである。保存状態は良い。

第111号住居跡

短煙道のカマドである。燃焼部内に甕が横倒しの状態で確認された。土製支脚も出土している。この支脚は、頂部が塞がっているが、中空の土製支脚である。外面は細かくヘラケズリされ、内面はヨコナデされている。

426-1は、長胴の甕である。外面には、肩部を中心に被熱痕跡が確認されている。内面には、胴下半に粒状の付着物を確認できる。

426-4は、長胴の甕で口縁部は欠損している。外面の底部を除いた胴部には、被熱痕跡が残っている。内面には、残存部の全面に粒状の付着痕跡がみられる。

426-7は、短頸壺である。外面の全体に被熱痕跡が確認されている。内面になんら痕跡はない。

第112号住居跡

短煙道のカマドである。保存状態は良好である。関係した土器類はみられない。

第113号住居跡

短煙道のカマドである。保存状態は良好である。燃焼部の内部から土製支脚、長胴甕が出土している。またカマド左袖の芯材として長胴甕が使用されていた。土製支脚は、途中まで中空となる形態で、外面を縦にヘラケズリし、内面を横方向にヘラケズリして整えている。また裾部はヨコナデが施されている。

428-17は、長胴の甕で底部と口縁部の一部に被熱痕が確認できる。内面には、底部から1/4のところに粒状の付着物が確認されている。

429-3は、長胴甕である。底部を除く胴部の外面いっばいに、被熱痕跡が残る。内面には、下から1/3のところまで粒状の付着物を確認できる。

429-2は、長胴の甕である。胴下位から底部にかけて、被熱痕が確認される。内面には、これと対応する位置に粒状の付着痕跡を確認する。

429-1は、長胴甕である。肩部に口縁部を除き、被熱痕跡が残る。内面には、口縁部直下から底部にかけて、粒状の付着物を確認できる。

429-4は、長胴の甕である。底部を欠損している。外面肩部に帯状に、被熱痕が確認される。内面には、胴部の中位に粒状の付着痕跡を確認する。

第114号住居跡

短煙道のカマドである。保存状態は良好である。関係した土器類はみられない。

(5) 遺物各説 一古墳時代第Ⅵ期の出土土器器分類一

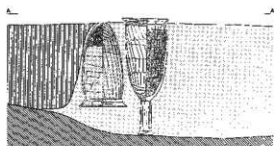
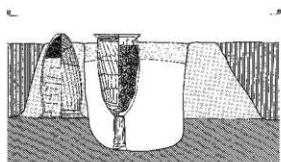
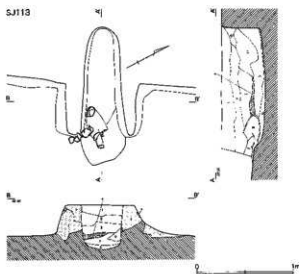
古墳時代第Ⅵ期の出土土器は、26種の器種を見ることができる。

1 坏埴類 食膳具の坏埴類には、9つの器種がある。

須恵器模倣坏蓋6（蓋坏6） 須恵器の蓋付坏の蓋を模倣した土師器の坏の系譜を引く坏である。田辺編年陶器古跡群TK209～TK217にかけての須恵器と併行すると思われる。模倣坏を独自に型的に発展させたものである。底部のヘラケズリの技法がさらに進む。成形の過程は、まず底部内面を円形にヘラオサエを行ない、外面を指押えによって成形する。口縁部には、断続ヨコナデがみられる。外縁は不明瞭化してくる。内面のS字状の戻りはさらに鈍い。口唇部は丸い。工具による押えはほとんどない。第Ⅴ期よりも扁平化しさらに小型化する。やはり普通製品のみ。

須恵器模倣坏身6（身坏6） 須恵器の蓋付坏の身を模倣した土師器の坏である。田辺編年陶器古跡群TK209～TK217の須恵器坏身に、形態は近似している。前段階同様、須恵器模倣坏蓋6とセットとなるのではなく、有段口縁坏B3とセットになるとと思われる。成形技法は、まず底部内面を円形にヘラオサエを行ない、外面を指押えによって成形。口縁部を断続ヨコナデし、底部を細かく削って仕上げる。削りは大変難になる。口縁部は、内側に傾斜しつつ立ち上がり、S字状に粘土を折り曲げて口縁部を作り出す。口縁部の返りが短くなる。須恵器の変化に連動し、小形化の傾向をさらにたどる。

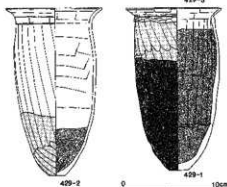
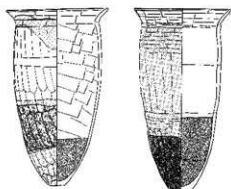
S.113



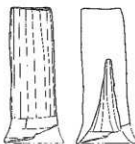
第113号住居跡・カマド土層説明

1. 灰褐色土 焼土粒子多量、灰化粒子少量含む
2. 暗褐色土 焼土粒子多量含む
3. 黒褐色土 焼土粒子多量、灰粒を含む、粘性強
4. 褐色土 焼土粒子多量含む、粘性極めて強
5. 黄褐色土 焼土粒子多量、灰粒を含む、粘性強
6. 褐色土 焼土粒子少量含む、粘性極めて強
7. 黄褐色土 焼土粒子ごくわずか含む
8. 暗赤褐色土 灰多量含む、焼土層
9. 褐色土 焼土粒子多量含む、粘性強
10. 暗褐色土 焼土粒子含まない
11. 暗褐色土 焼土粒子含まない

- ア 暗褐色土 焼土粒子多量含む
 イ 焼土粒子少量含む、地山に臨む
 ウ 灰黄褐色土 焼土粒子少量、灰化粒子含む
 エ 暗赤褐色土 焼土層(火災時のもの)
 オ 暗褐色土 灰粒子含む



S.113



0 20cm

第401図 第113号住居跡カマド・遺物出土状態

有段口縁環 B 2 (有環 B 2) 須臾器の蓋付環の蓋の模倣の一形態と考えられる。田辺編年陶器古窯跡群 T K 209~T K 217 に併行する段階と考えられる。口縁部は、1 段以上はない。この段階の普遍的な模倣環。成形手法として、口縁部には、細かな断続ヨコナデが認められ、やや外反気味に立上がる。底部は、ヘラケズリ技法が発達し、扁平化がさらに進む。有段口縁であるために器高は高い。口唇部は水平面ができるようになる。法量からみると普通製品である。黒色処理される製品もある。

有段口縁環 C 2 (有環 C 2) 須臾器の蓋付環の蓋の模倣の一形態と考えられる。田辺編年陶器古窯跡群 T K 209~T K 217 に併行する段階と考えられる。口縁部は、複数の段から構成される。胴体数は少ない。口縁部は、大きく外に開く器形である。底部は口徑に比べ大変小さく、底部ヘラケズリ技法によって作られている。底部は扁平で、口縁部が大きく開くため器高は低い。口唇部の内側には、水平面ができるようになる。法量からみると小形製品である。黒色処理される。

壙 5 (塚 5) 小形の壙形土器で外面は、ヘラケズリによって作られる。内面はヨコナデが施されている。小形の土器で、明確な系譜等を追うことは困難である。

真間式土器環 (真環 1) 口唇部が僅かに内側に屈曲する内屈口縁の環である。本来第 VII 期以降に普遍的になる食膳具であるが、1 点第 VI 期の土器とともに出土していたので掲載しておく。あるいは混入品か。外面は細かく口唇部直下までヘラケズリされ、内面はていねいにヨコナデされている。

比企型環 2 (比 2) 比企型環の一つ。器壁は薄く作られ、底部は細かくヘラケズリされている。口縁部はていねいにヨコナデされ、口唇部は S 字状に屈曲している。口徑が小さくなり、浅めの製品である。外面の底部を除くと全体に赤色塗彩が認められる。大変シャープな作りである。

搬入品壙 系譜関係の明らかに違う、非在地産の壙が、2 点確認されている。1 点は、内外面をていねいにヘラミガキされた土器で、平行ヘラミガキやジグザグ状のヘラミガキがみられる。深めの壙形の土器である。もう 1 点は、口縁部で大きく外反する深めの土器で、外面が黒色処理されている。プロポジション的に追うことができない。ていねいな作りである。

2 高環類 食膳具の高環類には、3 つの器種がある。

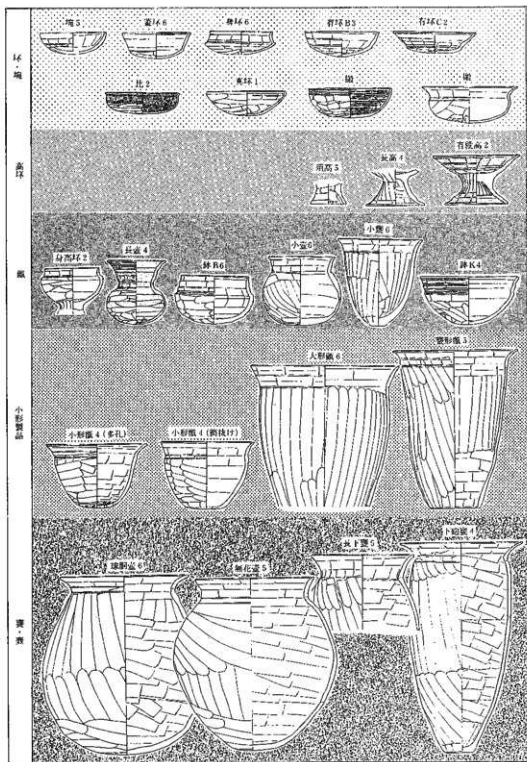
須臾器長脚高環模倣高環 4 (長高 4) 図示した高環脚部は、従来の須臾器の長脚高環を模倣した。この類に入るか不明だが、ここにしておくことにした。長く高く作られた脚部のみ残存する。裾部は、断続ヨコナデされている。

須臾器模倣高環 5 (須高 5) 須臾器の短脚高環の模倣高環の系譜を引く高環で、脚部のみ確認されている。裾の広がりは大きくない。断続ヨコナデが施されている。

有段口縁高環 2 (有高 2) 口縁部が有段口縁となる高環で、裾部も同様に有段化されている。器高はさらに低くなり、口縁部や脚部は裾広がりになっている。脚部は縦にヘラケズリを行ない、裾部や口縁部など断続ヨコナデが行なわれている。脚部の作りはていねいである。黒色処理されている。

3 小形製品 小形製品は、機能毎に柱を立てるべきだが一括した。6 つの器種を設定した。

長頸壺 4 (長壺 4) 須臾器の長頸壺を模倣したものが、独自の型式変化を遂げている。口縁部に



第 402 図 古墳時代第VI期の出土土器分類

は、薄く沈線状の凹がみられる。胴部はさらに扁平化が進み、広口の口縁部が付く。口縁部は、断続ヨコナデによって有段口縁化されている。胴部は、細かな横方向のヘラケズリによって成形されている。

鉢B類6（鉢B6） 大形の鉢形土器である。成形方法等は、口縁部は内側に屈曲し、口唇部で再び外側に屈曲する。断続ヨコナデによっていねいに作られている。底部も細かくヘラケズリされ、内面は断続ヨコナデされ、有段口縁化している。深めの壘形となっている。

鉢K類4（鉢K4） 大形の鉢形土器。深い壘形の器形で、口縁部は、有段口縁である。横方向に細かく断続ヨコナデされている。底部は、細かなヘラケズリで調整される。内面は、ヨコナデ。被熱痕の残る土器が多く、あるいは煮沸用の土器であろうか。内外面に黒色処理がされる場合がある。第V期に比べ、小型化している。

小形壺6（小壺6） 粘土を輪積みし、内面を指、あるいはヘラによる押し当てで成形する。外面は、胴部を横方向のヘラケズリを行ない調整する。口縁部は断続ヨコナデが行なわれ、有段口縁化されている。口縁は、球胴の胴部から強く屈曲して作られている。口縁部は直立している。

須恵器坏身模倣高坏（身高坏2） 坏身模倣坏を坏部とした高坏である。唯、深めなので、あるいは須恵器脚付有蓋短頸壺の模倣の可能性もある。成形技法は、坏身模倣坏と同様。

小形壺6（小壺6） 口縁部は大きく開き、長胴壺の1/2の高さで作られている。口縁部は断続ヨコナデが施され、胴部は縦にヘラケズリされている。

4 甔 甔の土師器全体に占める割合は、多くない。しかし3つの器種の設定が可能である。大形甔形甔5（甔形甔5） 頸部のあまり締まらない、ずん胴の大形の甔形甔である。内面は胴部を縦にナデアゲ、底部から1/3を横にヘラオサエしている。口縁部はくの字に屈曲している。外面は、口縁部をヨコナデし、胴部を縦にヘラケズリしている。

大形甔6（大形甔6） 大形の筒抜けの甔である。底部は欠損している。形状は、三角甔の大型化したもの。一直線に口縁部に達する。口縁部では短く、なだらかに屈曲し外反する。

小形甔4（小形甔4） 底部は欠損しているが、小形の筒抜けと多孔がある。口縁部は、胴部から一直線に作られ変化がない。口縁部は断続ヨコナデされている。外面は、縦に細かなヘラケズリ。内面は、ヘラオサエされている。

5 甕・壺 甕・壺は、煮沸・貯蔵用として多く生産される。4つの器種の設定が可能である。球胴壺6（球胴壺6） 口縁部は有段口縁化しており、胴部は下膨れである。外面は粗くヘラケズリされている。底部は横にヘラケズリされている。内面はヘラオサエによって作られている。

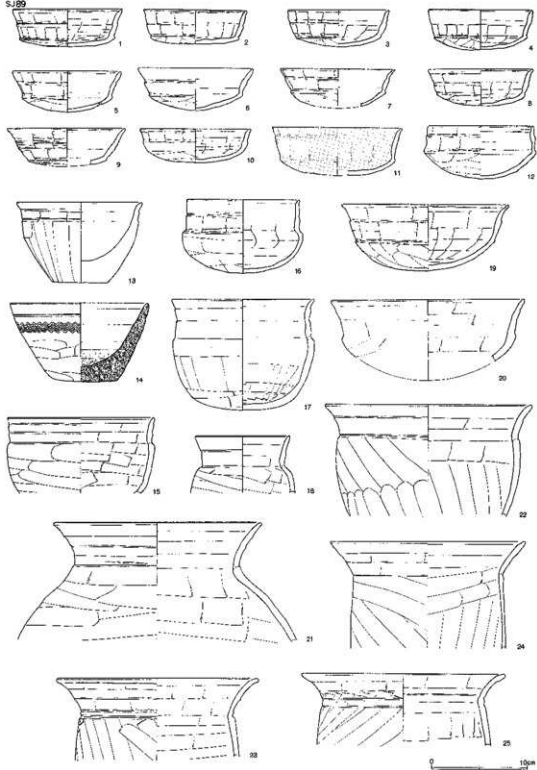
無花果壺5（無花果壺5） 口径の大きな大形の壺である。胴部の全面をヘラケズリされている。口縁部は緩く断続ヨコナデされている。内面は、ヘラオサエされており、口縁部はヨコナデである。球胴の大形の壺である。

下膨れ球胴壺5（長下壺5） 胴部中位以下が欠損している。長胴でしかも最大径が、胴下半にある下膨れの壺を一括する。外面は縦にヘラケズリをし、胴下半をさらにヘラケズリしている。口縁部が、くの字に近く屈曲し、断続ヨコナデが施されている。内面は、ヘラオサエのあと、ヨコナデが施されている。

砲弾形長胴甕4（長筒甕4） 長胴でしかも最大径が、胴上半肩部にある甕を一括する。外面は縦にヘラケズリをし、底部付近を斜め横に削っている。肩部が斜めに縦にヘラケズリされるのが特徴である。口縁部の開きがさらに広くなり、器高も高くなる。口縁部の外反も一段と強くなる。内面はヘラオサエによって作られている。

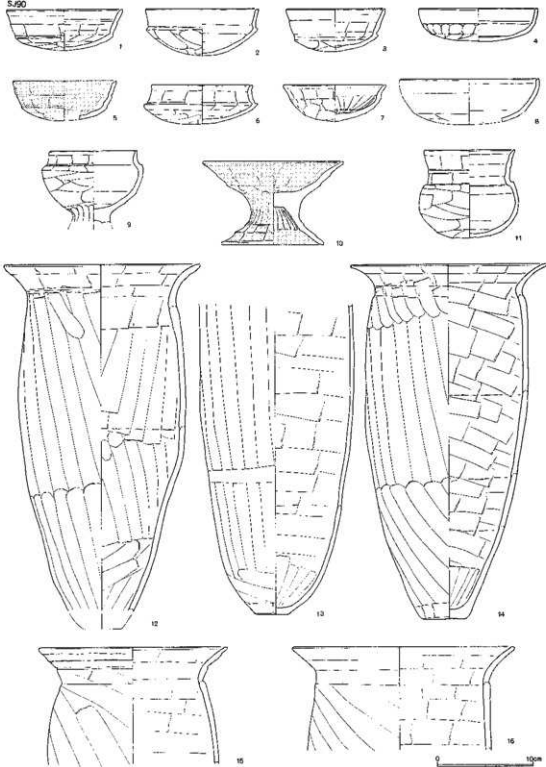
古墳時代第VI期として分類した土師器は、有段口縁坏が食膳具の殆どを占めるようになる。これにともなって各地からの土器の動きも、とくに食膳部を中心として活発になり、隣接する比企地方や北関東の土器が散見される。集落は、安定的な発展をみることができ、とくに本郷前東に集落を作ることは重要視できる。大形の首長墓は、前方後円墳から大型方墳（大型円墳）へと変化をする。在地の各集落は、大きなターニング・ポイントを迎えるわけではなかった。

SJ89

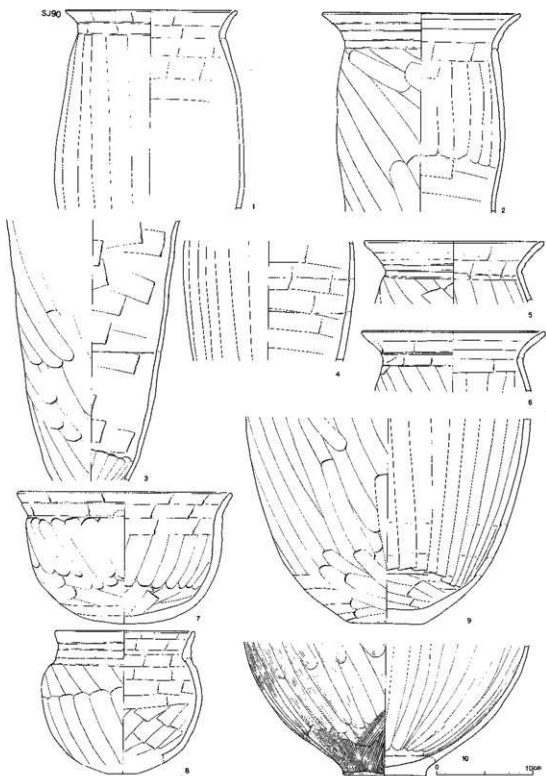


第 403 图 第89号住居跡出土遺物

S.90

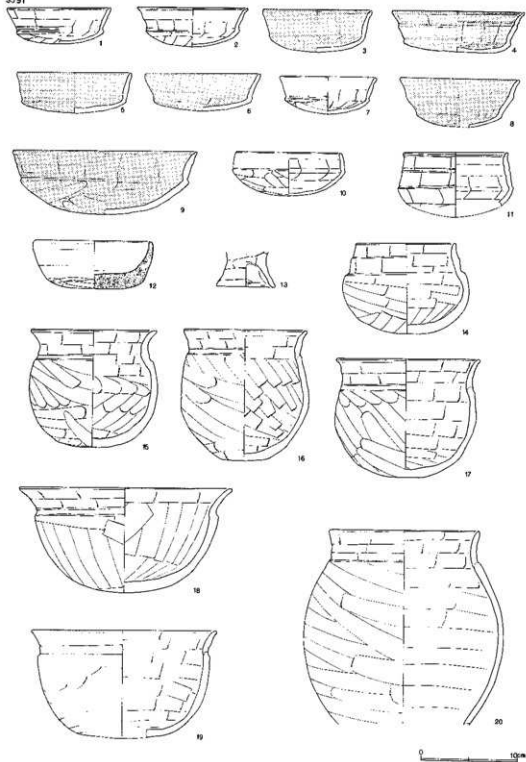


第404图 第90(1)号住居跡出土遺物



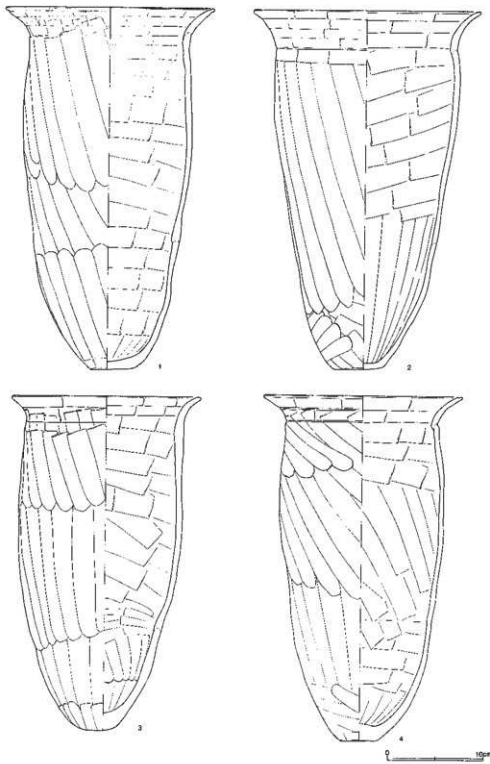
第405图 第90(2)号住居跡出土遺物

SJ91



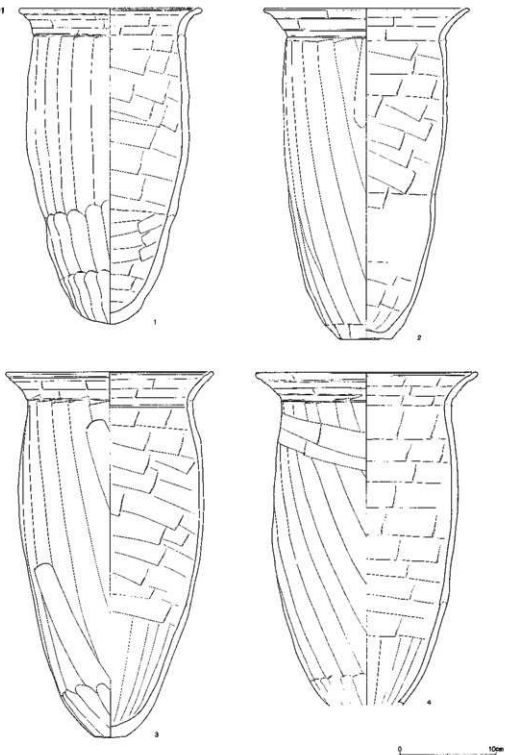
第 406 图 第91(1)号住居跡出土遺物

SJ91



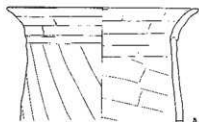
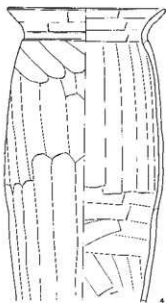
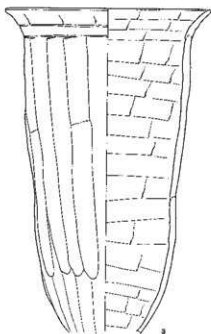
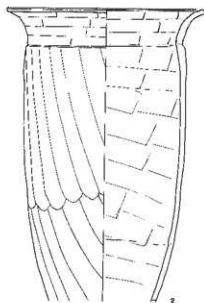
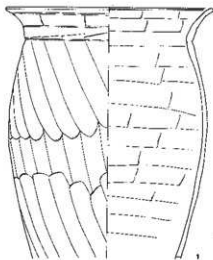
第 407 图 第91(2)号住居跡出土遺物

SJ91



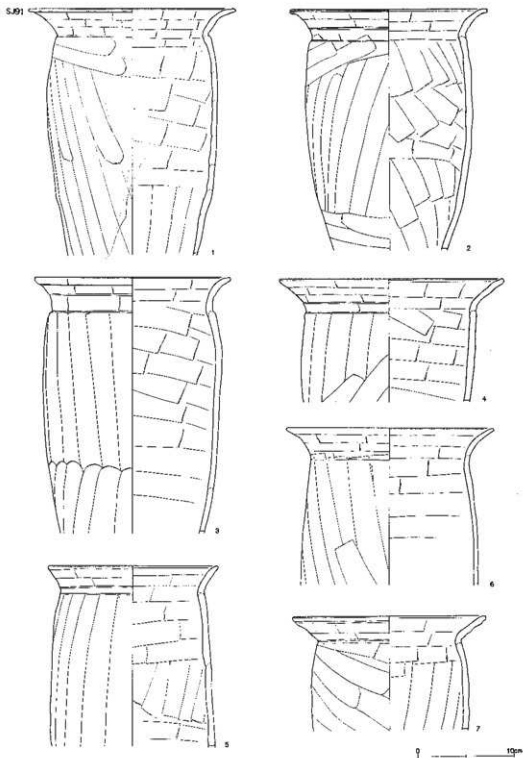
第 408 图 第91(3)号住居跡出土遺物

SJ91



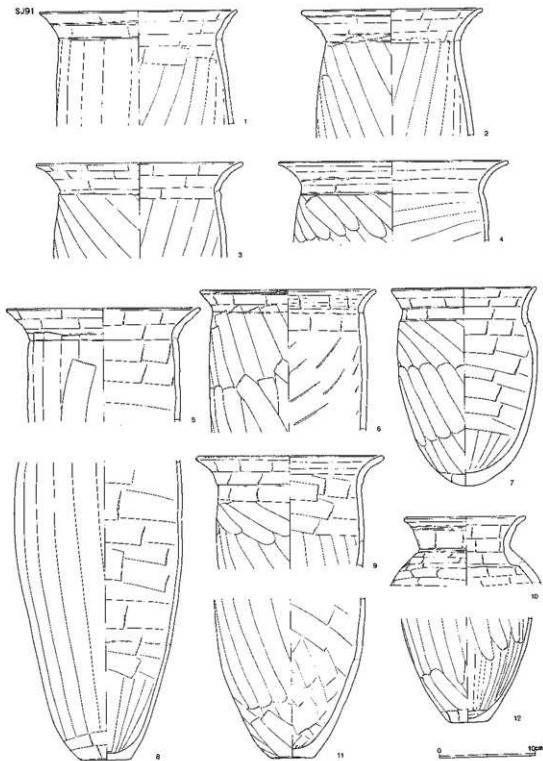
0 10cm

第 409 图 第91(4)号住居跡出土遺物



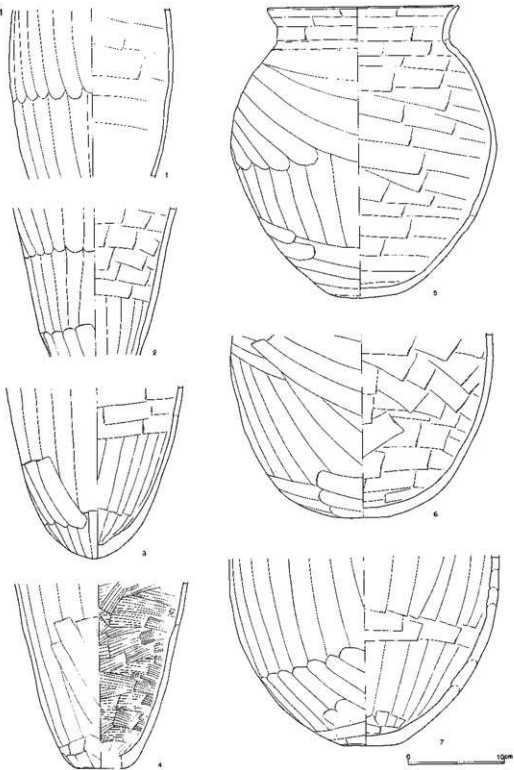
第410图 第91(5)号住居跡出土遺物

S.91

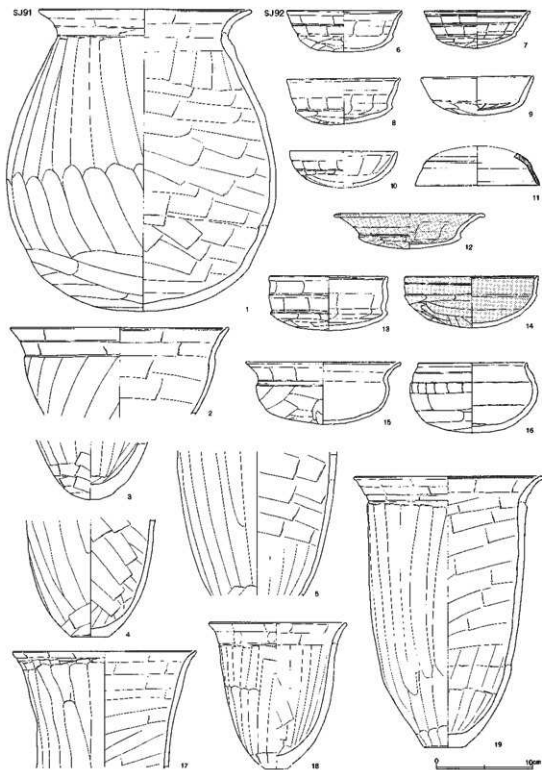


第 411 图 第91(6)号住居跡出土遺物

SJ91

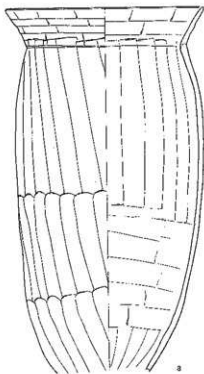
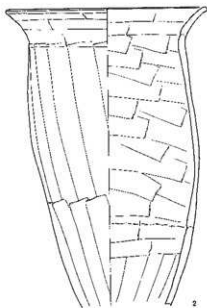
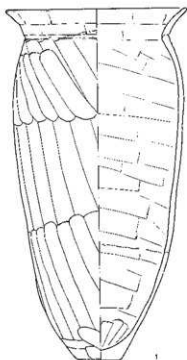


第412图 第91(7)号住居跡出土遺物



第 413 图 第91(8)·92(1)号住居跡出土遺物

SJ92

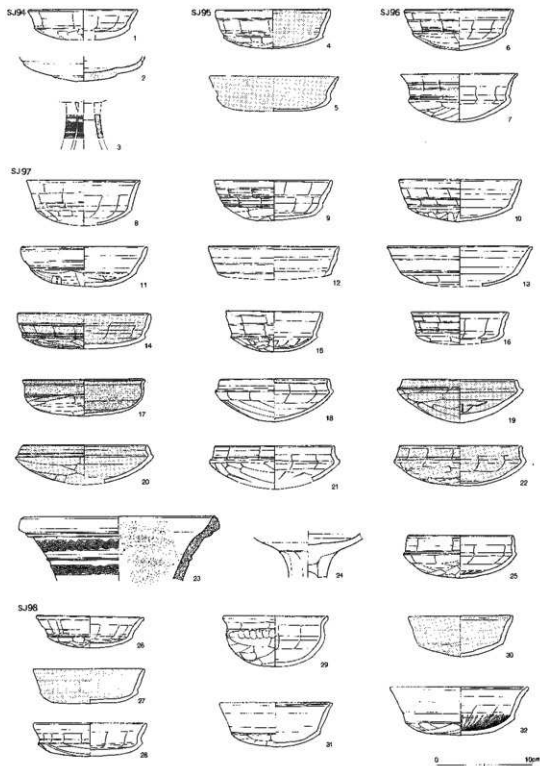


SJ93



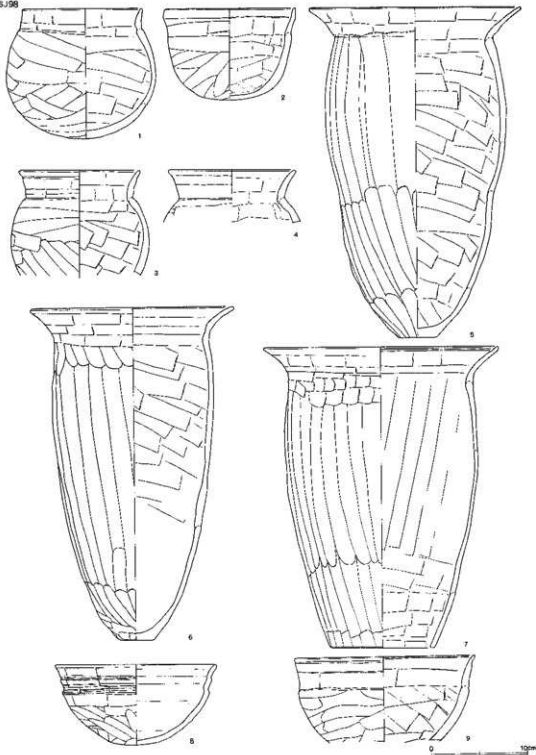
0 10cm

第 414 图 第92(2)·93号住居跡出土遺物

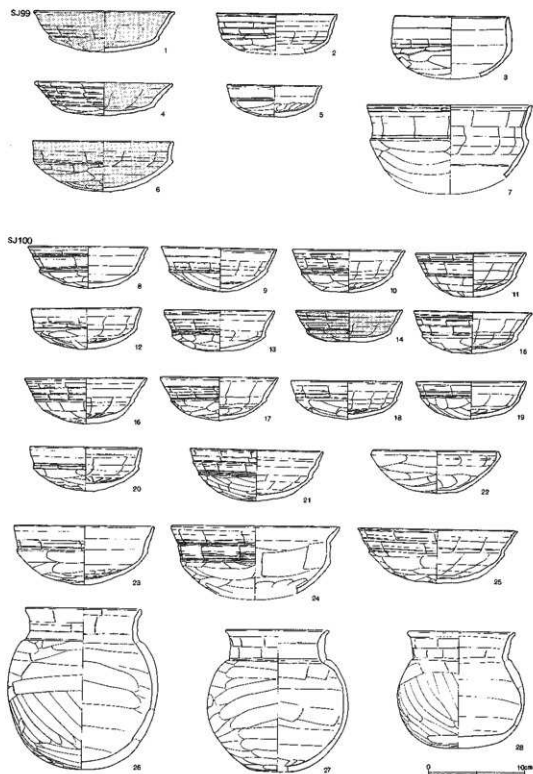


第 415 图 第 94·95·96·97·98(1)号住居跡出土遺物

S/98

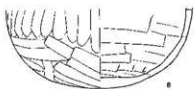
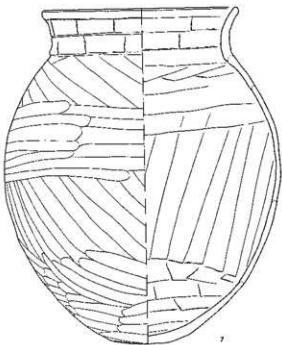
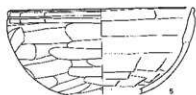
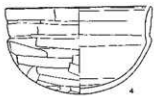
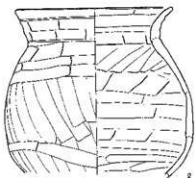
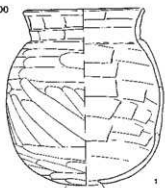


第416图 第982号住居跡出土遺物



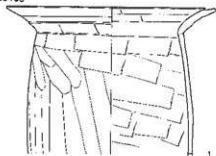
第 417 图 第 99·100(1)号住居跡出土遺物

SJ100

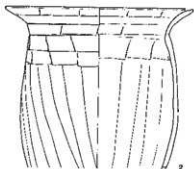


第 418 图 第1002)号住居跡出土遺物

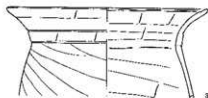
SJ100



1



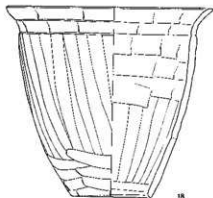
2



3



15



18

SJ101



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



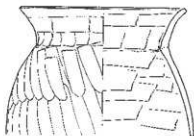
14



16



17

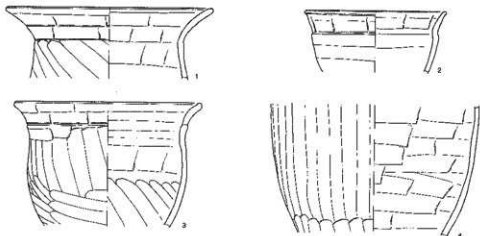


19

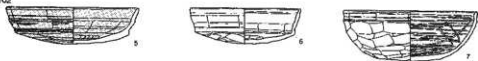


第 419 图 第 100(3)·101(1)号住居跡出土遺物

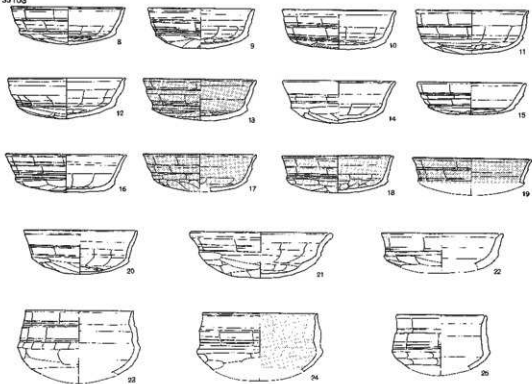
SJ101



SJ102

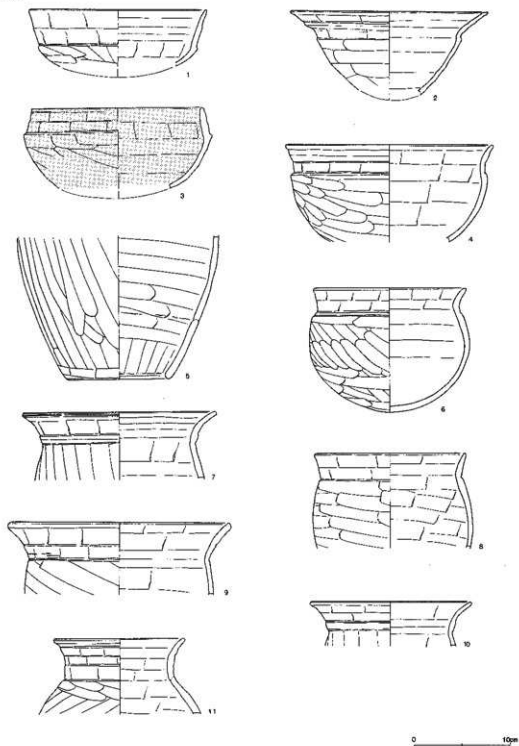


SJ103

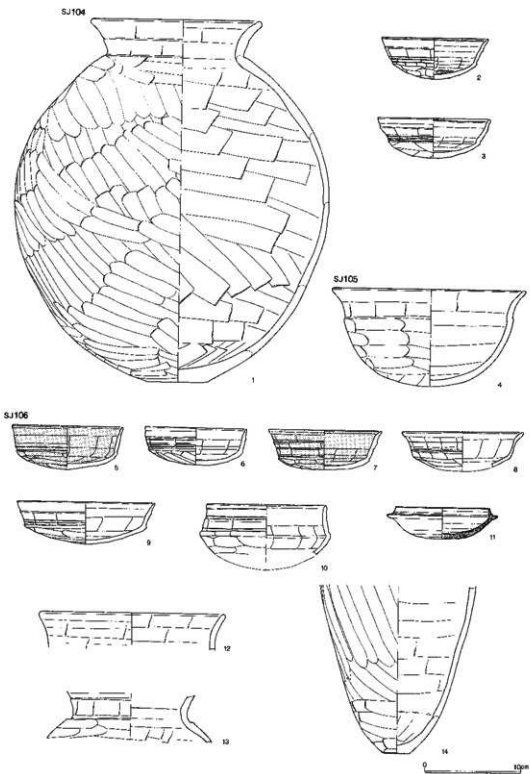


0 10cm

第 420 图 第101(2)·102·103(1)号住居跡出土遺物

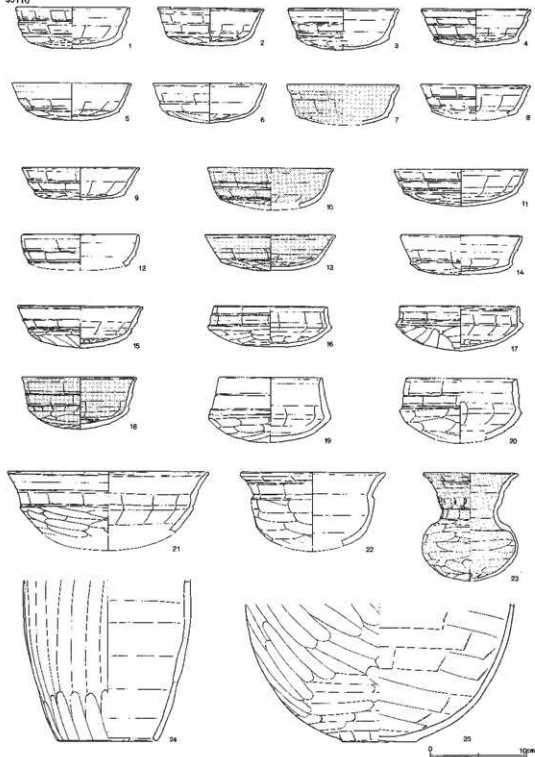


第 421 图 第103(2)号住居跡出土遺物



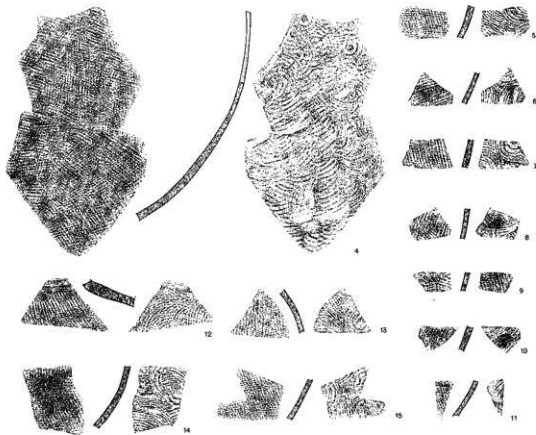
第 422 图 第 104 · 105 · 106 号住居跡出土遺物

SJ110

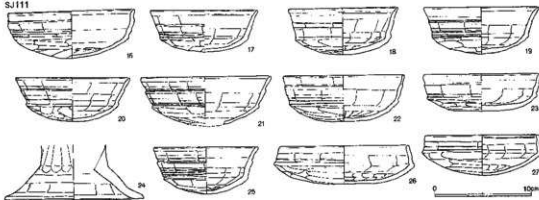


第 423 图 第110(1)号住居跡出土遺物

SJ110

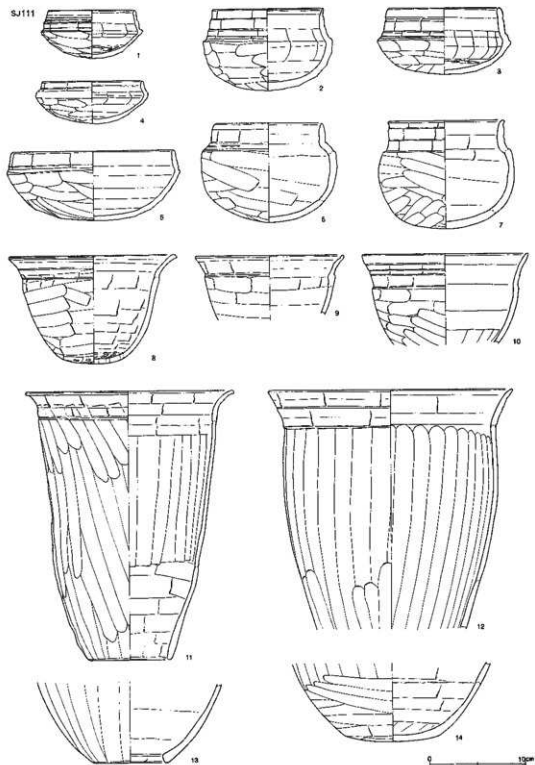


SJ111



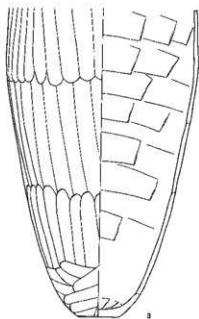
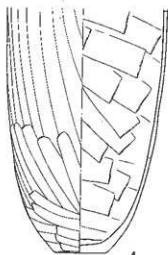
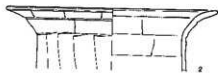
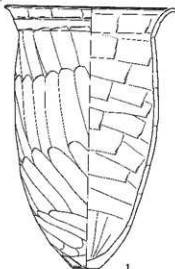
第 424 图 第 110(2)·111(1)号住居跡出土遺物

SJ111

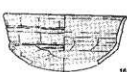


第 425 图 第111(2)号住居跡出土遺物

SJ111



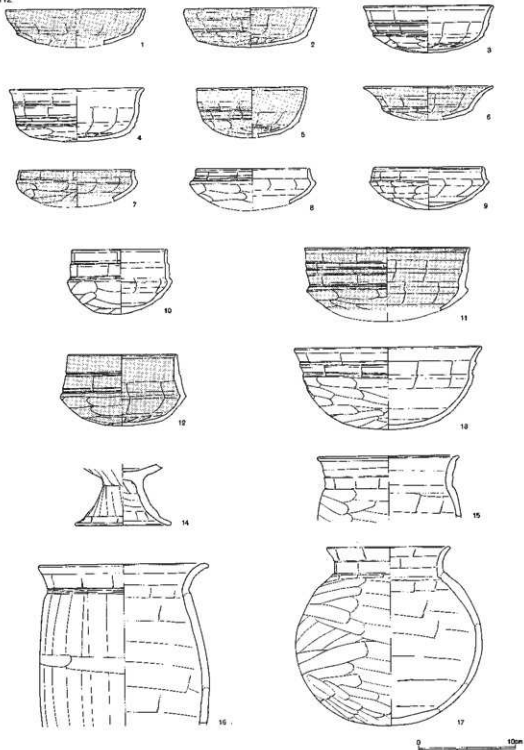
SJ112



0 10cm

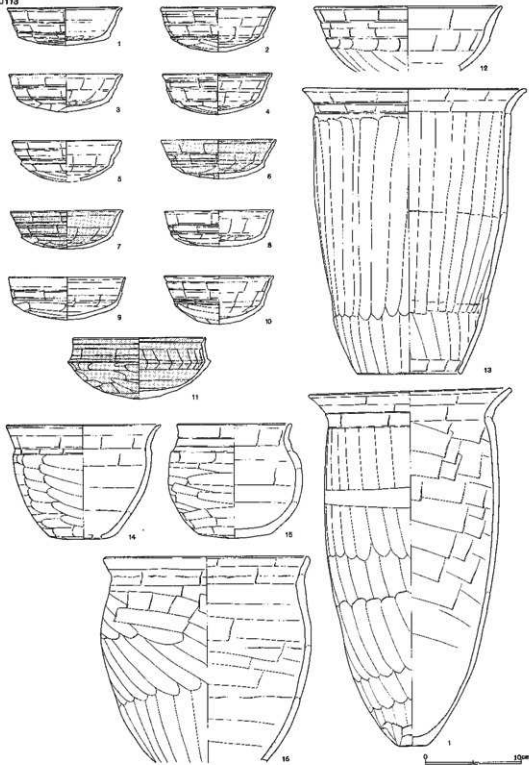
第 426 图 第 111(3)·112(1)号住居跡出土遺物

SJ 112



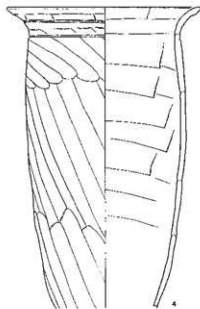
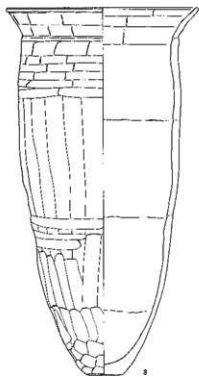
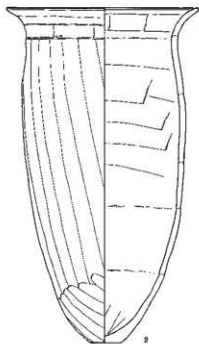
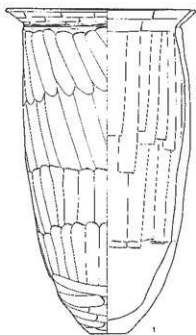
第 427 图 第112(2)号住居跡出土遺物

SJ113



第 428 图 第 113(1)号住居跡出土遺物

SJ113



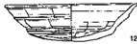
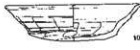
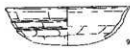
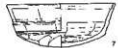
0 10cm

第 429 图 第113(2)号住居跡出土遺物

SJ113



SJ114



0 10cm

第 430 図 第113(3)・114号住居跡出土遺物

第149表 第89号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 景				残存度	手法の特徴・成(壺)形の順序	色調・構成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 403 図								
1	有环B2	11.6	10.0	4.0	240	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	3YR6/8
2	有环B3	11.0	9.5	3.6	280	8/10	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/2
3	有环B3	10.8	9.0	3.9	200	8/10	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR6/8
4	有环B3	11.1	10.4	4.2	260	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR7/4
5	有环B3	11.5	9.5	4.4	240	8/10	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	底面に小さな穴あり 7.5YR8/2
6	有环B3	12.2	10.0	4.6	300	3/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR8/6
7	有环B3	12.2	10.1	4.1	4/10		底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR6/6

第150表 第89号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				現存量	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	口径	器高	口径			
8	有环B3	11.1	9.4	3.9	200	完形	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5 Y R 7 / 8
9	有环B3	12.5	8.4	4.0	240	4 / 10	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5 Y R 5 / 2
10	有环B6	11.8	11.2	3.6	220	完形	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	5 Y R 6 / 8
11	有环B3	13.8	12.2	5.1	1 / 3		周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内面黒色処理 7.5 Y R 7 / 2
12	鉢B6	11.2	12.0	5.6	360	4 / 5	周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(2段)。内面ココナデ。	7.5 Y R 8 / 4
13	鉢K4	13.2	12.3	8.5	400	完形	胴部断続ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面ココナデ。	5 Y R 6 / 8
14	深コナテ	14.5	14.1	8.3	500	完形	口縁部ココナデ・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面ココナデ。	胴部内面断続厚底N5 / 2
15	鉢K4	15.5			2 / 5		胴部断続ヘラケズリー(2段)・口縁部ココナデ。内面断続ココナデ。	5 Y R 5 / 2
16	鉢B6	12.0	12.8	7.8	620	3 / 5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	7.5 Y R 6 / 2
17	鉢K4	15.2	15.0	11.6	400	4 / 5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(3段)。内面断続ココナデ・放射状ヘラミガキ。	5 Y R 7 / 8
18	小壺B	10.0			2 / 10		口縁部ココナデ(2段)。内面ココナデ。胴部断続ヘラケズリー。内面ヘラオシアテ・断続ココナデ。	7.5 Y R 7 / 2
19	鉢K4	17.7	14.8	7.1	800	完形	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5 Y R 7 / 4
20	鉢K4	20.7		8.5	7 / 15		底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	7.5 Y R 8 / 4
21	無底壺5	22.0			1 / 5		胴部断続ヘラケズリー・口縁部ココナデ。内面ココナデ。	5 Y R 7 / 8
22	鉢K4	22.0			4 / 10		周辺ヘラケズリー・口縁部ココナデ。内面断続ココナデ。	5 Y R 6 / 8
23	広底壺4	21.4			2 / 10		胴部断続ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面ヘラオシアテ・断続ココナデ。	5 Y R 7 / 4
24	高脚壺4	20.6			1 / 10		胴部断続ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面ヘラオシアテ・断続ココナデ。	7.5 Y R 8 / 6
25	長底壺4	21.5			8 / 16		胴部断続ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面ヘラオシアテ・断続ココナデ。	5 Y R 6 / 8

第151表 第90号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				現存量	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	口径	器高	口径			
第404回 1	有环B3	12.3	10.5	4.4	300	完形	底面ヘラケズリー・口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	7.5 Y R 8 / 1

第152表 第90号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(置)形の順序	色澤・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	口径			
2	甕坏6	11.9	11.9	5.0	320	7/10	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	
3	有耳鉢3	10.5	8.9	4.6	200	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 7/8
4	甕	12.6	12.0	3.5	300	3/10	底面ユビオサエ→周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR 7/4
5	有耳鉢3	11.0	9.0	4.4	200	1/2	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8
6	有耳鉢6	10.8	12.1	4.1	240	1/2	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 7/8
7	甕坏6	10.9	9.6	3.9	140	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/1
8	甕	14.7	14.7	4.0		1/4	周面ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナ デ。	7.5YR 7/6
9	身取高2	9.2	10.7		300	一部欠 損	底面周面ユビオサエ→周面ヘラケズリ→断続 ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	7.5YR 7/6
10	有段高2	14.8	10.0		240	完形	周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段) 内面断続ヨコナデ。断続底ヘラケズリ→断続 断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/2
11	瓦葺4	9.9	9.6	9.3	480	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR 7/0
12	瓦葺4	20.8				8/10	胴部ヘラケズリ→胴下半部ヘラケズリ→口縁 部断続ヨコナデ。内面ナデアゲ→ヘラオサエ→ 断続ヨコナデ。	5YR 6/8
13	長筒甕4		3.5			5/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヘラケズリ。内面ナ デアゲ→ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 7/6
14	長筒甕4	20.2	5.0	37.3	5,900	一部欠 損	胴部断続ヘラケズリ→底面断続ヘラケズリ→口縁部 断続ヨコナデ。内面ナデアゲ→ヘラオサエ→口 縁部断続ヨコナデ。	7.5YR 7/6
15	長筒甕4	20.0				4/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続 ヨコナデ。	7.5YR 8/1
16	長筒甕4	23.4				3/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面口縁 部断続ヨコナデ。	5YR 6/8
第 405 図								
1	長筒甕4	18.2				1/3	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面 断続ヨコナデ。	5YR 6/8
2	長筒甕4	21.0				1/3	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ナ デアゲ→口縁部断続ヨコナデ。	7.5YR 8/1
3	長筒甕4					3/10	胴部断続ヘラケズリ。内面ヘラオサエ→断続ヨコ ナデ。	7.5YR 8/8
4	長筒甕4					2/10	胴部断続ヘラケズリ。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8
5	長筒甕4	10.4				1/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ナ デアゲ→断続ヨコナデ。	内外面灰色地埋
6	長筒甕4	18.1				1/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ナ デアゲ→断続ヨコナデ。	7.5YR 6/8
7	鉢4	22.6	3.5	13.8	3,100	完形	胴部断続ヘラケズリ→底面断続ヘラケズリ→口縁部	5YR 6/8

第153表 第90号住居跡出土土器③

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
8	小壺6	14.7		15.0	1,900	8/10	ヨコナデ。内面ナデアゲ→断続ヨコナデ。 胴部横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部 ヨコナデ。内面ナデアゲ→断続ヨコナデ。	5 Y R 8 / 3
9	無花壺5		7.5			4/10	胴部横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面ヘ ラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
10	無花壺2		9.7			1/5	胴部横ヘラケメ→底部横ヘラケメ。内面ナデアゲ。	5 Y R 4 / 1

第154表 第91号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第406 団								
1	有环B3	11.0	9.2	3.0	200	3/4	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 8 / 3
2	有环B3	11.8	10.0	4.2	200	完形	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
3	有环B3	11.5	10.2	4.5		1/2	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面底部ヘラオサエ→断続 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
4	有环B3	14.0	11.4	4.3		1/3	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面底部ヘラオサエ→断続 ヨコナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 7 / 3
5	蓋杯6	12.0	11.1	4.4	280	7/10	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
6	有环B3	12.1	10.2	3.9	200	完形	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面底部ヘラオサエ→ヨコ ナデ。	5 Y R 4 / 1
7	有环B3	10.2	9.0	4.0		1/4	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 6
8	有环C2	12.6	9.0	5.3		1/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面底部ヘラオサエ→ヨコ ナデ。	5 Y R 4 / 1
9	鉢K4	10.6	17.8	8.8		1/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 5 / 2
10	身杯6	11.1	12.0	4.6	300	完形	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 8
11	鉢B6	11.1	12.2	7.2		7/10	周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断 続ヨコナデ。	5 Y R 8 / 2
12	須耳身	12.3	10.3	4.2	280	完形	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ。内面口縁 ヨコナデ。	須恵器 N 8 / 2
13	須高5					1/3	ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 5 / 6
14	鉢B6	10.7	12.5	9.5	1,200	完形	胴横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断 続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 3
15	小壺6	13.3	7.5	12.3	1,400	完形	胴横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断 続ヨコナデ。内面ナデアゲ→断続ヨコナデ。	1 0 Y R 8 / 2
16	小壺6	13.1		14.8	1,100	一部欠	胴横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断	2.5 Y R 6 / 8

第155表 第91号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(産)形の順序	色澤・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
17	小壺 4	15.3	6.8	12.5	1,500	1部欠 横	絞ココナデ。内面ナダアゲ→断縁ココナデ。 胴斜ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断縁	7.5YR 7/4
18	鉢 K 4	22.5		11.0	2,000	3/3	胴縁ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断縁 絞ココナデ。内面断縁ココナデ。	5YR 6/6
19	鉢 K 4	19.7	4.7	11.5		3/4	胴縁ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ→口縁部断縁 ココナデ。内面断縁ココナデ。	5YR 7/6
20	埴輪 6	15.9				6/10	胴縁ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面断縁 絞ココナデ。	5YR 8/2
第 407 図								
1	長冠壺 4	22.1	4.5	38.1	3,000	一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 ココヘラオサエ。	5YR 6/4
2	長冠壺 4	24.9	6.0	37.7	6,200	1/2	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 ココヘラオサエ。	5YR 7/4
3	長冠壺 4	20.0	3.5	35.2	4,000	一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 ココヘラオサエ。	7.5YR 8/1
4	長冠壺 4	21.0	4.3	36.2	6,100	4/5	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ→底部 横ヘラケズリ。内面ココヘラオサエ。	2.5YR 3/0
第 408 図								
1	長冠壺 4	19.2		33.3	4,900	一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ→底部 横ヘラケズリ。内面ココヘラオサエ。	5YR 8/1
2	長冠壺 4	21.7	5.8	35.0	5,300	一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ→底部 横ヘラケズリ。内面ココヘラオサエ。	2.5YR 6/8
3	長冠壺 4	22.0	3.2	38.4	6,500	一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ→底部 横ヘラケズリ。内面ココヘラオサエ。	2.5YR 6/8
4	長冠壺 4	23.5				3/5	胴部縦ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面断縁 絞ココナデ→ココナデ。	2.5YR 7/6
第 409 図								
1	長冠壺 4	22.0				2/3	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ→ココナデ。	5YR 6/4
2	長冠壺 4	21.0				3/5	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ→ココナデ。	2.5YR 6/6
3	長冠壺 4	21.8				一部欠 横	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ→ココナデ。	10R 5/8
4	長冠壺 4	16.6				2/3	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ→ココナデ。	5YR 6/4
5	長冠壺 4	20.2				1/3	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ。	5YR 6/4
6	長冠壺 4	22.5				1/5	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 断縁ココナデ。	2.5YR 7/6
第 410 図								
1	長冠壺 4	21.9			4,900	4/5	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面 ナダアゲ→断縁ココナデ。	10R 3/6
2	長冠壺 4	20.9			4,000	2/5	胴部縦ヘラケズリ→胴下半横ヘラケズリ→口縁 部断縁ココナデ。内面ナダアゲ→断縁ココナデ	2.5YR 6/3
3	長冠壺 4	20.7			5,800	4/5	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断縁ココナデ。内面	10R 6/4

第156表 第91号住居跡出土土器③

番号	器種分類	法 象				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
4	長卵甕4	23.6			2,400	1/5	ナデアゲ-新橋ヨコナデ。 胴部縦ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 新橋ヨコナデ。	2.5YR 6/4
5	長卵甕4	18.0			4,300	2/5	胴部縦ヘラケズリ-11線部新橋ヨコナデ。内面 新橋ヨコナデ。	5YR 6/4
6	長卵甕4	21.9			3,700	7/10	胴部縦ヘラケズリ-12線部新橋ヨコナデ。内面 ヨコナデ。	2.5YR 6/4
7	長卵甕4	20.5				1/5	胴部斜ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 ナデアゲ・ヨコナデ。	5YR 5/4
第 411 区								
1	長卵甕4	20.9				2/5	胴部斜ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 ナデアゲ・ヨコナデ。	5YR 6/4
2	長卵甕4	19.1				2/3	胴部斜ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 ナデアゲ・新橋ヨコナデ。	10R 5/8
3	長卵甕4	21.0				1/5	胴部斜ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 ナデアゲ-新橋ヨコナデ。	2.5YR 6/8
4	長卵甕4	24.3				1/5	胴部斜ヘラケズリ-口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	2.5YR 6/6
5	長卵甕4	20.3				1/5	胴部斜ヘラケズリ-口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	5YR 6/4
6	長卵甕4	74.6				1/5	胴部斜ヘラケズリ-11線部ヨコナデ。内面ナデ アゲ-新橋ヨコナデ。	5YR 7/3
7	小鉢6	15.3	20.8	3,000		1/3	胴部斜ヘラケズリ-底部斜めヘラケズリ-口縁 部新橋ヨコナデ。内面ヘラオサエ・新橋ヨコ ナデ。	7.5YR 7/4
8	長卵甕4		5.0	4,000		1/3	胴部斜ヘラケズリ-底厚斜めヘラケズリ。内面ナ デアゲ-ヘラオサエ。	7.5YR 6/6
9	長卵甕4	15.1				1/5	胴部斜めヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内 面ナデアゲ-ヘラオサエ-新橋ヨコナデ。	5YR 7/4
10	無花鉢5	12.8				1/3	胴部縦ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面 ヘラオサエ-新橋ヨコナデ。	5YR 7/6
11	長卵甕4		4.5			3/10	胴部斜ヘラケズリ-底部斜めヘラケズリ-内面ナ デアゲ-ヘラオサエ。	2.5YR 6/6
12	長卵甕4		4.0	2,500		1/3	胴部斜ヘラケズリ-底部斜めヘラケズリ。内面ナ デアゲ-ヘラオサエ。	7.5YR 7/4
第 412 区								
1	長卵甕4					2/5	縦ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	7.5YR 7/3
2	長卵甕4					1/5	縦ヘラケズリ。内面ナデアゲ-ヨコナデ。	2.5YR 6/4
3	長卵甕4					1/5	縦ヘラケズリ。内面ナデアゲ-ヨコナデ。	7.5YR 6/4
4	長卵甕4					2/5	縦ヘラケズリ。内面ナデアゲ-横ハケメ。	7.5YR 5/2
5	無花鉢5	20.4	30.6	10,700		4/5	胴部縦ヘラケズリ-口縁部新橋ヨコナデ。内面ヘラオ サエ-新橋ヨコナデ。	2.5YR 6/6
6	球胴甕6		8.0	6,900		4/5	胴部縦ヘラケズリ-肩部縦ヘラケズリ-口縁部 ヘラケズリ。内面ヘラオサエ。	10R 5/8
7	無花鉢6		5.5	4,800		4/5	胴部縦ヘラケズリ-肩部縦ヘラケズリ-口縁部	2.5YR 6/2

第159表 第82号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第414図	19 瓦椀Ⅳ	19.9	4.4	28.5	3,900	…底欠 痕	口縁部断続ヨコナデ・胴部縦ヘラケズリ・底部 横ヘラケズリ。内面ナデアゲ→ヘラオサエ→断 続ヨコナデ。	2.5YR 5/6
	1 瓦椀Ⅳ	19.9	4.3	37.0	5,900	4/5	口縁部断続ヨコナデ・胴部縦ヘラケズリ・底部 横ヘラケズリ。内面ナデアゲ→ヘラオサエ→断 続ヨコナデ。	2.5YR 5/6
	2 瓦椀Ⅳ	21.2				4/5	口縁部断続ヨコナデ・胴部縦ヘラケズリ。内面 ナデアゲ→ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5YR 5/6
	3 瓦椀Ⅳ	20.9				3/5	口縁部断続ヨコナデ・胴部縦ヘラケズリ。内面 ナデアゲ→ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 7/4

第160表 第93号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第414図	4 有环D3				220	一部欠 痕	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/8
	5 有环D3	12.3	12.1	4.4	240	1/2	ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR 7/3
	6 鉢Ⅳ	12.9		7.9	520	一部欠 痕	ユビオサエ→底部ヘラケズリ→口縁部断続ヨ コナデ。内面ナデアゲ→断続ヨコナデ。	5YR 6/6

第161表 第94号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第415図	1 器Ⅵ	11.6	10.1	3.3		破片	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 7/6
	2 須不明					破片	口縁部ヨコナデ。内面口縁ヨコナデ。	10YR 8/1須蓋器
	3 須高坏					破片	口縁部ヨコナデ→カキメ。三方透かし穴。ヘラ ケズリ	5B 6/1須蓋器

第162表 第95号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第415図	4 器Ⅵ	12.2	11.6	4.1	2,280	一部欠 痕	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外両黒色処理 7.5YR 7/6
	5 有环D3	13.6	12.1	3.8		4/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外両黒色処理 5YR 6/6

第163表 第96号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 415 団								
6	有環B3	11.5	10.0	4.5	200	3/5	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 10YR 7/6
7	有環B3	12.4	10.0	5.1		破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	10YR 7/3

第164表 第97号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 415 団								
8	有環B3	12.0	10.3	4.9		破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6
9	有環B3	12.5	10.5	4.3	300	破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/2
10	有環B3	13.0	11.2	4.5		破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/6
11	身環6	13.4	11.4	4.2	300	一部欠 損	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面底部ヘラオサエー断続ヨコナデ。	2.5YR 6/6
12	有環B3	13.8	13.4	3.6		破片	口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/4
13	有環B3	13.8	12.7	4.6		破片	底部ヘラケズリー口縁部ヨコナデ。内面ヨコナ デ。	5YR 7/8
14	有環B3	14.2	13.1	3.7		3/5	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 2.5YR 5/6
15	有環B3	10.3	9.3	4.4	(200)	一部欠 損	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面底部ヘラオサエー口縁 部ヨコナデ。	7.5YR 8/4
16	有環B3	15.4	12.6	4.3		破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面口縁部断続ヨコナデ。	7.5YR 8/8
17	耳環2	13.0	12.6	4.0	300	全形	周辺ヘラケズリー口縁部ヨコナデ。内面ヨコナ デ。	内面全面・外面口縁部にのみ赤彩施 施2.5YR 5/8
18	身環6	11.5	12.6	4.6		1/4	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ・断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6
19	身環6	12.2	13.4	4.7		3/5	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ・断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 2.5YR 5/6
20	身環6	13.4	14.6	4.2		破片	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	内外面黒色処理 5YR 6/6
21	身環6	10.4	9.5	4.5		破片	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオサエー断続ヨコナデ。	5YR 6/6
22	身環6	13.1	14.1	4.3		2/3	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー口縁部ヨコ ナデ。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 2.5YR 5/3
23	須臾須臾	20.1				破片	口縁部ヨコナデ→沈没→波状文(2段)。内面 口縁部ヨコナデ。	須臾器5RP4/1
24	蓋台4					破片	底部ヘラケズリー・底部ヘラケズリー周辺ヘラケ ズリー。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6

第165表 第97号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
25	身环B	11.2	12.0	4.5		破片	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	2.5YR 8/6

第166表 第98号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
第 415 図								
26	青环B3	11.4	9.0	3.3	100	4/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5YR 8/6
27	青环B3	11.8	10.4	3.7	200	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外両面色処理 2.5YR 8/6 5YR 7/6
28	青环B	12.0	11.1	3.5		2/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 7/6
29	鉢B6	11.2	10.3	5.5	280	1/1	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→内面指オサ エ→爪跡→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコ ナデ。	5YR 7/6
30	青环B	11.1	9.0	4.4	220	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	内外両面色処理 5YR 7/3
31	青环B3	12.0	9.5	4.7	220	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR 8/2
32	青环A3	14.7	11.5	5.1	400	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ→放射状刻文。	5YR 8/2
第 416 図								
1	小瓮B	12.8		13.8	1,500	完形	胴部横ヘラケズリ→底面ヘラケズリ→口縁部断 続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナ デ。	2.5YR 8/6
2	鉢K4	13.7		9.7		2/3	胴部横ヘラケズリ→底面ヘラケズリ→口縁部断 続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナ デ。	5YR 6/4
3	小瓮B	12.8				1/5	胴部横ヘラケズリ→底面ヘラケズリ→口縁部断 続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナ デ。	2.5YR 5/6
4	小瓮B	13.5				1/10	胴部横ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	2.5YR 6/8
5	長胴甕4	21.5	3.5	34.9	5,000	一部欠 損	胴部横ヘラケズリ(3段)→胴部断続ヨコナ デ。内面横ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5YR 6/3
6	長胴甕4	22.3	4.0	34.9	3,600	一部欠 損	胴部横ヘラケズリ(2段)→胴部断続ヘラケズリ →口縁部断続ヨコナデ。内面横ヘラオサエ→断続ヨ コナデ。	5YR 6/2
7	胴形甕6	24.9	16.2	31.6	7,200	4/5	胴部横ヘラケズリ(3段)→胴部横ヘラケズリ →口縁部断続ヨコナデ。内面ナデアゲ→横ヘラ オサエ→断続ヨコナデ。	5YR 6/4
8	鉢K4	17.2	15.5	8.5	960	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/4
9	鉢K4	19.1				一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ナデアゲ→ヨコナデ。	2.5YR 6/8

第167表 第99号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・或(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器径			
第417図								
1	有環A J	15.0	11.7	4.4		2/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面新焼ヨコナデ。	内外面黒色焼理 5 Y R 7 / 4
2	有環A 3	12.9	11.6	4.3	280	3/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(3段)。内面新焼ヨコナデ。	5 Y R 8 / 4
3	鉢B 6	12.2	12.7	6.7	(440)	2/3	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
4	有環C 2	14.0	11.0	3.5	300	1/2	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(4段)。内面新焼ヨコナデ。	内外面黒色焼理 5 Y R 7 / 6
5	玉環 5	10.1	9.1	3.4		1/2	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部ヨコ ナデ。内面ユビオサエーヨコナデ。	5 Y R 6 / 8
6	玉環 5	15.0	14.8	5.3		2/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ。内面新焼ヨコナデ。	内外面黒色焼理 7.5 Y R 6 / 4
7	鉢B 6	17.5	16.9	8.5		1/8	周辺ヘラケズリー-口縁部新焼ヨコナデ。内面新 焼ヨコナデ。	2.5 Y R 5 / 2

第168表 第100号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・或(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器径			
第417図								
8	有環B 3	11.6	10.5	5.4	200	一部欠 破	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
9	有環B 3	12.3	10.5	4.0	280	4/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部ヘラオサエー-新焼 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
10	有環B 3	12.0	9.8	4.5	(280)	4/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部ユビオサエー-新焼 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
11	有環B 3	11.8	9.7	4.7	(240)	一部欠 破	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部ユビオサエー-新焼 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 3
12	有環B 3	11.4	11.0	4.3	200	一部欠 破	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ。内面底部ヘラオサエー-新焼ヨコナデ	7.5 Y R 8 / 8
13	有環B 3	11.7	10.0	4.3	280	4/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ。内面底部ユビオサエー-新焼ヨコナデ	7.5 Y R 8 / 3
14	有環B 3	11.3	9.2	3.4		2/5	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部新焼ヨコナデ。	10 Y R 6 / 3
15	有環B 3	12.5	10.2	4.4	280	完形	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部ユビオサエー-新焼 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
16	有環C 2	13.0	10.7	4.9	280	完形	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(4段)。内面底部ユビオサエー-新焼 ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
17	有環B 3	12.5	10.3	4.6	280	一部欠 破	底部ヘラケズリー-周辺ヘラケズリー-口縁部新焼 ヨコナデ(2段)。内面底部ユビオサエー-新焼	7.5 Y R 8 / 3

第169表 第100号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 形				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	口径	器高	容積			
18	青灰B3	11.8	10.7	4.1	220	完形	ヨコナデ。 底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続	7.5YR8/6
19	蓋灰6	11.7	10.6	4.0	200	一部欠損	ヨコナデ。内面底端ユビオサエ・断続ヨコナデ。 底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続	10YR8/4
20	青灰B3	11.9	10.3	4.7	250	4/5	ヨコナデ。内面底端ユビオサエ・断続ヨコナデ。 底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続	7.5YR8/8
21	青灰C2	14.1	12.0	5.4	450	完形	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面底端ユビナデ→ヨコナデ。	7.5YR8/3
22	灰灰1	13.4	13.9	4.6	300	2/5	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面底端ユビナデ→ヨコナデ。	5YR5/8
23	青灰A3	14.8	13.9	6.3	380	一部欠損	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面底端ユビナデ→ヨコナデ。	7.5YR8/6
24	鉢K4	17.8	16.0	7.8		2/5	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面底端ユビナデ→ヨコナデ。	5YR6/8
25	青灰A3	17.0	14.5	5.7	560	一部欠損	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面底端ユビナデ・断続ヨコナデ。	7.5YR8/3
26	小壺6	12.1	4.5	17.0	2,200	一部欠損	胴部横ヘラケズリー・胴上半部横ヘラケズリー・底部横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ・口縁部断続ヨコナデ。	5YR6/4
27	小壺6	10.8	(4.0)	15.9		1/5	胴部横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ→ヨコナデ。	5YR6/6
28	小壺6	11.3	3.0	12.2	1,000	4/5	胴部横ヘラケズリー・胴部横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR7/4
第418圖								
1	小壺6	12.6		18.5	2,100	一部欠損	胴部横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR6/4
2	緑銅灰6	16.6				1/2	胴部横ヘラケズリー・胴部横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコサエ・口縁部断続ヨコナデ。	5YR7/3
3	鉢B6	12.1	(11.6)			1/2	周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR5/6
4	鉢B6	15.5	15.2	9.1	1,300	一部欠損	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	2.5YR5/8
5	鉢K4	19.5	(19.6)			3/5	底端ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ→ヨコナデ。	7.5YR7/3
6	鉢K4	16.0	9.3	10.2	900	完形	底端ヘラケズリー・断続ヨコナデ(4段)。内面ヘラオサエ・内面ヨコナデ。	7.5YR7/3
7	瓶花蓋5	26.5	7.5	35.2	12,090	3/5	胴部斜ヘラケズリー・胴中位横ヘラケズリー・胴下半横ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ナダゲヘラオサエ・断続ヨコナデ。	2.5YR6/8
8	球明燈6					1/10	胴部横ヘラケズリー・底部横ヘラケズリー。内面ヨコナデ。	2.5YR5/8

第170表 第100号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容 量			
第419 団								
1	長蛇壺 4	22.2				1/2	胴部傾ヘラケズリー→胴上半斜めヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面傾ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5Y R 6/3
2	長蛇壺 4	19.9				2/5	胴部斜ヘラケズリー→胴上半傾ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面ナデアゲ→断続ヨコナデ。	7.5Y R 6/3
3	長蛇壺 4	21.2				1/5	胴上半斜めヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5Y R 7/3

第171表 第101号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容 量			
第419 団								
4	有環日 3				280	4/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5Y R 7/6
5	有環日 3	13.2	11.2	4.9		4/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色焼理 7.5Y R 7/3
6	器台 4						破片 底面ヘラケズリー。内面ヨコナデ。	5Y R 6/8
7	有環日 3	14.5	11.2	3.8	320	一部欠 欠	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。→ヨコナデ。	5Y R 7/6
8	有環日 3	13.8	12.0	4.3		2/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。→ヨコナデ。	内外面黒色焼理 7.5Y R 8/4
9	有環日 3	11.7	10.0	3.8		1/4	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5Y R 6/8
10	有環日 3	13.2	11.5	4.0		1/10	周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色焼理 7.5Y R 8/4
11	有環日 3	12.1	9.1	4.0		4/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5Y R 6/8
12	有環日 3	13.2	11.0	3.7		1/8	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ユビオサエ→断続ヨコナデ。	5Y R 6/8
13	有環日 3	10.4	9.2	3.6	200	2/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5Y R 6/8
14	有環日 3	13.7	12.3	4.4	3.40	定形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	2.5Y R 6/8
15	有環日 3	12.0	14.2	5.6		1/10	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	2.5Y R 6/6
16	鉢K 4	19.0	16.5	5.8		2/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	2.5Y R 7/4
17	須臾						破片 口縁ヨコナデ→沈積→口縁部断続状。内面口縁ヨコナデ。	7.5Y R 5/1
18	大型壺 4	21.8	8.5	19.9	3,900	一部欠	胴部傾ヘラケズリー→底面ヘラケズリー→口縁部	7.5Y R 7/4

第172表 第101号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第420図	19 長下壺5	17.8				根	断続ヨコナデ(2段)。内面ナデアゲー横ヘラ オサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR6/3
	1 長底壺4	22.0				破片	写基料めヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ(2 段)。内面ナデアゲーヨコナデ。	5YR6/6
	2 鉢K4	15.0				破片	周辺ヘラケズリー→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨ コナデ→断続ヨコナデ。	5YR7/6
	3 鉢K4	19.7				1/5	胴部横ヘラケズリー→底面横ヘラケズリー→口縁部 断続ヨコナデ(2段)。内面ナデアゲー横ヘラ オサエ→ヨコナデ。	5YR6/8
	4 長底壺4					1/10	胴部横ヘラケズリー。内面横ヘラオサエ。	5YR6/4

第173表 第102号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第420図	5 有环B3	14.1	12.2	3.9	320	1/2	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ→断続ヨコ ナデ。	内外面黒色肌用 5YR6/6
	6 有环B3	11.7	10.6	3.7		2/5	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面スピオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR8/6
	7 無	14.2	14.2	5.3	460	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面スピオサエ→断続ヨコナデ(単位 や文様構成は、序編が数しく不明瞭)。	5YR5/6

第174表 第103号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第420図	8 有环B3	12.2	10.3	4.0		1/2	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ→断続ヨコ ナデ。	7.5YR7/6
	9 有环B3	11.5	9.9	4.2	290	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ→断続ヨコ ナデ。	7.5YR7/6
	10 有环B3	12.1	10.1	4.1	240	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ→断続ヨコ ナデ。	5YR7/6
	11 有环B3	12.0	10.9	4.7	280	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ→断続ヨコ ナデ。	5YR6/8
	12 有环B3	12.5	10.4	4.3	(220)	1/2	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続	5YR7/8

第175表 第103号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量			保存度	下駄の特徴・或(型)形の順序	色調・構成・使用痕跡等	
		口徑	底径	高さ				
13	有耳皿3	12.0	10.1	4.3	2/5	ヨコナデ。内面ユビオサエ・断続ヨコナデ。 底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続	内外面黒色地埋 7.5YR 8/2	
14	有耳皿3	12.0	9.1	4.5	280	一深欠 底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ・断続ヨコナデ。	7.5YR 8/2	
15	有耳皿3	12.0	9.1	3.4	1/8	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR 5/6	
16	有耳皿3	12.8	10.5	4.1	280	4/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ・断続ヨコ ナデ。	5YR 6/8
17	有耳皿3	12.2	9.1	4.0	2/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ・断続ヨコナデ。	内外面黒色地埋 7.5YR 7/6	
18	有耳皿3	11.8	10.8	4.0	1/2	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ・断続ヨコ ナデ。	内外面黒色地埋 7.5YR 5/2	
19	有耳皿3	12.7	10.3	4.9	1/5	口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコ ナデ。	内外面黒色地埋 7.5YR 8/3	
20	有耳皿3	12.0	10.4	4.7	3/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ・断続ヨコナデ。	2.5YR 6/8	
21	有耳皿3	15.2	13.0	4.9	3/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ・ヨコナデ。	7.5YR 8/1	
22	有耳皿3	12.9	12.0	4.3	4/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/1	
23	鉢B6	11.5	13.0	7.9	4/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	5YR 6/8	
24	鉢B6	12.2	13.4	7.2	3/10	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8	
25	鉢B6	9.5	10.4	6.3	1/8	周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。 内面ヨコナデ。	5YR 8/1	
第 421 図								
1	鉢K4	18.8			1/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/2	
2	鉢K4	21.9	15.4	9.4	1/4	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	5YR 7/8	
3	鉢B6	18.2	20.0	9.8	1/6	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	内外面黒色地埋 5YR 6/8	
4	鉢K4	21.9			破片	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 7/4	
5	変形瓶4				破片	胴部斜めヘラケズリー・底面斜めヘラケズリー。内面 ナデアゲ・ヨコナデ。	5YR 8/3	
6	鉢K6	16.0	13.0	1.700	T/8	胴部斜めヘラケズリー・底面斜めヘラケズリー・口 縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5YR 8/6	
7	長細瓶4	20.4			破片	胴部斜めヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面 ヨコナデ。	5YR 5/6	
8	長細瓶4	16.9			1/5	胴部斜めヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面 横ヨコナデ。	5YR 6/6	
9	長細瓶4	23.5			破片	胴部斜めヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2	5YR 6/8	

第176表 第103号住居跡出土土器③

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
10	長袍壺4	17.0				破片	段)。内面断続ヨコナデ。 胴部縦ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ。内面 ヨコナデ。	7.5YR7/3
11	小壺6	13.4				破片	胴部斜ヘラケズリー口縁部縦ヘラケズリー口縁部 断続(3段)ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5YR5/8

第177表 第104号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第422図								
1	黒花壺5	18.0	6.3	28.3	26,000	1/4	胴部斜ヘラケズリー(6単位)→底部ヘラケズリー →胴部周辺ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ (2段)。内面ナデアゲ・口縁部断続ヨコナデ。	2.5YR5/8
2	青灰目3	11.3	9.0	4.4	200	完形	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR8/2
3	青灰目3	12.9	9.7	4.2	240	完形	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/3

第178表 第105号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第422図								
4	鉢K4	20.5		10.3	1,600	3/5	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	5YR6/6

第179表 第106号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第422図								
5	青灰目3	11.7	10.8	4.6		3/5	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色焼成 7.5YR8/4
6	青灰目3	10.8	10.1	4.0	220	一欠火 類	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	2.5YR6/8
7	青灰目3	12.6	9.6	4.2	280	1/2	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR3/2
8	蓋鉢6	12.9	10.2	4.2		1/7	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR7/6
9	青灰目3	14.7	13.0	4.4		1/5	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/6
10	鉢B6	12.2	12.8	6.5		1/6	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面底部ヘラケズリー→断続ヨコナデ。	2.5YR7/6
11	須弥身	9.9	3.4	3.3	180	1/4	口縁ヨコナデ。内面口縁ヨコナデ。	N5須弥身
12	長袍壺4	10.5				破片	ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR6/8

第180表 第106号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（壁）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
13	無花台 5					破片	肩部横ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面 断続ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8
14	長短臺 4		2.5			1/10	肩部横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面底 部ヘラオツエ→口縁部ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8

第181表 第110号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（壁）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 423 団								
1	有環B 3	12.0	10.5	4.4	280	4/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ→断続ヨコ ナデ。	7.5 Y R 7 / 4
2	有環B 3	11.3	9.3	4.0	220	1/2	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ→断続ヨコ ナデ。	2.5 Y R 7 / 6
3	有環B 3	11.8	10.0	4.4	220	4/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8
4	有環B 3	11.0	9.1	4.0		1/3	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 5 / 3
5	有環B 3	12.6	9.8	4.0	280	3/4	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
6	有環B 3	12.0	10.6	4.2	320	一次欠 損	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
7	有環B 3	12.0	10.0	4.4		1/7	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	内外面黒色処理 2.5 Y R 6 / 6
8	有環B 3	11.7	9.2	3.6		1/8	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 3
9	有環B 3	12.5	9.7	3.4	220	2/3	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5 Y R 6 / 8
10	有環B 3	13.4	10.7	4.5		1/4	周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断 続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 6 / 6
11	有環B 3	14.2	12.1	3.9	360	3/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
12	有環B 3	12.5	11.0	3.9		1/6	口縁部断続横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
13	有環B 3	14.0	10.0	3.9	260	3/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 7.5 Y R 4 / 1
14	有環B 3	12.9	11.0	4.2	300	3/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 8
15	有環B 3	13.3	11.0	4.5	320	3/5	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 2
16	有環B 6	12.1	13.1	4.4	340	3/5	周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ユ ビオサエ→断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
17	有環B 6	12.7	13.5	4.8	380	3/4	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 横ヨコナデ。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	2.5 Y R 6 / 6

第182表 第110号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	口径			
18	青灰B3	12.2	10.8	5.5	340	一部欠損	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR6/4
19	鉢B6	11.0	13.0	6.9	520	2/5	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR7/8
20	鉢B6	11.7	13.0	7.0		2/3	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR8/1
21	鉢K4	21.3	18.4	8.5		破片	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/3
22	鉢K4	15.4	11.1	8.4		1/4	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	5YR5/2
23	長巻4	10.1	6.5	11.4		1/2	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)・頸部泡気泡気。内面底部ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	内外面黒色地肌 10YR4/1
24	壺形瓶6					破片	頸部断続ヘラケズリー・底部ヘラケズリー。内面ヨコナデ。	5YR6/4
25	球胴定6		7.8			破片	頸部断続ヘラケズリー・底部周辺ヘラケズリー。内面ヘラオサエ。	5YR7/3
第424図								
1	小壺6	10.1				破片	頸部断続ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(4段)。内面断続ナダゲ→断続ヨコナデ。	5YR5/3
2	無花皿5	15.9				破片	底部断続ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR7/6
3	鉢K4	19.5				破片	周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR6/6
4~15	須壺					破片	外面格子状タタキ。内面同心円文タタキ。12・13は耳部。他は胴下半部。	N5/0

第183表 第111号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	口径			
第424図								
16	青灰B3	13.3	12.9	4.0	400	完形	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヘラオサエ→ヨコナデ。	7.5YR8/8
17	青灰B3	11.4	9.4	4.5	260	1/2	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR7/6
18	青灰B3	11.7	10.2	4.0	240	4/5	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面底部ユビオサエ→断続ヨコナデ。	5YR7/4
19	青灰B3	12.2	10.3	5.0	320	4/5	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/4
20	青灰B3	12.2	9.8	4.7	300	1/2	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR4/2
21	青灰B3	13.8	11.5	5.2		1/3	底部ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー・口縁部断続ヨコナデ。	5YR4/6

第184表 第111号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				保存度	手法の特徴・成（壁）形の順序	色調・組成・使用痕跡等
		口径	底径	高さ	容量			
22	有環B3	12.9	11.5	4.9		1/2	ヨコナデ（2段）。内面底面エビオサエ→断続ヨコナデ。 底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（2段）。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 8/2
23	有環B3	12.4	11.7	4.0	280	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（2段）。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6
24	長高3					破片	胴部ヘラケズリ→胴部断続ヨコナデ。内面底面断続ヨコナデ。	7.5YR 6/6
25	有環B3	11.9	9.0	5.1	240	5/6	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（2段）。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 4/2
26	身環6	13.7	14.7	4.0	240	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5YR 7/3
27	身環6	12.0	12.7	4.3	320	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（2段）。内面底面エビオサエ→断続ヨコナデ。	5YR 6/8
第 425 図								
1	鉢B6	9.3	10.8	5.1	240	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 4/6
2	鉢B6	11.7	14.7	8.8	700	2/3	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面底面エビナデ→断続ヨコナデ。	2.5YR 5/8
3	鉢B6	12.0	14.1	7.1	500	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（2段）。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5YR 6/8
4	身環6	10.6	12.0	4.5	260	2/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面エビナデ→断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6
5	鉢B6	17.3	18.4	7.4	1,000	2/3	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR 7/6
6	小壺6	11.3		10.5	800	5/6	胴部断続ヘラケズリ→底面断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR 6/8
7	小壺6	12.4		11.5	1,000	一欠片	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ（3段）。内面断続ヨコナデ→ヨコナデ。	5YR 7/6
8	鉢K4	17.7		11.4	1,600	一欠片	胴部断続ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。外面から内面へ穿孔（多孔式風の孔）。	2.5YR 6/8
9	鉢K4	15.8				破片	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR 7/4
10	鉢K4	17.5				破片	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ナダアゲ→ヨコナデ。	5YR 6/1
11	甕形壺6	22.0	8.7	28.3	4,700	一欠片	胴部断続ヘラケズリ→肩面断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→ナダアゲ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR 6/8
12	大壺6	25.8				3/10	胴部断続ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ナダアゲ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR 7/2
13	甕形壺6					破片	胴部断続ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	3YR 7/6

第185表 第111号住居跡出土土器③

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第426 図	無花草5		10.0			1/10	胴部横ヘラケズリ→胴部横ヘラケズリ。内面 縦ナデアゲ断続ココナデ。	7.5Y R 7 / 3
	1 長卵盤6	18.0	2.5	17.6	3,900	4/5	胴部横ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面ナ デアゲ→横ヘラオサヌー→口縁部ココナデ。	7.5Y R 7 / 8
	2 長卵盤4	22.0				1/10	胴ヘラケズリ→口縁部断続ココナデ(2段)。 内面ココナデ。	7.5Y R 7 / 4
	3 長卵盤4		4.0			1/2	胴ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面ヘラオ サヌーココナデ。	5 Y R 7 / 3
	4 長卵盤4		5.4			2/3	胴ヘラケズリ→底部横ヘラケズリ。内面ヘラオ サヌーココナデ。	7.5Y R 7 / 3

第186表 第112号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第426 図	5 有环B3	12.2	10.2	4.2		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	7.5Y R 8 / 2
	6 有环B3	11.5	9.3	4.5		1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5Y R 8 / 3
	7 有环B3	11.5	10.2	4.3		1/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 3 / 2
	8 有环B3	11.8	10.5	3.9	210	1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5Y R 7 / 3
	9 有环B3	12.1	8.7	3.9		2/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ。内面断続ココナデ。	5 Y R 7 / 6
	10 有环B3	11.5	9.8	4.7	240	1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ。内面底面ヘラオサヌー→断続ココナデ。	7.5Y R 6 / 3
	11 有环B3	12.8	11.3	5.1	340	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面底面ユビオサヌー→断続 ココナデ。	5 Y R 7 / 6
	12 有环B3	12.0	10.8	5.2	300	底部 欠	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面ヘラオサヌー→断続ココ ナデ。	内外面黒色処理 7.5Y R 6 / 3
	13 有环B3	11.7	8.5	3.0		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5 Y R 7 / 8
	14 有环B3	11.5	8.2	3.3		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5 Y R 7 / 8
	15 有环B3	12.0	11.0	4.1		1/6	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ。内面ココナデ。	7.5Y R 8 / 3
	16 有环B3	12.0	11.5	6.0		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5Y R 2 / 1
	17 有环B3	12.0	9.0	3.5	200	完形	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ココナデ(2段)→内面断続ココナデ。	2.5Y R 6 / 8
	18 有环B3	11.9	10.2	4.9	260	完形	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続	7.5Y R 8 / 3

第187表 第112号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				保存度	平法の特徴・成(型)形の順序	色調・成成・使用痕跡等
		口径	底径	高さ	容量			
19	埴	12.5	10.8	3.7		1/2	底面ヘラケズリー・内面ユビオサエ→断続ココナデ。 底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ→口縁部ユビオサエ。	7.5YR 8/3
第 427 図								
1	青灰B3	14.7	12.4	4.1		2/3	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5YR 4/2
2	青灰B3	14.1	12.2	4.2	340	2/3	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面底面ユビオサエ→断続ココナデ。	内外面黒色処理 5YR 4/2
3	青灰B3	13.2	11.8	3.1		2/3	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面底面ヘラオサエ→断続ココナデ。	2.5YR 6/6
4	青灰B3	14.3	12.8	5.5	520	1-底欠 損	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面ヘラオサエ→断続ココナデ。	7.5YR 8/2
5	赤灰B	11.7	10.4	3.4		1/2	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面ヘラオサエ→断続ココナデ。	内外面黒色処理 5YR 7/3
6	青灰C2	13.7	9.7	3.6		2/3	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5YR 8/3
7	赤灰B	12.3	12.9	3.9		1/2	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 7.5YR 4/2
8	赤灰B	12.0	13.5	4.5		1/3	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	2.5YR 7/6
9	赤灰B	11.8	12.7	4.5		1/2	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面断続ココナデ。	5YR 6/8
10	鉢B6	10.1	11.2	6.9	400	2/3	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	7.5YR 8/4
11	鉢K4	17.5	17.1	7.9		1/4	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(3段)。内面断続ココナデ。	内外面黒色処理 5YR 7/6
12	鉢B6	11.7	13.4	7.6	640	4/5	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面ヘラオサエ→断続ココナデ。	内外面黒色処理 5YR 7/6
13	鉢K4	20.0	18.2	8.7	1,500以 上	3/4	底面ヘラケズリー・周辺ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	7.5YR 8/3
14	灰西3					2/3	底面ヘラケズリー→断続ココナデ。内面ユビオサエ→断続ココナデ。	10YR 7/3
15	小皿6	14.9				1/10	口縁部ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面ココナデ。	10YR 7/4
16	瓦礫器4	18.0				3/5	胴部ヘラケズリー→胴中位横ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ。内面ヘラオサエ→ココナデ。	3YR 6/6
17	小皿6	13.1		18.8	2,800	4/5	胴部横ヘラケズリー→底面ヘラケズリー→口縁部断続ココナデ(2段)。内面断続ココナデ。	5YR 7/4

第188表 第113号住居跡出土土器①

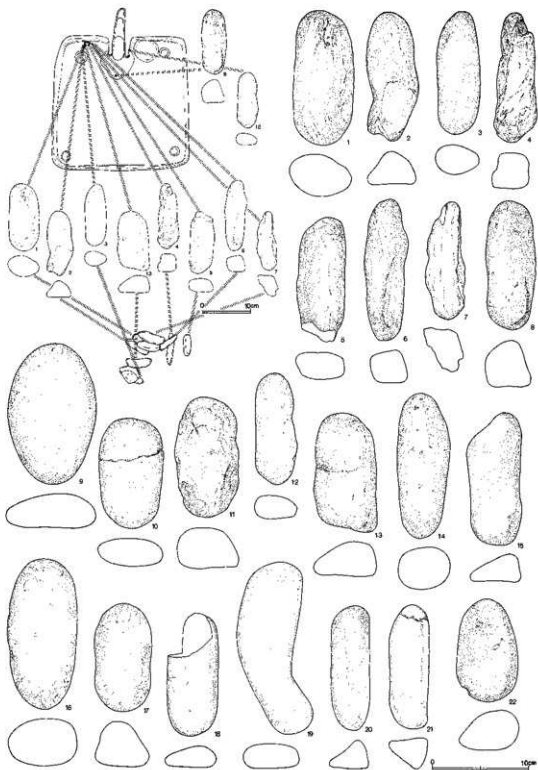
番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・点(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 428 図								
1	有坏B3	12.2	10.0	4.1	220	完形	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR7/6
2	有坏B3	12.2	9.8	4.8	300	2/3	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR7/6
3	有坏B3	12.0	9.7	4.1	240	一部欠 損	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコ ナデ(2段)。	5YR7/4
4	有坏B3	11.7	9.5	4.4	220	完形	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ヘラオサエ→断続ヨコ ナデ(2段)。	5YR7/6
5	有坏B3	11.5	9.8	4.5		2/3	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR7/4
6	有坏B3	12.3	9.9	4.1	250	1/3	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5YR6/2
7	有坏B3	12.0	9.7	4.1	220	一部欠 損	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5YR6/2
8	有坏B4	11.7	10.2	3.9	230	一部欠 損	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコ ナデ。	5YR7/4
9	有坏B3	12.3	11.2	4.5		1/2	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR6/8
10	有坏B3	11.8	9.1	3.2	260	4/5	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR8/3
11	有坏B	14.1	13.3	6.5		1/2	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5YR7/4
12	鉢K4	19.8				1/3	底部ヘラケズリー周辺ヘラケズリー口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR6/1
13	甕形瓶B	23.6	9.5	30.1	5,000	完形	胴部縦ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ(2 段)。内面胴部ナデアゲ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR8/3
14	小形瓶4	16.3	4.0	12.0	1,300	完形	周辺ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ。内面ヨ コナデ。	7.5YR8/3
15	小甕B	12.1		12.0	1,200	完形	胴部縦ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ。内面 ヨコナデ。	7.5YR7/4
16	埴輪盆6	21.8				2/3	胴部縦ヘラケズリー・訂部斜めヘラケズリー口縁 部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR8/4
17	長形盤4	21.4	3.0	37.2	5,900	完形	胴部縦ヘラケズリー・訂部横ヘラケズリー→訂部横 ヘラケズリー口縁部断続ヨコナデ。内面縦ヘラ オサエ→断続ヨコナデ。	5YR7/4
第 429 図								
1	長形盤4	20.0	3.7	34.2	4,800	一部欠 損	胴部縦ヘラケズリー・訂部横ヘラケズリー口縁部 断続ヨコナデ。内面縦ヘラナデアゲ→口縁部断 続ヨコナデ。	7.5YR7/2
2	長形盤4	20.3	3.3	35.0	5,600	一部欠 損	胴部縦ヘラケズリー・訂部斜めヘラケズリー口縁 部断続ヨコナデ。内面縦ヘラオサエ→訂部断 続ヨコナデ。	7.5YR7/4

第189表 第113号住居跡出土土器②

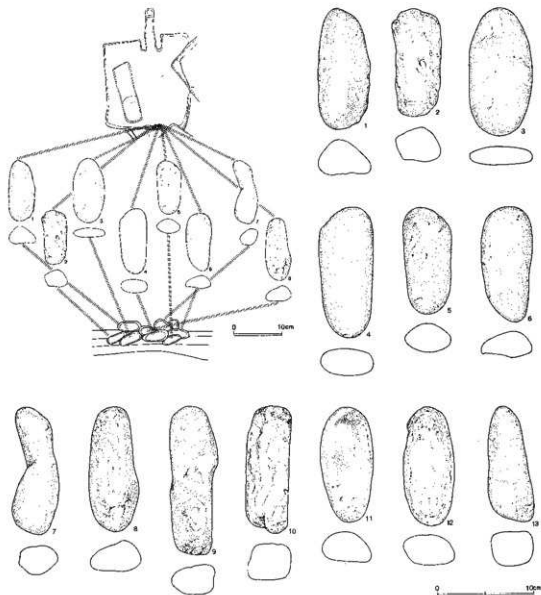
番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第430図	3 長筒甕4	20.3	4.7	38.8	5,000	一部欠 取	胴部縦ヘラケズリ→底部斜めヘラケズリ→肩部・胴中位横ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 3
	4 長筒甕4	20.5				一部欠 取	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
	1 長筒甕4	21.3				破片	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ→口縁部断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 4
	2 長筒甕4	18.7				1/10	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部断続ヨコナデ。	2.5 Y R 7 / 6
	3 小甕8	15.9				1/8	胴部斜めヘラケズリ→肩部ヨコナデ→口縁部断続ヨコナデ。内面口縁部断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4

第190表 第114号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第430図	4 有耳B3	13.0	11.9	4.5	306	一部欠 取	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 3
	5 有耳B3	12.3	10.7	4.1	260	完形	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
	6 有耳B3	12.0	10.0	4.4	260	一部欠 取	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	10 Y R 8 / 2
	7 有耳B3	11.5	10.2	4.6	240	2/3	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ(2段)。	7.5 Y R 8 / 6
	8 有耳C2	13.2	11.0	4.2	240	完形	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色焼成 5 Y R 6 / 8
	9 有耳B3	13.3	10.7	4.1		1/3	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8
	10 有耳C2	14.5	9.5	3.8	260	一部欠 取	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
	11 有耳C2	13.9	9.5	4.0	260	一部欠 取	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色焼成 5 Y R 6 / 6
	12 有耳C2	14.2	9.4	3.9	260	2/3	底部ヘラケズリ→両辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 6



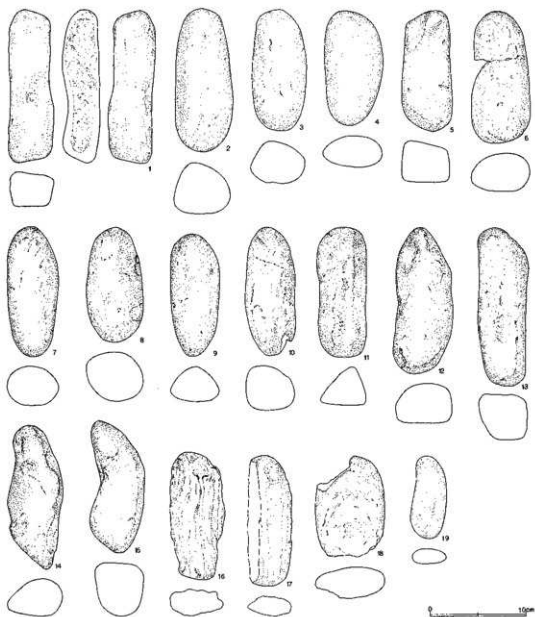
第 431 図 古墳時代第Ⅵ期の紡物石(1)



第 432 図 古墳時代第VI期の編物石(2)

(6) 遺物各説 —古墳時代第VI期の編物石—

第92・98・89・90・91・95・97・99・100・103・106・67・113号住居跡で、数点ずつまとめて編物石が出土している。とくに第92・98号住居跡では、出土位置が明確に分かっている。第92号住居跡では、カマドの左脇に重なりあうように置かれていた。これに対し、第98号住居跡では、カマドと反対側にまとめて編物石が出土している。壁周溝の中に落ち込むようにして発見され、重なり

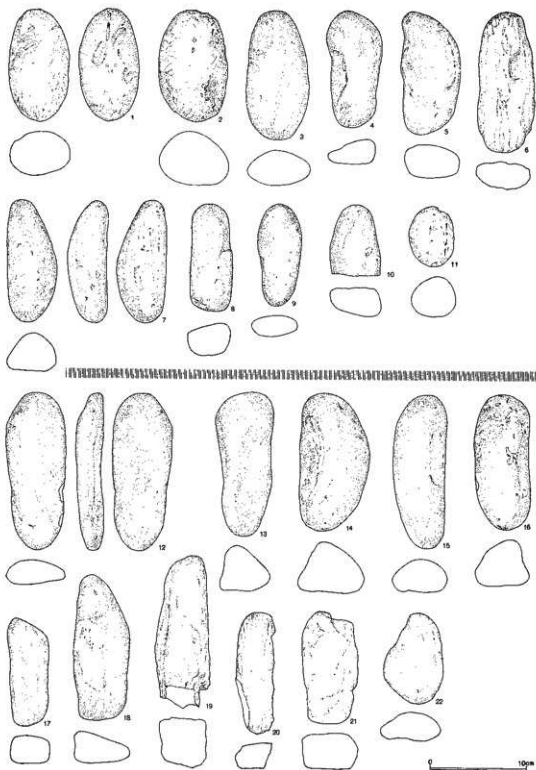


第433図 古墳時代第Ⅵ期の編物石(3)

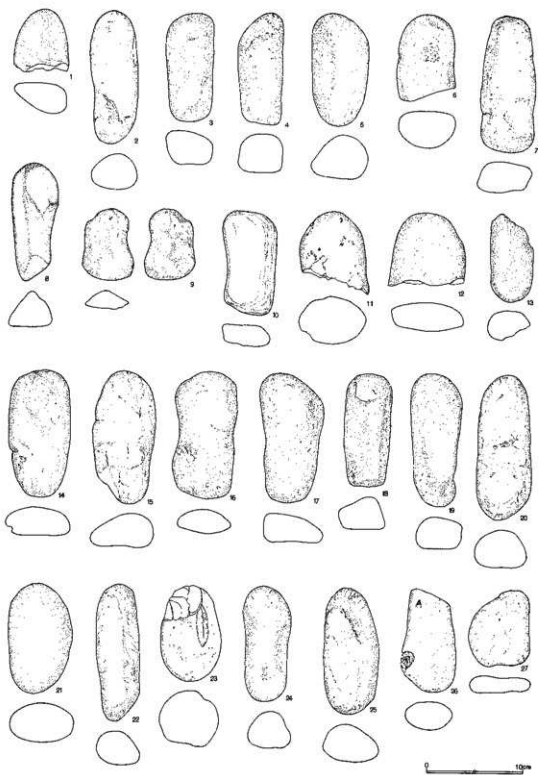
りあったまま8点出土している。編物石の片付けられ方を考えるうえでは貴重な資料である。

このほかに、第89・90・91・67号住居跡から編物石が、10点前後のまとまりをもって出土している。重量は、まちまちだが500g前後である。

第Ⅴ期に比較しても、さらに多くの編物石が確認されており、安定した製品を生産していたと予測される。やはり前段階同様、編物石は、2～3軒に1セット程度の割合で出土している。とくに新屋敷東遺跡のなかでも東寄りに位置している一群に、多くこの編物石を見ることができる。ある



第 434 図 古墳時代第VI期の編物石(4)



第 435 図 古墳時代第VI期の編物石(5)

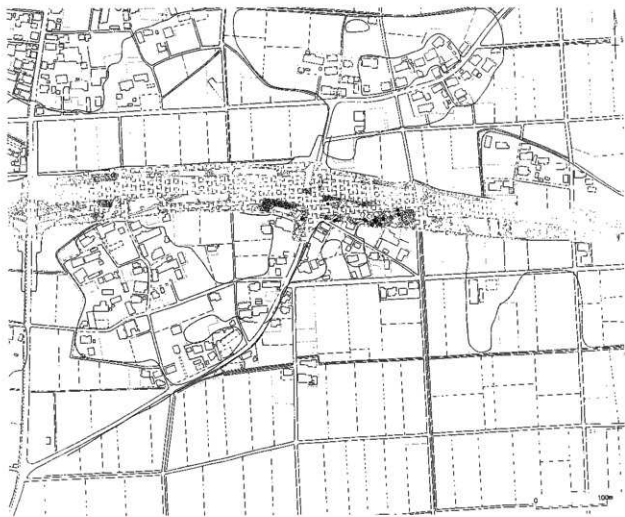
第191表 古墳時代第VI期の礫物石①

番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等	番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等	
第431図												
1	S J 92	141	64	560	安山岩	10	S J 89	135	53	530	安山岩	
2	S J 92	136	41	385	緑泥石片岩	11	S J 89	132	50	435	安山岩	
3	S J 92	129	45	230	安山岩	12	S J 89	153	52	640	安山岩	
4	S J 92	136	39	340	安山岩	13	S J 89	165	51	760	安山岩	
5	S J 92	131	50	285	安山岩	14	S J 89	134	58	415	安山岩	
6	S J 92	148	93	740	安山岩	15	S J 80	138	53	680	安山岩	
7	S J 92	124	43	270	安山岩	16	S J 89	132	58	325	緑泥石片岩	
8	S J 92	136	35	495	安山岩	17	S J 89	137	40	210	緑泥石片岩	
9	S J 92	145	40	285	安山岩	18	S J 80				緑泥石片岩	
10	S J 92	116	67	380	緑泥石片岩	19	S J 89				安山岩	
11	S J 92	126	67	525	安山岩	第434図						安山岩
12	S J 92	116	43	230	緑泥石片岩	1	S J 90				安山岩	
13	S J 92	120	64	480	安山岩	2	S J 90				安山岩	
14	S J 92	151	54	560	安山岩	3	S J 90	136	67	460	安山岩	
15	S J 92	139	54	335	安山岩	4	S J 90	122	50	285	安山岩	
16	S J 92	158	74	810	安山岩	5	S J 90	129	63	410	安山岩	
17	S J 92	114	58	470	安山岩	6	S J 90	148	60	475	緑泥石片岩	
18	S J 92	130	54	250	安山岩	7	S J 90	128	52	375	安山岩	
19	S J 92	182	59	495	安山岩	8	S J 90	112	45	280	安山岩	
20	S J 92	131	41	355	安山岩	9	S J 90	102	48	150	安山岩	
21	S J 92	131	42	225	安山岩	10	S J 90				安山岩	
22	S J 92	108	64	410	安山岩	11	S J 90				安山岩	
第432図												
1	S J 98				安山岩	12	S J 91	161	61	440	安山岩	
2	S J 98	113	48	315	安山岩	13	S J 91	151	53	550	安山岩	
3	S J 98	135	66	305	安山岩	14	S J 91	144	63	770	安山岩	
4	S J 98	136	55	355	安山岩	15	S J 91	162	56	565	安山岩	
5	S J 98	111	50	255	安山岩	16	S J 91				安山岩	
6	S J 98	121	53	245	安山岩	17	S J 91	110	40	280	安山岩	
7	S J 98	123	37	295	安山岩	18	S J 91	153	58	465	安山岩	
8	S J 98	131	53	290	安山岩	19	S J 91	152	46	765	緑泥石片岩	
9	S J 98				安山岩	20	S J 91	128	39	210	緑泥石片岩	
10	S J 98	133	45	445	安山岩	21	S J 91	118	58	445	安山岩	
11	S J 98	121	56	310	安山岩	22	S J 91	142	56	595	安山岩	
12	S J 98	125	54	325	安山岩	第435図						安山岩
13	S J 98				安山岩	1	S J 95				安山岩	
第433図												
1	S J 89	161	46	475	安山岩	2	S J 95				安山岩	
2	S J 89	151	61	790	安山岩	3	S J 97	118	59	485	安山岩	
3	S J 89	128	58	450	安山岩	4	S J 97	118	47	390	安山岩	
4	S J 89	127	51	495	安山岩	5	S J 97				安山岩	
5	S J 89	120	62	375	安山岩	6	S J 97	113	50	345	安山岩	
6	S J 89	138	62	500	安山岩	7	S J 99	131	67	580	安山岩	
7	S J 89	136	54	440	安山岩	8	S J 100	160	61	615	安山岩	
8	S J 89	121	60	505	安山岩	9	S J 100				安山岩	
9	S J 89	129	52	380	安山岩	10	S J 103				安山岩	
						11	S J 106				安山岩	
						12	S J 67				安山岩	
						13	S J 67				安山岩	

第192表 古墳時代第Ⅵ期の編物石②

番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等	番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等
14	S J 67	133	65	447	安山岩	21	S J 67	158	37	295	安山岩
15	S J 67	140	65	415	安山岩	22	S J 113				安山岩
16	S J 67	135	63	425	安山岩	23	S J 110				安山岩
17	S J 67	134	57	320	安山岩	24	S J 111	121	45	350	安山岩
18	S J 67	118	49	305	安山岩	25	S J 111	132	49	465	安山岩
19	S J 67	138	49	455	安山岩	26	S J 111	103	48	290	安山岩
20	S J 67	152	55	650	安山岩	27	S J 111				安山岩

いは、集落内部の分業が存在した可能性も捨て切れない。西の一群では、僅かに第111号住居跡のみが整った編物石を出土している。



第 436 図 古墳時代第Ⅶ期の新屋敷東遺跡

8 古墳時代第Ⅶ期の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の概観

新屋敷東遺跡の集落に大变革期が訪れる。竪穴式住居跡で構成される従来の集落に、大形の掘り方をもった獨立柱建物群が、突如構築された。この建物群は、少なくとも六棟等以上で構成され、河川による物資輸送を前提に計画された施設と考えられる。しかも一棟を除き、柱で構成される建物構造は、倉庫群と推定でき、古墳時代から律令時代への過渡期、このような遺跡が、形成されていたことに驚きを感じる。

また倉庫群の西には、整然と竪穴式住居が配置され、両者が、棟方向や棟間隔などに細かな規格や規矩術をもって編成されていたことが分かる。とくに第Ⅶ期、細かな単位群に分かれた竪穴式住居は、第Ⅶ期には、二つの単位群に分かれるのみとなる。

食膳具にあっても大きな変化がみられた。いわゆる暗文土器の出現である。器の内面を、放射状に細かくへらミガキを施し仕上げる。畿内の土器作りの導入である。

■集落の構成 確認された遺構は、竪穴式住居跡12軒・掘立柱建物跡8棟である。大きくは、竪穴式住居跡2群と、掘立柱建物跡1群の3群から構成されている。竪穴式住居跡は、掘立柱建物跡と重複を考えると、第123・124・125・126号住居跡から構成される西群と、第118・119・120・121・122号住居跡から構成される東群からなる。そして倉庫群と考えられる共通した3×3間の掘立柱建物跡と共に有機的な関係にあった。

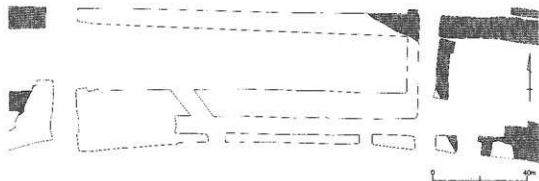
とくに第115・116号住居跡は、出土遺物から7世紀の第Ⅲ後半期に位置付けられる竪穴式住居跡であり、これを壊して掘立柱建物が、建設されていることから、少なくとも第Ⅶ期は、前後2期にさらに細かく分けることができよう。またこの掘立柱建物は、平安時代には、すでに廃絶していたことが明らかになっている。竪穴式住居跡も、掘立柱建物跡の軸と同一の方向性があり、両者に共通の企画性や規矩術をみることができよう。

■竪穴式住居跡 遺構の重複関係の上段にあるために、他の遺構による破壊は免れたものの、調査区の狭小により、完履できなかった住居跡も多かった。とくに大形の住居跡は見られないが、第Ⅵ期同様、竪穴式住居跡の平面形態及び規模によって、三つのタイプの抽出が可能である。①大形の竪穴式住居跡(118・119・124)②長方形の竪穴式住居跡(121・125)③小形の竪穴式住居跡(115・116・117・120・122・123・126)108・110・112・113・114)である。

西群は、まばらな配置のようにみえるが、調査区が狭小なためにこのようになったのであり、本来は、東群のような竪穴式住居跡の編成がされていた可能性がある。

また特殊な住居構造として、第123号住居跡をあげられる。壁外に一对の柱を設置し、これで上屋を支えるのであろう。新屋敷東遺跡内には、このような例は他にはみられない。

■カマド カマドを調査した住居跡は、8軒に及ぶ。短煙道・長煙道のカマドとともに確認されている。ただし第Ⅵ期のような長煙道のカマドはない。また相対的にカマド軸は、短めの傾向がある。短煙道は、第119・121号住居跡、長煙道は、第115・117・118・120・122・123・126号住居跡で確認されている。圧倒的に長煙道が多い。カマドの構築補強材として、甕を使用した例は、第119号住居跡にみられたのみである。また第118号住居跡のカマド支脚は、貫通しない穿孔が、幾つも見られる特異な形態の支脚である。



第 437 図 古墳時代第Ⅶ期遺構全体図(1)

■**掘立柱建物跡** 第Ⅶ期を特長付ける掘立柱建物跡は、全て3×3間の大形の総柱倉庫群と考えられる。床面積50㎡前後の大形の倉庫群である。全ての柱穴が、隅丸長方形の掘り方に径20～30cm程度の柱を埋め込み、ていねいに版築して柱を押えている。一つとして重複が見られない。一集落内部の動産の蓄積を反映する対象としては、余りにも不釣り合いな倉庫群である。

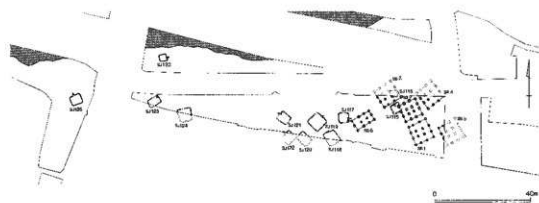
■**煮沸具** 煮沸具は、甕と大振りの鉢型土器である。前段階とあまり大きな変化はない。ただし明瞭な甕がみられないために、甕との相対的な変化は見出せない。甕は、肩がほとんど張らず、胴上半部に斜めのヘラケズリを施すタイプに集中する。

■**食膳具** 有段口縁環が、前期に引き続き生産されたのは同様だが、最も大きな変化として、日常雑器に在産の暗文土器が加わったことである。とくにこの在産の暗文土器は、畿内の暗文土器の生産技法の一部を導入し、北武蔵とくに妻沼低地、加須低地等の平野部を中心として成立した。壙形の土器の内面に、放射状の細かな暗文と呼ばれるヘラミガキを施し、外面は、細かなヘラケズリで、器壁をていねいに仕上げている。この在産暗文土器の登場と第Ⅶ期集落の編成は、不可分の関係にあり、両者を切り放して考えることは到底できない。

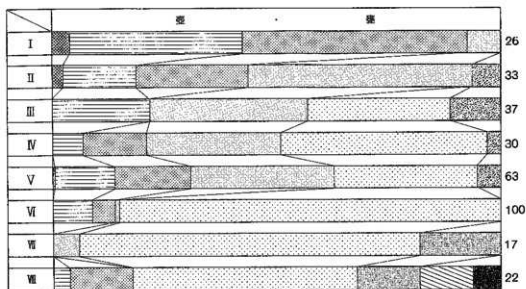
■**貯蔵具** 煮沸具に対して小形貯蔵具が各住居跡に目立つ。口縁部に有段にしたものもみられる。

■**須恵器** 破片資料が多いが、須恵器は確実にみられる。第119・126号住居跡の坏身、第117・119・120・126号住居跡の坏蓋、第94号住居跡の高坏、第115・117号住居跡の大型壺、第119号住居跡の台付長頸壺、第119・120号住居跡のフラスコ形瓶などである。とくにフラスコ形瓶や坏類に、東海地方産の須恵器が、搬入されてきていることは重要である。

■**編物石** 編物石は、相対的な竪穴式住居跡の減少から、まとめて出土している住居跡の例が少ない。比較的良好な例として、第123号住居跡を上げられるに過ぎない。



第 438 図 古墳時代第Ⅶ期遺構全体図(2)



資料数

328



壺・甕類器種別生産量の推移

第193表 古墳時代第Ⅶ期住居跡一覧表

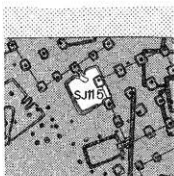
地	住居跡規模				カマド				貯蔵穴		備考	
	長軸長さ	短軸長さ	幅込深さ	形態	厚さ長さ	煙道幅	右袖長さ	左袖長さ	形態	幅		深さ
115	3.89	3.89	0.17	正方形	0.65	0.30	0.42	0.43	A類			ミ-268
116	3.72		0.33	正方形								メ-273
117	4.40	4.36	0.38	正方形	0.78	0.25	0.74	0.75				メ 273
118	4.83	4.28	0.63	正方形					B類	3.10	2.70	ユ-273
119	6.25	6.05	0.27	長方形					A類			メ-274
120			0.30	長方形					C類			メ 275
121	5.15	4.15	0.27	長方形	1.12	0.70	0.46	0.44	C類			メ 276
122			0.33	正方形					B類			ユ-276
123	3.21	2.93	0.25	長方形	1.26	0.33	0.32	0.19	C類	1.50		ヒ-285
124	5.78		0.30	長方形								メ-284
125	5.10	3.24	0.17	長方形	1.15	0.33				3.50		レ-293

(2) 遺構各説 一遺構構築段階一

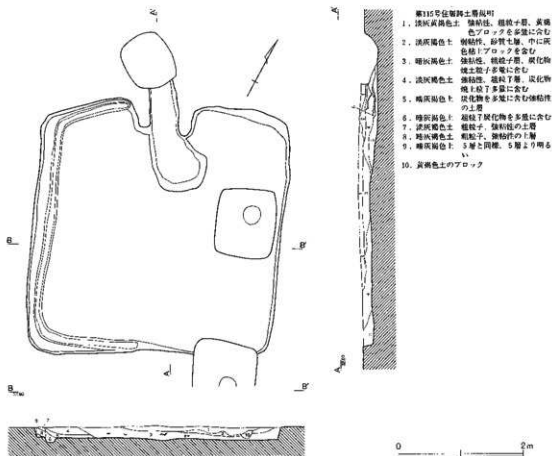
第115号住居跡（調査時C2区1号住居跡）

ミ-268グリッドに位置する。重複関係は、第1・3号獨立柱建物跡の柱穴によって壊されている。ただし全体像の分かる貴重な例である。住居跡の規模は、長軸3.89m、短軸3.89mを測る。掘り込みの深さは、17cmである。壁間溝は、西側半分にしかみることができない。柱穴は確認されていない。

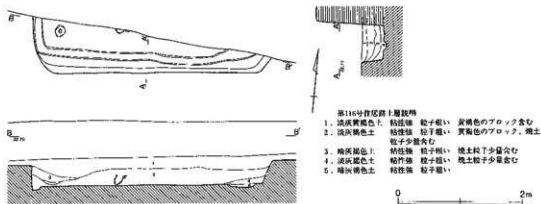
カマドは、北壁ほぼ中央に確認されている。短い地山掘り残しの袖で、やや広い燃焼部からほぼ均一な大きさで煙道が延びる。煙道の先端や煙り出し穴は、第3号獨立柱建物跡の柱穴によって破壊されている。焚き口部が極端に大きく右よりに開い



第439図 位置図



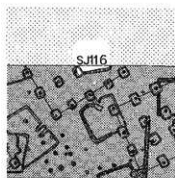
第440図 第115号住居跡



第 441 図 第116号住居跡

ている。

出土遺物は、土師器杯・甕・甌・小形甕・須恵器大甕などがある。



第 442 図 位置図

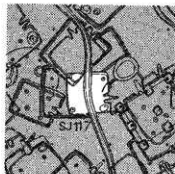
第116号住居跡（調査時C 2区11号住居跡）

シー-269グリッドに位置する。重複関係は、第3号掘立柱建物跡よりも古い。北側は調査区域外である。規模は、長軸3.72m、短軸—mを測る。掘り込みの深さは33cmである。壁周溝は調査区域内では、完周している。柱穴はみられない。

カマドは調査区域内では確認されていない。

調査区域のさわながら、覆土が明瞭だったことから比較的順調に調査された遺構である。

出土遺物は、土師器甕・壺・須恵器フラスコ形長頸瓶などが確認されている。

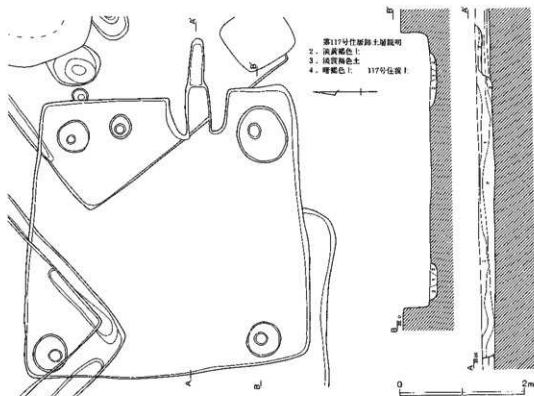


第 443 図 位置図

第117号住居跡（調査時C 2区112号住居跡）

メー-273グリッドに位置する。重複関係は、第36・68・69・97号住居跡よりも新しく、第139号住居跡よりも古い。住居跡の規模は、長軸4.40m、短軸4.36m。掘り込み深さは、38cmと深い。壁周溝は、みられない。柱穴は、各コーナーの部分に一つずつ確認されている。大型の掘り方をもち、比較的しっかりしている住居跡である。

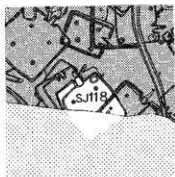
カマドは、東側右よりに確認され、地山掘り残しの比較的袖の長いカマドである。袖の長さの1.5倍程度の煙道が付く。燃焼部から煙道にかけて一段高く造られ、徐々に立上がり、煙り出し穴の部分で垂直に立ち上がる。燃焼部は比較的狭く、焚き口は不明瞭である。



第444図 第117号住居跡

遺構の重複が激しく、確認等に手間取った。

出土遺物は、土師器・甕・須恵器蓋などがある。

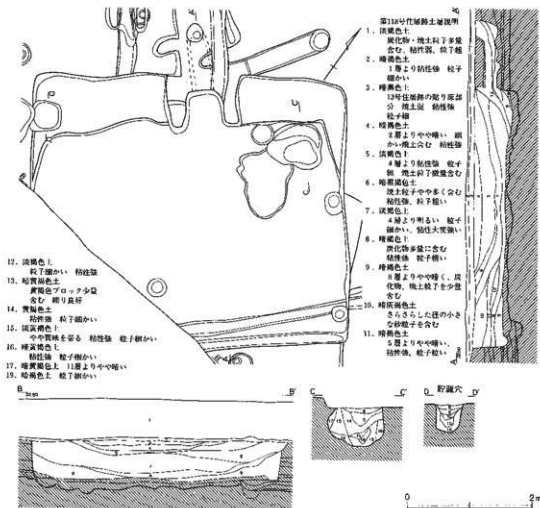


第445図 位置図

第118号住居跡（調査時C 2区32・13号住居跡）

ユ-273グリッドに位置する。重複関係は、第13・21・34号住居跡よりも新しく、第128号住居跡よりも古い。住居跡の規模は、長軸4.93m、短軸4.28mを測る。掘り込みの深さは、63cmである。壁周溝はカマドの反対側の壁にみられるが、他にはみられない。床面には、5か所の緩い落ち窪みがみられるが柱穴ではない。カマドの右側には、やや深めの貯蔵穴がある。円形の貯蔵穴で、ややオーバーハングぎみに造られている。カマドの両脇には、掘り残しの礎状の部分が存在している。高さ18cm、幅66cmである。機能や性格等は、出土遺物からは考察できなかった。

カマドは、北辺右よりに構築されている。左右の袖細長く地山掘り残しで造られ、壁外へ袖の長さの1.5倍ほどの煙道が延びる。燃焼部は、やや広い。燃焼部の火床は、やや深く掘り込まれ、煙道部へは、明確な段をもって立ち上がっていく。煙道部の幅は、燃焼部よりも狭く、煙り出し穴にむかって狭くなっていく。煙り出し穴は垂直に掘られ、これに壁穴内からえぐり込まれてカ

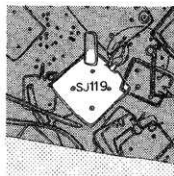


第 446 図 第118号住居跡

マドが構築されていた様子が良くわかる。

遺構の確認は、他の遺構との重複が大変多く、困難を極めた。

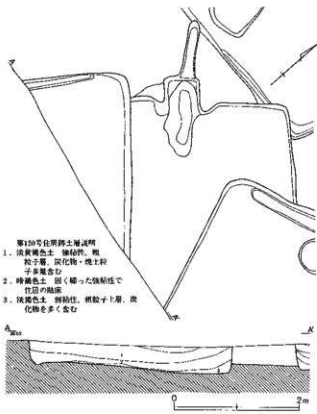
第118号住居跡に伴う出土遺物は、土器器環・甕などがある。



第 447 図 位置図

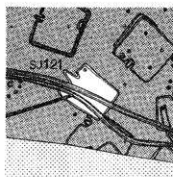
第119号住居跡（調査時C 2区93号住居跡）

メー274グリッドに位置する。重複関係は、第7・12・98・157号住居跡よりも新しい。重複遺構の激しい部分の調査ではあるが、最も新しい遺構であるため確認は順調に行えた。規模は、長軸6.25m、短軸6.05mである。掘り込みの深さは27cmである。壁周溝は、南辺の部分を除き完周している。柱穴は、等間隔に4本確認されている。柱穴掘り方は比較的大きい。おそ



- 第120号住居跡土層説明
1. 淡黄色土 強粘質、細粒土層、炭化物・造土粒子多量含む
 2. 暗褐色土 固く締った強粘性で住居の陥床
 3. 淡黄色土 倒給仕、細粒土層、炭化物を多く含む

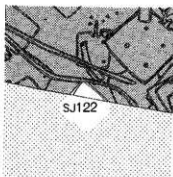
第449図 第120号住居跡



第451図 位置図

第121号住居跡（調査時C2区73号住居跡）

メー276グリッドに位置する。重複関係は、第72号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長軸5.15m、短軸4.15mを測る。掘り込みの深さは、27cmである。壁周溝・柱穴は認められない。ただカマドの両脇には、小穴が一對ある。柱穴とは考えられない。また貯蔵穴でもなからう。



第450図 位置図

らく住居跡の規模に比例してのことであろうか。

カマドは、北辺ほぼ中央に確認されており、地山掘り残しの短い袖と、この袖の2倍ほどもある煙道から構成される。しかし、大きな燃焼部は、そのまま煙道とほとんど区別がつかず、大きな掘り込みとなっている。焚き口部は大きく掘り込まれ、やや大きく凹地状となっている。

出土遺物は、土師器杯・鉢・甕・須恵器坏蓋・身・脚付長頸壺・フラスコ形長頸瓶・大形甕など須恵器が多くめだつ。

第120号住居跡（調査時C2区95号住居跡）

ユ一275グリッドに位置する。重複関係は、第136号住居跡よりも新しい。規模は、不明であるが、掘り込みの深さは、30cmである。壁周溝・柱穴は、検出されていない。

カマドは、調査区域内では確認されなかった。

第120号住居跡に伴う出土遺物は、土師器杯・須恵器坏蓋・長頸瓶である。

カマドは、西辺ほぼ中央に確認されている。地山掘り残しの袖は短い。煙道は、燃燒部と区別が付かず、大きく構築されている。また焚き口部もやや深く掘り込まれている。煙道は、袖の2.5倍程度の長さがある。燃燒部は広く、火床部もやや深く掘り込まれている。燃燒部から煙道へは、緩やかな傾斜がある。

住居跡の真上を近世の溝が縦に寸断していたため、遺構確認等は困難をきたした。

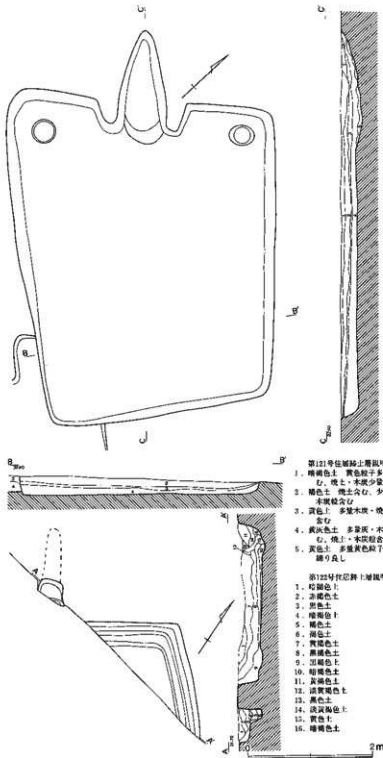
第121号住居跡の出土遺物は、土師器杯である。

第122号住居跡

(調査時C 2区)

72号住居跡)

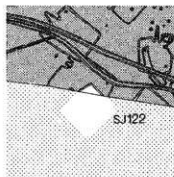
ユ-276グリッドに位置する。重複関係は、第72号住居跡よりも新しい。遺構の大半が、調査区域外となっている。住居跡の規模は、不明であるが、掘り込みの深さは、33cmである。壁周溝は確認部分のみは、めぐって



- 第121号住居跡土層説明
1. 暗褐色土 黄色砂子多量含む、焼土・木炭少量含む
 2. 暗褐色土 焼土含む、少量木炭粒含む
 3. 黄褐色土 多量木炭・焼土粒含む
 4. 黄褐色土 多量灰・木炭含む、焼土・木炭粒含む
 5. 黄褐色土 多量黄色砂子含む 掘り直し

- 第122号住居跡土層説明
1. 暗褐色土
 2. 赤褐色土
 3. 黒色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 黄褐色土
 8. 黄褐色土
 9. 黄褐色土
 10. 暗褐色土
 11. 黄褐色土
 12. 黄褐色土
 13. 黒色土
 14. 淡黄褐色土
 15. 黄褐色土
 16. 暗褐色土

第452図 第121・122号住居跡



第 453 図 位置図

ヒ-285グリッドに位置する。重複関係は、みられない。全掘できた数少ない例である。全体のプランは、明確である。住居跡の規模は、長軸3.21m、短軸2.93mを測るが、掘り込み深さは25cmである。壁周溝・柱穴は、確認できなかった。ただし、壁外に一对の柱穴状の部分がある。カマドの右側には、方形の貯蔵穴がある。小形の浅い貯蔵穴である。

カマドは、東辺右よりに構築されている。煙道部は細長く、袖の長さの3倍程度はある。袖は、造りつけの袖で、小さく貧弱である。燃燒部は広く、焚き口部分も広い。火床は、やや深く掘り込

いる。柱穴は確認されていない。

カマドは、北辺に確認されている。僅かに煙道部分と、燃燒部のごく一部分が確認されているにすぎない。細長い煙道と考えられる。そのほかは、不明瞭である。

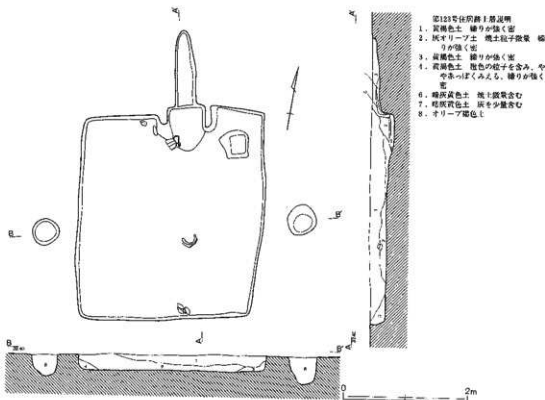
他の遺構との重複が激しく、調査区域の際であるため調査は難行した。

第122号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環の破片である。

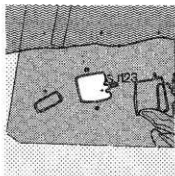
第123号住居跡（調査時C2区29号住居跡）

ヒ-285グリッドに位置する。重複関係は、みられない。全掘できた数少ない例である。全体のプランは、明確である。住居跡の規模は、長軸3.21m、短軸2.93mを測るが、掘り込み深さは25cmである。壁周溝・柱穴は、確認できなかった。ただし、壁外に一对の柱穴状の部分がある。カマドの右側には、方形の貯蔵穴がある。小形の浅い貯蔵穴である。

カマドは、東辺右よりに構築されている。煙道部は細長く、袖の長さの3倍程度はある。袖は、造りつけの袖で、小さく貧弱である。燃燒部は広く、焚き口部分も広い。火床は、やや深く掘り込



第 454 図 第123号住居跡



第 455 図 位置図

まれており、煙道部は、一段高く構築されている。煙道は、緩やかに傾斜して煙り出し穴へと続く。

重複遺構が全く無く、調査は順調に進んだ。

第123号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・甕がある。

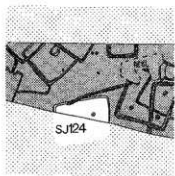
第124号住居跡（調査時C 2区66号住居跡）

メー284グリッドに位置する。重複関係はみられない。南は調査区域外である。住居跡の規模は、長軸5.78m、短軸1.1mを測る。掘り込み深さは、33cmである。壁周溝は、東辺にのみ確認される。柱穴は中央付近に一つあるが、この住居跡と関係するかは疑問である。

カマドは、調査区域内には確認されていない。

重複遺構がなく順調に調査できた。

第124号住居跡の出土遺物は、土師器環がある。



第 456 図 位置図

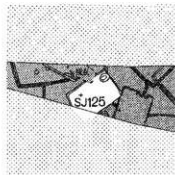
第125号住居跡（調査時C 2区75号住居跡）

シー293グリッドに位置する。重複関係は、第27・40・53・130号住居跡よりも新しい。住居跡の南側が、調査区域外となっている。住居跡の規模は、長軸5.10m、短軸3.24mである。掘り込みの深さは、17cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。北角に貯蔵穴がある。円形の比較的深い掘り込みをもつ貯蔵穴である。

カマドは、確認されていない。

重複が激しい部分ではあるが、最も新しい遺構であるため、調査は順調に進んだ。

出土遺物は、土師器環・甕・須恵器大甕の破片である。

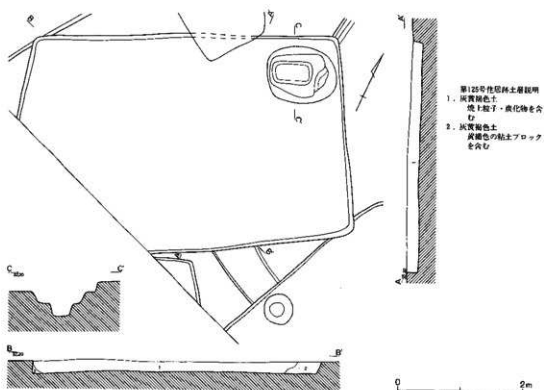
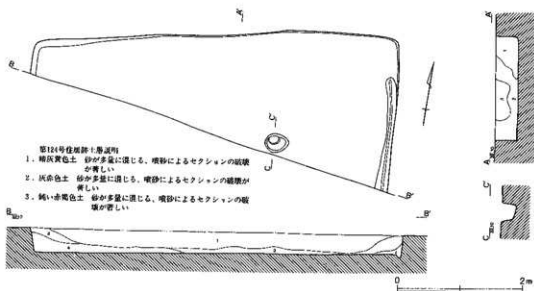


第 457 図 位置図

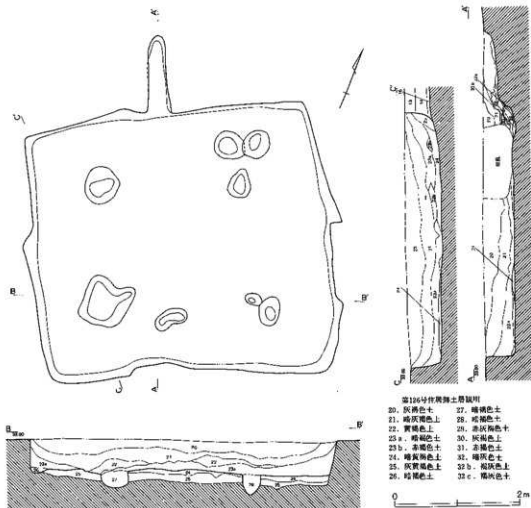
第126号住居跡（調査時B区3号住居跡）

シー291グリッドに位置する。重複関係は、第43・54・78号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長軸4.78m、短軸4.05mである。掘り込みの深さは、54cmである。壁周溝は確認されていないが、柱穴は、4箇所等間隔に確認されており、住居跡としては明瞭である。

カマドは、北壁に接し、やや左よりに構築されていたらしい。袖の部分は造り付けであったらしく、その残形はみられない。つまり煙道の部分のみが検出されている。煙道は、細長くクランク状に造られていたらしい。壁から一段高い位置に煙道は造られている。煙道は、ほぼ水平に壁外に延び、煙り出し穴で垂直に抜けていく。



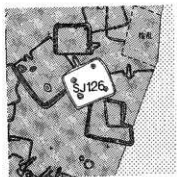
第458図 第124・125号住居跡



第 459 図 第 126 号住居跡

重複の激しい部分の住居跡ではあったが、最も新しい遺構であったために調査は順調に進んだ。

第 126 号住居跡の出土遺物は、土師器坏・甗・須恵器坏蓋・坏身である。

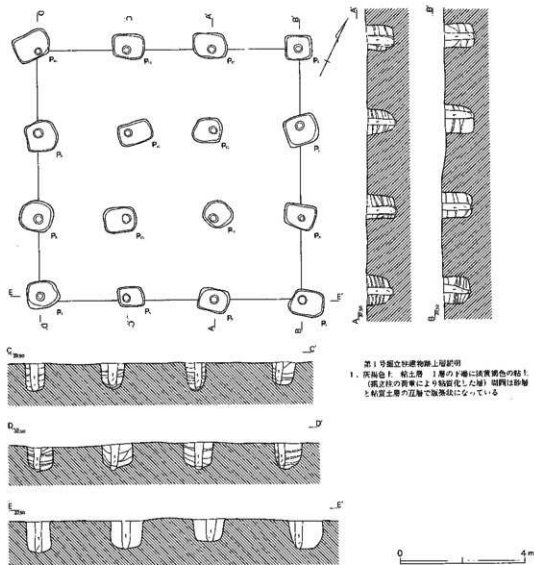


第 460 図 位置図

掘立柱建物跡

第 1 号掘立柱建物跡

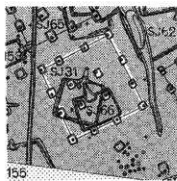
ユ-267グリットに位置する。重複関係は、第 31・65・66 号住居跡よりも新しい。建物跡の規模は、3 × 3 間で、桁行 4.20



第461図 第1号獨立柱建物跡

m、梁行4.00mを測る。獨立柱建物跡群のなかで最も明瞭に確認された遺構である。柱間の長さは、桁行で1.35m—1.40m—1.35m、梁行で1.25m—1.50m—1.25mである。

柱穴の掘り方は、基本的には横長の隅丸長方形をしており、変形した掘り方もある。柱痕跡は、かならずしも掘り方の中心にはなく、それぞれ建物の計画軸にそって振れている。掘り方の深さは、97cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋め土によって固定されている。この埋め土は、細かな砂と粘土を

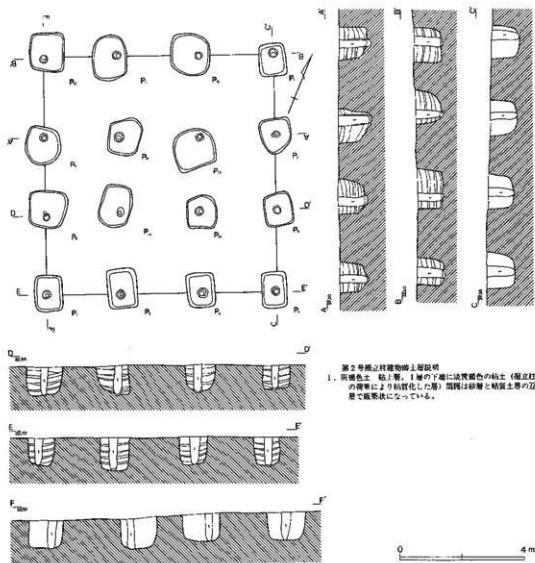


第462図 位置図

「版築」状に叩き締めている。柱痕跡の最下端は、壁体部分の荷重によって白色粘土化している。柱痕跡はきわめて明瞭にわかる。径20cm前後。
出土遺物は、僅かな土師器片のみである。

第2号掘立柱建物跡

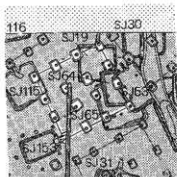
ミー267グリットに位置する。重複関係は、第19・63・64・65・115号住居跡よりも新しく、第153号住居跡よりも古い。建物跡の規模は、3×3間で、桁行7.70m、梁行7.30mを測る。掘立柱



第2号掘立柱建物跡土層説明

1. 灰褐色土 粘上等。1層の下端に灰青色の粘土（掘立柱の荷重により粘質化した層）間隔は砂層と粘質土層の互層で板状状になっている。

第463図 第2号掘立柱建物跡



第464図 位置図

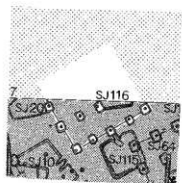
め土によって固定されている。この埋め土は、細かな砂と粘土を『版築』状に叩き締め重層化している。

柱痕跡の最下端は、壁体部分の荷重によって白色粘土化している。柱痕跡はさきわめて明瞭にわかる。径20cm前後。

出土遺物は、僅かな土師器片のみである。

第2号掘立柱建物跡

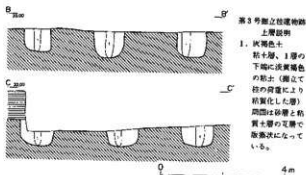
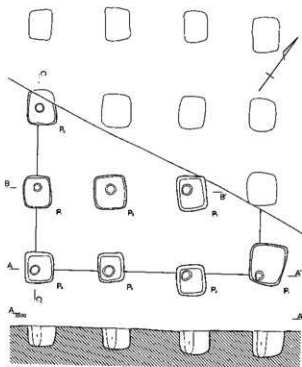
シー269グリットに位置する。重複関係は、第20・115・116号住居跡よりも新しい。建物跡の規模は、3×3間であらう。桁行7.25m、梁行1—mを測る。北側が調査区域外な



第465図 位置図

建物跡群のなかで、重複遺構が多い部分にありながら、第1号掘立柱建物跡同様、明瞭に確認された遺構である。柱間の長さは、桁行で2.60m—2.40m—2.60m、梁行で2.30m—2.60m—2.30mである。

柱穴の掘り方は、基本的には横長の隅丸長方形をしており、変形した掘り方もある。柱痕跡は、かならずしも掘り方の中心にはなく、それぞれ建物の計画軸にそって振れている。掘り方の深さは、105cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋



第3号掘立柱建物跡
上層説明
1. 灰褐色土
粘土層、1層の
下部に淡黄褐色
の粘土（掘立て
柱の荷重により
積算化した層）
間隙は砂礫と粘
質土層の互層で
版築状になって
いる。

第466図 第3号掘立柱建物跡

ので、掘立柱建物跡の全体像はわかりづらい。柱間の長さは、桁行で2.90m—2.70m—2.80m、梁行で2.70m—2.90mである。

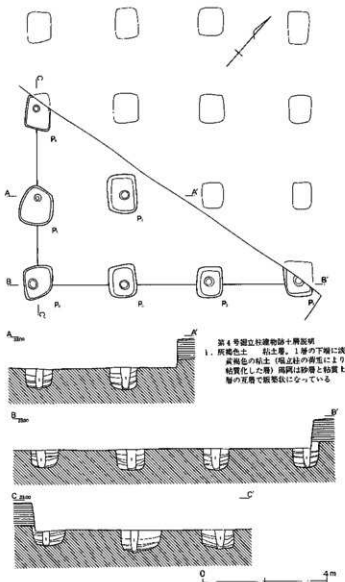
柱穴の掘り方は、基本的には横長の隅丸長方形をしており、変形した掘り方もある。柱痕跡は、かならずしも掘り方の中心にはなく、それぞれ建物の計画軸にそって振れている。掘り方の深さは、100cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋め土によって固定されている。この埋め土は、細かな砂と粘土を「版築」状に叩き締め重層化している。

柱痕跡の最下端は、壁体部分の荷重によって白色粘土化している。柱痕跡はきわめて明瞭にわかる。径20cm前後。

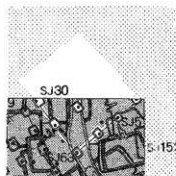
出土遺物は、僅かな土師器片である。

第4号掘立柱建物跡

ユ-266グリットに位置する。重複関係は、第5・9・30・63号住居跡よりも新しい。隣接する第152号住居跡のカマド煙道が、第4号掘立柱建物跡の軒に掛かるため、この住居跡より少なくとも古いことがわかる。建物跡の規模は、3×3間であろう。桁行8.45m、梁行—mを測る。北側は調査区域外である。柱間の長さは、桁行で2.80m—2.70m—2.80m、梁行で2.70m—2.90mである。

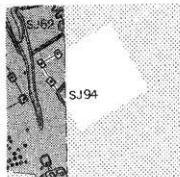


第4号掘立柱建物跡+層説明
1. 灰褐色土 2. 粘土層、1層の下層に成
黄褐色の粘土（掘立柱の存在により
粘質化した層）両層は砂骨と粘質土
層の交互で版築状になっている



第467図 位置図

第468図 第4号掘立柱建物跡



第469図 位置図

柱穴の掘り方は、基本的には横長の隅丸長方形をしており、変形した掘り方もある。柱痕跡は、かならずしも掘り方の中心にはなく、それぞれ建物の計画軸にそって振れている。掘り方の深さは、90cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋め土によって固定されている。この埋め土は、細かな砂と粘土を『版築』状に叩き締め重層化している。

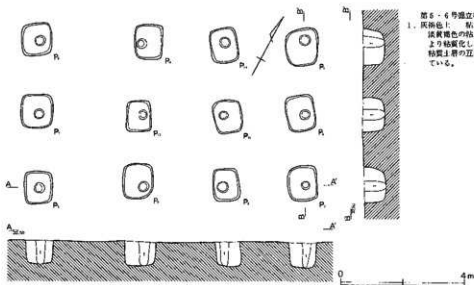
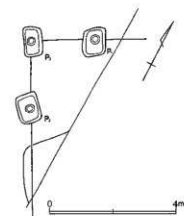
柱痕跡の最下端は、壁体部分の荷重によって白色粘土化している。柱痕跡はきわめて明瞭にわかる。径20cm前後。

出土遺物は、僅かな土師器片のみである。

第5号掘立柱建物跡

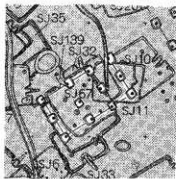
ユ-265グリットに位置する。重複関係はみられないが、第94号住居跡よりも新しいと思われる。建物跡の規模は、不明である。遺構のほとんどの部分が調査区域外に当たる。柱間の長さは、桁行き2.20m、梁行で2.00mである。

柱穴の掘り方は、横長の隅丸長方形である。掘り方の深さは、70cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋め土によって固定されている。明瞭な版築状の部分は見られないが、柱痕跡は明瞭である。



第5・6号掘立柱建物跡土層断面
1. 灰褐色土 粘土層。1層の下部に
淡黄褐色の粘土（掘立柱の荷重に
より粘質化した層）層間は砂層と
粘質土層の互層で、版築状になっ
ている。

第470図 第5・6号掘立柱建物跡



第471図 位置図

出土遺物は、僅かな土師器片のみである。

第6号掘立柱建物跡

メー271グリッドに位置する。重複関係は、第10・11・32・33・67・139号住居跡よりも新しい。建物跡の規模は、2×3間で桁行8.60m、梁行4.80mを測る。重複遺構の最も激しいところに位置する掘立柱建物跡であり、確認は困難をきわめた。柱間の長さは、桁行で3.35m—2.50m—2.50m、梁行で2.30m—2.40mである。

柱穴の掘り方は、方形を基本に変形した掘り方もある。柱痕跡は、かならずしも掘り方の中心にはない。建物の計画軸にあってもやや振れている。掘り方深さは、100cm前後である。柱は、掘り方内に充填された埋め土によって固定されている。

柱痕跡の最下端は、壁体部分の荷重によって白色粘土化している。柱痕跡はきわめて明瞭にわかる。径20cm前後。

出土遺物は、僅かな土師器片である。

(3) 遺構各説 —遺物出土状態—

第115号住居跡(床面) 床面上には、とくにカマドの前方の部分に甕・甕が、横位で出土している。中でも甕の口縁部の下には、坏が正位で出土している。甕の破片は、床面上を散乱しているが、ほぼ竪穴の中央部分にまとまる傾向がある。

(カマド脇) 左袖に接して坏と小形甕・高坏・甕が、焚き口部を取り巻くように置かれていた。袖側からみると、坏—坏—坏—坏—小形甕—高坏—甕の順番である。坏・高坏は正位、甕・小形甕は横位である。右袖の前方には、甕が3点焚き口の縁に横位で置かれていた。またこの背後には、甕の胴上半部のみが置き台となり、このうえに小形甕が置かれた状態で出土している。またその隣には、坏が2点重ね碗の状態で出土している。焚き口の中心部の直前にも、坏が2点正位で置かれている。

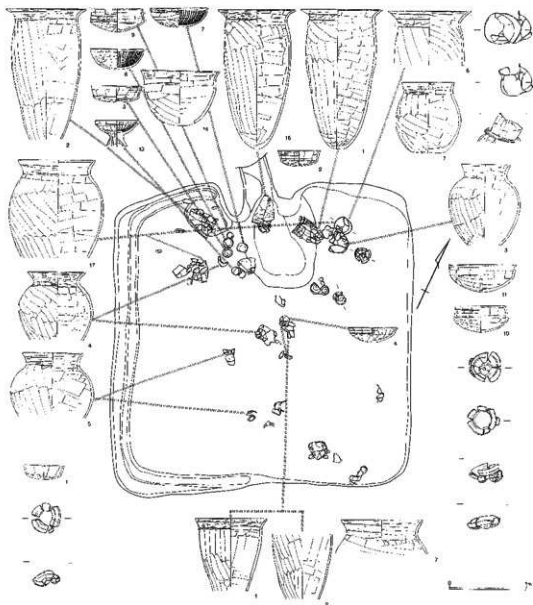
(4) 遺構各説 —カマドと煮沸土器—

古墳時代第Ⅶ期のカマドと、煮沸にかかわる土器の関係について述べる。

古墳時代第Ⅶ期のカマドの確認された住居跡とその構造についてはすでに述べたが、6軒のカマドについて詳細が分かっている。

第115号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの燃焼部で、焚き口側に倒れた長胴甕がある。この長胴甕の口縁部には、坏が正位に置かれており、あたかも蓋のような機能をしていただと思われる。支脚は出土し



第472図 第115号住居跡遺物出土状態

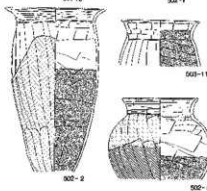
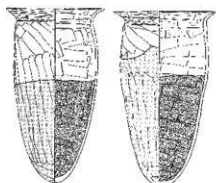
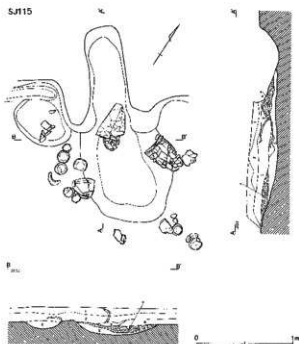
ていない。

501-16は、長胴の甕で胴下半部に被熱痕跡が明瞭にみられる。内面には、これと同じ位置に、粒状の付着痕跡が筋状に残っている。

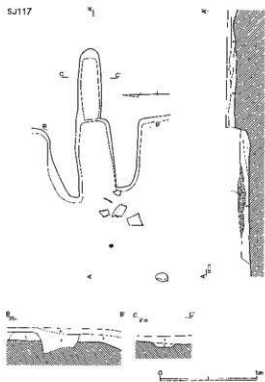
502-1は、長胴の甕である。外面の底部と口縁から肩部にかけての部分を除いた胴部に、被熱痕跡が明瞭に観察できる。また内面の胴中位以下に底部にかけて粒状の付着痕を確認できる。カマド内に残っていた土器である。

502-2は、長胴の甕で底部が欠損している。肩部以下に被熱痕が斜めに確認できる。内面には胴中位以下に、粒状の付着痕跡が確認される。

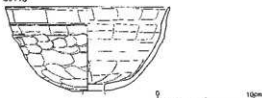
S/J15



S/J17



S/J15



第115号住居跡・カマド土層説明

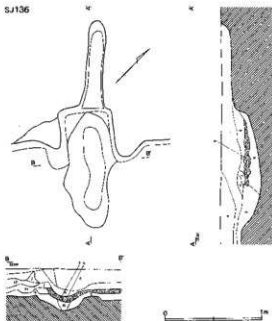
1. 黄褐色土 粘性強、粒子細い、炭化物・焼土多量含む
2. 淡緑褐色土 粘性強、粒子粗、炭化物・焼土多量含む
3. 淡赤褐色土 粘性強、焼土ブロック層
4. 粘性の強い黄褐色土層 粘土層かい、カマドの天井部
5. 黄褐色土 粘性強、粒子粗かい、黄褐色ブロック多量含む
6. 淡灰褐色土 粘性強、炭・炭化物層、カマドの灰層

第117号住居跡・カマド土層説明

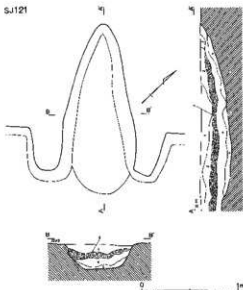
1. 暗褐色土 117号住居跡層上
2. 淡黄褐色土 117号住居跡層土
3. 暗赤褐色土 炭化物・焼土粒子を多量に含む、粘性の大きい粒子の粗い土層
4. 黄褐色土 粘性強、粘性強、粒子粗かい、129号住居跡の粘土
5. 暗黄褐色土 粘性強、粘土層かい、129号住居跡掘り方埋土

第473図 第115・117号住居跡カマド・遺物出土状態

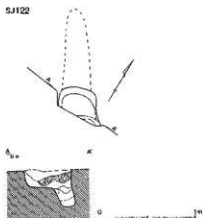
SJ136



SJ121



SJ122



第121号住居跡・カマド土層説明

1. 粘褐色土 黄色粒子多量含む、少量の焼土・木炭含む、細り貝
2. 褐色土 黄色粒子・焼土を含む、少量の木炭含む、細り貝
3. 黄色土 多量の木炭・焼土を含む
4. 黄灰色土 多量の灰・木炭含む、焼土・木炭を含む
5. 黄色土 多量の黄色粒子含む、細り貝

第122号住居跡・カマド土層説明

1. 淡黄褐色土 粘性弱 粒子粗、炭化物・焼土多量を含む
2. 暗褐色土 固く締った粘性が大変強い、仕切の粘床
3. 淡褐色土 粘性弱 粒子粗、炭化物・焼土粒下を含む
4. 淡褐色土 粘性弱 粒子粗、やや多量より強い
5. 暗褐色土 粘性弱 粒子粗、炭化物炭化物多く含む
6. 暗褐色土 粘性弱、やや多量より強い
7. 暗赤褐色土 焼土・アロック
8. 淡黄褐色土 焼土
9. 淡赤褐色土 灰・炭混じり
10. 淡赤褐色土 アロック
11. 淡灰褐色土 灰層
12. 淡灰褐色土 灰・炭層

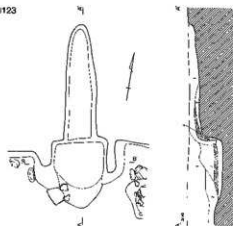
第 475 図 第121・122・136号住居跡カマド・遺物出土状態

503-11は、長胴の甕で胴部以下を欠損している。口縁部以下に被熱痕跡が確認されている。内面には、粒状の付着痕跡が口縁部の下から底部にかけて残る。

502-5は、壺で底部を欠損している。胴部下半に、焼土と粘土の付着痕跡がみられ、これより上、口縁部以下に被熱痕跡がみられる。また内面には、下から1/3程度以下に、粒状の付着痕跡がみられる。

503-2は、長胴の甕で底部と口縁部を欠損している。外面には、胴部全面に被熱痕跡が確認できる。内面には、胴下半に粒状の付着痕跡が確認できる。

SJ123



第123号住居跡・カマド土層説明

1. 黄褐色土
2. 暗灰黄色土
3. 暗灰黄色土 黄褐色粘土粒多量含む
4. 暗赤褐色土
5. 灰色土
6. 暗灰黄色土 地上部混入
7. 暗灰黄色土 灰少量含む



SJ125

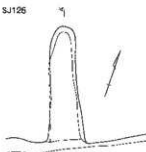


第125号住居跡・カマド土層説明

20. 灰褐色土
21. 暗灰褐色土
22. 暗褐色土
24. 暗黄褐色土

503-5

SJ126



29. 赤灰褐色土
30. 灰褐色土
31. 赤褐色土
32. 暗灰色土
- 32 b. 暗灰色土
- 32 c. 暗灰色土



第476図 第123・126号住居跡カマド・遺物出土状態

503—12は、長胴甕で底部と口縁部を欠損している。外面には、全面に被熱痕跡が確認でき、内面には、粒状の付着物が確認できる。

第117号住居跡

カマドは、長煙道である。住居跡に伴う煮沸痕跡等の残る土器は、確認されていない。

第118号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの構築材として、左の袖の心材に長胴甕が使用されていた。2点の土製支脚が出土している。1は大形の土製支脚で、外面には指押えの跡が明瞭に残る。底部は小さくえぐり込んでいる。2は、支脚の頭部で貫通しない円形の穿孔が6か所確認できる。

504—24は、長胴の甕で胴部下位が欠損している。肩部から下に被熱痕が確認されている。内面には、この位置と対応する位置に、粒状の付着痕跡が確認されている。

第119号住居跡

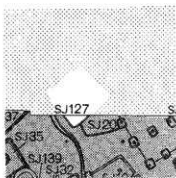
短煙道のカマドで、左袖の心材に長胴甕が使われている。燃焼部内には遺物を確認することができなかった。

505—9は、長胴の甕で胴下半が欠損している。外面の胴部以下には、被熱痕跡が残っている。内面には付着痕跡等はみられない。

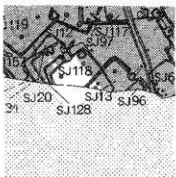
503—5は、小形の壺で底部が欠損している。外面には、肩部以下に、被熱痕が確認できる。内面には、肩部に帯状に、付着痕がある。

(5) そのほかの古墳時代の遺構

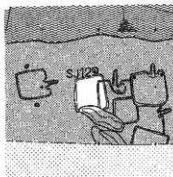
ここでは、古墳時代Ⅰ～Ⅶ期までの時期区分に該当させることが、不可能だった古墳時代の遺構について、調査内容・所見等を記す。ほとんど出土遺物が僅少であったり、部分的な調査しか行なえなかった遺構である。



第 477 図 位置図



第 478 図 位置図



第 479 図 位置図

1 遺構各説 一遺物出土状態一

第127号住居跡（調査時C 2区61号住居跡）

シー283グリッドに位置する。重複関係は、第76号住居跡よりも新しい。北側が調査区域外である。住居跡の規模は不明だが、掘り込みの深さは13cmある。壁周溝・柱穴は、確認されていない。

カマドは、調査区域内では確認できなかった。

重複遺構の激しい部分なので、調査は難行した。

出土遺物は、土師器杯の破片がある。

第128号住居跡（調査時C 2区35号住居跡）

ユー273グリッドに位置する。重複関係は、第118号住居跡よりも古い。カマドの煙道部分のみが僅かに検出されただけである。細長い煙道であり、煙り出し穴の部分で垂直に立上っている。住居跡の大部分は、第118号住居跡によって蝕まれ、また調査区域外である。

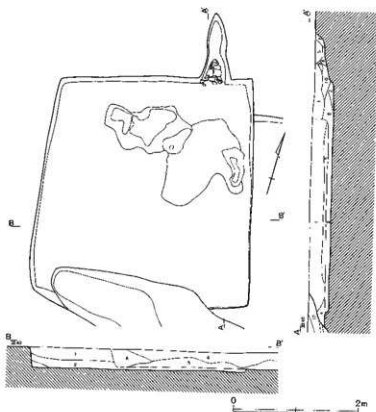
覆土が、地山の堆積層と近似し、また重複遺構も激しく、調査は難行した。

出土遺物は、土師器破片のみである。

第129号住居跡（調査時C 2区58号住居跡）

モー284グリッドに位置する。重複関係は、第52号住居跡よりも古い。カマドと西・北壁の部分が残っているが、住居跡の大半は、第52号住居跡によって蝕まれている。住居跡の規模は、長軸3.58m、短軸3.33mを測る。掘り込みの深さは32cm。壁周溝は巡らず、柱穴も確認されていない。

カマドは、北側の極端に右よりに確認されている。袖は失われている。おそらく造り付けの袖が、存在したと考えられる。



第 480 図 第129号住居跡

煙道は比較的長い。燃焼部から煙道にかけて、一段高く造られる。煙道の燃焼部よりには、壁が伏せて置かれており、あるいは煙道の補強材として用いられたのであろうか。煙り出し穴は、垂直に立ち上がっている。煙道の先端は、鋭く尖っている。

当初、多くの住居跡が重複する部分であったため、遺構確認に大変手間取った。

出土遺物は、土師器の破片があるだけである。

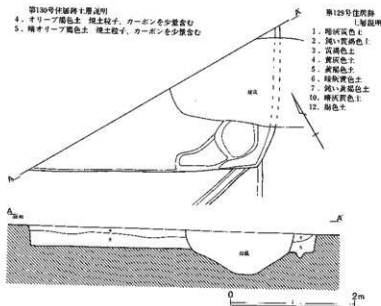
第130号住居跡

(調査時 C 2 区

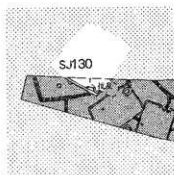
60号住居跡)

シー-286グリッドに位置する。重複関係は、第41号住居跡よりも新しい。北側は、ほとんど調査区域外である。住居跡の規模は不明である。掘り込みの深さは、30cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。床面に、緩やかな凹みがあるが、貯蔵穴等ではない。カマドは、確認されていない。

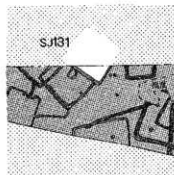
遺物が大変重複している地点なので、確認には



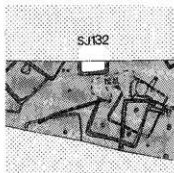
第 481 図 第130号住居跡



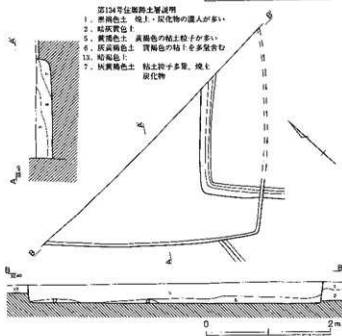
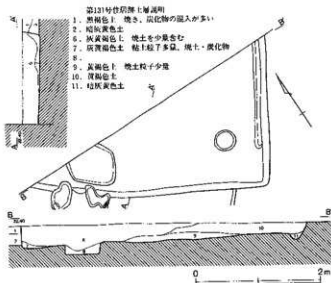
第482図 位置図



第483図 位置図



第484図 位置図



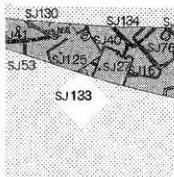
第485図 第131・134号住居跡

手間取った。

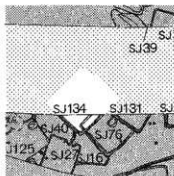
出土遺物は、土師器片のみである。

第131号住居跡（調査時C2区61号住居跡）

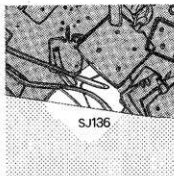
シー283グリッドに位置する。重複関係は、第76号住居跡よりも新しい。北側のほとんどが、調査区域外である。規模は不明だが、掘り込みの深さは25cmを測る。壁周溝は、東辺に一部分を確認



第486図 位置図



第487図 位置図



第488図 位置図

重複遺構が激しい部分なので、調査は難行した。
出土遺物は、土師器片のみである。

第135号住居跡（調査時C2区67号住居跡）

第34号住居跡参照。

している。柱穴は、確認されていない。

カマドは、確認されていない。

遺構の確認は、多くの重複関係から困難を極めた。

第131号住居跡に伴う出土遺物は、土師器破片のみである。

第132号住居跡（調査時C2区80号住居跡）

シー280グリッドに位置する。重複関係はみられない。北側のほとんどの部分が、調査区域外である。規模は、長軸3.10m、短軸—mである。掘り込みの深さは、15cmである。壁周溝は、確認部分のみでは、完調している。柱穴は、確認されていない。

カマドは確認されなかった。

重複遺構も少なく、比較的順調に調査できた遺構である。

第132号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。

第133号住居跡（調査時C2区81号住居跡）

ミー285グリッドに位置する。重複関係は、みられない。住居跡のほとんどが、調査区域外にあり、北隅の一部が調査対照となっているに過ぎない。住居跡の規模・壁周溝・柱穴は、不明。

カマドも確認されていない。

遺構の調査面積が小さく、調査に手間取った。

出土遺物は、土師器片のみである。

第134号住居跡（調査時C2区83号住居跡）

シー284グリッドに位置する。重複関係は、第16・40・76号住居跡よりも新しい。北側は、調査区域外である。住居跡の規模は不明だが、掘り込みの深さは30cmである。壁周溝・柱穴は確認されていない。

カマドは、確認されていない。

第136号住居跡（調査時C 2区96号住居跡）

ユー-274グリッドに位置する。重複関係は、第98号住居跡よりも新しく、第120・157住居跡よりも古い。南辺は、調査区域外である。住居跡の規模は、不明であるが、掘り込みの深さは、30cmを測る。壁周溝・柱穴は、確認されていない。

カマドは、西壁中央に接し存在している。煙道部は細長く、短い袖の2倍ほどはある。ただカマドの部分に近世の溝が、重複しているため、遺構としてとらえづかった。煙道部は細長く、緩やかな傾斜をもって造られている。



SJ137

第 489 図 位置図

遺構の重複関係が激しく、また地山と覆土の色調が似通っており、カマドの存在のみが明瞭に分かった。

第136号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。

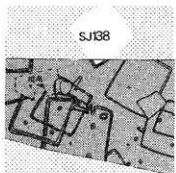
第137号住居跡（調査時C 2区97号住居跡）

ユー-274グリッドに位置する。重複関係は、第34号住居跡よりも新しく、第157号住居跡よりも新しい。調査区のきわに確認された。ほんの僅かばかりの床面である。規模・掘り込み等是不明。第27号住居跡よりも新しい。壁周溝・柱穴は、みられない。

カマドは確認されていない。

多くの重複遺構の存在から、遺構の確認は困難を極めた。

第137号住居跡の出土遺物は、土師器片のみである。



SJ138

第 490 図 位置図

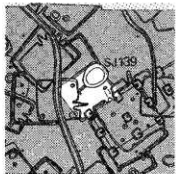
第138号住居跡（調査時C 2区111号住居跡）

シー-281グリッドに位置する。重複関係は、調査区内ではみられない。北側部分は、調査区域外である。住居跡の規模は不明だが、掘り込みの深さは13cmである。壁周溝・柱穴は、確認されていない。

カマドは、確認されていない。

調査区の北端にあり、南角のみが検出されている。

第138号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。

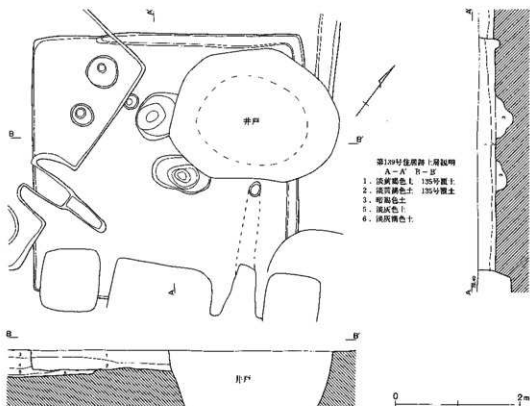


SJ139

第 491 図 位置図

第139号住居跡（調査時C 2区115号住居跡）

エー-291グリッドに位置する。重複関係は、第32・67・68・128号住居跡よりも古く、第17・117・128号住居跡よりも新しい。重複遺構が激しく、住居跡の全貌は、必ずしもわかっていない。住居跡の規模は、長軸4.16m、短軸4.04mを測る。掘り込みの深さは18cmである。壁周溝は、北東の壁側にめぐって



第492図 第135号住居跡

る。柱穴は、数ヶ所確認されているが、はたして本住居跡に伴うか不明である。

カマドは確認されていない。

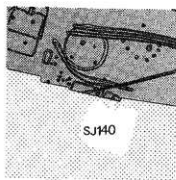
第139号住居跡の出土遺物は、土師器片だけである。

第140号住居跡（調査時C 2区117号住居跡）

メー278グリッドに位置する。重複関係は、第22号住居跡よりも新しい。カマドの煙道部分のみが、僅かに第22号住居跡に重複して、土層断面に確認された。規模・掘り込みの深さ不明。

カマドは煙道部分のみが調査され、比較的大形のカマドだったことがわかる。

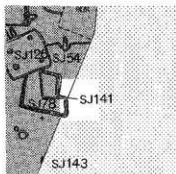
第140号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。



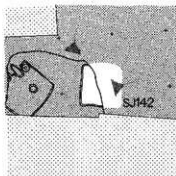
第493図 位置図

第141号住居跡（調査時B区8号住居跡）

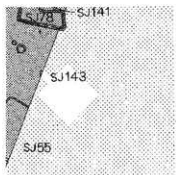
メー290グリッドに位置する。重複関係は、第78・54号住居跡よりも古い。調査区域の際にはほんの僅か確認された住居跡である。住居の規模・掘り込みの深さ・壁周溝・柱穴・カマド



第494図 位置図



第495図 位置図



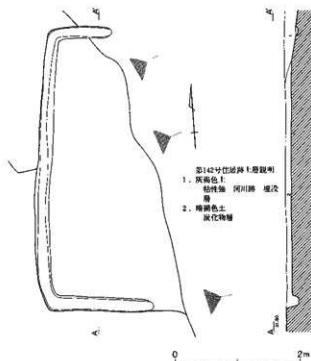
第496図 位置図

第143号住居跡（調査時B区34号住居跡）

メー291グリッドに位置する。重複関係は、調査区域内ではみられない。東側が調査区域外で、カマドの煙道部のごく僅かな部分が、確認されているに過ぎない。住居跡の規模・掘り込みの深さ・壁周溝・柱穴は不明。

確認されたのは、カマド煙道の先端、煙り出し穴の部分だけである。

第143号住居跡の出土遺物は、土師器の小破片のみである。



第497図 第142号住居跡

は、不明である。

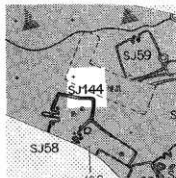
出土遺物は、僅かな土師器片のみである。

第142号住居跡（調査時B区17号住居跡）

ヒー301グリッドに位置する。重複関係は、みられない。東側半分が、河川跡の浸食によって失われている。住居跡の規模は、長軸4.45m、短軸—m。掘り込みの深さ8cm。壁周溝は、確認部分では完周している。柱穴は不明。

カマドは確認されていない。

第142号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。



第 498 図 位置図

第144号住居跡（調査時B区42号住居跡）

ヒ-293グリッドに位置する。重複関係は、第58号住居跡と関係するが、新旧は判断しかねる。遺物の分布のみが確認されているが、明確な遺構としては確認することができなかった。しかしここでは、第144号住居跡としておく。

出土遺物としては、土師器片がある。

2 遺構各説 —カマドと煮沸土器—

そのほかの古墳時代のカマドと、煮沸にかかわる土器の関係について述べる。

第123号住居跡

長煙道のカマドである。カマド内や周辺からは、煮沸に関係した遺物は確認されていない。

507-5は、短頸壺である。外面には、胴中位に、帯状に焼土と粘土の付着痕跡が確認できる。内面には、口縁部以下胴中位まで、粒状の付着痕跡がみられる。

第129号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの煙道部入り口に、長頸甕が横倒しの状態で出土した。焼き口側に口縁部を向けていた。劣化が激しく取り上げは不可能だった。あるいは、焼き口部を保護するための土器であったのだろうか。

カマドの、明瞭に確認されなかった土器で、煮沸痕跡等が残るものを説明する。

512-1は、大形の甕である。外面には、胴下半に斜めに被熱痕跡が確認できる。内面には、胴部中位以下に粒状の付着痕跡がみられる。

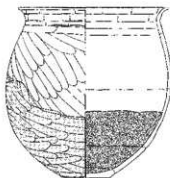
513-3は、大形の甕である。外面には、胴部やや下側に帯状の焼土・粘土の付着痕跡が確認された。内面にはなにも確認されていない。

561-9は、くの字口縁の甕である。外面に帯状の粘土・焼土の付着痕跡が確認されている。内面には、粒状の付着痕跡が全面に確認できる。

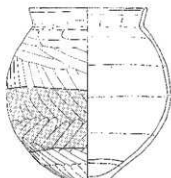
499-1の土製支脚は、板状の粘土を繋ぎあわせた中空の支脚で、外面は縦にヘラケズリされている。馬型埴輪の足のようである。

499-2は、土製羽口で、頂部は、タール状の付着物がみられる。外面はていねいにヘラケズリされている。河川跡の川底（最下層）から出土している。

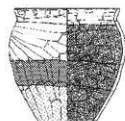
SJ142



512-1



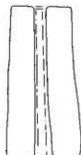
512-2



561-9

0 90cm

SJ142



0 100mm

1. 稲葉褐色土 少量の焼土粒子 (3-5mm) 及び細粒砂を含む、粘性やや弱く締り極めて良好
2. 暗褐色土 多量の焼土フロック (3-5mm) を含む、粘性弱く締り極めて良好、天井裏層
3. 暗茶褐色土 焼土粒子 (1mm内外) を含む、粘性・締り共良好
4. 暗茶褐色土 焼土粒子を含まない、少量の細粒砂を含む、粘性・締り共良好
5. 暗茶褐色土 少量の焼土粒子 (5-10mm) を含む、粘性良好だが締りにやや欠ける
6. 暗茶褐色土 焼土粒子 (5mm内外) 及び少量の細粒砂を含む、粘性・締り共良好
7. 黄褐色土 膠質の焼土粒子 (3mm内外) を含む、粘性・締り共良好

第 499 図 第142号住居跡カマド・遺物出土状態

(6) 遺物各説 —古墳時代第Ⅶ期の出土土師器分類—

古墳時代第Ⅶ期の出土土師器は、20種の器種を見ることができる。

1 坏坑類 食器具の坏坑類には、7つの器種がある。

須恵器模倣坏蓋7 (蓋坏7) 須恵器の蓋付坏の蓋を模倣した土師器の坏の系譜を引き、独自に型的な発展をしたもの。外稜はきわめて緩くその形状を留めない。底部へラケズリがさらに進み、

第194表 そのほかの古墳時代住居跡一覧

No.	作 場 跡 風 積			方 々				貯 蔵 穴		備 考	
	長軸長さ	短軸長さ	配込長さ	形 状	沖込長さ	煙 道 幅	右軸長さ	左軸長さ	形 態		幅 深 さ
126	4.70	4.05	0.54	長方形					c類		シー291
127			0.13	正方形							シー293
128				長方形							ユ一273
129	3.58	3.33	0.32	長方形	1.07	0.30			c類		セ 284
130			0.30	長方形							シー285
131			0.25	正方形							シー283
132	3.10		0.15	正方形							シ 28
133				正方形							シー285
134			0.30	正方形							シー284
135				正方形							ユ一273
136			0.30	正方形	1.25	0.13	0.24	0.30			ユ一274
137				正方形							ユ一274
138				長方形							シー281
139	4.15	4.04	0.18	正方形							ア一291
140				正方形							メ一278
141				正方形							メ 290
142	4.45		0.08	正方形							ヒ一301
143				正方形							メ 291
144				正方形							ヒ一293

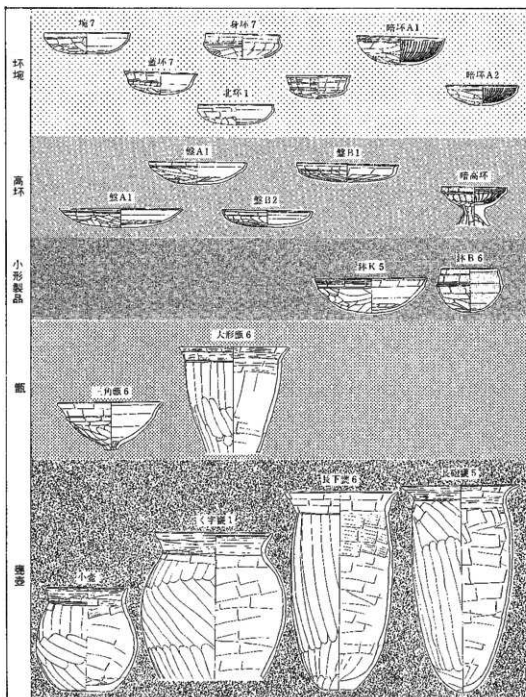
周辺部の削り込みは雑になる。成形技法は前段階と同様で、底部内面を円形にヘラオサエを行ない、外面を指押えによって成形する。口縁部には、断続ヨコナデがみられる。外稜は不明瞭化してくる。内面のS字状の戻りはさらに鈍い。口唇部は丸い。口縁部の外反が進む。さらに小型化する。やはり普通製品のみ。

須恵器模倣坏身7（身坏7） 須恵器の蓋付坏の身を模倣した土師器の坏である。セットとなる蓋は、この段階にはなく、単独製品である。個体数は激減する。成形技法は、前段階と同様で、まず底部内面を円形にヘラオサエを行ない、外面を指押えによって成形。口縁部を断続ヨコナデし、底部を細かく削って仕上げる。削りは大変雑になる。口縁部は、内側に傾斜しつつ立ち上がり、口縁部の返りが不明瞭化する。

有段口縁坏B4（有坏B4） 須恵器の蓋付坏の蓋の模倣の一形態と考えられる。口縁部は、1段以上はない。この段階の普遍的な模倣坏。小型化する。口縁部の直立するものと外反するものがある。成形手法として、口縁部には、細かな断続ヨコナデが認められ、底部は、ヘラケズリ技法が発達している。扁平化がさらに進む。有段口縁であるために器高は高い。口唇部は水平面がある。法量からみると普通製品である。黒色処理される製品がある。

境6（境6） 小形の境形土器で、外面は、ヘラケズリによって作られ、内面はヨコナデが施されている。小形の土器で、明確な系譜等を追うことは困難である。

北武藏型杯1（北杯1） 碗形の器形で、口唇部がほんの僅かに内側に屈曲する。外面をヘラケズリし、短い口縁部はヨコナデされている。内面は、ていねいにヨコナデされている。



第 500 図 古墳時代第Ⅴ期の出土土器分類

北島型暗文土器環A(暗環A) 碗形の器形で、外面をていねいにヘラケズリし、短い口縁部は断続ヨコナデされている。内面には、放射状暗文が口唇部直下まで施されている。畿内飛鳥地方の宮部の土器、暗文土器環Cの系譜を引くと考えられる。法量分化がみられ、大中小・大小の組合せがみられる。在地産暗文土器。新しいものは器高が低くなり、扁平化する(これをA2とした)。口唇部の変化は、S字状の口唇部から素口縁の口唇部へと移行する。

2 高環・盤類 食器具の高環・盤類には、3つの器種がある。

盤A(盤A) 口縁部が屈曲せずに、緩やかに口唇部となるもので、深めの製品から浅めの製品へと変化する。基本的には、放射状の暗文が施されていたのであろうが、風化が激しく読み取ることができなかった。北島形暗文土器の一翼を担う土器であろう。

盤B(盤B) 口唇部がS字状に屈曲し、受け口状となる。やはり深めの製品から浅めの製品へと変化する。これも放射状の暗文が施され、北島形暗文土器の一つと考えられる。

暗文高環(暗高環) 暗文環を環部に載せた高環。畿内地方の本来暗文の施される高環は、脚部の高い皿状の器形であるが、この高環は、従来の有段口縁部の高環の系譜を引くものと思われる。外面は指押え、内面はヘラオサエの後に暗文、そして脚部は縦のヘラケズリがみられる。黒色処理される製品。

3 小形製品 小形製品は、機能毎に柱を立てるべきだが一括した。2つの器種を設定した。

鉢B類6(鉢B6) 小形の鉢形土器である。成形方法等は、口縁部は内側に屈曲し、口唇部で再び外側に屈曲する。断続ヨコナデによってていねいに作られている。底部も細かくヘラケズリされ、内面は断続ヨコナデされ、有段口縁化している。深めの碗形となっている。黒色処理されている。

鉢K類5(鉢K5) 大形の鉢形土器。深い碗形の器形で、口縁部は、横方向に細かく断続ヨコナデされている。底部は、細かなヘラケズリで調整される。内面は、ヨコナデ。被熱痕の残る土器がある。内外面に黒色処理がされる場合がある。

4 甔 甔の土師器全体に占める割合は、多くない。しかし3つの器種の設定が可能である。

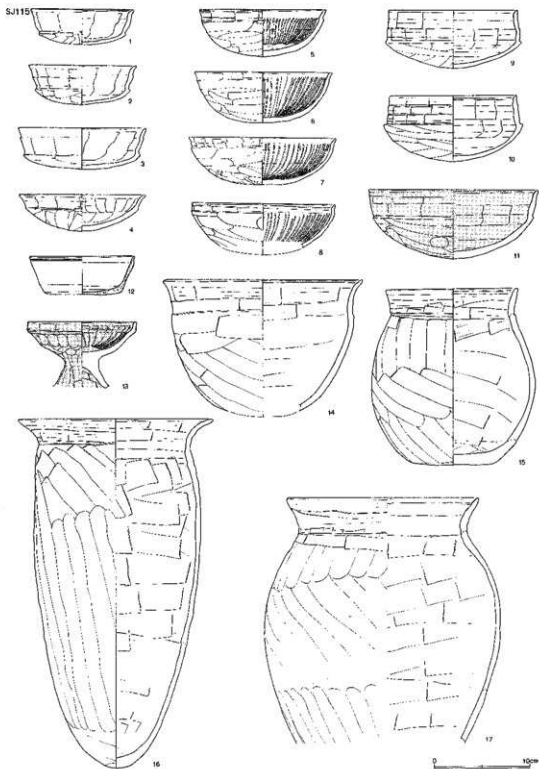
大形甔形甔6(甔形甔6) 頭部のあまり締まらない、ずん胴の大形の甔形甔である。底部が欠損しているので詳細は分からないが、前段階より小形化している。外面は縦のヘラケズリ、内面は横のヘラオサエ、口縁部はヨコナデされている。内面は胴部を縦にナデアゲ、底部から1/3を横にヘラオサエしている。口縁部はくの字に屈曲している。

小形甔5(小形甔5) 底部がロート状になる甔。外面は細かなヘラケズリ、口縁部は断続ヨコナデされている。内面はヨコナデされている。

5 甗・壺 甗・壺は、煮沸・貯蔵用として多く生産される。4つの器種の設定が可能である。

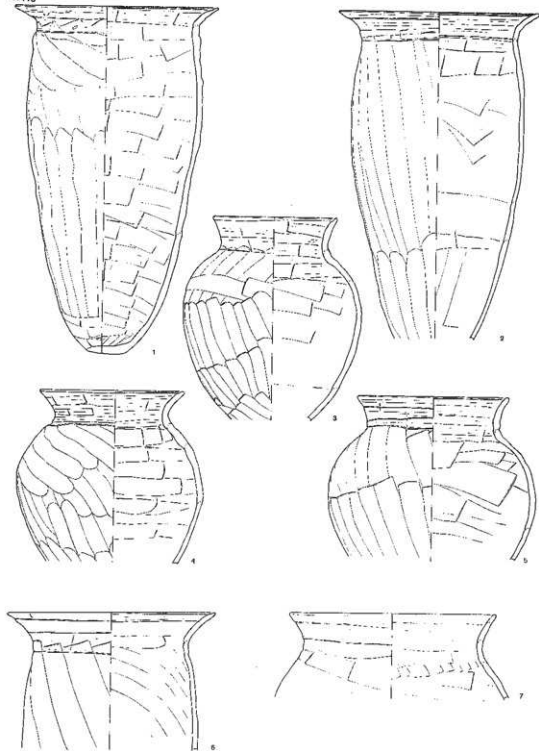
小形甗7(小形甗7) 底部の平底の小形の甗形土器で、外面が縦にヘラケズリされ、胴中位で斜めにヘラケズリされている。口縁部はヨコナデされている。内面はヘラオサエされ、比較的ていねいに作られている。

くの字口縁甗(く字甗1) 胴部球形に近く、胴部の張が強い。口縁部をくの字に作るのが特徴。この段階以降みられるようになる。外面は縦に細かくヘラケズリされ、口縁部はヨコナデされてい

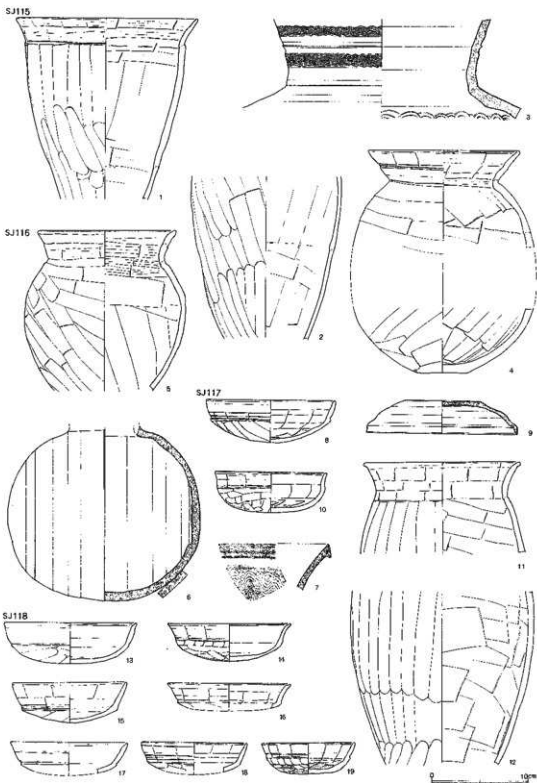


第 501 图 第115(1)号住居跡出土遺物

SJ115

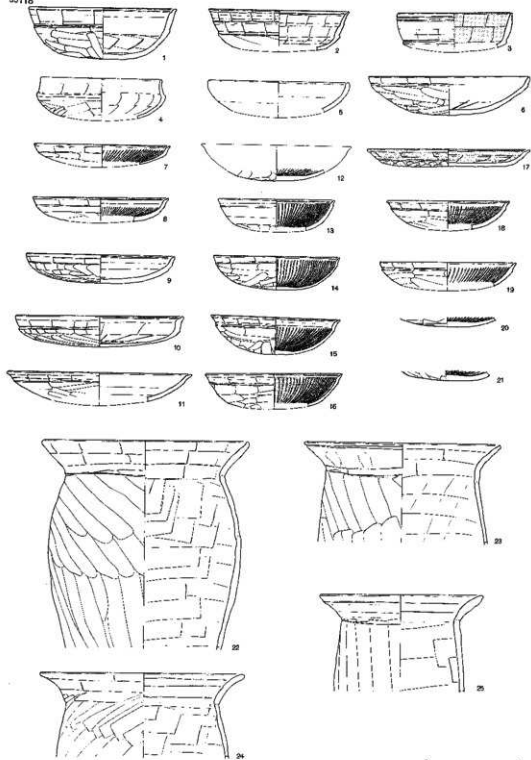


第 502 图 第115(2)号住居跡出土遺物



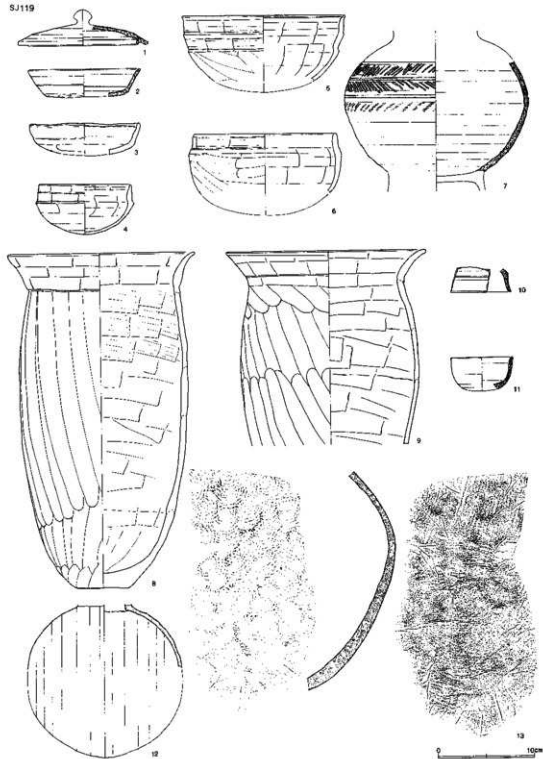
第 503 图 第115(3)·116·117·118(1)号住居跡出土遺物

SJ118

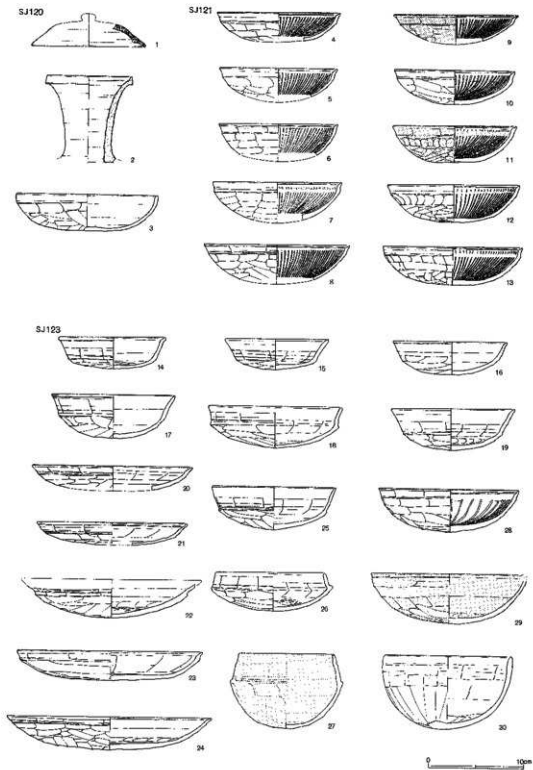


第 504 图 第118(2)号住居跡出土遺物

SJ119

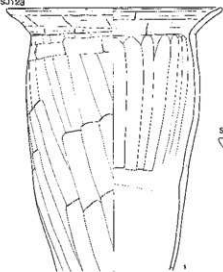


第 505 图 第 119 号住居跡出土遺物



第 506 图 第 120 · 121 · 123(1)号住居跡出土遺物

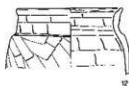
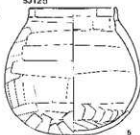
SJ123



SJ124



SJ125



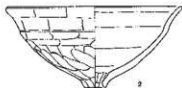
SJ126



0 10cm

第 507 图 第 123(2)·124·125·126(1)号住居跡出土遺物

S.126



0 10cm

第508図 第126(2)号住居跡出土遺物

第195表 第115号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 象				残存度	手法の特徴・産(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第501図								
1	蓋杯7	10.9	9.1	3.8	180	完整	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 8/3
2	有坏D4	11.4	10.1	4.2	200	完整	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8
3	有坏B4	13.5	12.4	4.4	340	完整	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→11線部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 6/8
4	蓋杯7	13.3	12.0	4.0		1/2	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 7/6
5	盥杯A1	13.5	13.0	5.0	400	完整	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状暗文。	5YR 6/8
6	盥杯A1	14.5	14.0	5.3	520	完整	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状暗文。	5YR 7/6
7	盥杯A1	15.8	15.1	5.0	480	3/4	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。放射状暗文。	5YR 7/6
8	盥杯A1	15.1				1/5	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状暗文。	5YR 7/6
9	身杯7	13.6	14.5	6.2	520	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 7/3
10	身杯7	13.5	14.3	7.0	680	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(3段)。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8
11	鉢K5	18.0	17.2	7.3	900	一部欠 損	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(3段)。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/4
12	盥杯身	11.1	8.5	4.0		1/2	ロクロヨコナデ→口縁部沈線。内面ロクロヨコ ナデ。	7.5YR 8/1
13	有段高3	11.5	11.5			2/3	周辺ユビオサエ→底部ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 7/1

第196表 第115号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
14	鉢K3	21.0	(19.3)			一部欠損	胴部斜ヘラケズリ・肩周縁ヘラケズリ・口縁部 断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ・断続ヨコナデ	5 Y R 7 / 4
15	小壺7	13.9		18.5	2,400	4/5	胴部縦ヘラケズリ・胴中位斜めヘラケズリ・口 縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 8 / 2
16	長短壺5	20.6	3.5	26.8	6,000	一部欠損	胴部縦ヘラケズリ・胴上位斜めヘラケズリ・口 縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
17	く字壺1	20.2				1/2	胴部縦ヘラケズリ・胴上位・胴下位斜めヘラケ ズリ・頸部ヨコナデ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
第502図								
1	長短壺5	21.5	4.0	36.1	5,900	一部欠損	胴部縦ヘラケズリ・胴上位斜めヘラケズリ・底 部縦ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラオ サエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 4
2	長短壺5	21.2				一部欠損	胴部縦ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラ オサエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
3	小壺7	13.1				一部欠損	胴部縦ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラ オサエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 3
4	小壺7	15.3				3/4	胴部斜めヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 4
5	埴輪点6	16.0				3/4	胴部斜めヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 6
6	長短壺5	22.0				1/3	胴部斜めヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
7	く字壺1	21.8				1/2	胴部斜めヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4
第503図								
1	大型瓶7	19.0				2/3	胴部縦ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面 ナデアゲ・ヘラオサエ・ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
2	長短壺5					1/3	胴部縦ヘラケズリ。内面ナデアゲ・ヘラオサエ	7.5 Y R 7 / 2
3	須長頸壺					破片	口縁ヨコナデ・波状文?段。内面同心門文ク タキ・口縁ヨコナデ。	須磨器 NT/0
4	埴輪点6	15.8				1/3	胴部縦ヘラケズリ・肩周縁ヘラケズリ・底部縦 ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ナデア ゲ・ヘラオサエ・断続ヨコナデ。	2.5 Y R 7 / 6

第197表 第116号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
第503図								
5	小壺7	14.5				3/5	胴部斜ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面 ナデアゲ・ヘラオサエ・断続ヨコナデ。	5 Y R 6 / 6
6	須長頸壺					1/3	口縁ヨコナデ。内面口縁ヨコナデ。外面に 焼向に使用していた須磨器小破片が埋着。	須磨器フラスコ瓶 N 6 / 0
7						破片	口縁ヨコナデ・波状文。内面口縁ヨコナデ	須磨器 N 4 / 0

第198表 第117号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(替)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第503 図								
8	蓋环7	13.6	12.7	4.4	300	3/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエ→新焼ヨコナデ。	2.5Y R 7/6
9	羽灰蓋	15.9	15.8	3.4		1/2	口縁ヨコナデ。内面口縁ヨコナデ。	消患器2.5Y R 7/1
10	甕环7	11.8	11.3	4.3	200	一薄欠損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→新焼ヨコナデ	2.5Y R 6/6
11	長楕圓5	16.5				1/10	胴部側ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面ヘラオサエ→新焼ヨコナデ。	5Y R 6/3
12	長楕圓5					1/8	胴部側ヘラケズリ→内面ヘラオサエ。	5Y R 6/1

第199表 第118号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(替)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第503 図								
13	蓋环7	14.0	12.4	4.3		1/6	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5Y R 6/8
14	蓋环7	12.9	11.2	4.0		1/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5Y R 8/3
15	蓋环7	12.1	10.0	4.3		1/6	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	10Y R 7/3
16	蓋环7	13.0	11.0	3.0		破片	周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面新焼ヨコナデ。	7.5Y R 8/8
17	有环B4	12.4	10.1	4.6		破片	底面ヘラケズリ→ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5Y R 8/3
18	蓋环7	11.2	9.8	3.5		破片	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面新焼ヨコナデ。	5Y R 6/6
19	蓋环7	9.8	8.8	3.3	160	1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→エビオサエ→口縁部新焼ヨコナデ。内面ヘラオサエ→新焼ヨコナデ。	2.5Y R 5/8
第504 図								
1	有环B4	15.6	14.4	5.5	540	2/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面ヘラオサエ→ヨコナデ。	2.5Y R 5/6
2	有环B4	15.0	13.0	4.5		破片	底面ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ(2段)。内面新焼ヨコナデ(2段)。	7.5Y R 6/2
3	有环B4	12.1	11.0	4.2		破片	周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面新焼ヨコナデ。	7.5Y R 6/2
4	身环7	12.9	13.7	4.5		1/3	周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面新焼ヨコナデ。	5Y R 6/4
5	身环2	15.0				1/4	ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5Y R 7/6
6	袋A1	17.0	16.6	4.1		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ(2段)。内面底面ヘラオサエ。	2.5Y R 5/8
7	體B2	14.3	13.6	2.5		破片	周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→新焼ヨコナデ→放射状増文。	5Y R 7/6
8	體B2	14.5	13.6	2.8		破片	周辺ヘラケズリ→口縁部新焼ヨコナデ。内面底	5Y R 7/6

第200表 第116号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
9	蓋B 2	15.3	15.3	3.0		2/3	部ヘラオサエ→底面ヨコナデ→放射状施文。	7.5YR 8/6
10	蓋B 1	17.8	17.1	3.3		一部欠損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ→放射状施文。	5YR 7/6
11	蓋A 1	19.5	(18.0)	(3.5)			破片 周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR 3/3
12	輪環A	15.8					破片 底面ヘラケズリ。内面放射状施文。	7.5YR 8/4
13	輪環A 2	14.5	(13.0)	(3.0)			破片 周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状施文。	2.5YR 8/8
14	輪環A 2	13.5	12.9	3.5	200	1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ→放射状施文。	5YR 6/8
15	輪環A 2	13.6	12.7	4.0		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ→放射状施文。	5YR 6/8
16	輪環A 2	14.3	(13.6)	(3.0)		1/4	周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状施文。	7.5YR 5/6
17	蓋B 2	17.2	14.8	1.0		1/6	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 3/2
18	輪環A 2	12.9				1/6	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面底面ヘラオサエ→断続ヨコナデ→放射状施文。	7.5YR 8/3
19	輪環A 2	14.3					破片 周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状施文。	2.5YR 8/8
20	輪環A						破片 底面ヘラケズリ。内面放射状施文。	7.5YR 5/6
21	輪環A						破片 底面ヘラケズリ。内面放射状施文。	5YR 5/6
22	長段壺5	21.8				1/4	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面横ヘラオサエ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR 7/3
23	長段壺5	20.6				1/10	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面横ヘラオサエ→ヨコナデ。	5YR 8/3
24	長段壺5	21.6				1/10	胴部縦ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面横ヘラオサエ→ヨコナデ。	2.5YR 6/6
25	長段壺5	17.2				1/6	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面横ヘラオサエ→口縁部ヨコナデ。	5YR 6/6

第201表 第119号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第505 団								
1	盃環蓋					1/2	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	7.5YR 5/4 須磨器
2	盃環身	11.0	(9.1)	(2.9)			破片 ロクロヨコナデ→底面ヘラケズリ。内面ロクロヨコナデ。	10YR 7/1 須磨器
3	盃環7	11.7	11.0	3.4		2/5	周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナ	7.5YR 8/4

第202表 第119号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存量	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
4	丹环7	9.8	10.5	5.3		1/8	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)、内面断続ヨコナデ。	5YR7/8
5	鉢K5	17.3	(16.0)	(8.2)		1/5	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ(2段)、内面断続ヨコナデ。	7.5YR7/8
6	鉢B6	15.2	(16.2)	(8.5)		1/8	周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続 ヨコナデ。	2.5YR5/8
7	須長頸瓶						破片 ロクロヨコナデ・沈箱2突→木端状工具造脱 シヤテ。内面ロクロヨコナデ。	須志器N8/0
8	瓮下器6	19.8	5.5	35.1	4,800	一部欠 損	胴部縦ヘラケズリ・底縁部ヘラケズリ→口縁部 断続ヨコナデ。内面ナデアゲ→ヘラオシヤテ→ 口縁部断続ヨコナデ。	5YR7/4
9	長冠壺5	21.0				1/2	胴部前めヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内 面横ヘラオシヤテ→口縁部断続ヨコナデ。	7.5YR7/4
10	須环蓋						破片 ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須志器5PB6/1
11	須环身	6.5					破片 ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須志器5YR7/4
12	須高頸壺						破片 ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須志器7.5Y6/3
13	須壺						破片 平行線文タタキ。内面同心円文タタキ。	須志器2.5YR6/1

第203表 第120号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存量	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第506図								
1	須环蓋					1/10	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	5Y7/1
2	須長頸瓶					1/5	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	2.5YR7/1
3	甕环7	15.0	14.8	3.0		1/5	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	5YR6/6

第204表 第121号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存量	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第506図								
4	甕环A2	13.1	(12.3)	(3.2)		1/10	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシヤテ→放射状焼文。	5YR
5	甕环A1	12.5	11.9	3.7		1/6	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシヤテ→放射状焼文。	7.5YR4/2
6	甕环A1	12.6	12.0	4.0		1/6	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシヤテ→放射状焼文。	5YR7/8
7	甕环A2	13.6	13.5	4.4		1/7	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシヤテ→放射状焼文。	5YR7/6
8	甕环A1	15.3	14.5	4.2		1/10	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシヤテ→放射状焼文。	7.5YR5/4
9	甕环A2	13.2	11.8	3.3		1/10	底面ヘラケズリ・周面ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。	7.5YR3/1

第205表 第121号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
10	甗環A 2	12.7	12.3	3.6		1/3	ナデ。内面ヘラオシアテ→放射状焼文。 底面ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシアテ→放射状焼文。	5 Y R 7 / 8
11	甗環A 2	13.2	12.4	3.9	300	1/2	底面ヘラケズリ→周辺エビオサエ→1段部ヨコ ナデ。内面ヘラオシアテ→放射状焼文。	内外面黒色焼成 2.5 Y R 4 / 3
12	甗環A 2	14.0	13.4	4.0	280	2/3	底面ヘラケズリ→周辺エビオサエ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシアテ→放射状焼文。	7.5 Y R 7 / 6
13	甗環A 1	14.8	14.5	4.0	200	- 欠欠 粗	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部ヨコ ナデ。内面ヘラオシアテ→放射状焼文。	7.5 Y R 4 / 2

第206表 第123号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成（型）形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 506 団								
14	蓋環 7	11.2	9.3	3.4		1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→1段部断続 ヨコナデ。内面ヘラオサエ→ヨコナデ。	5 Y R 7 / 8
15	蓋環 7	11.0	8.5	4.2		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 3
16	蓋環 7	12.1	10.7	3.5		1/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→1段部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
17	有環B 4	13.1	11.3	4.0		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 8
18	蓋環 7	14.0	13.5	4.4		1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5 Y R 0 / 8
19	蓋環 7	13.1	10.5	4.1		7/10	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面エビオサエ→断続ヨコナデ。	2.5 Y R 6 / 8
20	蓋B 2	16.8				1/10	周辺ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断 続ヨコナデ。	2.5 Y R 6 / 6
21	蓋B 2	15.8				1/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 6
22	甗A 1	19.1	16.2	4.1		1/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→1段部断続 ヨコナデ。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 6
23	蓋B 2	16.5	19.0	2.2		2/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5 Y R 5 / 6
24	甗A 1	21.5		3.4		1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→1段部断続 ヨコナデ。内面エビオサエ→ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6
25	有環B 4	13.0	11.4	4.0		1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 4
26	身環 7	11.4	12.8	4.1		3/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面ヘラオサエ→断続ヨコ ナデ。	2.5 Y R 6 / 6
27	鉢B 6	9.8	11.9	7.0	300	3/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ（2段）。内面ヨコナデ。	内外面黒色焼成 5 Y R 7 / 1
28	甗環A 1	14.8	14.3	4.5		3/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→1段部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ→放射状焼文。	2.5 Y R 6 / 6

第207表 第123号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・或(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
29	甕A 1	16.5	16.4	5.2		3/3	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエーヨコナデ。	内外面黒色焼成 2.5Y R 6/8
30	鉢K 5	13.4	13.7	7.7	600	1/3	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエー新装ヨコナデ。	2.5Y R 5/6
第507図								
1	長筒甕5	22.8				1/2	胴部縦ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ。内面胴部ナデアゲ・口縁部新装ヨコナデ。	7.5Y R 8/4
2	く字甕1	20.5				破片	胴部縦ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ。内面ナデアゲ・口縁部ヨコナデ。	7.5Y R 7/4

第208表 第124号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・或(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第507図								
3	甕A 1	17.1	(13.3)	(3.2)		破片	底部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	10Y R 8/3
4	比坏3	13.2	13.5	3.8	300	4/5	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ。内面ヨコナデ。	比色喪失 5Y R 7/8

第209表 第125号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・或(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第507図								
5	小甕7	9.2		13.4		1/2	胴部縦ヘラケズリ・胴部・底部縦ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエーヨコナデ。	7.5Y R 5/4
6	甕環2	11.0	10.8	3.3	160	1/2	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5Y R 5/8
7	甕環2	13.0	13.5	4.3	320	一部欠損	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエーヨコナデ。	2.5Y R 6/6
8	甕環2	12.0	12.1	3.7	240	一部欠損	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエーヨコナデ。	5Y R 6/4
9	甕環片4	11.2				1/8	周辺ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ(2段)。内面新装ヨコナデ一枚割取片。	10Y R 7/3
10	甕環A 2	14.3	13.3	3.8		4/5	底部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ。内面割取片。	7.5Y R 7/6
11	甕環片4	9.0	8.5	4.0	120	1/2	底部ユビオサエー・口縁部新装ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5Y R 7/6
12	小甕7	11.2				破片	胴部縦ヘラケズリ・口縁部新装ヨコナデ。内面縦ヘラオサエー・口縁部新装ヨコナデ。	7.5Y R 7/6
13	須臾					破片	口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。	須臾器10R 4/1
14	須臾					破片	口縁部ヨコナデ・流状文。内面口縁部ヨコナデ。	須臾器2.5Y R 4/1
15	須臾					破片	口縁部ヨコナデ・流状文。内面口縁部ヨコナデ。	須臾器5PB 5/1
16	須臾					破片	平行線状タタキ。内面同心円文タタキ。	須臾器5Y 7/1

第210表 第126号住居跡出土土器

器号	器種分類	法 量				残存度	下法の特徴・成(変)形の順序	色割・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	高さ	容量			
第507図								
17	青灰B4	12.0	10.0	4.1		破片	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 6/8
18	青灰B4	10.6	9.4	3.4	1	3/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 7/6
19	青灰B4	11.3	9.7	3.6	180	破欠	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	7.5YR 8/3
20	青灰B4	12.5	10.7	3.9	240	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ→断続ヨコナデ。	7.5YR 8/6
21	青灰B4	12.2	11.3	4.5	300	一部欠 破	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	10YR 8/3
22	灰緑E2	10.9	10.4	3.2		1/5	底面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面断続ヨ コナデ。	7.5YR 8/6
23	灰緑E2	13.2	12.8	4.1		1/4	周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨ コナデ。	7.5YR 8/6
24	灰緑A1	12.8	12.7	3.7	220	4/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ→放射状織文。	7.5YR 6/2
25	灰緑A1	15.2	14.3	5.0		1/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ。放射状織文。	5YR 8/8
26	灰緑A1	15.5	14.8	5.6		1/3	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヨコナデ→放射状織文。	5YR 8/6
27	灰緑E2	12.2	10.5	3.7	220	4/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR 8/6
28	灰緑E2	11.7	11.3	3.8	200	完形	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR 7/8
29	灰緑E2	12.6	12.7	3.3		2/5	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続ヨ コナデ。内面ヨコナデ。	5YR 7/6
30	身坏	8.0	9.1	5.1		1/4	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5YR 7/6
第508図								
1	鉢K5	19.8	18.8	6.3	(800)	一部欠 破	底面ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	2.5YR 6/8
2	三角甕6	18.5	2.8	8.5	900	一部欠 破	底面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨ コナデ。	7.5YR 8/6
3	須弥蓋	18.5	13.7	3.2		1/2	口縁ヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須弥蓋N4/3
4	有灰B4	10.8	9.2	3.8	220	2/3	口縁ヨコナデ→底面周面ヘラケズリ。内面ロ クロヨコナデ。	須弥蓋7.5YR 8/2

る。内面はヘラオサエされている。

下底長胴甕6(長下甕6) 長胴でしかも最大径が、胴下半にある下膨れの甕を一括する。外面は縦にヘラケズリをし、胴下半をさらにヘラケズリしている。口縁部が、くの字に近く屈曲し、断続ヨコナデが施されている。内面は、ヘラオサエのあと、ヨコナデが施されている。この系統の甕はこの段階をもって終わるようである。

砲弾形長胴甕5(長砲甕5) 長胴でしかも最大径が、胴上半肩部にある甕を一括する。外面は縦

にヘラケズリをし、底部付近を斜め横に削っている。肩部が斜め縦にヘラケズリされるのが特徴である。口縁部の開きがさらに広くなり、器高も高くなる。口縁部の外反も一段と強くなる。内面はヘラオサエによって作られている。この系統の甕はさらに続く。

古墳時代第Ⅶ期は、生産された土師器をみると、暗文土器・北武藏型土器・壺・くの字口縁甕などの新器種の出現をみる。とくに同時期の須恵器の模倣による、土師器の製作技法の伝習が崩れ、彼らは、新しい器種を製作し出した。土師器全体を構成する器種の転換は、在地内の諸関係に変動があったことを伺わせる。他方で、集落内部の編成も、倉庫群を中心とした集落へ変化し、新たな編成秩序の存在を伺わせる。

(7) そのほかの古墳時代の遺物

1 土壌と出土土器

古墳時代の土壌と明確にいえものは、第18号土壌を除いてない。他の土壌からは、古墳時代の遺物は出土しているが、覆土の状態等から、はたしてこの時代のものか疑わしい。

第18号土壌は、第123号住居跡に南西に隣接して確認された長方形の土壌で、豊富な出土遺物がある。大きさは、150×350×20cmで、覆土は、暗褐色の粘質土であった。出土した遺物は、第509図に示すように、有段口縁杯・坏蓋模倣杯・大形筒抜け甕・長胴甕など、一般の住居跡から出土する遺物と変わらない器種が出土している。時期的には、古墳時代第Ⅴ期に併行すると思われる。なお把手付甕の片方の把手は、欠損している。

他には、土壌出土の遺物として杯・鉢・高坏等がみられる。また509-1は、須恵器横瓶の側面部の可能性もある。

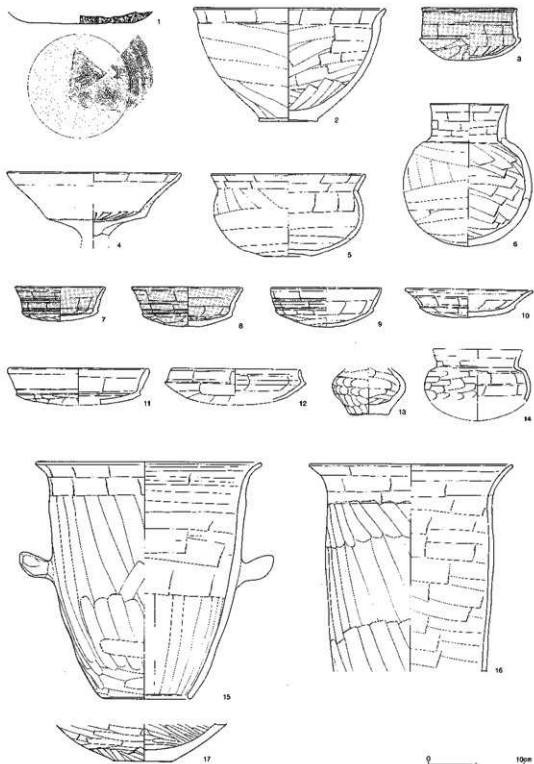
2 溝と出土土器

第10号溝から出土した遺物は、有段口縁杯・暗文土器・須恵器横瓶など、古墳時代第Ⅶ期に位置付けられる遺物が出土している。これらは、全て第10号溝と、第11・12・13号溝が重複するところから出土しており、果たしてどの溝と関係した遺物であるか、調査時の所見では分からなかった。しかしこれらが近世の開削である可能性を残しつつも、7世紀代であった可能性も捨て切れない。この地域が開発が、7世紀後半まで遅り、導水のための溝の掘削をおこなっていた可能性を残しておきたい。

3 河川跡と出土土器

集落の北側には、自然堤防の縁辺にそって、河川跡が確認できる。この河川跡は、同一の幅で流れていたのではなく、所々蛇行し、後背湿地や三日月湖あるいは、数々の沼沢を抱えていたと考えられる。河川跡の埋没堆積層中の出土遺物から、古墳時代前期から、ほぼ古墳時代いっぱい、河川として通水があったらしい。

この河川跡は、西からみると南西から北東にむかって流れ、本郷前東の自然堤防を迂回し、北西から南東に向かって流れる。再び新屋敷東で北東に向きを変え、新田裏の北を通っていく。小山川



第 509 图 土壤出土遺物

第211表 土壌出土土器

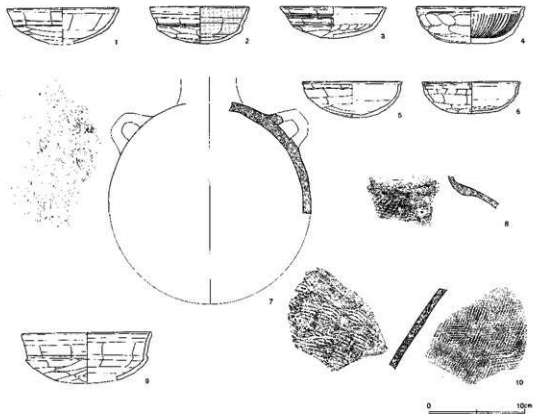
番号	器種分類	法 景				残存数	手法の特徴・痕(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第509図								
1						破片	ロクロコナダ→カキメ。内面ロクロコナダ 接痕の裡部部の可能性がある。	須恵器5PB7/1 B区10号土壌
2		20.3	8.0	11.0	2,000	2/3	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ。内面ヘラオサエ→断続コナダ。	5YR6/6 C区39号土壌
3		10.2	10.8	5.6		完形	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ(2段)。内面断続コナダ。	内外面黒色処理7.5YR7/4 C区49号土壌
4		18.5	10.5			1/2	コナダ。内面ヘラオサエ→断続コナダ。	C区35号土壌5YR7/8
5		16.4	4.8	8.3	1,200	1/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ。内面断続コナダ。	C区39号土壌2.5YR8/6
6		8.3		15.0	1,000	4/5	胴部縦ヘラケズリ→胴下部横ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ(3段)。内面ヘラオサエ→断続 コナダ。	C区1号土壌5YR6/8
7		9.6	8.1	3.7	120	一部欠 損	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ(2段)。内面断続コナダ。	内外面黒色処理7.5YR8/4 C区2区1号土壌
8		11.7	9.6	4.2	240	4/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ(2段)。内面ユビオサエ→断続コナ ダ。	内外面黒色処理7.5YR8/4 C区2区1号土壌
9		11.7	10.4	4.3	200	1/2	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ(2段)。内面断続コナダ。	5YR7/6 C区2区1号土壌
10		13.5	10.2	3.0	180	完形	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ。内面断続コナダ。	2.5YR6/8 C区2区1号土壌
11		14.2				1/4	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ。内面断続コナダ。	2.5YR7/3 C区2区1号土壌
12		13.5	14.9			1/5	底面ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ→口縁部断続 コナダ。内面断続コナダ。	3YR6/6 C区2区1号土壌
13				4.0		完形	胴部ユビオサエ。内面ユビオサエ。	C区35号土壌2.5YR8/8
14		9.5	9.1	7.5		破片	胴部横ヘラケズリ→口縁部断続コナダ。内面 コナダ。	5YR6/8 C区2区1号土壌
15		23.9	9.3	25.0	4,900	一部欠 損	胴部縦ヘラケズリ→胴部横ヘラケズリ→把手ユ ビオサエ→口縁部断続コナダ。内面ナテアゲ →ヘラオサエ→コナダ。	5YR7/8 C区2区1号土壌
16		21.5				1/4	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断続コナダ。内面 ヘラオサエ→コナダ。	7.5YR7/3 C区2区1号土壌
17			9.2			破片	細かなヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	C区2区1号土壌2.5YR7/6

あるいは、福川の旧流路であった可能性がある。

古墳時代前期では、S字状口縁付甕や複合口縁甕等が出土している。集落の存在は、今のところ確認されていないが、その可能性を肯定する資料である。

続く段階には、東日本では珍しい須恵器樽形甕を始めとして、口縁部に波状文の残る長頸壺、あるいは土師器の坏頸類がみられる。この段階が新屋敷東遺跡では、古墳時代の集落が開始された段階である。その段階に須恵器樽形甕が、存在していたことは、特筆すべき事柄であろう。

さらに次の段階は、須恵器坏壺模倣坏の段階である。水中に近い状態で保存されていた土器であ



第 510 図 溝出土遺物

るために、保存状態が大変良好で、断続ヨコナデや、底部のヘラケズリが明瞭に読み取ることができた。ただし煮沸用の土器はその限りではなく、摩滅が激しいものも含まれていた。

土師器が明確につかめるのは、次の有段口縁杯の段階までである。とくに有段口縁杯でも大振りの製品、段の数が多い杯Aが主体をしめる古墳時代第IV期の製品、これがこの河川の通水していた古墳時代の最終段階を示すのであろうか。

このほかに、土師器の大甕や壺などが出土している。また須恵器の大形壺も出土している。

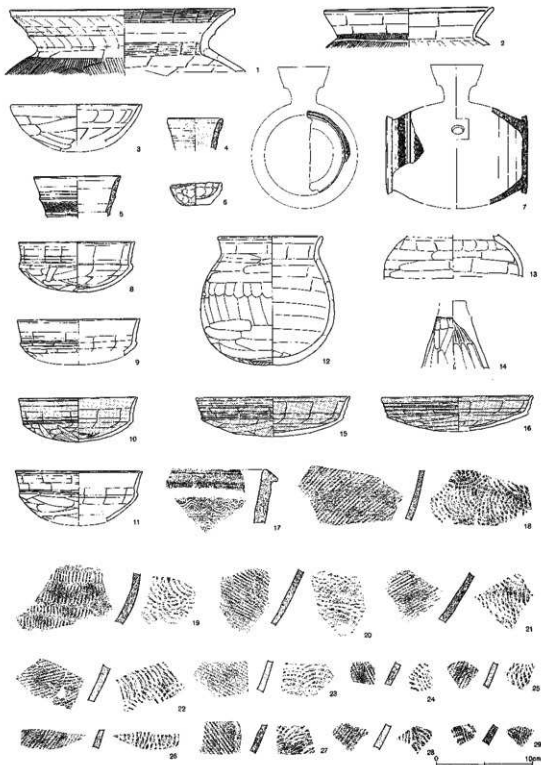
さらに出土位置は明確ではないが、中層中から手捏ねのコップ形土器が4点出土している。この形態の土器は、いわゆる祭祀遺跡と呼ばれるところから出土する例が多い。

第212表 第14号溝跡出土土器

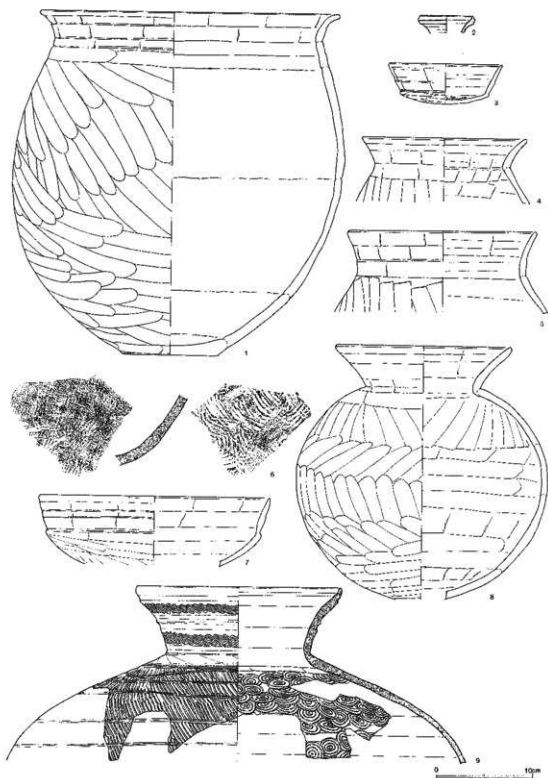
番号	器種分類	法 量				保存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第510図								
1		11.7	10.0	3.9		1/3	底部ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR6/8
2		10.5	9.2	3.9	180	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	内外両黒色処理 2.5YR6/8
3		10.3	9.0	3.4		一部欠 損	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ(2段)。内面スピオサエ。	7.3YR7/6
4		11.5	11.4	3.9	220	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ→放射状施文。	2.5YR6/8
5		10.5	10.3	3.8	200	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR5/6
6		10.4	10.0	3.4		2/3	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部ヨコ ナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR6/8
7						破片	口縁ヨコナデ→カキメ。内面口縁ヨコナデ	須恵器N4/0
8						破片	口縁ヨコナデ→カキメ。内面口縁ヨコナデ	須恵器N5/0
9		13.8	(13.0)	(5.3)		1/4	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR7/4
10						破片	平行線文タタキ。内面同心円文タタキ。	須恵器N5/0

第213表 河川跡出土土器①

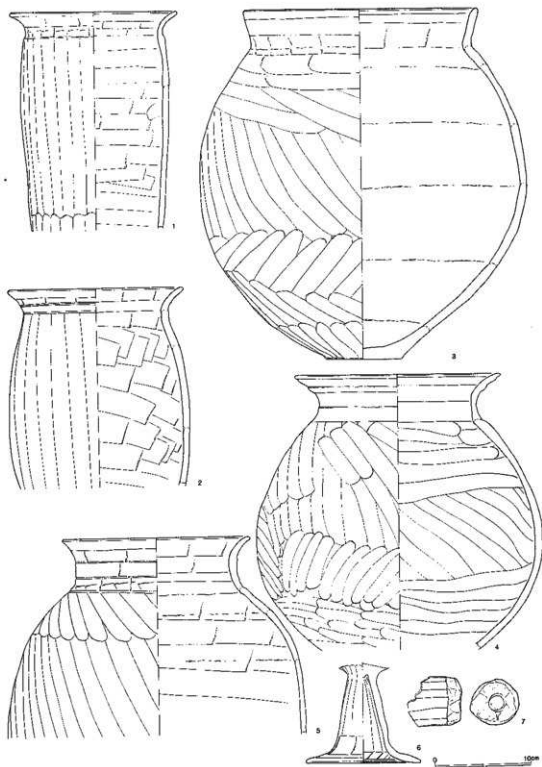
番号	器種分類	法 量				保存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第511図								
1		23.8				1/10	胴部縦ハケメ→口縁部ハケメナデアゲ→ヨコナ デ(刷り消し)。内面ヘラオサエ→横ハケメ。	2.5YR7/6 黒下層出土
2		16.0				破片	胴部縦ハケメ→口縁部ヨコナデ。内面ナデアゲ →ヨコナデ。	5YR7/3 黒下層出土
3		13.8	(13.1)	(5.0)		破片	底面ヘラケズリー→ヨコナデ。内面ヘラオサエ→ 断続ヨコナデ。	5YR7/6 黒下層出土
4		5.7				破片	口縁ヨコナデ。内面口縁ヨコナデ。自然焼。	須恵器。下層出土7.5Y6/2
5		0.2				破片	口縁ヨコナデ→沈線→波状文→凸線の上にヘラ で区画。内面口縁ヨコナデ。自然焼。	須恵器。下層出土5B4/1 下層出土
6		5.5	3.0	2.3	20	完形	手捏ね。外面に磨削した跡が付着。トリベカ	下層出土2.5YR6/4
7						破片	口縁ヨコナデ→沈線区画→波状文。内面口 縁ヨコナデ。	須恵器5PB5/1 下層出土
8		12.3	12.1	5.2	380	完形	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	5YR7/8 下層出土
9		12.0	12.4	4.8		3/5	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR6/8 下層出土
10		12.8	11.7	4.6		破片	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面ヘラオサエ→断続ヨコナデ。	内外両黒色処理5YR17/1 下層出土
11		13.4	12.5	5.8		破片	底面ヘラケズリー→周辺ヘラケズリー→口縁部断続 ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	5YR6/6 下層出土
12		11.1	5.0	13.5	800	5/6	胴部縦ハケズリー→胴下半横ヘラケズリー→胴部	2.5YR6/8



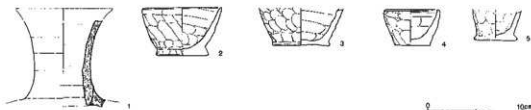
第 511 図 河川跡出土遺物(1)



第 512 圖 河川跡出土遺物(2)



第 513 図 河川跡出土遺物(3)



第 514 図 河川跡出土遺物(4)

第 214 表 河川跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存数	手法の特徴・成(型)形の題序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	口径	器高	容量			
13						1/3	横ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ・ヨコナデ・断続ヨコナデ。	下層出土
14					480	1/5	横ヘラケズリ。内面コビオサエ・断続ヨコナデ。	下層出土 5 Y R 6 / 6
15		16.4	15.1	4.1	480	4/5	縦ヘラケズリ。内面ナデ。	下層出土 5 Y R 6 / 4
16		16.1	(15.0)	(3.7)			縦部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ(3段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 6 / 8 中層出土
17							縦部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ(3段)。内面断続ヨコナデ。	内外面黒色処理 5 Y R 3 / 1 中層出土
18							ロクロヨコナデ・波状文。内面ロクロヨコナデ	須恵器。中層出土 5 B 4 / 1
19							平行線状タタキ。内面同心円文タタキ。全て同一器体と考えられるが、接合点なし。	須恵器 N 8 / 0
20								中層出土
第 512 図								
1		30.7	10.3	35.0	17,500	1/2	縦部縦ヘラケズリ・縦部斜めヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面横ヨコナデ・口縁部断続ヨコナデ。	10 Y R 7 / 4 徳間山 B 粘土層直下
2		5.1	6.1				ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器。中層出土 5 G Y 5 / 1
3		11.9		4.2			縦部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヘラオサエ・ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 3 中層出土
4		17.3					縦部縦ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 4 中層出土
5		19.9					縦部縦ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 3 中層出土
6							平行線状タタキ。内面同心円文タタキ。	須恵器。中層出土 5 Y 6 / 1
7		24.4					縦部ヘラケズリ・周辺ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ(2段)。内面ヨコナデ。	7.5 Y 8 / 2 中層出土
8		18.5				1/3	縦部縦ヘラケズリ・縦部横ヘラケズリ・縦部横ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ・ナデアゲ・ヨコナデ。	7.5 Y R 8 / 3 下層出土
9		21.6					平行線文タタキ・カキメ(4本一組5単位)・口縁部ロクロヨコナデ・虎脚2条一波状文2条。内面同心円文タタキ・口縁部ロクロヨコナデ。	5 P B 7 / 1 中層出土
第 513 図								
1		17.7					縦部縦ヘラケズリ・口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ・口縁部断続ヨコナデ。	10 Y R 8 / 3 中層出土

第215表 河川跡出土土器④

番号	器種分類	法 量				成存度	手法の特徴・或(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口徑	底径	器高	容量			
2		18.5				3/4	胴部縦ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヘラオサエ→口縁部断続ヨコナデ。	5YR7/4 中層出土
3		24.7	8.0	37.0	18,000	1/2	胴部縦ヘラケズリ→側下半斜めヘラケズリ→肩部横ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR7/4 中層出土
4		21.8				1/3	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ→口縁部ヨコナデ。	7.5YR8/3 中層出土
5		19.8				破片	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヘラオサエ→口縁部ヨコナデ。	7.5YR1/4 中層出土
6						破片	縦ヘラケズリ→肩部断続ヨコナデ。内面ヘラケズリ→肩部断続ヨコナデ。	5YR9/6 中層出土
第514図								
1						1/10	口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。	須恵器。中層出土,N8/0
2		8.4	5.4	5.0	140	2/3	手捏ね→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	中層出土,7.5YR8/3
3			5.9			1/6	手捏ね→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	中層出土,7.5YR8/4
4		5.7	3.8	3.8	50	3/4	手捏ね→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	中層出土,7.5YR8/2
5			4.2			3/4	手捏ね→口縁部断続ヨコナデ。内面ヨコナデ。	中層出土,7.5YR8/3

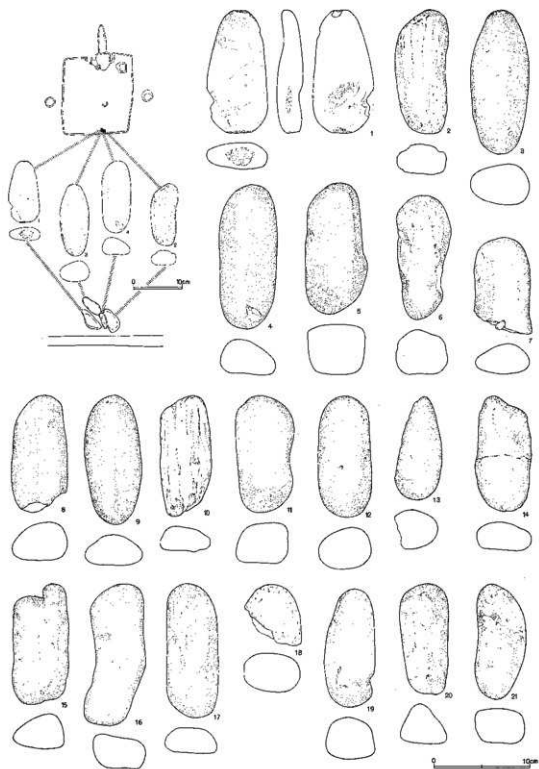
(8) 遺物各説 —古墳時代第Ⅶ期の編物石—

第123・156・118・115・117・130・119・125号住居跡で、数点ずつ編物石が出土している。とくに第123号住居跡では、出土位置が明確に分かっている。また第123・156・118・115・119号住居跡では、3～11点のまとまった編物石が出土している。

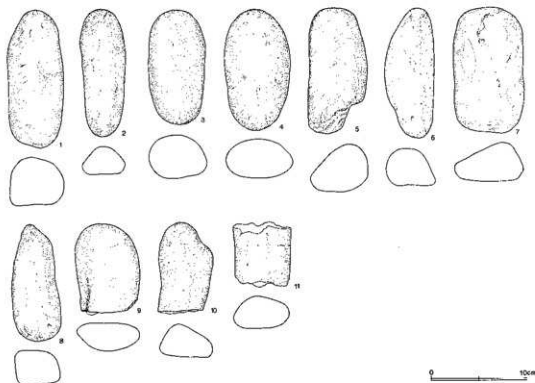
第123号住居跡では、出土状態が明瞭で、カマドと反対側の壁中央に、4点の編物石が重なりあうようにして確認されている。第98号住居跡の出土例と同様の出土状態である。壁周溝の中に落ち込むようにして発見され、編物石の片付けられ方を考えるうえで貴重な資料である。

このほか編物石はあるが、欠損部が多く、重量等の比較が難しい。ただしこの欠損したままの状態で使用していた可能性もある。

古墳時代第Ⅶ期の竪穴式住居跡から編物石が、出土する例は決して多いとは言えない。これは、集落内部の編成秩序の変化に伴い、集落内外の分業のあったことを示すのであろうか。そのまえにこの編物石によって生産される製品は、果たしてこうした分業といった形態を採るのであろうか。



第 515 図 古墳時代第Ⅷ期の紡物石(1)



第516図 古墳時代第Ⅷ期の編物石(2)

第216表 古墳時代第Ⅷ期の編物石

番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等	番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等
第515図						17	S J 118	148	55	380	安山岩
1	S J 123	130	64	295	安山岩	18	S J 118	—	—	—	安山岩
2	S J 123	—	—	—	緑泥石片岩	19	S J 115	125	53	415	安山岩
3	S J 123	—	—	—	安山岩	20	S J 115	116	50	325	安山岩
4	S J 156	—	—	—	安山岩	21	S J 115	120	51	320	安山岩
5	S J 156	—	—	—	安山岩	第516図					
6	S J 156	—	—	—	安山岩	1	S J 117	144	59	755	安山岩
7	S J 156	—	—	—	安山岩	2	S J 130	134	45	310	安山岩
8	S J 156	—	—	—	安山岩	3	S J 119	—	—	—	安山岩
9	S J 156	136	59	355	安山岩	4	S J 119	—	—	—	安山岩
10	S J 156	—	—	—	緑泥石片岩	5	S J 119	—	—	—	緑泥石片岩
11	S J 156	—	—	—	安山岩	6	S J 119	125	53	365	安山岩
12	S J 156	—	—	—	安山岩	7	S J 119	—	—	—	安山岩
13	S J 156	—	—	—	安山岩	8	S J 119	122	49	355	安山岩
14	S J 156	—	—	—	安山岩	9	S J 119	—	—	—	安山岩
15	S J 156	—	—	—	安山岩	10	S J 119	—	—	—	安山岩
16	S J 118	—	—	—	安山岩	11	S J 125	—	—	—	安山岩

環A 口縁部で一旦内側に屈曲し、再度外反する境形に近い器形である。暗文の施文は、放射状暗文のみ。他の文様は、僅例を除き施されていない。口縁部の表出手法によって4類に分けて考えられる。環A₁一旦内側に屈曲し、再度外湾する際に、口縁部内側に沈線を施す。口縁部のナデは、明瞭な線を残す。口径：底径比は、1：0.35前後を示す。環A₂内側への屈曲度は少なく、外反する際の沈線は、施されなくなる。外縁は不明瞭となる。口縁部の立上がりが短くなり、S字状となる。口径：底径比は、1：0.30前後を示す。環A₃口縁部の屈曲は、さらに少なく、口縁部内面のみでは、環Bとほとんど差がない。外縁は消滅する。口径：底径比は、1：0.25前後を示す。環A₄ほとんど初期の形態を留めないほど口縁部は水平化し、口縁部と底部の差は痕跡程度になる。口径：底径比は、1：0.20前後を示す。

環B 口縁部は、変化の少ない票口縁で、窠形に近い器形である。暗文の施文は、放射状暗文のみ、他の文様は施されていない。口縁部の表出手法の変化は少ないが、全体の特長から3類に分けて考えられる。環B₁口縁部が大きく内湾し、口縁部で内側に面をもち、外方へ小さく引き上げている。口縁部をきわめて丁寧に作りあげるのが特長である。口径：底径比は、環Aと同様である。環B₂口縁部は内湾するのだが、精密さが薄れ、返りも少ない。外方への引き上げは、不明瞭である。口径：底径比は、環Aと同様である。環B₃口縁部の返りは、外面からは目立たず、内面が僅かな断面三角形状となるにすぎない。口径：底径比は、環Aと同様である。

環C 口縁部でつきつ屈曲する境形の器形である。暗文の施文は、口縁内面のみ放射状暗文が施されるタイプと、これに加え口縁外面にも平行線暗文を施す二つのタイプがある。環C₁口縁部は、内面に一旦屈曲した後、小さく外方に突き出る形態。環C₂口縁部は、内面が一旦屈曲せずに、小さく外方に突き出る形態。口縁の内湾化の傾向は、緩くなる。環C₃口縁部は、緩く外方に突き出るだけとなる。外面に平行暗文が、施される製品が登場する。形態的には、環B₁に近い製品となっていく。

*環A・環B・環Cともに深めの製品から、浅めの製品への扁平化が、変化の方向性として設定できる。暗文の施文については、内面中央部の施文が少なくなっていく傾向がある。

環D 浅い環形の器形で、口縁部が小さく外反する。暗文の施文は、放射状暗文と螺線状暗文が施される。施文順序は、放射状→螺線状の順である。環D₁口縁部の屈曲は、小さく明瞭に残っている。放射状暗文は、中心部まで施され、これに螺線状暗文が施される。口縁部のヨコナデが長い。環D₂口縁部の屈曲は、緩く残るのみである。放射状暗文は、中心部には施されなくなり、螺線状暗文がこれに加わる。平底ぎみとなる。

環E 底部は平底で、緩く内湾しながら口縁部が立上がる。内面は、放射状暗文と螺線状暗文が施されている。底部と口縁部の境が明瞭。

環F 口縁部が丸くなり、内面は緩い沈線状となる。器高の低い環状の器形である。

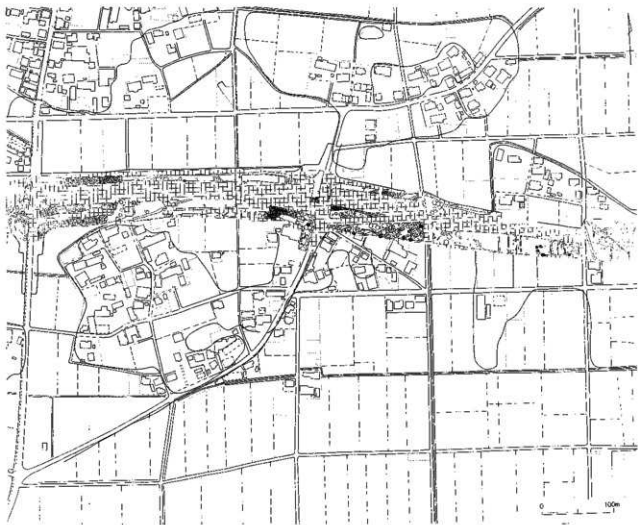
鉢 鉢として定型化した形態の器形はない。環類の大形の製品をここでは鉢とする。

高杯 小形の高杯で、環A₁を環部とし、小さな脚部を残す高杯である。杯内面に放射状暗文が、施されている。口縁部は、緩く屈曲する。

盤A 口縁部の立上がりが小さく、深め皿状の器形を指す。暗文の施文は、放射状暗文が施されるに過ぎない。盤A₁口縁部が底部から独立し、高く作られている。口縁部は、環A₁類と同様の作りが見られる。放射状暗文が、中心部から明瞭に施文されている。盤A₂口縁部は短くなり、「S」あるいは「N」字状となる。放射状暗文が中心部には、見られなくなっている。盤A₃口縁部と底部の区分は付けにくい。暗文は、不規則・疎となっている。

盤B 口縁部の立上がりが小さく、浅めの皿形の器形をさす。暗文の施文は、放射状暗文が施されるに過ぎない。盤B₁・盤B₂・盤B₃は、盤Aと同様の変化の方向性を示す。

(田中 1991より抜粋)



第 517 図 奈良・平安時代の新屋敷東遺跡

9 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の概観

奈良時代も終りになると、集落の北側を流れていた河川が、堆積のスピードを増し、流路を埋没させる。この埋没が、新屋敷東遺跡の解体を生み、7世紀後葉に大規模な獨立柱建物跡群を構築したあと、一旦集落の編成がみられなくなる。再び集落が息を吹き返すのは、平安時代に入ってからである。7～8棟前後で一単位群を構成し、まま獨立柱建物をその編成に組み込む。

食膳具は、土師器と須恵器の比率が、50%近くになり、須恵器の供給が一般的になっていた。とくに寄居町末野窯跡群からの製品が大量に見られ、さらに南比企窯跡群からの製品も、まま見受けられる。煮沸具には、依然として土師器の甕が用いられ、形骸化したカマドで使われていた。

承和元(834)年二月、播磨郡の荒廃田123町が、冷然院に寄せられる。古代的開発が変容していくなかで、新たに河川跡を水田として復興し、集落をこの地に選択したのが、この遺跡である。

■集落の構成 確認された遺構は、竪穴式住居跡14軒である。大きく3つの単位群に分けて考えることができる。東群は、第145～150号住居跡。中央群は、第151～157号住居跡。西群は、第158号住居跡から構成されている。西群を除き7・8棟で構成されている。第103号住居跡が、掘立柱建物跡と重複しており、少なくともこの竪穴式住居跡の構築段階には、すでに掘立柱建物群は、廃絶していたと考えられる。

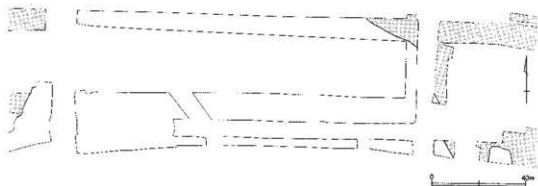
集落の北側は、かつて河川であったところが埋まり、黒色土が堆積し、水田となっている。この水田跡、最上層直上に浅間山天仁元年噴出のB軽石が堆積している。平安時代後期までは確実に水田経営の痕跡を見ることができる。ただしこの河川跡以外の場所では、B軽石層はおろか、水田の床土層すらも確認することはできなかった。

■竪穴式住居 遺構の重複関係の最も上段に在るため、他の遺構による破壊は免れている。完備できた住居跡は多い。竪穴式住居跡の平面形態、及び規模によって、三つのタイプの抽出が可能である。①大形の竪穴式住居（155・156）②長方形の竪穴式住居（152・153・154・158）③小形の竪穴式住居（145・146・147・148・149・150・151・157）である。竪穴式住居跡は、全体的に小形化・形骸化し、不正形の掘り込みをもつものが多くなる。さらに第153号住居跡のように壁外に柱穴をもつものも現われた。

■カマド カマドを調査した住居跡は、11軒に及び、短煙道・長煙道のカマドともに確認されている。ただしカマドの構造が形骸化し、両者の中間的タイプのカマドもある。短煙道は、第155・156・158号住居跡で確認されている。長煙道は、第145・146・147・148・150・152・153・154号住居跡で確認されている。圧倒的に長煙道が多い。

カマドの構築補強材として、甕を使用した例は、第152号住居跡に見られたのみである。また第145号住居跡のカマドでは、土師器の坏4枚を重ねて支脚として使用し、この上に甕を載せた状態で確認されている。

■煮沸具 煮沸具は、甕が基本的な組成の中心を成す。第158号住居跡のように、甕と併用される場合もままあったと思われる。甕は、口縁部が大振り、緩く胴が張り、細い底部へと続く。第149号住居跡の甕は、胴下半が劣化して、器壁の色調が、淡化したものである。



第518図 奈良・平安時代の遺構全体図(1)

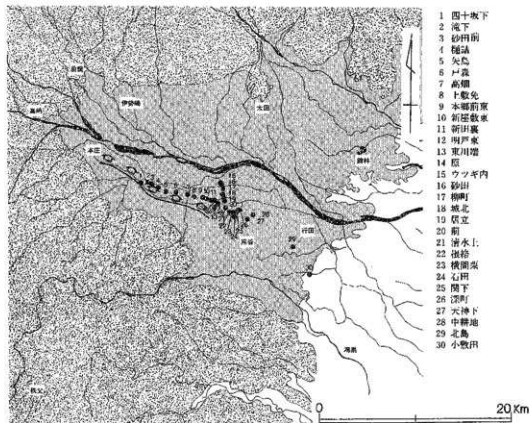
また第157号住居跡からは、台付甕が1点出土している。容量は少ないが、台付甕を使った煮沸調理が、この段階にあったことを示す。

食膳具 土師器の坏は、ユビオサエで成形したあと底部をヘラケズリしたもの、須恵器を模倣したものがある。また須恵器の坏には、灰釉陶器を模倣したものがあり、食膳具の形態に大変バラエティーがみられる。須恵器が、土師器と均衡する程度に集落の食膳具に入っていたことは、両者の流通を考えると興味深いことである。

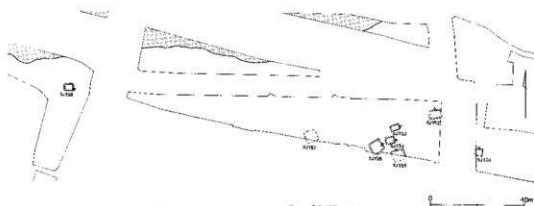
貯蔵具 明解な貯蔵具はみられないが、須恵器の長頸瓶・壺の破片資料が出土している。

須恵器 煮沸具を除いた器物広範に須恵器がみられる。製品も寄居町末野窯跡群や南比企窯跡群で生産されたものが、集落の雑器として使用されていた。

編物石 編物石は、第152号住居跡からのみ、まとまった形で出土している。他は、まばらな出土である。



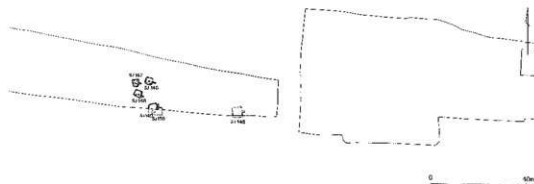
第519図 北武蔵の噴砂を確認した遺跡



第 520 図 奈良・平安時代の遺構全体図(2)

第218表 奈良・平安時代住居跡一覧

No	住居跡規模				カマ				竪穴		備考	
	長軸長さ	短軸長さ	掘込深さ	形態	煙道長さ	煙道幅	右軸長さ	左軸長さ	形態	幅		深さ
145	3.42		3.42	長方形					C型	2.50		コ-232
146	3.27	2.50	0.12	長方形	1.27	0.21	0.49	0.49	C型			テ-238
147	3.15	2.45	1.16	正方形	1.27	0.60			C型			チ-239
148	3.29	2.75	0.20	長方形	1.17	0.28	0.59	0.64	C型			テ-244
149	3.54		4.49	長方形					B型			エ-237
150	3.30		0.50	長方形								エ-237
151				長方形								キ-262
152	5.07	3.37	0.28	長方形	0.82	0.37	0.63	0.70	C型	3.60		1-195
153	3.90	2.92	0.10	長方形	1.25	3.40			B型			メ-268
154	4.00	2.72	0.06	長方形	1.02	0.26	0.27		C型			メ-268
155	3.20		0.50	正方形								キ-268
156	4.00	4.72	0.30	長方形	0.74	0.79			A型			メ-269
157	5.07		0.26	長方形								メ-291
158	3.92	3.33	0.26	長方形	0.95	0.84			A型	2.90	2.50	エ-291

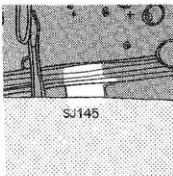


第 521 図 奈良・平安時代の遺構全体図(3)

(2) 遺構各説 一遺構構築段階一

第145号住居跡（調査時C区1号住居跡）

コー232グリッドに位置する。重複関係は、第3号溝よりも古い。南側が調査区域外、北側がこの溝によって切られており、残存状態はけっして良くない。住居跡の規模は、長軸3.42m、短軸——mを測る。掘り込みの深さは、42cmである。壁周溝・柱穴は確認されなかった。カマドの右側に貯蔵穴が確認されている。円形の比較的大きな貯蔵穴で、やや浅めである。



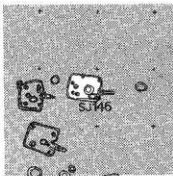
第522図 位置図

カマドは、東辺に確認され、軸はほとんど残っていない。煙道はやや長い。燃焼部は箱形である。燃焼部から煙道へかけては、やや緩く立上がっている。

出土遺物は、土師器杯・壺などがある。

第146号住居跡（調査時C区4号住居跡）

テー238グリッドに位置する。重複関係はみられない。ほとんど完掘に近く調査できた数少ない例である。住居跡の規模は、長軸3.27m、短軸2.50mを測る。掘り込みの深さは12cmである。壁周溝は、みられない。柱穴は、7本床面にみられるが、この住居跡とどのように関わるかは疑問が残る。カマドの右に貯蔵穴状の落ち込みがみられるが、かならずしも所謂貯蔵穴といえるか疑問である。住居跡の中央には、円形の緩い落ち込みが確認されている。



第523図 位置図

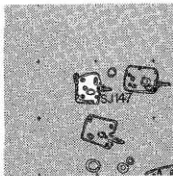
カマドは、東辺に接し、右よりに構築されている。左右の軸は、地山掘り残して短く造られ、壁外へ軸の長さの2倍ほど煙道が延びる。燃焼部には、焼土と炭化物の堆積層があり、円形に掘り込まれている。煙道は細長く造られ、煙り出し穴に続く。

覆土が、地山の堆積層と近似し検出が困難であった。

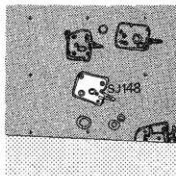
出土遺物は、土師器杯・甕・須器杯などがある。

第147号住居跡（調査時C区6号住居跡）

テー239グリッドに位置する。重複関係は、みられない。住居跡の規模は、長軸3.15m、短軸2.45m。掘り込みの深さ16cm。壁周溝は、南と北壁の一部分に確認されているに過ぎない。柱穴は、4本等間隔に確認され、この住居跡を支えるに足ると思われる。住居跡の中央には、緩い大きな落ち込みが確認



第524図 位置図

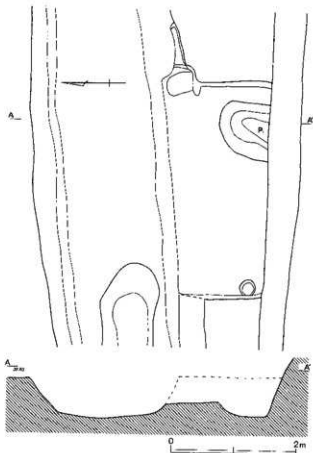


第 525 図 位置図

されている。

カマドは、東辺ほぼ中央に確認されている。短かな袖は、造りつけで、痕跡程度しか残っていない。燃焼部は、箱形でやや深く掘り込まれている。燃焼部から煙道にかけて、緩く造られる。煙道部は、細長く造られている。先端が鋭利に造られ、煙り出し構造はわからない。

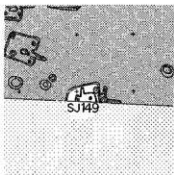
出土遺物は、土師器坏がある。



第148号住居跡

(調査時C区5号住居跡)

テ-239グリッドに位置する。重複関係は、みられない。住居跡の規模は、長軸3.20m、短軸2.75mを測る。掘り込みの深さは、20cmである。壁周溝は、巡っていない。柱穴は、4本確認されている。4本は、等間隔に確認されている。住居跡の中央には緩い落ち込みがある。



第 527 図 位置図

第 526 図 第 145 号住居跡

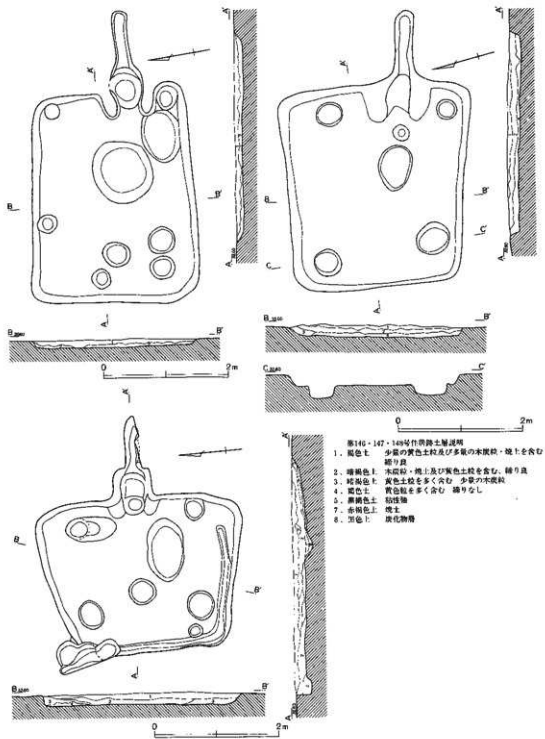
カマドは、東辺右により構築されている。左右の袖は、造りつけで構築されていたらしく、その痕跡程度しか残っていない。煙道は、細長く造られており、袖の長さの1.5倍程度である。燃焼部は狭く、やや箱形である。

重複遺構も少なく、比較的順調に調査できた。

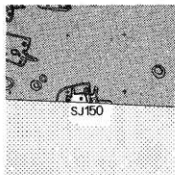
第148号住居跡に伴う出土遺物は、土師器坏・甕・須恵器坏高台付長頸壺など良好なセットがある。

第149号住居跡 (調査時C区3号住居跡)

エ-237グリッドに位置する。重複関係は、第150号住居跡よ



第 528 図 第146・147・148号住居跡



第529図 位置図

遺構の確認は、調査区域の際であることと、重複関係から困難を極めた。

第149号住居跡に伴う出土遺物は、土師器甕・須恵器坏である。

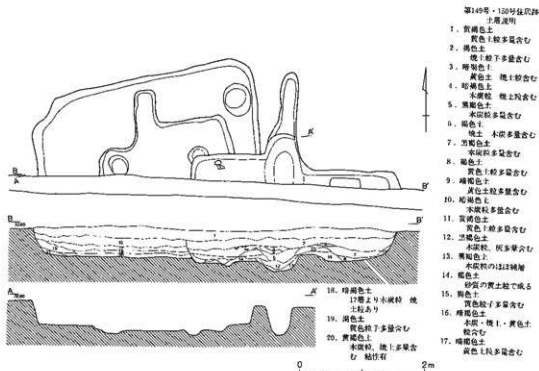
りも古い。規模は、長軸3.54m、短軸—mを測る。掘り込みの深さは49cmである。壁周溝は、確認されていない。柱穴は、2本確認されている。掘り方状に住居跡の周囲が、掘り残されている。ただし明瞭な掘り込みではなく、緩い傾斜によって構成されている。北東隅に貯蔵穴状の落ち込みがある。円形の浅い落ち込みである。

カマドは、北辺左よりに掘り方の部分のみが確認されており、煙道部のみがごく僅かに残る程度である。燃焼部に関しては良くわかっていない。煙道部は、壁よりも外に出ておらず、はたしてカマドであったか疑わしい。

第150号住居跡（調査時C区2号住居跡）

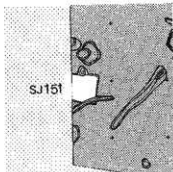
エー237グリッドに位置する。重複関係は、第149号住居跡より新しい。規模は、長軸3.30m、短軸—m。掘り込みの深さは、50cmである。壁周溝・柱穴は、確認されていない。

カマドは、北辺左側に確認されている。煙道部分が長く造られ、燃焼部は、円形の掘り込み状で



第530図 第149・150号住居跡

ある。燃焼部から煙道へは、緩い段をもって構成されている。
第150号住居跡に伴う出土遺物は、土師器甕である。



第 531 図 位置図

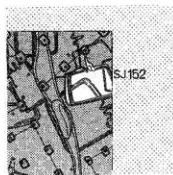
第151号住居跡（調査時C区第53・55号土壇）

キー262グリッドに位置する。重複関係は、みられない。住居跡の規模は、不明である。土壇状に掘り込まれた部分は、貯蔵穴とおもわれる。壁周溝・柱穴は、確認されていない。

カマドも確認されていない。

覆土は地山と全く区別がつかず、遺構の確認は困難を極めた。

第151号住居跡の出土遺物は、土師器環・皿・須恵器環などがある。



第 532 図 位置図

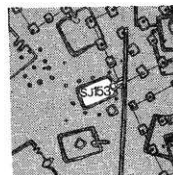
第152号住居跡（調査時C2区9号住居跡）

ミー265グリッドに位置する。重複関係は、第5・31・62号住居跡よりも新しい。住居跡の規模は、長軸5.07m、短軸3.37m。掘り込みの深さは、28cmである。壁周溝は、確認部分には見ることができた。壁周溝の外側には、棚状の部分が確認されている。西側と、北側のみである。柱穴は、確認されていない。貯蔵穴が、カマドの左側に確認できた。

カマドは、北辺右よりに確認されやや住居跡の軸に対して西にずれている。燃焼部は大きく箱形に掘り込まれ、火床は深く掘り込まれている。袖は地山掘り残して造られ、先端には甕が転倒し、袖心材として据えられている。袖の長さと同じ程度の煙道が残り、その先端には煙り出し穴が円形に造られている。焚き口部は深く掘り込まれており、燃焼部との境が不明瞭である。燃焼部から煙道へは、高い段をもって構成されている。

重複遺構の激しい部分なので、調査は難行した。

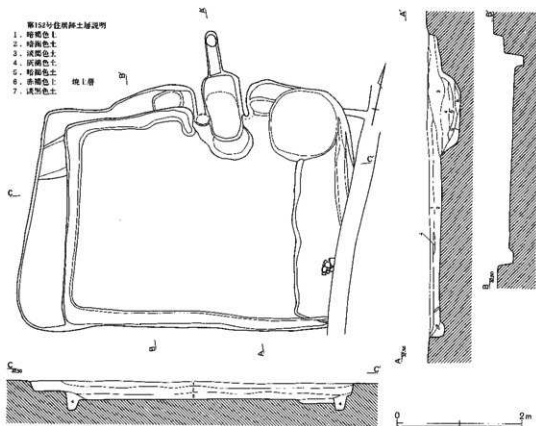
第152号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・甕・須恵器環壺である。



第 533 図 位置図

第153号住居跡（調査時C2区4号住居跡）

メー268グリッドに位置する。重複関係は、第2号掘立柱建物跡の柱穴を破壊して、カマドの煙道が構築されている。全体のプランは、良好に検出された。住居跡の規模は、長軸3.90m、短軸2.92mを測る。掘り込みの深さは、10cmである。壁周溝は、カマド部分、南隅、北辺中央を除き完

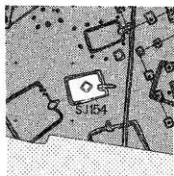


第 534 図 第152号住居跡

周している。柱穴は、竪穴内にみられないが、壁外に7本確認することができる。全て円形の小柱穴で、北側は等間隔、他はふぞろいに検出されている。北辺中央には、粘土の塊がまとまって確認されている。

カマドは、東辺ほぼ中央に接し構築されている。袖部分は検出されておらず、おそらく造りつけの袖部だった可能性がある。燃焼部は広く、深く掘り込まれており、八の字状に煙道部へ続く、煙道部は燃焼部から段をもって構築され、緩やかな傾斜を描きながら煙り出し穴へ通じている。焚き口部は大変広く造られている。

調査に当たっては比較的重複も少なく、精査できた。
第153号住居跡に伴う出土遺物は、須恵器環である。



第 535 図 位置図

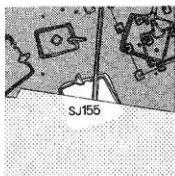
第154号住居跡（調査時C2区3号住居跡）

ユ-268グリッドに位置する。住居跡との重複関係はみられないが、住居跡中央に近世の土壌が重複している。全体のプランは良好に検出された。住居跡の規模は、長軸4.00m、短軸

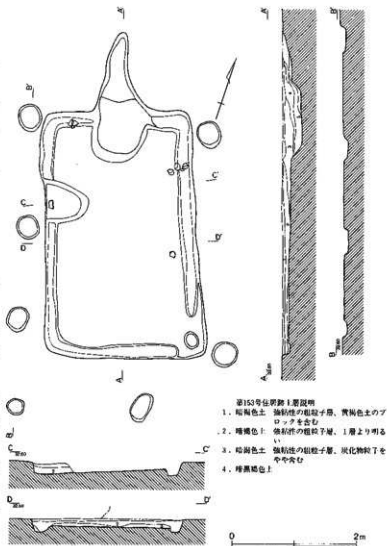
2.92mを測る。掘り込みの深さは、6cmである。壁周溝は、カマド部分、南・東辺を除き完周している。柱穴はみられないが、第153号住居跡同様、壁外に存在したと考えられる。しかし掘り込みの深さが浅いため、確認することはできなかった。

カマドは、東辺やや右よりに接し構築されている。袖部分はごく僅かしか検出されておらず、あるいは、造りつけの袖部だった可能性がある。焚き口部から燃焼部へかけては広く、深く掘り込まれており、土壇状になっている。煙道部は燃焼部から段をもって構築され、緩やかな傾斜を描きながら煙り出し穴へ通じている。構造的には、第153号住居跡と大変共通している。

比較的調査に当たって



第537図 位置図



第153号住居跡1層説明

1. 粘褐色土 強粘性の粗粒子層、黄褐色土のブロックを含む
2. 暗褐色土 強粘性の粗粒子層、1層より明るい
3. 粘褐色土 強粘性の粗粒子層、灰化物質を中々含む
4. 暗褐色土

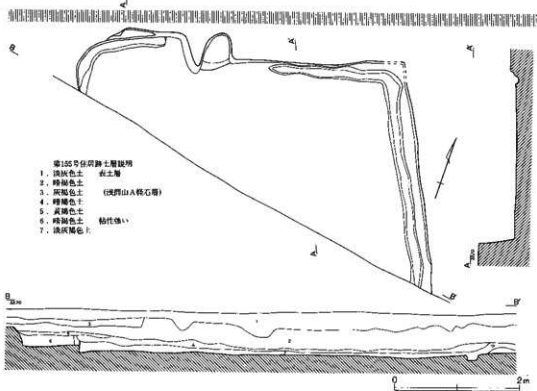
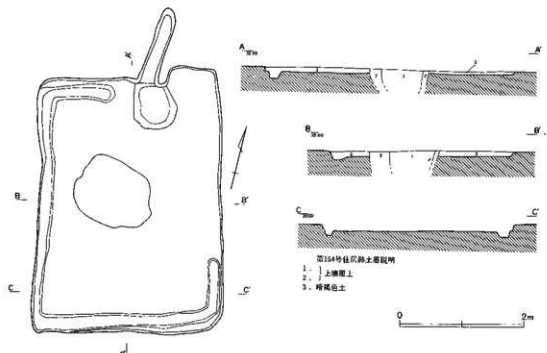
第536図 第153号住居跡

は、重複も少なく精査できた。

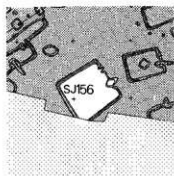
第154号住居跡に伴う出土遺物は、土師器片のみである。

第155号住居跡（調査時C2区22号住居跡）

キー268グリッドに位置する。住居跡との重複関係は見られないが、近代の溝が重複している。南側は、調査区域外である。住居跡の規模は、長軸5.20m、短軸—mを測る。掘り込みの深さは50cmである。壁周溝は、北壁のカマド部分を除き確認することができ、壁周溝はしっかりと回っている。東壁では、壁からやや離れたところに壁周溝はみられる。柱穴は、み



第 538 图 第154・155号住居跡



第539図 位置図

第156号住居跡（調査時C2区2・16号住居跡）

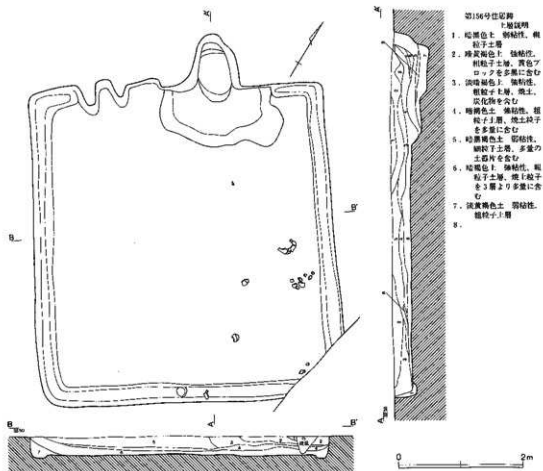
ユー-269グリッドに位置する。重複関係は、調査区域内では確認されていない。南側が、調査区

られない。

カマドは、北側の壁に接して確認されており、左よりに構築されている。左袖は、壁から突出している。しかし右袖は、壁外に突出していない。燃焼部は小さく、僅かな焚き口部から構成されており、ましてや煙道は、ほとんど壁外に延びてはいない。焚き口部は不明瞭である。

試掘のトレンチによって多くの部分が壊され、掘り込みの深さの割には、期待された成果が得られなかった。

第155号住居跡の出土遺物は、土師器杯・甕などがある。



第540図 第156号住居跡

域外である。住居跡の規模は、長軸4.90m、短軸4.72m。掘り込みの深さは、30cmである。壁周溝は、カマド部分を除き完周している。柱穴は、確認されていない。

カマドは、東側に確認されており、南・北2基確認できる。重複関係はみられず、便宜的に北カマド・南カマドとする。北カマドは、袖・煙道ともに小形で、ごく僅かの痕跡しかない。燃烧部・煙道は狭く、はたして、どのような機能をもったのか推定しえない。

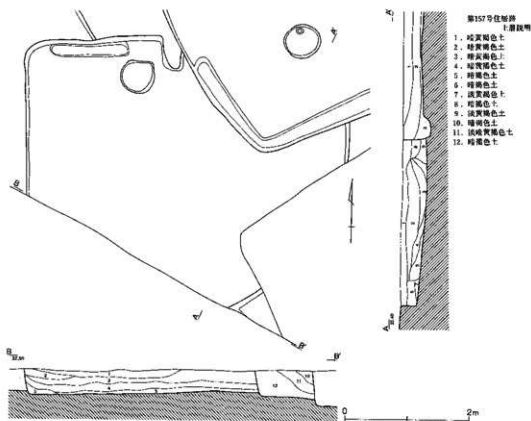
南カマドは、袖部が検出されていないが、焚き口・燃烧部ともに大きなカマドで、本来の本住居跡の機能を満足させるカマドである。燃烧部は深く掘り込まれ、壁外に構築されている。煙道は、燃烧部からはんの僅か突出する程度で、明瞭な境はみられない。

当初カマドが、二つ存在することから2軒の住居跡の重複と理解していたが、実際は、二つのカマドをもつ1軒の住居跡であった。

第156号住居跡に伴う出土遺物は、土師器環・須恵器環・甕である。

第157号住居跡（調査時C2区91号住居跡）

エー291グリッドに位置する。重複関係は、第20・34・97・119・136号住居跡よりも新しい。住



第 541 図 第157号住居跡

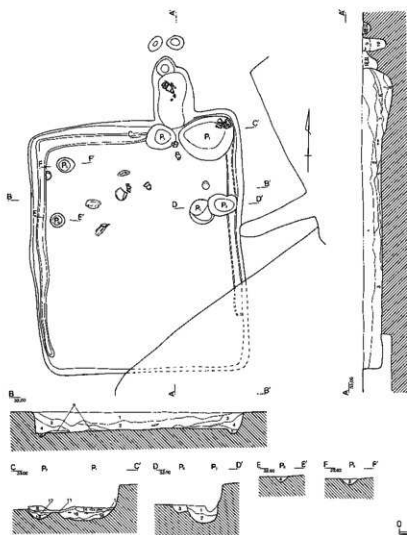


第 542 図 位置図

居跡の周囲をほとんど重複遺構によって壊されており、残存する部分のごく僅かである。住居跡の規模は、長軸5.07m、短軸—mを測る。掘り込みの深さは26cmである。壁周溝は、西側の壁にごく僅かにめぐっている。柱穴は、確認されていない。カマドの左側に貯蔵穴状の落ち込みを確認できる。

カマドは、北辺左よりに確認されている。袖部分のごく一部分しか確認されておらず、全体像を考えることは不可能である。袖はやや長く、地山堀り残して透れている。焚き口・燃焼部・煙道等については全くわからない。

第119号住居跡の壁面精査中に確認した。本来は、第157号住



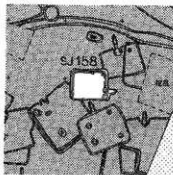
第 543 図 第158号住居跡

第158号住居跡土層説明

1. 純黄褐色土 締り良く、粘性低い
砂礫気味・焼土・炭粒子を少量含む
2. 灰黄褐色土 3層に亘るか灰・焼土を多量含む
3. 暗褐色土 締り、粘性と1層に近い、焼土を少量含む
4. 純黄褐色土 質層土を多量に含む
灰・焼土はほとんど含まず
5. 明黄褐色土 締り良く、粘性低い
粘り層は含まない
6. 暗赤褐色土 極多量の焼土を含む
灰もかなり含む
7. 暗赤褐色土 明褐色土をベースに
灰を極多量含む、焼土・灰も多量、締り良く、粘性やや高い
8. 純褐色土 締りやや悪く、粘性高い、焼土アロップ多量
9. 純黄褐色土 締りやや良く粘性強い、焼土粒子を少量含む
10. 灰黄褐色土 締り悪く粘性やや高い、焼土粒子を少量、白色炭粒子もわずかに含まれる

ピットの土層説明

1. 純黄褐色土 締りやや良く、粘性高い、白色炭粒子、焼土粒子をわずかに含む
2. 暗褐色土 締り良く、粘性非常に高い、灰・焼土を少量含む
3. 褐色土 粘り層は含まない
4. 灰黄褐色土 白色炭粒子、焼土粒子をわずかに含む
5. 明黄褐色土
6. 純褐色土
7. 暗褐色土 締り良く粘性やや高い、灰・焼土を多量含む
8. 純黄褐色土 質層土を主層に灰褐色土、少量の焼土
9. 灰黄褐色土 12層に亘るか灰色土の遺入多い、締りやや不良、粘性高い
10. 褐色土 しまりやや良く粘性低い
従土層少量含む
11. 暗褐色土 しまりやや悪く粘性高い
に含む
12. 明黄褐色土 地山に近い、焼土、灰をこくわずかに含む



第544図 位置図

居跡が新しいので、こちらを先に調査すべきであったが、遺構覆土が、地山層と全く近似しており、順序立てて調査することができなかった。

第157号住居跡の出土遺物は、土師器杯・台付甕である。

第158号住居跡（調査時B区5号住居跡）

エー291グリッドに位置する。重複関係は、第43・42号住居跡よりも新しい。西南の隅を除き、ほぼ全体が確認された。住居跡の規模は、長軸3.92m、短軸3.33mを測る。掘り込みの深さは、26cmである。西壁を除き壁周溝が全体的にめぐる。柱穴は、数カ所確認されているが、主柱穴となるかどうかは基だ疑問が残る。カマドに接して貯蔵穴が構築されており、円形のやや深めな貯蔵穴である。

カマドは、東辺右よりにみられる。煙道はほとんどみられず、煙道と燃焼部の区別がつかない。燃焼部は広く、やや深めに掘られている。

重複関係の激しい部分だが、比較的明瞭に確認できた。

第158号住居跡に伴う出土遺物は、土師器杯・甕・甌・須恵器杯・埴である。

(3) 遺構各説 —遺物出土状態—

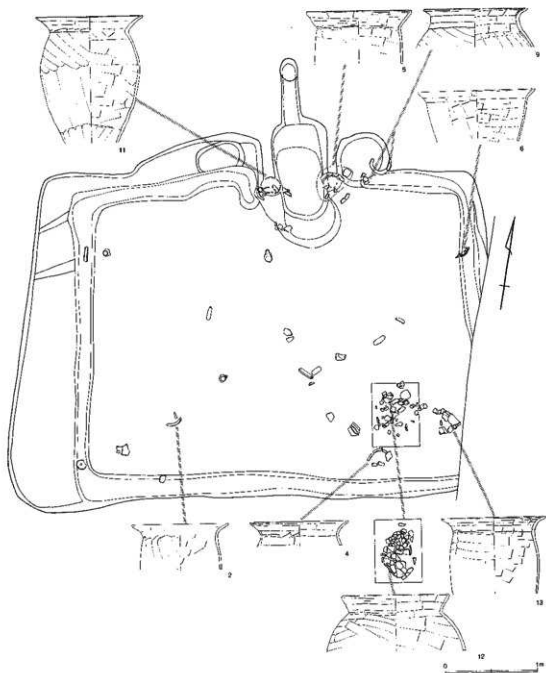
奈良・平安時代の遺構で、良好な遺物出土状態を保つ遺構は、第152号住居跡だけである。

第152号住居跡

カマドと住居跡の南半分に遺物が集中する顕著な傾向がある。

（床面） 南半分の床面に、4点の煮沸具が出土している。しかも東南の隅に、まとまる傾向がある。ただ完形品が少なく、胴下半部はみられない。大形の甕は、粉々に破砕された状態で出土している。

（カマド） 両方の袖の部分に芯材として甕が、その先端に倒位で使用されていた。燃焼部には、遺物を確認することができなかった。



第 545 图 第 152 号住居跡遺物出土状態

(4) 遺構各説 —カマドと煮沸土器—

奈良・平安時代のカマドと、煮沸にかかわる土器の関係について述べる。

奈良・平安時代のカマドの確認された住居跡とその構造についてはすでに述べたが、11軒のカマドについて詳細が分かっている。

第145号住居跡

長煙道のカマドである。ただしカマドの左半分が、堀によって破壊されている。燃焼部には、高台付の環が、3枚重ねあわせ伏せた状態で使用されていた。このカマドの上に甕が、載せられた状態で出土している。

この甕は、553-13で底部は欠損しているものの、全体の形状等は良く分かる。外面には、粘土と焼土の付着痕跡が確認されている。内面には、胴上半部から下にかけて、粒状の付着痕跡が筋状に残っている。

554-1は、小形の甕で外面胴下半に被熱痕跡がみられる。内面には、同様の位置に粒状の付着痕跡が確認されている。

第146号住居跡

カマドは、長煙道である。住居跡に伴う煮沸痕跡等の残る土器は、確認されていない。しかし燃焼部が円形に大きく掘り込まれており、あるいは架けられていた甕等を外したあとであろうか。燃焼部に甕の破片が残る。

第147号住居跡

長煙道のカマドである。燃焼部に土師器の破片等が確認されたが、形状を推定できるものはなかった。他にカマドに関係した土器等はみられない。

第119号住居跡

短煙道のカマドで左袖の芯材に長胴甕が使われている。燃焼部内には遺物を確認することができなかった。

第150号住居跡

長煙道のカマドである。カマド内や周辺からは、煮沸に関係した遺物は確認されていない。覆土中から台付甕が出土している。

555-3は、台部の欠損した台付甕である。外面胴下半に被熱痕跡がみられ、内面には、何等痕跡はみられない。

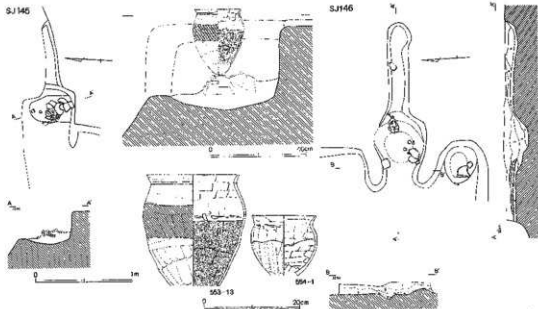
第148号住居跡

長煙道のカマドである。燃焼部に土師器の破片等が確認されただけである。

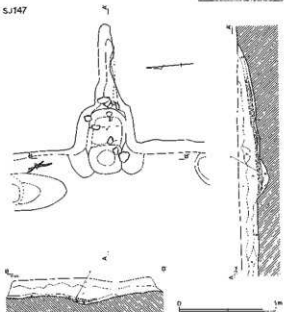
554-13は、甕型土器で、底部が欠損している。肩部以下には、被熱痕跡がみられる。内面には、何等痕跡はみられない。

第152号住居跡

長煙道のカマドで左右袖の芯材に長胴甕が使われている。燃焼部内には遺物を確認することができなかった。



SJ147



第143号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 黄褐色土ブロック含む 粒子粗い 粘性强
2. 暗褐色土 1層より薄い 粘り強い 粘性强
3. 暗褐色土 灰化物粒子をやや含む 粘り強い 粘性强
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土

第144号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 粒子の粗い・灰土層 粘性强
2. 暗褐色土 粘り強く、灰化物、焼土粒子少量含む 粘性强

第145号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 粘り強い 粘性强
2. 淡褐色土 粒子粗い 粘性强
3. 赤褐色土 焼土層 粘性强
4. 暗褐色土 灰化物を含む灰層 粘性强
5. 暗褐色土 灰化物少量含む 粘性强
6. 赤褐色土 焼土・灰化物多量を含む 粒子粗い 粘性强

第146号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 黄褐色ブロック多量を含む 粒子粗く 粘性强
2. 淡褐色土 焼土・灰化物含む 粒子粗く 粘性强
3. 暗褐色土 焼土粒子多量を含む 粒子粗く 粘性强
4. 暗褐色土 3層より焼土粒子多量を含む 粒子粗く 粘性强
5. 淡褐色土 焼土粒子多量を含む
6. 淡褐色土 焼土粒子ほとんど含まず 粘性强
7. 淡褐色土 粒子粗く 粘性强

第148号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 片土部質 焼土・灰化物少量含む 粘性强 粘り良好
2. 淡褐色土 3層に類似するが焼土多量を含む
3. 暗褐色土 焼土少量含む 灰は北側の部分に多く含む
4. 暗褐色土 焼土・灰化物多量を含む 天井部の崩壊に起因する
5. 暗褐色土 明褐色土をベースに、灰、焼土、炭を多量を含む
6. 暗褐色土 焼土ブロック (42cm位) 多量を含む 粘性强

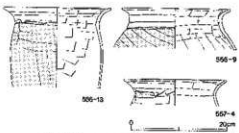
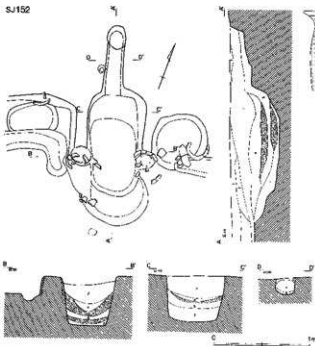
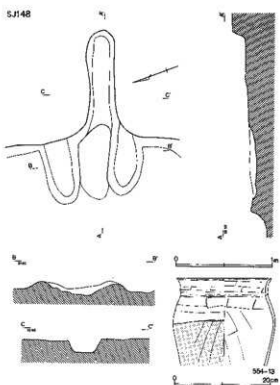
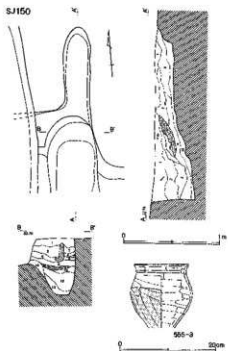
第146号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 灰色粘り及び木炭粒、焼土粒を含む
2. 赤褐色土 多量の木炭粒・焼土粒を含む 粘り強
3. 暗褐色土 多量の焼土粒を含む 粘り強
4. 暗褐色土 多量の黄色土粒と少量の木炭粒、焼土粒を含む
5. 暗褐色土 木炭粒 焼土粒を含む 粘り強
6. 暗褐色土 多量の黄色土粒・木炭粒、焼土粒を含む
7. 暗褐色土 多量の焼土粒、焼土を含む 粘り強

第147号住居跡・カマド土層説明

1. 暗褐色土 黄色土粒少量、木炭粒、焼土粒を含む
2. 赤褐色土 焼土粒、焼土地よりなる
3. 暗褐色土 黄色土粒、木炭粒、少量含む、しまり有り
- 4.
5. 赤褐色土 多量木炭粒含む、しまりなし
- 6.
7. 赤褐色土 多量木炭粒、少量焼土粒を含む
8. 暗褐色土 多量焼土、木炭粒を含む、しまりなし

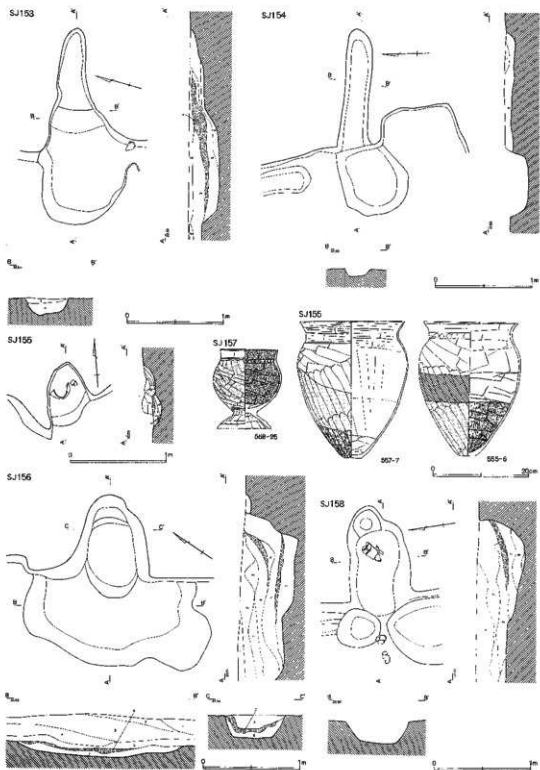
第 546 図 第145・146・147号住居跡カマド・遺物出土状態



- 第150号住跡・カマド土層説明
1. 砂褐色土 黄色土粒多く含む 埴り貝 焼土、木炭粒少量
 2. 褐色土 多量の黄色土粒と少量の木炭粒、焼土粒含む
 3. 暗褐色土 多量の黄色土粒と木炭粒、焼土含む 埴り貝
 4. 褐色土 多量の焼土粒、粒、焼土含む 埴り貝
 5. 暗褐色土 多量の木炭粒含む、埴り貝
 6. 赤褐色土 多量の焼土よりなる
 7. 暗褐色土 少量の木炭粒、焼土粒、黄色土粒含む 埴り貝
 8. 黄褐色土 少量の木炭粒、焼土粒、黄色土粒含む 埴り貝
 9. 黒褐色土 多量の木炭粒、焼土粒含む 埴り貝
 10. 黒褐色土 多量の木炭粒、焼土粒含む 埴り貝
 11. 褐色土 多量の黄色土粒と少量の木炭粒含む 埴りなし
- (1)~(10)層がカマド内に埋積した層、(11)層は埴り過ぎ部分

- 第152号住跡・カマド土層説明
1. 暗褐色土 粘性強 砂子粗
 2. 淡黄褐色土 粘性弱 砂子粗 炭化物含む
 3. 暗褐色土 粘性強 砂子粗 焼土多量に含む
 4. 黄褐色土 粘性強 粘土質の部分
 5. 淡黄褐色土 粘性弱 砂子粗 灰土層
 6. 赤褐色土 焼土層
 7. 黄褐色土 粘性弱 砂子粗 炭化物層

第547図 第148・150・152号住居跡カマド・遺物出土状態



第 548 図 第 153・154・155・156・158 号住居跡カマド・遺物出土状態

556-13は、長胴の甕で口縁部以下に被熱痕跡がみられる。内面にはこの痕跡を確認することはできない。左袖の先端に利用されていた。

556-9は、大形の甕で胴部以下が欠損している。口縁部以下から残存部いっぱいにかけて被熱痕跡が確認できる。内面には、これらの痕跡はみられない。

557-4は、大型甕の口縁部である。残存するごく一部に被熱痕跡がみられる。右袖の先端に利用されていた。

第153号住居跡

長煙道のカマドである。カマドの残存状態は決して良くない。カマド内や周辺からは、煮沸に関係した遺物は確認されていない。

第154号住居跡

長煙道のカマドである。カマド袖は明瞭ではない。カマドの煙道部のみが残る。カマドに関係した土器は確認されていない。

第155号住居跡

短煙道のカマドである。カマドの残存状態は決して良くない。燃焼部中から甕の口縁部が出土している。カマド内や周辺からは、煮沸に関係した遺物は確認されていない。

557-7は、甕型土器で、肩部から胴部下半にかけて帯状に被熱痕跡が確認できる。ただしこの痕跡は、斜めに帯状にみられる。内面には、なんらこの痕跡はみられない。

第156号住居跡

短煙道のカマドである。カマドの袖は明瞭ではない。カマドの燃焼部のみが残る。カマドに関係した土器は確認されていない。

第158号住居跡

短煙道のカマドである。カマド袖は明瞭ではない。カマドの燃焼部から土師器片が確認されているが、図化できるほど残存していない。カマドに関係した土器は確認されていない。

このほかにカマドの確認されなかった住居跡でも、被熱痕跡等の残る土器が確認されている。

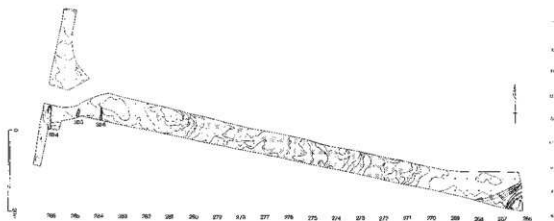
第149号住居跡から確認された甕は、外面の胴中に、帯状に粘土・焼土の付着痕跡が確認できる。また内面の底部付近に粒状の付着痕跡が確認できる。

第157号住居跡から確認された台付甕の558-25は、口縁部を除く外面全体に、被熱痕跡が確認される。また内面には、口唇部直下から全面に粒状の付着痕跡が確認できる。

(5) 遺構各説 一水田跡一

集落の北側を流れる河川が、肥沃土の堆積作用の進行によって埋没し、平安時代には、緩い谷地形状となっていた。この谷地形は、流路方向にそって南北に伸び、水田として利用されていたようである。黒色の粘質土が堆積し、この粘質土を基層とした水田が、一面に広がっていたと考えられる。ソ-274付近の土層について行なったプラント・オパールによる自然科学的な分析・検討の結果も、水田としての可能性が高いと出ている。

水田跡として認識した契機は、このような水田に適した地形であることもさることながら、堆積



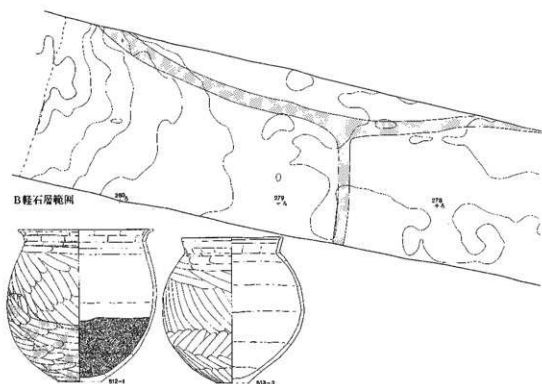
第 549 図 浅間山B軽石層確認範囲

層中に、天仁元年噴出といわれている、浅間山B軽石層が確認されたためである。とくにこの浅間山B軽石層に覆われた水田跡は、浅間山に近い群馬県側で、ここ15年来調査が続けられその実態がかなり詳しく分かりつつある。

この浅間山B軽石層、浅間山が、天仁元年（1108）史上最大の火山噴火を起こし、その降灰は、北関東を中心に広く関東平野を覆った（第550図参照）。このときの火山灰層である。そのため広域



第 550 図 浅間山B軽石の影響範囲



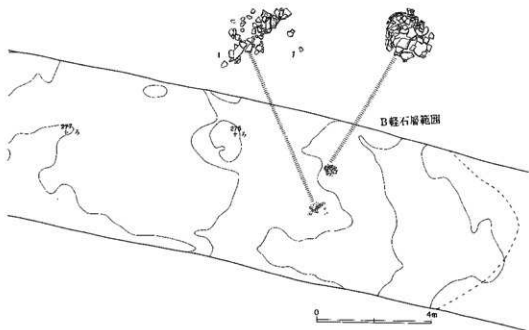
第 551 図 平

的な確認例をもち、各種の編年軸上のキー層となっている。しかしこの火山灰層も、降下時の状態をそのまま留めている場合は少なく、雨水による流出や、耕作のための片付けなどを考慮に入れておく必要がある。

この水田跡は、スー270から ろー281にかけて確認されている。確実な遺構と呼べるものは、中央西よりで確認された畦畔状の遺構である。幅20～30cm前後で、東西に伸びる1本と南北に伸びる1本が、T字形に交わっている。ただし直線的ではなく、緩やかなカーブを描いており、おそらく地形の緩やかな高低を意識したものと考えられる。

浅間山B軽石層を序々に取り除いた結果、その下からは、凹凸の激しい水田表面を確認することができた。ただし歩行状態や方向等を推定できるような足跡はなく、表面観察では、これらは確認できなかった。

なおこの水田耕作層の直下から甕が2点出土している。口径の大きな甕で、作りは非常に雑で歪んでいる。水田とは関わらない河川跡の堆積層中の遺物であろう。



安時代水田跡

(6) 遺物各説 —奈良・平安時代の出土土師器分類—

奈良平安時代の出土土師器は、19種の器種を見ることができる。

1 坏坑類 食膳具の坏坑類には、10の器種がある。

北武蔵型坏 (北坏A・B) 比較的作りの粗い碗形の坏で、僅かに底部が平底気味。緩やかに立上がるA類と、丸底で底部から緩やかなカーブを描くB類の二つのタイプに分けて考えることができる。両者とも底部から指押えて作りあげていき、口縁部をヨコナデして形を整える。底部はヘラケズリが施され、器厚は薄く作り上げられる。最もポピュラーな坏類である。

削出し高台坏 (削出A・B) ロクロを使用して成形している。深めの碗形の器形のA類と、浅めでやや内湾しているB類に分けて考えられる。底部は、あげ底風の削り出し高台である。A類は底部から緩やかに外反しつつ立ち上がり、B類は、緩やかに内湾しつつ立ち上がっている。明らかに須恵器の製作技法そのものであり、両者に互換性があるものと思われる。

脚高高台付坏 (脚高坏) 非常に高い高台に乗る坏で、ロクロ成形で作り上げられている。高台は八字状に外に開き、口縁部は緩やかに内湾しつつ、口唇部で外側へ折れるように外反する。坏部は浅めの製品である。

無高台埴（無高台埴） 指押えのあとヨコナデによって成形した無高台の埴である。底部は厚く作られ、口唇部で内側にきつく曲がる。

皿状坏（皿状坏） 大形の皿状に開く坏で、口縁部と底部の境に段をもつ。作りが雑で、口縁部は波を打っている。底部は雑にヘラケズリされ、口縁部はヨコナデされている。内面もヨコナデ。

暗文土器坏D（暗坏D） 内面に放射状の暗文の施される坏で、7世紀後半の暗文土器坏とは別の系譜から出現した土器である。平底の环形の土器で、底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施されている。口唇部が丸く、内面に沈線状の凹みができる。

暗文土器坏E（暗坏E） 底部は平底で、緩く内湾しながら立ち上がる。内面は、放射状暗文が施される。口縁部で緩く外方へ屈曲する。これも7世紀後半の暗文土器坏とは、別の系譜で出現してきた土器である。

真筒式系坏3（真坏3） 口唇部が小さく内側に屈曲する、いわゆる内屈口縁の坏である。外面が細かくヘラケズリされ、内面はヨコナデが施されている。やや小形である。

なお第552図では、比較のために須恵器の坏埴類を併出しておいた。

2 小形製品 小形製品は、機能毎に柱を立てるべきだが一括した。2つの器種を設定した。
小型甕（小甕） 小形の甕形土器であるが、底部が欠損している。プロポーショナル的に底部に向かって細くなっており、あるいは小形の台が付く、いわゆる台付甕の形態になるのかと思われる。外面は縦にヘラケズリされ、口縁部以下肩部を横方向にヘラケズリされている。内面には横方向のヘラオサエが顕著にみられる。

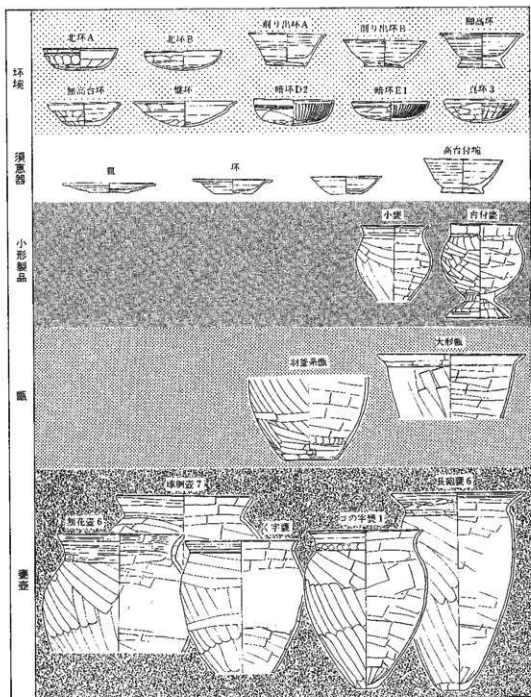
台付甕（台付甕） 八の字状に開く脚部と小形の甕で構成される台付甕である。外面は、まず縦に粗くヘラケズリされ、そのあと横方向に細かくヘラケズリされる。脚部は、断続的にヨコナデが施される。内面は細かなヘラオサエがみられる。肩部は球胴の甕で、口縁部は直立するが僅かに外反する。

3 甕 甕の土師器全体に占める割合は、多くない。しかし2つの器種の設定が可能である。
大形甕1（変形甕1） 頸部のあまり綺麗な、尻空み大形の甕である。胴下半が欠損しているので、詳細は分からない。外面は縦のヘラケズリ、内面は横のヘラオサエが顕著で、口縁部はヨコナデされている。

羽釜系甕（羽釜系甕） 胴上半が欠損しているため、果たして口縁部が羽釜状になるか不明だが、他の遺跡出土例などと照らして考え、羽釜へ繋がる系譜を見出せると思う。底部は大きく筒抜けとなっており、2つの対になる穿孔が、底部やや上を開けられ、これが支えの軸棒の受け穴になるのであろう。外面は縦にヘラケズリされ、底部近くを横方向にヘラケズリされている。内面は、ヘラオサエされ、さらに穿孔部分のやや上を一周、指押えしている。

4 甕・壺 甕・壺は、煮沸・貯蔵用として多く生産される。5つの器種の設定が可能である。
くの字口縁甕（くの字甕2） 口縁部がくの字形に短く屈曲する甕形土器で、底部が欠損している。胴上半部に最大径があり、下降するに従って尻窄りになっていく。外面を縦にヘラケズリし、肩部を横方向にヘラケズリしている。内面は横方向のヘラオサエが顕著である。

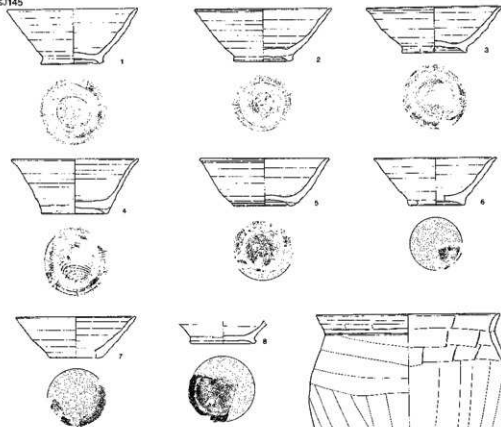
砲弾形長胴甕6（長砲甕6） 長胴でしかも最大径が、胴上半にある甕を一括する。外面は縦にヘ



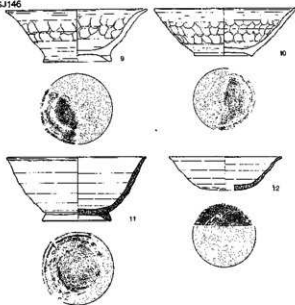
第 552 図 奈良・平安時代の出土土器分類

ラケズリをし、底部付近を横に削っている。肩部が斜め縦にヘラケズリされるのが特徴である。口縁部の開きが低く長くなっている。器高も高くなる。底部の平底は明瞭である。内面はヘラオサエ

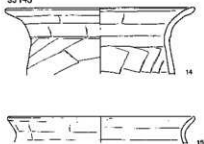
SJ145



SJ146

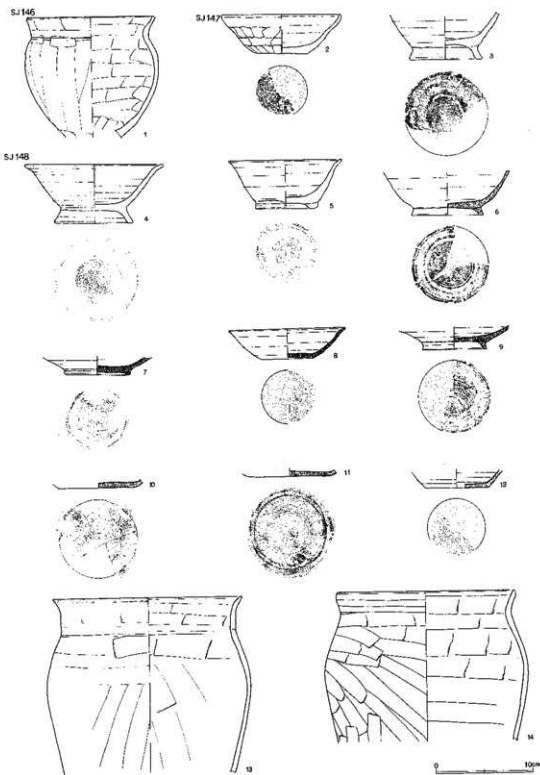


SJ145

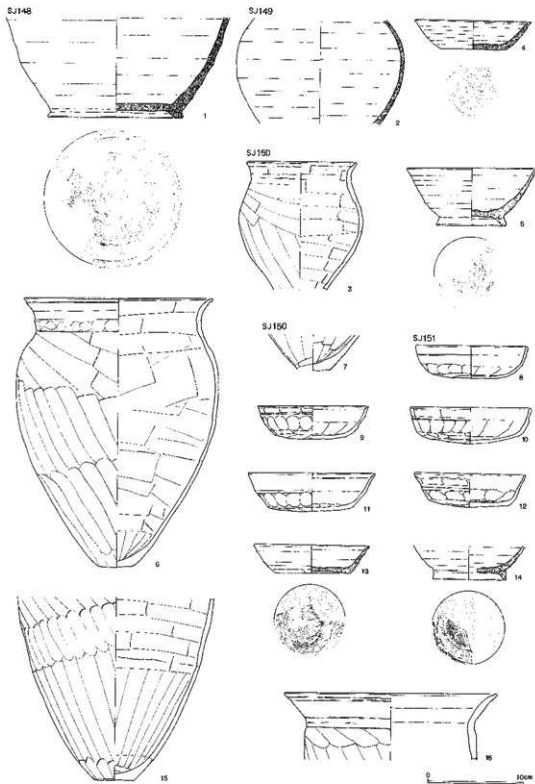


0 10cm

第 553 图 第 145 · 146(1)号住居跡出土遺物

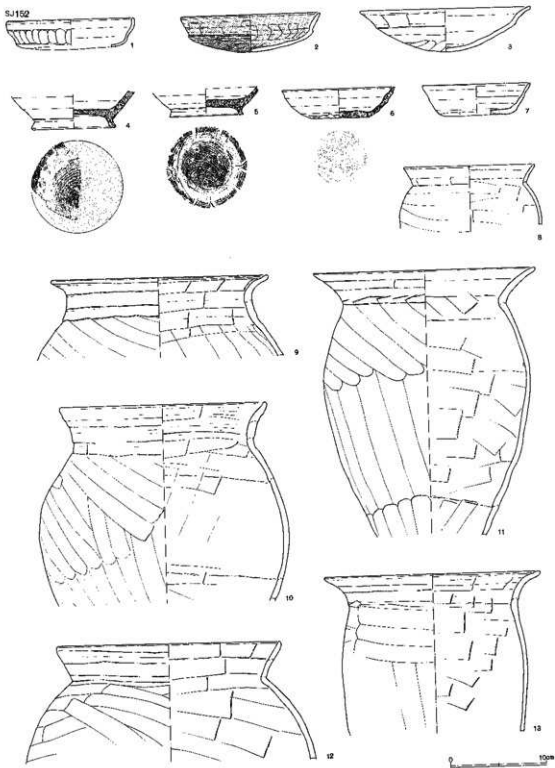


第 554 图 第 146(2)·147·148(1)号住居跡出土遺物

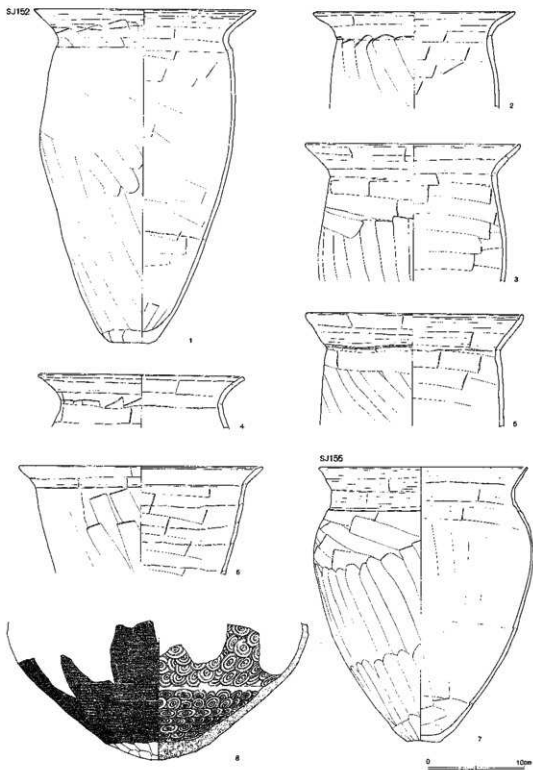


第 555 图 第 148(2)·149·150·151(1)号住居跡出土遺物

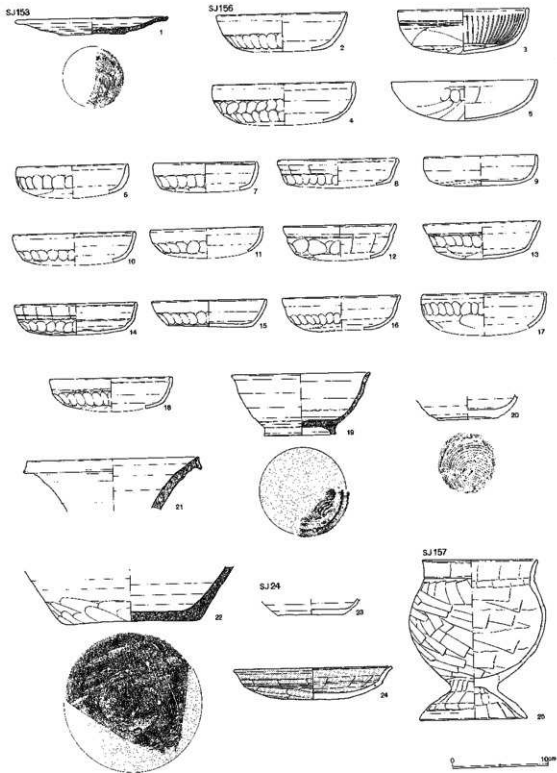
SJ152



第 556 图 第152(1)号住居跡出土遺物

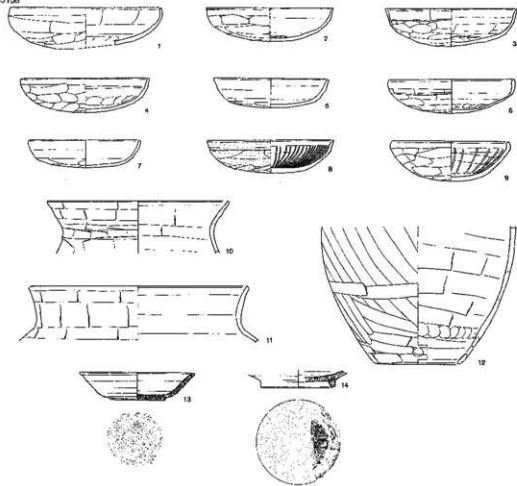


第 557 图 第 152(2)・155 号住居跡出土遺物

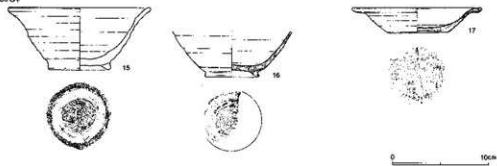


第 558 图 第 153 · 156 · 24 · 157 号住居跡出土遺物

SJ158



SJ84



第 559 图 第 158・84 (上層) 号住居跡出土遺物

第219表 第145号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第 553 図								
1	削出坏B	14.0	6.7	5.8	360	5/6	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	10Y 7/1
2	削出坏B	14.5	6.4	5.6	360	2/3	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	10R 5/4
3	削出坏B	14.4	6.9	4.8	340	4/5	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	5Y R 8/1
4	削出坏A	13.6	7.0	5.8	380	2/3	ロクロヨコナデ→静止糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	7.5Y 8/1
5	削出坏A	13.8	6.5	5.0	320	1/2	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台削出。 し。内面ロクロヨコナデ。	10Y R 7/1
6	削出坏A	13.1	5.0	5.0	(300)	1/4	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台削出。 し。内面ロクロヨコナデ。	10Y R 8/1
7	無高台坏	12.8	5.6	4.3		1/2	ロクロヨコナデ→回転糸切り。内面ロクロヨコ ナデ。	7.5Y R 7/4
8	須削出し		7.9				破片 ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	10Y R 7/1
14	長股寛6	20.0					破片 朝顔斜めヘラケズリ・口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ→ヨコナデ。	2.5Y R 7/6
15	長股寛6	10.8					破片 ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5Y R 7/6

第220表 第146号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
9	削出坏B	19.5			360	1/2	エビオサエ成形→ロクロヨコナデ→回転糸切り (L)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	7.5Y R 7/4
10	削出坏B	14.8	6.1	5.0	400	2/3	エビオサエ成形→ロクロヨコナデ→回転糸切り (L)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	5Y R 8/3
11	須削出し	14.6	7.0	6.8	540	2/3	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。 内面ロクロヨコナデ。	須磨器N 7/0
12	無高台坏	11.9				1/2	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロク ロヨコナデ。	須磨器10Y R 7/1
13	く字寛2	19.4				1/3	朝顔斜めヘラケズリ・青飯焼ヘラケズリ→口縁部 断端ヨコナデ。内面ヘラオサエ→ナデアゲ→新 焼ヨコナデ。	7.5Y R 8/3
第 554 図								
1	小夜8	13.5				一部欠 損	朝顔斜めヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ヘ ラオサエ→ヨコナデ。	7Y R 6/4

第221表 第147号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第554図								
2	無高台杯	12.5	(5.3)	(4.2)		1/4	スビオヤエ→ロクロコナデ→静止糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	7.5Y R 7 / 6
3	脚高杯		7.7			1/2	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	7.3Y R 8 / 6

第222表 第148号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第554図								
4	脚高杯	14.5	8.2	6.2	340	4/5	ロクロコナデ→静止糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	7.5Y R 8 / 3
5	割出杯A	11.9	6.5	5.1	300	完形	ロクロコナデ→静止糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	7.5Y R 8 / 2
6	割削出し		7.5			1/4	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	須恵器5Y 6 / 2
7	割削出し		6.5			破片	ロクロコナデ→静止糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	須恵器5Y 7 / 2
8	浅平安杯	12.3	4.9	3.2	230	1/2	ロクロコナデ→静止糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	須恵器N 8 / 0
9	割削出し		6.7			破片	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	灰釉陶器7.5Y 7 / 1
10	浅平安杯		7.7			破片	回転糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	須恵器7.5Y 6 / 1
11	浅平安杯		8.0			破片	回転糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	須恵器10Y N 7 / 2
12	無高台杯		6.6			破片	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロコナデ。	須恵器7.5Y 6 / 1
13	く字甕2	20.0				破片	胴部斜ヘラケズリー→肩部斜ヘラケズリー→口縁部横梳コナデ。内面ヘラオサエ→ナダゲ→コナデ。	5Y R 7 / 3
14	く字甕2	18.6				破片	胴部斜ヘラケズリー→口縁部コナデ。内面ヘラオサエ→コナデ。	5Y R 7 / 3
第555図								
1	須恵器	14.8				3/5	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→刷り直し→高台貼付。内面ロクロコナデ。	須恵器5PB 6 / 1

第223表 第149号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(装)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第555図								
2	須恵器					破片	ロクロコナデ。内面ロクロコナデ。	須恵器5B 5 / 1
4	浅平安杯	12.2	7.0	3.0	(220)	1/3	ロクロコナデ→回転糸切り(L)。内面ロクロコナデ。	須恵器2.5Y R 5 / 4
5	須恵器	13.8	7.3	6.0	440	1/3	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。	須恵器10Y R 6 / 1

第224表 第149号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
6	コ字甕1	20.0	3.5	22.2	6,000	4/5	内面ロクロコナデ。 胴部斜ヘラケズリ→胴部ユビオサエ→口縁部コ コナデ。内面ヘラオサエ→ココナデ。	2.5YR7/8

第225表 第150号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第555図								
3	小甕8	11.6				1/3	胴部斜ヘラケズリ→胴部斜めヘラケズリ→口縁 部ココナデ。内面ヘラオサエ→胴部ココナデ。	2.5YR7/4
7	小甕8					破片	底部ヘラケズリ。内面底部ヘラオサエ。	5YR5/8

第226表 第151号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第555図								
8	北塚B1	11.7		3.5		1/4	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部コ コナデ。内面ココナデ。	7.5YR6/6
9	北塚A1	11.6		3.5	200	一層欠	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部漸続 破	5YR5/6
10	北塚A1	12.0		3.8		1/3	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部漸続 ココナデ。内面ココナデ。	5YR6/6
11	北塚A1	13.6		3.5	320	2/5	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部コ コナデ。内面ココナデ。	7.5YR7/6
12	北塚A1	12.0		3.5	290	5/6	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部漸続 ココナデ。内面ココナデ。	7.5YR5/3
13	黒高台坪	12.3	7.8	3.0	229	2/5	ロクロコナデ→回転糸切り(L)。内面ロク ロココナデ。	須色器N6/0
14	須磨出し		7.7			破片	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→西合刷付。 内面ロクロコナデ。	須色器N5/0
15	コ字甕1		4.0			1/5	胴部斜ヘラケズリ・底部縦ヘラケズリ。内面 グダグダ・胴中位横ヘラオサエ。	10YR5/6
16	長筒甕6	22.5				破片	胴部斜ヘラケズリ→口縁部ココナデ。内面コ コナデ。	5YR7/4

第227表 第152号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第556図								
1	北塚B1	13.5	13.3	3.2		1/6	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部コ コナデ。内面ココナデ。	7.5YR7/6
2	黒塚4	14.8	13.3	4.0	400	一部欠	底部ヘラケズリ→周辺ヘラケズリ・底部漸かな ヘラミガキ→口縁部漸続ココナデ。内面ヘラオ サエ。	内外面黒色処理 5YR4/6

第228表 第152号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(部)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
3	甕罎Ⅰ	18.1	14.7	4.5	440	一部欠損	瓦器ヘラケズリ→周面ヘラケズリ→口縁部磨製	5YR6/8
4	須磨高		9.0			1/5	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付 内面ロクロコナデ。	須磨器5Y7/1
5	須磨出し					1/5	ロクロコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付 内面ロクロコナデ。	須磨器5Y7/1
6	須磨高杯	12.4	6.6	3.0	200	1/4	ロクロコナデ→回転糸切り(L)→周面ヘラケズリ。内面ロクロコナデ。	須磨器5Y7/1
7	須磨杯	11.5		3.3		1/6	ロクロコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	須磨器Ⅱ8/
8	小甕Ⅱ	13.8				1/10	胴部横ヘラケズリ→口縁部磨製コナデ。内面横ヘラオサエ。	2.5YR5/6
9	須磨高Ⅶ	23.1				1/10	肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面ナデアゲ→横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/8
10	須磨高Ⅶ	21.9				1/5	肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面ナデアゲ→横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/6
11	長筒甕Ⅵ	23.5			(6,200)	1/3	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面ナデアゲ→横ヘラオサエ→コナデ。	5YR7/6
12	須磨高Ⅶ	23.4				1/10	胴部横ヘラケズリ→口縁部コナデ。内面横ヘラオサエ→コナデ。	5YR7/4
13	五稜甕Ⅵ	22.9				1/10	胴部縦ヘラケズリ→肩部横ヘラケズリ→口縁部コナデ。内面横ヘラオサエ→コナデ。	2.5YR7/8
第557図								
1	長筒甕Ⅵ	22.7	5.2	35.2	6,900	1/3	胴部縦ヘラケズリ→肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面ナデアゲ→横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/6
2	長筒甕Ⅵ	21.3				破片	肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/8
3	長筒甕Ⅵ	22.7				1/5	胴部縦ヘラケズリ→肩部横ヘラケズリ→口縁部磨製コナデ。内面横ヘラオサエ。	5YR6/8
4	長筒甕Ⅵ	21.8				破片	胴部縦ヘラケズリ→肩部横ヘラケズリ→口縁部コナデ。内面コナデ。	5YR6/6
5	長筒甕Ⅵ	23.1				破片	肩部斜めヘラケズリ→口縁部コナデ。内面横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/6
6	大形甕Ⅶ	25.8				破片	胴部縦ヘラケズリ→口縁部コナデ。内面横ヘラオサエ→コナデ。	5YR6/8
8	須磨高Ⅶ					破片	胴部平行線文タテキ→高部ヘラケズリ。内面同心円文タテキ。	須磨器2.5YR3/8

第229表 第153号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(部)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第558図								
1	須磨高	16.6	6.9	1.6		1/3	ロクロコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロコナデ。	須磨器2.5YR7/1

第230表 第155号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
第 557 回	7 コ字西1	22.1	3.4	23.7	6,900	3/4	胴部縦ヘラケズリー→肩部斜めヘラケズリー→底部ヘラケズリー→口縁部縦線ヨコナデ。内面ナデアゲ→ヘラオシアター→[筒形縦線ヨコナデ。	2.5YR 7/4

第231表 第156号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
第 558 回	2 北環B1	13.8					破片 底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 6
3 北環D2	13.7		4.7	400	1/2	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→控針状地文→ヨコナデ	7.5 Y R 6 / 4	
4 北環B1	14.9				1/5	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 6	
5 北環B1	15.4	15.2	4.3		1/3	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 6	
6 北環B1	11.7				1/4	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 4	
7 北環B1	11.0				破片	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 5 / 6	
8 北環A1	12.6				1/4	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8	
9 北環B1	11.9		3.2	240	2/3	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6	
10 北環B1	12.9				1/8	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 8	
11 北環B1	11.9				破片	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 4	
12 北環A1	11.8				破片	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部縦線ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 4	
13 北環B1	12.8		3.9		1/8	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 8	
14 黒四台杯	12.9		3.3	300	4/5	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 6 / 6	
15 北環B1	12.1		2.8		3/8	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 6 / 6	
16 北環B1	12.4				3/5	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5 Y R 7 / 6	
17 北環A1	13.0 (13.3)	(4.5)			破片	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→[1]縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 6	
18 須長形蓋	12.9				破片	底部ヘラケズリー→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5 Y R 7 / 4	
19 須長出し	14.8	7.6	9.5	500	1/3	口縁ヨコナデ→回転糸切り(裏)→凸台解け	須長器N 7 / 0	

第232表 第156号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
20	黒高台杯		6.3			1/5	内面ヨコナデ。 ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器10YR7/1
21	赤辰原巻	18.9				破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器N5/0
22	赤辰原巻		13.2			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)・底面周辺ヘラケズリ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器N7/0

第233表 第157号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
23	黒高台杯		7.2			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5Y5/1
25	台付甕1	12.2	11.5	10.9	1,300	一部欠損	胴部縦ヘラケズリ→横ヘラケズリ→胴部砥石コナデ→肩部ヨコナデ。内面ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ→肩部断続ヨコナデ。	2.5YR4/4

第234表 第24号住居跡出土土器

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
24	平底1	18.9	14.7	3.4		1/3	底面ヘラケズリ→周縁ヘラケズリ→口縁部断続ヨコナデ。内面磨鏡ヨコナデ。	内外面黒色焼用 5YR6/8

第235表 第158号住居跡出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
1	北杯B1	16.1	(16.3)	(4.4)		破片	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR7/6
2	北杯B1	13.5	11.5	3.6	240	1/2	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→放射状等文→ヨコナデ。	5YR6/6
3	北杯A1	14.1	13.0	4.0	280	一部欠損	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR5/6
4	北杯B1	13.7	13.5	3.6	300	一部欠損	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR6/6
5	北杯B1	12.3	10.2	3.1		1/3	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR6/6
6	北杯B1	13.5	12.9	3.6		2/5	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	7.5YR7/8
7	北杯B1	12.0	10.2	3.0		破片	底面ヘラケズリ→周縁ユビオサエ→口縁部ヨコ	5YR6/6

第236表 第158号住居跡出土土器②

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
8	輪坯E1	13.5	12.8	3.5	260	2/3	ナデ。内面ヨコナデ。 底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ→放射状焼文。	7.5YR1.7/1
9	真珠E3	12.5	12.2	4.3		1/2	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ→粗い放射状焼文。	2.5YR7/6
10	長頸壺6	19.2					破片 胴部縦ヘラケズリ→口縁部断片ヨコナデ。内面ヨコナデ。	5YR6/6
11	球胴壺7	23.2					破片 口縁部断片ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR6/6
12	羽釜新甕						破片 胴部縦ヘラケズリ→底面縦ヘラケズリ→円形の穿孔(瓶の支え穴二孔一対)。内面ヘラオシアテ→孔の上ユビオサエ→ヨコナデ。	10YR6/6
13	須平家杯	12.2	5.9	2.0	220	3/5	口縁ヨコナデ→回転糸切り(1)。内面口縁ヨコナデ。	須磁器N5/0
14	須削出し		7.6				破片 口縁ヨコナデ→回転糸切り(2)→高台貼付。内面口縁ヨコナデ。	灰釉陶器2.5YR6/1

第237表 第84号住居跡出土土器(上層)

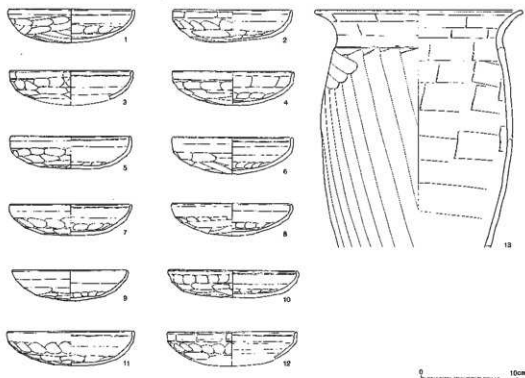
番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(型)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容積			
第559図								
15	須削出し	14.9	6.1	6.6	500	1/2	口縁ヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面口縁ヨコナデ。	須磁器5YR7/6
16	須削出し		5.5			1/3	口縁ヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面口縁ヨコナデ。	須磁器5YR5/1
17	須玉縁	13.6	6.3	3.2	160	3/4	口縁ヨコナデ→回転糸切り(R)。内面口縁ヨコナデ。	須磁器5YR6/6

によって作られている。胴部の広がりが大きくなり、コの字口縁の變などに繋がっていくものと考えられる。

コの字口縁の變(コの字變) 口縁部がコの字形をする変形土器で、きわめて薄い作りの器壁である。外面部を縦方向に細かくヘラケズリを行ない、内面には、明瞭なヘラオサエが残る。口縁部は指押えの後にヨコナデを行なっている。

球胴壺7(球胴壺7) 大形の壺形土器で、口縁部はくの字に屈曲している。胴下半が欠損しているために、この部分の形状等は不明瞭である。外面には横方向のヘラケズリがみられ、内面にはヘラオサエの痕跡が明瞭に残っている。

無花果壺6(無花壺6) 胴下半を欠損するが、大形の壺で、口縁部がくの字に近く屈曲する。外面には縦にヘラケズリされ、肩部を斜め方向に再びヘラケズリされている。口縁部はヨコナデされ、内面にはヘラオサエの痕跡が明瞭である。



第580図 土壇出土遺物(1)

奈良・平安時代の土器は、本来一括すべきものではないが、ここでは大雑把におさえるに留めておいた。この段階の特徴は、とくに各集落における窯業製品のうち須恵器の割合が、この段階になると飛躍的に増加し、土師器の食膳具・貯蔵具等の一部の器種は、須恵器へ転換されることである。これは、近隣の寄居町末野窯跡群や嶋山町南比企窯跡群等の須恵器窯が、活発な操作をしていたからにはかならない。またこの段階に出現した集落、とくに平安時代の竪穴式住居群は、古墳時代からの集落を引きずるものではない。新しく4～7軒前後で構成され、その背景に在地内の新秩序に基づく編成の行なわれたことを匂わせる。

(7) 土壇と出土土器（全体図参照）

奈良・平安時代の土壇は、明確なものは、第19号土壇を除いてない。他の土壇からは、奈良・平安時代の遺物は出土しているが、覆土の状態等からはたしてこの時代のもか疑わしい。なお覆土の状態等から年代的な特定が困難な土壇は、次の中・近世に一括した。

第19号土壇は、第85号住居跡の西に隣接して確認された長方形の土壇で、豊富な出土遺物がある。大きさは、100×80×20cm。覆土は、暗褐色の粘質土であった。壁面には、僅かに焼土が確認されたが、湧き水と水田の用水で調査が難行し、土層等の正確な記録が得られなかった。あるいは土師器焼成遺構の可能性もある。

出土した遺物は、第580図に示すように、椀形土器と甕形土器が出土している。壺は、指押えに

第238表 土器出土土器①

番号	器種分類	注				残存度	手法の特徴・或(整)形の順序	色調・模様・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第560図 (B区SK9)								
1		13.2	13.5	3.5	300	2/3	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR6/6
2		11.5	11.6	3.4	240	1/2	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR6/6
3		13.0	13.1	3.7		1/2	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部断片ヨコナデ。内面ヨコナデ。	2.5YR6/8
4		12.8	12.8	3.7	240	1/4	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→断片ヨコナデ。	須色部 7.5YR6/4
5		12.7	12.3	3.5		3/4	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	須色部 5YR7/6
6		12.3	12.5	4.0	280	5/6	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR5/3
7		13.0	12.2	3.3	250	1/3	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	3YR6/6
8		12.3	12.0	3.5	220	3/5	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	2.5YR6/6
9		12.2	10.8	3.3	180	1/4	底部ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	3YR6/6
10		13.6	13.0	3.9	200	1/2	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR6/6
11		13.6	13.1	3.6	250	3/4	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	7.5YR5/3
12		13.5	13.7	3.7		断片	底部ヘラケズリ→周辺ユビオサエ→口縁部ヨコナデ。内面ユビオサエ→ヨコナデ。	5YR6/6
13		22.0				3/5	胴部縦ヘラケズリ→肩部縦ヘラケズリ→口縁部断片ヨコナデ。内面ヘラケズリ→ヨコナデ。	7.5YR7/6

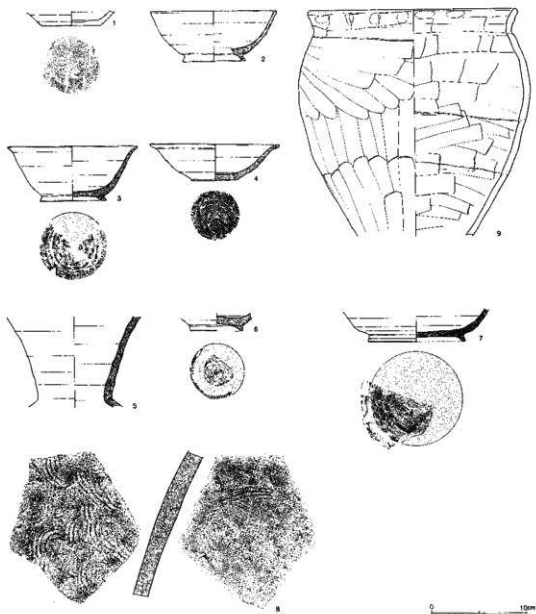
よって成形し、口縁部を僅かにヨコナデして仕上げている。内面にも、指押えの痕跡が残り、上部をヨコナデしている。甕は、長胴甕で、外面を縦にヘラケズリし、内面にはヘラオサエの痕跡が残る。

出土した遺物に平行する段階の住居跡は、やや離れて158号住居跡があるが、この調査区の外側や、谷を隔てた上敷免遺跡側が、この土壌と関係するのかもしれない。

他に土壌出土の遺物として環・高台付環・くの字口縁甕・須臾器長頸壺等の破片をみることが出来る。

(8) 溝と出土土器(全体図参照)

奈良・平安時代の遺物で、溝から出土したものは全て新田裏遺跡にかかる中・近世の溝から出土している。遺物は、有段口縁杯・暗文土器・須臾器提瓶など、古墳時代第Ⅶ期に位置付けられる遺物が出土している。そのため完形遺物は少なく、僅かに環類があるだけである。また須臾器大甕の破片も散見でき、さらに羽釜や広口長頸壺等バラエティーにとんだ遺物がみられる。古代にかかる



第561図 土壌出土遺物(2)

確実な溝は確認することはできなかったが、竪穴式住居跡の覆土の厚みからも浅かったかもしれない。今後の周辺地域の調査に期待したい。

(9) 河川跡と出土土器(全体図参照)

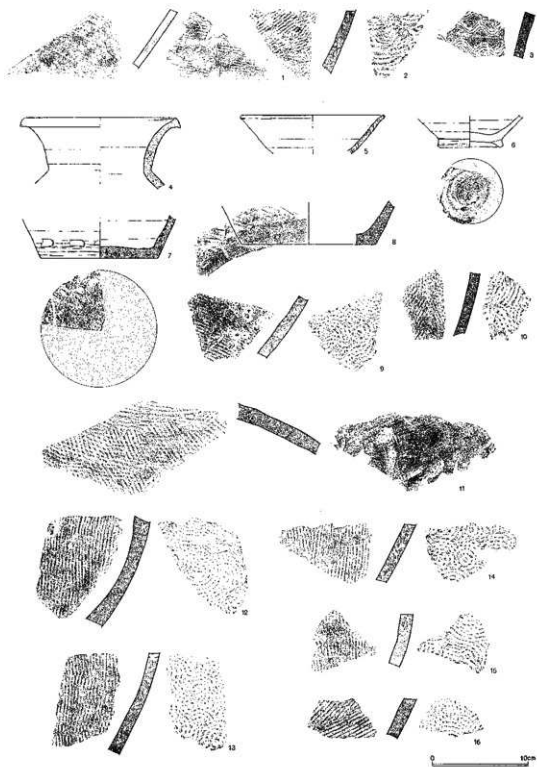
平安時代、浅間山B軽石層の堆積する以前までには、河川跡は埋没し、水田として耕作されていた。この耕作の開始は、どの時点であるかは定かでない。しかし堆積層中から古墳時代の遺物が消

第239表 土壌出土土器②

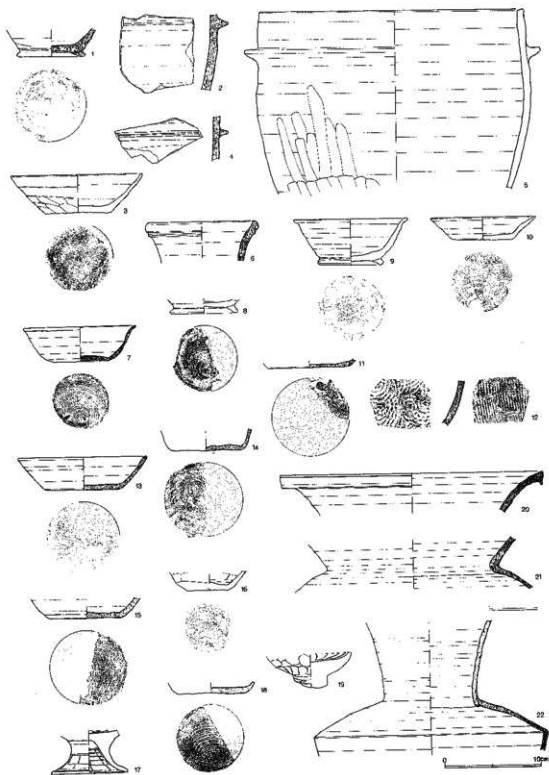
番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第 561 図								
1			6.2			破片	ロクロヨコナデ・回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	5YR7/4 C区SK3
2		13.4	(6.8)	(5.4)		破片	ロクロヨコナデ・高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5P B 6/1 C区SK19
3		13.7	6.8	5.7	400	1/3	ロクロヨコナデ・静止糸切り(R)・高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5YR7/6 C区SK7
4		13.7	4.9	3.9	260	1/3	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器10YR6/1 C区SK7
5						破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器・C区SK7 7.5Y7/1
6			5.6			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)・高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5Y4/1 B区SK14
7			10.0			破片	ロクロヨコナデ→静止糸切り(R)・高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器7.5Y6/1 C区SK7
8						破片	平行線文タタキ→磨り出し。内面同心円文タタキ。	須恵器5Y5/1 B区SK1
9		22.2				1/4	胴部傾へラケズリ→胴部傾へラケズリ→1/4輪部ヨコナデ→胴部圧縮。内面へラケズリ→ヨコナデ→胴部圧縮。	2.5YR7/3 C区SK14

第240表 漢出土土器①

番号	器種分類	法 量				残存度	手法の特徴・成(製)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	器厚			
第 562 図 (1~3がC区SD1・2、4~16がC区SD3)								
1						破片	平行線文タタキ。内面同心円文タタキ→磨り出しのみ。	須恵器5Y5/1
2						破片	平行線文タタキ。内面同心円文タタキ。	須恵器5Y5/1
3						破片	ロクロヨコナデ→波状文。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5Y5/1
4		16.0				破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5P B 4/1
5		15.6				破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5YR7/1
6			6.8			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器10YR7/6
7			12.8			破片	ロクロヨコナデ→静止糸切り(R)→底部傾へラケズリ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器5Y4/1
8						破片	ロクロヨコナデ・静止糸切り(R)→底部傾へラケズリ。	須恵器5Y5/1
9~16						破片	平行線文タタキ。内面同心円文タタキ(→磨り出しのみ)。	須恵器5B2/1
第 563 図								
1			7.0			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD13 10YR8/4
2						破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD13 10Y7/1
3		14.0	7.0	4.1	280	1/3	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→底部周辺へラケズリ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14 7.5YR7/6
4						破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14N3/0
5		28.0				破片	ロクロヨコナデ→胴下平へラケズリ。内面ロクロヨコナデ。	10YR4/1



第 562 图 溝出土遺物(1)



第 563 图 溝出土遺物(2)

第241表 溝出土土器②

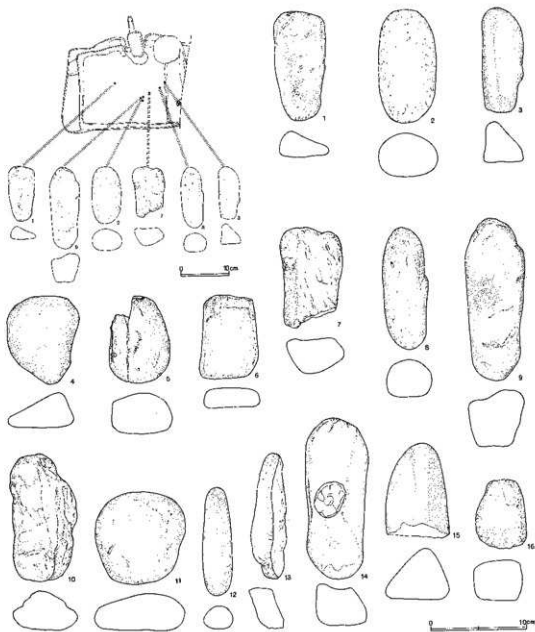
番号	器種分類	法 量				保存度	予法の特徴・或(整)形の順序	色調・焼成・使用痕跡等
		口径	底径	器高	容量			
第563 団								
6		11.3				破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14 7.5Y 6/1
7		12.0	6.0	3.7	(200)	破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14N 6/0
8			5.9		$\frac{1}{2}$	破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14 7.5Y R 8/2
9		12.0	6.5	4.9		破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)→高台貼付。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14 5Y R 8/3
10		11.0	6.4	2.4		破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(L)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C区SD14 10Y R 8/4
11			8.2			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(L)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器C 2区SD9 5Y R 8/0
12						破片	平行線文タタキ。内面同心円文タタキ。	須恵器河川跡7.5Y 5/1
13		13.7	7.7	3.5	280	1/4	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡10Y 6/1
14			7.4			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡7.5Y 6/1
15			7.7			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡5Y R 6/4
16			4.4			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡7.5Y R 8/2
17						破片	断続ヨコナデ。内面断続ヨコナデ。	河川跡2.5Y R 7/6
18			7.1			破片	ロクロヨコナデ→回転糸切り(R)。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡10Y 7/1
19						破片	スピオサユ→ヘラケズリ(底部柱状彫刻無し)内面ヘラケズエ。	河川跡7.5Y R 8/3
20		27.7				破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡N 5/0
21						破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡10Y 6/1
22						破片	ロクロヨコナデ。内面ロクロヨコナデ。	須恵器河川跡7.5Y 7/1

える前後の段階、つまり8世紀代に、埋没が急速に進行したと考えられ、遅くとも9世紀代に河川跡は、水田として開発されていたと考えられる。この堆積層から出土した土器は、須恵器の甕・広口長頸瓶、土師器坏等である。

(10) 遺物各説 一奈良・平安時代の編物石一

第152・153・156号住居跡で、数点ずつ編物石が出土している。とくに第152号住居跡では、出土位置が明確に分かっている。また第152・156号住居跡では、10点前後のまとまった編物石が出土している。

第152号住居跡から出土した編物石は、出土状態が明瞭で、住居跡の中央部に集中して6点確認



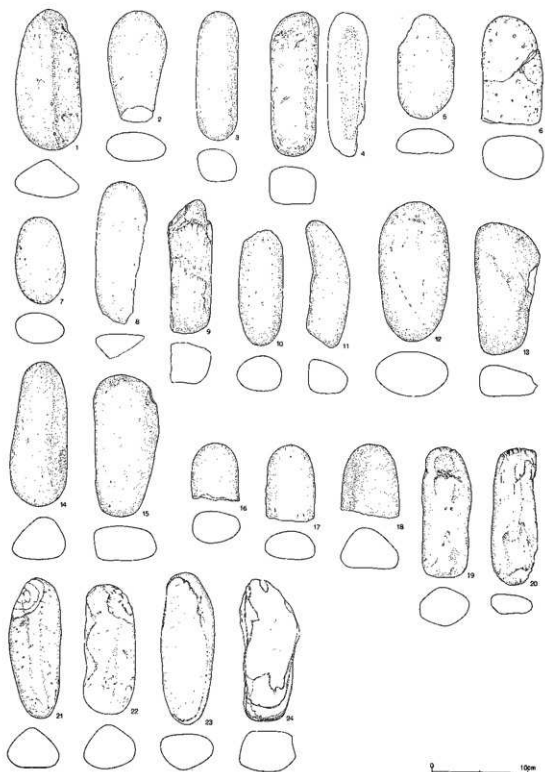
第564図 奈良・平安時代の編物石

された。編物石は、とくに揃った形状ではなく、破損した石材ばかりである。これは、破損した石材であっても、編物石として充分使用に堪えることができたことを示している。

このほかの編物石もあるが、欠損部が多く、重量等の比較が難しい。

また第156号住居跡からも、9点の編物石が出土している。明確な位置の把握はされていない。

奈良・平安時代の住居跡が前段階に比べ激減していることも手伝うのか、出土する例は減少す



第 565 図 グリッド出土の礮物石

第242表 奈良・平安時代の編物石

番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等
第564図					
1	S J 152	115	53	205	—
2	S J 152	—	—	—	—
3	S J 152	—	—	—	—
4	S J 152	—	—	—	—
5	S J 152	—	—	—	—
6	S J 152	—	—	—	—
7	S J 152	—	—	—	—
8	S J 152	—	—	—	—
9	S J 152	—	—	—	—
10	S J 152	—	—	—	—
11	S J 152	—	—	—	—
12	S J 152	—	—	—	—
13	S J 152	—	—	—	—
14	S J 115	—	—	—	—
15	S J 153	—	—	—	—
16	S J 153	—	—	—	—

第243表 グリッド・表土層中出土の編物石

番号	出土遺構	長さmm	厚みmm	重さg	石質等
第565図					
1	キ-258	—	—	—	—
2	表土層中	—	—	—	—
3	表土層中	—	—	—	—
4	表土層中	—	—	—	—
5	表土層中	—	—	—	—
6	表土層中	—	—	—	—
7	表土層中	91	52	—	—
8	表土層中	—	—	—	—
9	表土層中	139	42	450	—
10	メ-272	119	47	375	—
11	メ-271	123	42	300	—
12	表土層中	—	—	—	—
13	表土層中	—	—	—	—
14	表土層中	—	—	—	—
15	表土層中	—	—	—	—
16	表土層中	—	—	—	—
17	表土層中	—	—	—	—
18	表土層中	—	—	—	—
19	表土層中	—	—	—	—
20	表土層中	—	—	—	—
21	表土層中	—	—	—	—
22	表土層中	—	—	—	—
23	表土層中	—	—	—	—
24	表土層中	—	—	—	—

る。あるいはこうした小規模な竪穴式住居跡の単位群内では、こうした編物を生産しなかったのか、敢えて竪穴式住居跡内に編物石を残さなかったかのいずれかであろう。

なおグリッド・表土層中から編物石と思われる細長い棒状の石材が出土している。帰属した住居跡やそのほかのことは不明瞭だが、これからも竪穴式住居跡内以外の場所からも出土することを注意していきたい。

(1) 遺物各説—古墳時代から奈良・平安時代の鉄製品—

(第566図)

鉄鎌 鉄鎌は、4点確認されている。

1 大きく湾曲する曲刃鎌で、大変錆食が激しい。所々に錆跡がみられ、また鎌自体も三つに割れてしまっている。鍛造で作られ、柄に装着する部分は、僅かに内側に折り曲げられている。錆食が激しく、断面形状はやや正確さを欠くが、図のとおりである。長さは196mm、峰までの高さ82mm、鋒の幅6mm、刃部幅32mmを測る。177g。第153号住居跡から出土している。

2 柄の木質部分が残る直刃鎌である。柄の木目に対して、やや斜めに装着された状態で出土している。柄部は、鎌先の両側に確認することができ、鎌先を双方から挟み込んで固定したものと解

積できる。挟み込んだあと内側に折り返しており、この折り返しは明瞭である。長さは134mm、峰までの高さ34mm、峰の幅5mm、刃部幅26mmを測る。60g。第10号住居跡から出土している。

3 装柄部が、明瞭にわかる直刃鎌である。錆食が激しいため防錆処理を施した。使い込みが著しく、刃部は大変細くなっている。とくに中央部が激しく、先端と刃部幅がそれほど変わらない。折り返しは、内側にごく僅か折り返しているに過ぎない。長さは152mm、峰までの高さ32mm、峰の幅4mm、刃部幅19mmを測る。55g。第119号住居跡から出土している。

4 鎌の柄装着部である。刃部の殆どが欠損しており、正確な形状は分からない。僅かに内側に折り曲げた痕跡が確認できる。法量は不明確で、残存する峰の幅4mm、刃部幅26mmを測る。26g。第77号住居跡から出土している。

5 鎌の刃部先端である。他の部分はほとんど欠損しており、刃部の先端部しか確認されなかった。法量は不明確で、残存する峰の幅3mm、刃部幅25mmを測る。16g。第82号住居跡から出土している。

鉄製紡錘車 1点確認され、8と接して出土している。

6 鉄製の紡錘車で、軸棒と紡輪から構成される。軸棒は、断面方形から円形に近く、細長い棒状。頭部の先端がやや曲がり、あるいは鉤状になると思われる。径6mm、残存長さ417mmを測る。紡輪は、円形の小さな紡輪で錆食が激しい。径45mm、厚さ4mm。両者とも鍛造で作られている。70g。8は、6とともに接して出土した鉄器で、あるいは6とともに使用されていた可能性がある。下端が欠損しており、やや不明確だが、頭部は丸く、途中に2つの枝棒がみられる。枝棒は、頭部から31mmと90mmの位置にある。唐尺の1寸と3寸に当たる。軸棒と枝棒は、断面が方形に近い円形で、両者は直角に接合されている。軸棒の残存長さは、232mm。35g。第147号住居跡から出土している。

槍鉋 1点確認されている。

7 鉄製の槍鉋の先端で、装柄部が残存している。全体的に錆食が激しく、刃部は欠けて形状を推定するのはやや困難である。全体の形状は、中心から左に反った片刃の槍先状で、先端は鋭い。峰の部分には装柄部が残っていないが、腐食して欠けてしまったものと考えられる。刃部長さは、57mm、峰の幅5mm、刃部幅17mm。16g。第153号住居跡の覆土中から出土している。

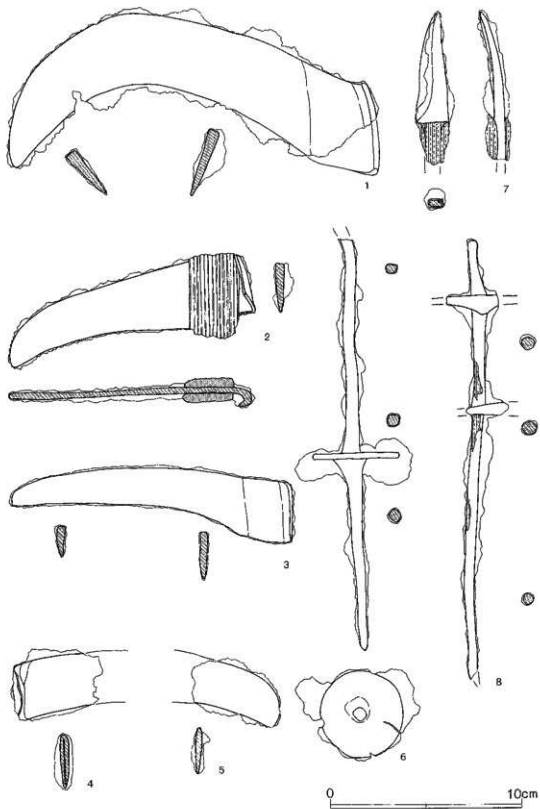
(第567図)

鉄鎌 7点の鉄鎌が出土している。しかし全体の形状を伺えるものではなく、全て断片である。

1 長頭鎌で、鎌の先端部は欠損している。ステッキ状に折り曲げられ、二次的な利用をされていたと思われる。僅かに基部が存在していたことが分かる。錆が進行しているので、保存処理を行っている。断面方形、長さは推定12cm。15g。第119号住居跡から出土している。

2 長頭鎌で、鎌の両端が欠損している。これも1と同様に、ステッキ状に折り曲げられ、二次的な利用をされていたと思われる。頭部のみのため詳しいことは分からない。錆が進行している。断面円形、残存長さは47cm。6g。第29号住居跡から出土している。

3 長頭鎌で、鎌の先端部は欠損している。僅かに基部とその周辺が残存している。断面は長方形で、装柄部は、断面楕円形である。残存する長さは64mm。6g。第82号住居跡から出土している。



第586図 古墳時代～平安時代の鉄製品(1)

4 長頸鎌で、鎌の先端部まである製品だが、錆食が激しく先端部の形状は不明瞭。断面は長方形で、先端部は中央が僅かに膨れている。茎部は判然としないが、無いものと思われる。残存長は112mm、14g。第23号住居跡から出土している。

5 長頸鎌で、鎌の先端部のみ残存する。錆食が激しい。先端部の形状は不明瞭。断面は楕円形である。残存長は37mm、5g。第87号住居跡から出土している。

6 長頸鎌で、装着部のみ残存する。錆食が大変激しい。茎はあるか不明。下端はさらに伸びると思われる。断面は楕円形である。残存長は50mm、2g。第72号住居跡から出土している。

7 長頸鎌で、首部のみ残る。錆食が大変激しい。断面は楕円形である。残存長は54mm、6g。第119号住居跡から出土している。

鉄釘 2点鉄釘が出土している。あるいは新か。

8 やや太い釘で、鍛造。断面方形。釘の頭はやや潰れている。先端部は欠損しており、残存するのは40mmである。径5mm、3g。第78号住居跡出土。

9 やや細い釘で、鍛造。断面方形。釘の頭は潰れている。先端部は欠損しており、残存するのは35mmである。径3mm、1g。第78号住居跡出土。

不明鉄器 残存部分が少なく、全体の形状等の把握が困難な鉄器である。10点出土している。

10 湾曲する棒状の鉄器で、先端は欠損している。上部に装着部を描いたが、果たしてどのような鉄器の一部か不明確である。断面は長方形。装着部は円形。45mm、4g。第146号住居跡出土。

11 棒状鉄製品。鍛造品。断面長方形。用途不詳。両端欠損。残存部長さ50mm、断面は11×6mm、15g。第146号住居跡出土。

12 棒状鉄製品。中空の円筒状。用途不詳。両端欠損。残存部長さ30mm、径11mm、5g。第119号住居跡出土。

13 刀子 きわめて小破片なので、刀子の先端かわからない。しかし鍛造で作られている様子が、断面の観察によって伺うことができる。残存部長さ23mm、幅16mm、厚さ3mm。第158号住居跡出土。

14 鉄片。きわめて小破片なので用途不明。両端欠損。残存部長さ20mm、幅1mm、1g。第146号住居跡出土。

15 鉄片。小破片。用途不明。両端欠損。残存部長さ37mm、幅1mm、3g。第106号住居跡出土。

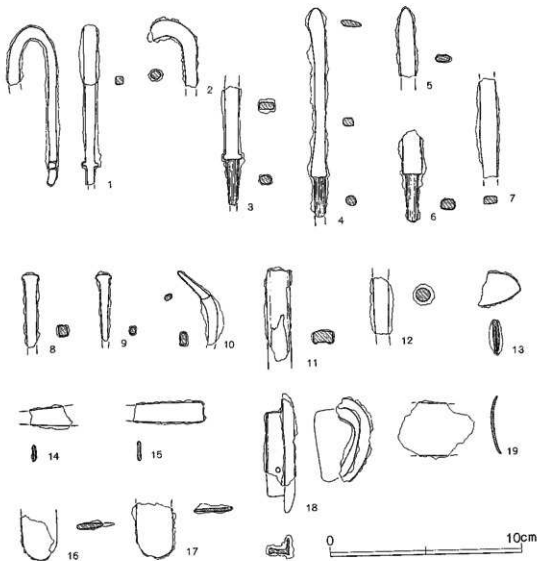
16 鉄片。小破片。用途不明。小札状。先端は円形になっている。上部欠損。残存部長さ23mm、幅1mm、1g。第150号住居跡出土。

17 鉄片。小破片。用途不明。16と同様の小札状。先端は円形になっている。上部欠損。残存部長さ29mm、幅1mm、4g。第150号住居跡出土。

18 貴金具状鉄製品。錆食が激しく、果たして刀子等の貴金具かわからない。鍛造品。卵倒形と思われる。欠損部分多い。残存部長さ43mm、幅2mm、6g。第147号住居跡出土。

19 鉄片。湾曲した鉄板状の製品で、錆食が激しく、用途不明。残存部長さ40mm、幅29mm、10g。第147号住居跡出土。

以上鉄製品は、27点出土している。古墳時代の住居跡からはほとんど出土せず、出土が急激に増



第567図 古墳時代～平安時代の鉄製品(2)

すのが、平安時代になってからである。これは、他の東国の一般的な竪穴式住居跡で構成される集落に特有な状況であって、これと同じ歩みをたどっているといえる。そのなかで注目すべき事柄として、第119号住居跡からの鉄製品の出土の多さに目を見張られる。5点の僅かな出土ではあるが、掘立柱建物群が形成されるこの段階、こうした鉄製品をもつ竪穴式住居跡が存在していることは重視しておく必要があるだろう。

また鉄製紡錘車の出土は、高級織物の原料のための糸紡ぎの存在を推定させるという説もあるように、きわめて重要な出土遺物である。

さらに槍砲の第153号住居跡の覆土からの出土は、想像を逞しくすれば、掘立柱建物跡の構築と関係があるのではないだろうか。

(12) 遺物各説—古墳時代から奈良・平安時代の玉類—

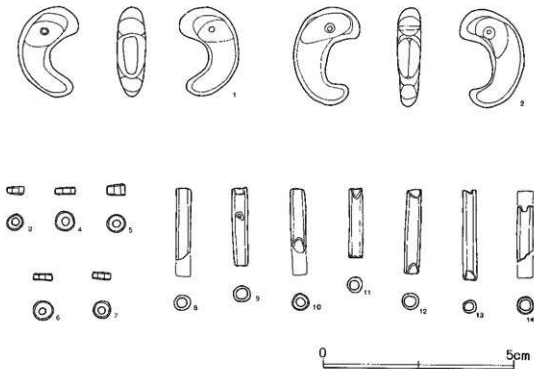
第13号住居跡出土玉類 (第568図)

第13号住居跡からは、勾玉・管玉・小玉が出土している。住居跡の北側壁よりのところから出土している。一括して床直の状態出土しており、勾玉を伴うことから、一連の首飾りと考えられる。全て滑石製。

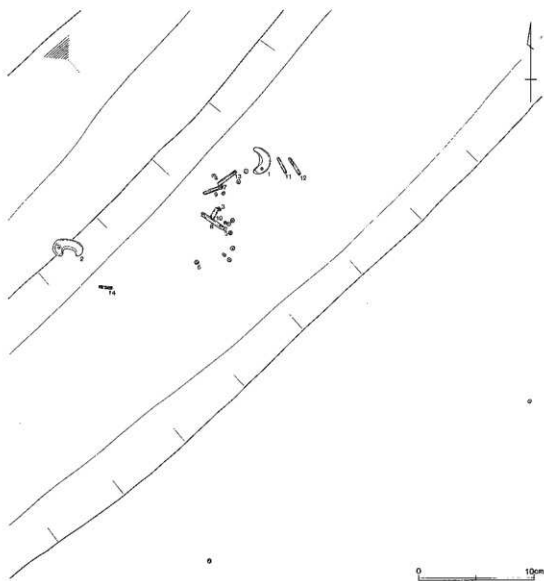
勾玉 1は、小形の勾玉でていねいに作られている。両面は扁平に磨かれており、通常の穿孔位置よりも低い位置に穿孔されている。出土した当時は、コバルトブルーに近い色調であったが、次第に色あせ白っぽくなった。長さ24mm、幅8mm、厚さ8mm。3g。2も、小形の勾玉で、ていねいに作られている。ややコの字形に近い。両面が扁平に磨かれ、屈曲部に穿孔がみられる。色調は1と同様。長さ26mm、幅14mm、厚さ6mm。3g。

小玉 5点出土している。全て同一の形態で、径や長さが揃っている。深緑色。管玉状の製品をかまぼこ状に刻んだのか、1点1点を別々に作ったのか不明。径5mm、厚さ1.5mm。0.5g。

管玉 7点出土している。細長い管玉で、径・長さは揃っている。ただし殆ど両端が破損しており、原形を留めるものは少ない。深緑色。長さは、43mmを基準にしているのだろうか。両面穿孔。



第568図 第13号住居跡出土の玉類



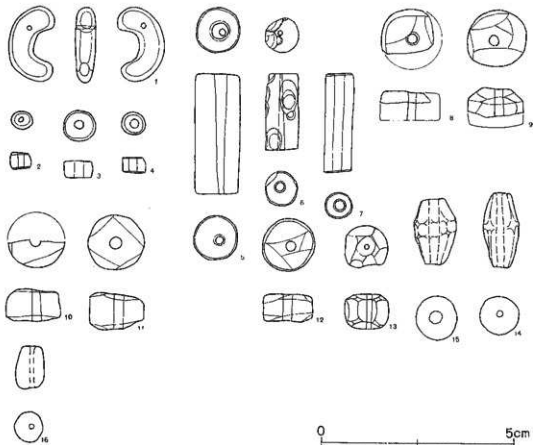
第569図 第13号住居跡の土類出土状態

径4mm。1g。

第13号住居跡から出土した玉類は、一連の頭飾りと考えられる。出土状態（第569図参照）から勾玉—管玉—小玉—小玉—小玉—小玉—小玉—小玉—管玉—管玉—小玉—小玉—小玉—小玉—管玉—管玉—小玉—小玉—小玉—小玉—勾玉—管玉—管玉—（—小玉—小玉）の順番で一連となっていた可能性がある。

そのほかの住居跡出土の玉類（第570図）

勾玉 1は、小形の勾玉で、ていねいに作られている。両面は扁平に磨かれており、通常の穿孔位置よりもやや低い位置に穿孔されている。淡い黄緑色。長さ20mm、幅7mm、厚さ6mm。3g。滑



第 570 図 古墳時代～平安時代の石製品(1)

石製。第88号住居跡出土。

小玉 4点出土している。3はガラス製。コバルトブルーの半透明の奇麗な小玉。径6mm、厚さ4mm、0.5g。滑石製。第68号住居跡出土。4は滑石製。淡い緑色の小玉。径9mm、厚さ4mm、0.5g。第23号住居跡出土。5は滑石製。淡い緑色の小玉。径6mm、厚さ4mm、0.5g。第61号住居跡出土。

管玉 3点出土している。6は大形の管玉で、碧玉製。片面穿孔で、きわめていねいに作られている。細長い管玉で、欠損部はない。光沢のある深緑色。長さは31mm、径12mm。7g。第67号住居跡出土。7は小形の管玉で、碧玉製。片面穿孔で、きわめていねいに作られている。破損が激しく、所々が剝離している。あるいは被熱した可能性もある。光沢のある深緑色。長さは20mm、径9mm。5g。第23号住居跡出土。8は大形の管玉で、滑石製。両面穿孔で、きわめていねいに作られている。残存状態は良い。乳白色。長さは26mm、径7mm。3g。第67号住居跡出土。

臼玉 5点出土している。欠損しているものが多く、完形品は少ない。比較的雑に金属製の工具で平坦部をカットされ、周辺部は磨かれている。全て滑石製である。大きさにばらつきはあるが、幅は8mm、径15mm。3g前後。8～11まで第67号住居跡から、12は第134号住居跡から出土している。

漆塗土玉 第67号住居跡から1点出土している。指押えによって作った土製の玉で、小さな穴が開いている。外面には、薄く漆の皮膜が確認できる。黒色。幅9mm、径12mm。2.5g。

土製切子玉 2点出土している。ただし出土遺構不明。表土層中。切子玉の土製模造品で、指押えによって切子玉の稜を表現している。一見管状土鍾状である。14は長さ20mm、径9mm。1.5g。15は長さ17mm、径11mm。1.5g。

土製小玉 1点出土している。出土位置不詳。長さ11mm、径7mm。1g。

(13) 遺物各説—古墳時代から奈良平安時代の石製模造品・紡錘車・土製鍾—

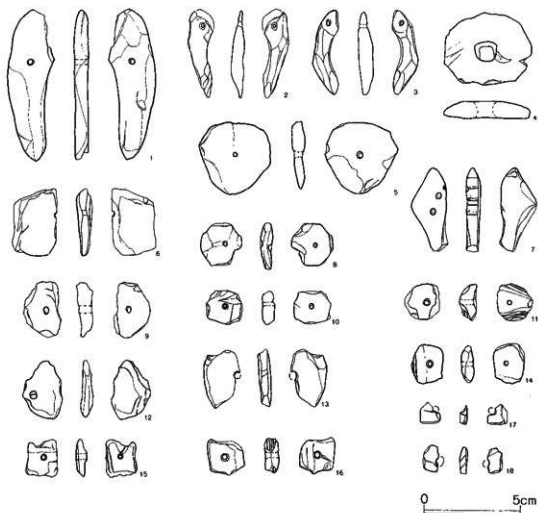
石製模造品は、未成品や破損品も含めて、43点が確認されている。各住居跡出土のほか、第103号住居跡に隣接した河川跡の埋没層から出土している。ただしここから出土した遺物は、湧水と水田の用水が激しく、細かな出土地点を示すことはできず、一括して取り上げざるをえなかった。なおここからは、写真図版89に示す石製模造品の削り屑も出土している。セー302付近である。

(第571図)

勾玉形模造品 1は、大形の勾玉形の模造品で滑石製。乳白色。頭部が破損している。低い位置に円孔が明けられている。鋭利な金属器によって粗削りされている。長さ79mm、幅23mm、厚さ7mm。20g。河川跡出土。2と3は、小形の勾玉形の模造品で滑石製。灰白色。頭部が破損している。頭部中央に円孔が穿たれている。鋭利な金属器によって粗削りされたままである。2は長さ47mm、幅12mm、厚さ6mm。4g。3は長さ46mm、幅8mm、厚さ7mm。両者とも、第77号住居跡から出土しており、一連のものと考えられる。

大形有孔円板 4は、大形の有孔円板で、表面が亀甲状、裏面が扁平になっている。中央に円孔が穿たれており、やや方形である。穿孔は、8×7mm。長径45mm、短径37mm、厚さ8mm。20g。第82号住居跡出土。5も大形の有孔円板で、中央に穿孔されている。両面ともに扁平。長径38mm、短径36mm、厚さ6mm。15g。第81号住居跡出土。

6～18は、不定形な石製模造品で、全て滑石製。白玉を意識しているようである。乳白色。次に法量のみを上げておく。6は穿孔部分が欠けている。長径34mm、短径22mm、厚さ8mm。8g。7は2つ穿孔部分があるが、貫通していない。長径43mm、短径18mm、厚さ7mm。7g。8は中央に両側から1つずつ穿孔されているが、貫通していない。長径22mm、短径22mm、厚さ6mm。3g。9は中央に1孔ある。貫通している。長径30mm、短径19mm、厚さ7mm。5g。10は中央に1孔貫通する穴がある。長径20mm、短径17mm、厚さ6mm。3g。11は貫通する穴が中央にある。長径19mm、短径19mm、厚さ9mm。3g。12は縁に貫通しない穴が1孔ある。長径31mm、短径20mm、厚さ6mm。4g。13は穿孔部分は欠けている。長径31mm、短径21mm、厚さ6mm。6g。14は中央に貫通する穴が1孔ある。長径20mm、短径16mm、厚さ6mm。3g。15は中央に貫通する穴が1孔ある。長径20mm、短径16mm、厚さ5mm。2g。16は中央に貫通する穴が1孔ある。長径19mm、短径17mm、厚さ7mm。5g。17は穿孔部分から欠けている。長径10mm、短径10mm、厚さ3mm。1g。18は穿孔部分から欠けている。長径14mm、短径7mm、厚さ3mm。1g。6～8・13は、河川跡出土。9は、第131号住居跡出土。12は、第125号住居跡出土。他は第92号住居跡出土。



第 571 図 古墳時代～平安時代の石製品(2)

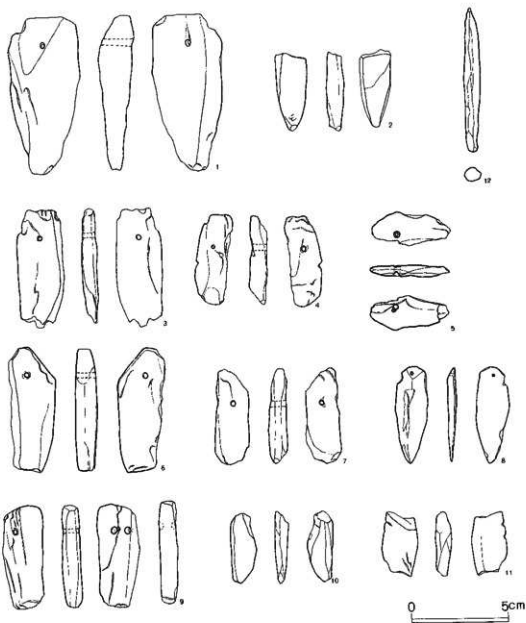
(第572図)

剣形模造品 1～11の11点が出土している。扁平な細長い板状の製品で、上端に1孔を穿つものを一括した。形骸化した剣形石製模造品と考えておきたい。1は大形の石製模造品で、長さ83mm、幅35mm、厚さ17mm。55g。2は上半部が欠損しており、正確な形状等は分からない。長さ41mm、幅16mm、厚さ8mm。10g。3は上端に穿孔が1孔ある。長さ62mm、幅22mm、厚さ8mm。16g。4はやはり上端に穿孔がある。長さ48mm、幅16mm、厚さ8mm。10g。5は上部欠損。あるいは刀子の柄と考えられる。長さ41mm、幅18mm、厚さ5mm。4g。6は上端に穿孔が1ある。長さ66mm、幅24mm、厚さ11mm。26g。7は上や中央に穿孔がある。長さ50mm、幅16mm、厚さ8mm。11g。8は剣形模造品。これだけが緑泥石片岩製で、他は乳白色の滑石製。長さ51mm、幅16mm、厚さ5mm。1g。9は上半に貫通しない穴が両側から1孔と、貫通する穴が1孔ある。長さ53mm、幅21mm、厚さ9mm。16g。10は穿孔がみられない。刀子の一部か。長さ37mm、幅13mm、厚さ7mm。5g。11は上下両端

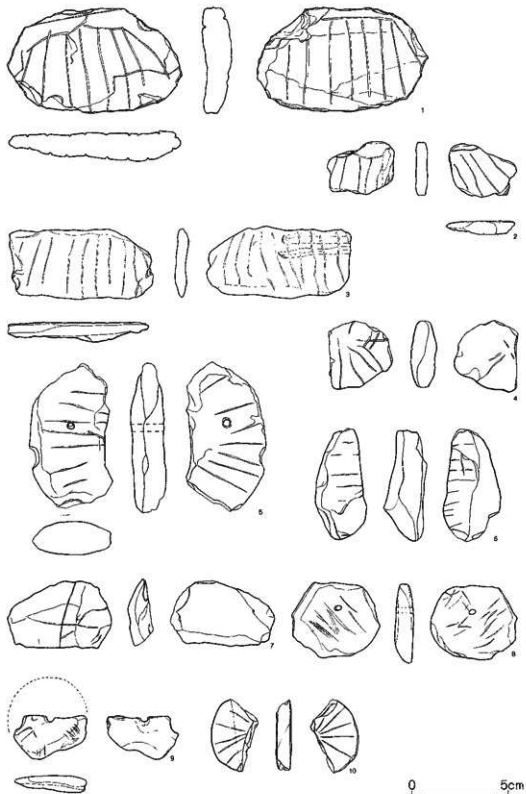
が欠損した石製模造品で、長さ31mm、幅17mm、厚さ8mm、5g。出土遺構は、1・3・4・6・7・9が第72号住居跡である。8が第18号住居跡。10が第81号住居跡。他は河川跡からの出土。

鉄錐形模造品 一点鉄錐の模造品と思われる棒状の石製模造品が出土している。外面は粗削りで仕上げられ、端部は丸く作られている。基部と思われる部分はやや細めに作られ、先端は尖っている。長さ76mm、幅8mm、6g。第55号住居跡出土。

(第573図)



第 572 図 古墳時代～平安時代の石製品(3)



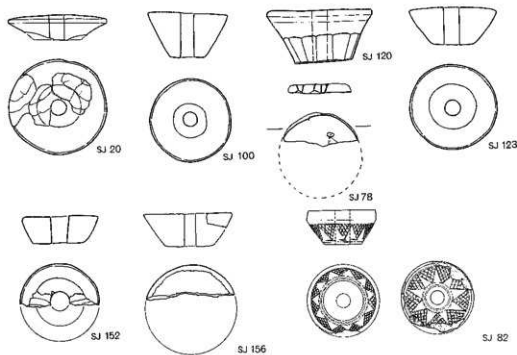
第 573 図 古墳時代～平安時代の石製品(4)

櫛形模造品 櫛形の石製模造品が、3点確認されている。全て滑石製である。1は、ほぼ完璧な形態を留めている。表裏面ともに、成形途上の粗割りの石材の表裏面に細い線刻を施し、ムネと歯を表現している。表面はムネの表現が良くみられるが、裏面はみにくい。外縁部は、ていねいに成形されている。ムネは、ハの字状に開かれており、このなかに表裏面6本ずつの歯の表現がみられる。間隔はまばらで、11~7mm程度開いている。線刻は、鋭利な金属器で刻まれたものと思われる。大きさは、長さ91mm、幅54mm、厚さ14mm、101g。

2は、ムネの部分の表現がなく、おそらく欠損したものと思われる。表裏面ともに、成形途上の粗割りの石材の表裏面に細い線刻を平行に施し、歯を表現している。外縁部・表裏面ともに、成形は雑である。歯の表現は、表裏面ともに9本ずつみられる。間隔はまばらで、10~5mm程度開いている。鋭利な金属器で線刻されたものと思われる。長さ72mm、幅36mm、厚さ8mm、38g。

3は、ムネ・歯ともに明瞭に表現されているが、破片である。粗割りの後に、表裏面がていねいに磨かれている。とくにムネ部分の研磨がていねいである。ムネと歯は、一本の横線で仕切られ、表面にはムネに直行する6本の歯が付けられている。裏面には、僅かにムネの表現とこれに斜行する4本の線刻を読み取ることができる。長さ33mm、幅26mm、厚さ7mm、10g。全てセー302付近出土。

勾玉形模造品 中央やや上に円形の小さな穴のある模造品で、子持ち勾玉・勾玉・櫛形等の模造



第 574 図 古墳時代~平安時代の紡錘車

品と考えられる。表裏面ともに荒削りの後、ていねいに磨いている。穿孔は、表面から片面穿孔されている。表面には、平行しつつ中央に向かう線刻が、8本確認され、穿孔部分を避けている。裏面には、やはり中央に向かい線刻が、8本確認されている。縁部分では、内側の抉ぐり込み部分と、外側の峰部分には、断片的に確認することができる。頭部と尾部が欠損していると考えられる。長さ79mm、幅32mm、厚さ16mm、81g。セー302付近出土。

そのほかの線刻された石製模造品 そのほか線刻された滑石が、6点確認されている。5は長軸に直行するように5本の線刻がみられる。裏面にも9本の線刻がみられる。長さ60mm、幅26mm、厚さ21mm、38g。6は不正三角形の石製模造品で、表面に放射状の線刻がみられ、裏面にはみられない。いわゆる線刻円板であろう。長さ35mm、幅34mm、厚さ13mm、20g。7は中央に穿孔があり、表裏面に細かな線刻がみられる。有溝円板。長さ47mm、幅38mm、厚さ9mm、25g。8は表面に数本の線刻がみられるが他にはみられない。長さ54mm、幅34mm、厚さ11mm、29g。9は中心から放射状に線刻が伸びる。なお外縁部及び表裏はていねいに磨かれている。穿孔部分は欠損している。長さ38mm、幅25mm、厚さ7mm、11g。10は、表裏に数条の線刻がみられる。中央に穿孔されている。有孔円板。長さ40mm、幅22mm、厚さ7mm、10g。

石製模造品の表裏は、任意に設定した。

(第574図)

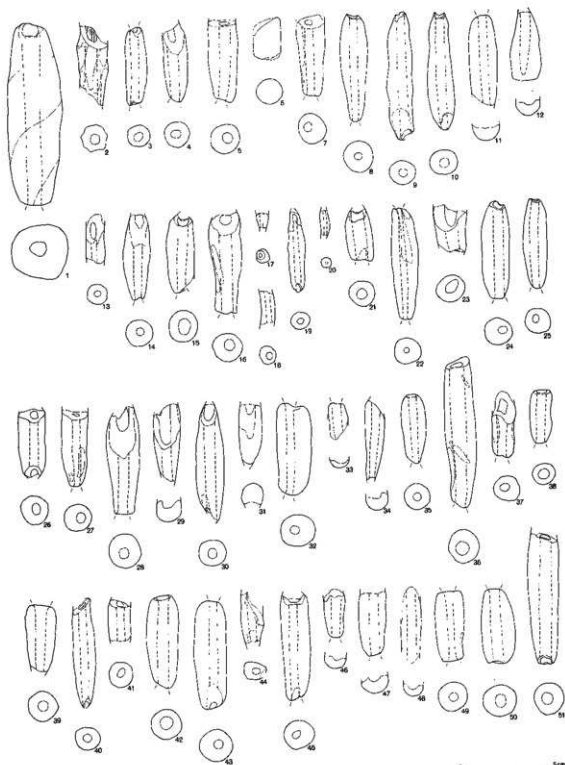
紡錘車 石製・土製の紡錘車は、各住居跡から7点出土している。土製紡錘車は、第120号住居跡から1点確認されているだけである。上部は奇麗にヨコナデされており、下部を縦にヘラケズリしている。上径56mm、下径30mm、高さ27mm、66g。

石製紡錘車は、5点確認されている。第20号住居跡出土のものは、扁平で精巧にできている。上径53mm、下径26mm、高さ13mm、45g。第78号住居跡出土のものは、滑石製の資料で、破片。上径45mm、下径不明、高さ不明。(4)g。第82号住居跡出土のものは、底面と側面に内向する鋸歯文がみられる。細かな線刻で構成され、三角内は格子状に線刻される。側面に稜をもつ。上径56mm、下径30mm、高さ27mm、66g。以上古墳時代の石製紡錘車。

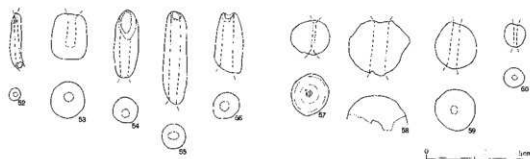
第100号住居跡出土のものは、高さの高い石製紡錘車である。上径42mm、下径18mm、高さ23mm、50g。第123号住居跡出土のものは、各部の作りの雑な紡錘車である。上径47mm、下径21mm、高さ20mm、50g。第152号住居跡出土のものは、半分破損している。上径40mm、下径26mm、高さ14mm。(20)g。第156号住居跡出土のものは、上部の一部しか残っていない。上径47mm、下径(25)mm、高さ(17)mm。(10)g。以上は奈良時代の石製紡錘車。

(第575・576図)

土製錘 管状土錘といわゆる土玉がある。管状土錘は、56点確認されており、第67号住居跡から発見された1点を除き均一な形態である。1は、岩瀬分類のC類(岩瀬 1991)に当たり、他はDないしE類に当たる。土玉は、4点確認され、大形のものと小形のものがある。出土遺構による偏りはなく、ほとんどが、竪穴式住居跡の覆土中から出土している。



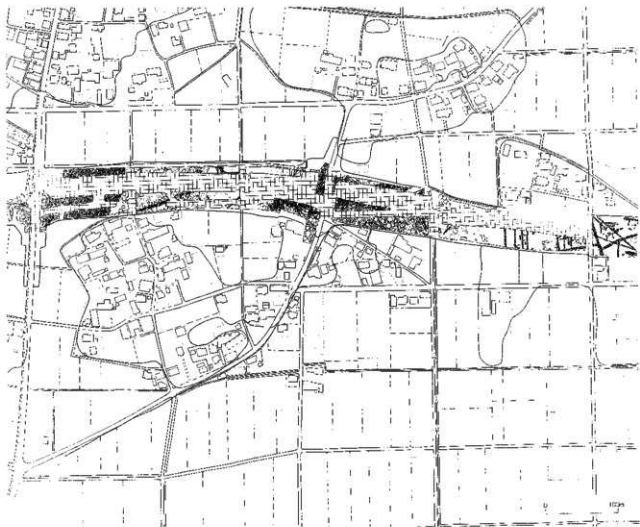
第 575 図 古墳時代～平安時代の土製轆(1)



第576図 古墳時代～平安時代の土製罐(2)

第244表 土罐計測表

番号	出土遺構	長さ mm	径 mm	高さ g	番号	出土遺構	長さ mm	径 mm	高さ g
1	S J 67	95	29	79.00	31	S J 94	(31)	(12)	9.91
2	S J 14	(40)	14	6.76	32	S J 95	48	19	16.35
3	S J 16	41	12	3.30	33	S J 97	(19)	(10)	0.76
4	S J 16	(42)	15	6.66	34	S J 97	(41)	(12)	3.50
5	S J 23	(44)	17	12.40	35	S J 99	36	14	1.66
6	S J 25	21	14	3.83	36	S J 100	79	21	22.38
7	S J 27	(13)	15	12.13	37	S J 100	(34)	15	5.42
8	S J 27	57	16	12.46	38	S J 103	26	12	4.00
9	S J 33	57	15	9.15	39	S J 117	(35)	11	8.64
10	S J 33	63	14	8.35	40	S J 118	(58)	14	9.45
11	S J 33	(48)	14	5.10	41	S J 119	(22)	12	4.30
12	S J 33	(38)	16	4.40	42	S J 126	49	11	10.08
13	S J 33	(28)	11	9.15	43	S J 127	34	12	21.78
14	S J 43	(45)	15	7.42	44	S J 131	(27)	(12)	2.41
15	S J 43	(41)	16	9.73	45	S J 134	(55)	16	12.70
16	S J 52	(54)	17	14.19	46	S J 134	(25)	(12)	2.00
17	S J 67	(8)	7	1.23	47	S J 134	(33)	(15)	4.13
18	S J 67	(17)	10	1.89	48	S J 139	(40)	(12)	2.03
19	S J 67	(42)	10	2.27	49	S J 150	37	15	10.93
20	S J 67	(13)	6	0.41	50	S D 23	30	18	12.85
21	S J 68	(28)	14	4.37	51	S K 1	(67)	15	17.13
22	S J 73	59	14	12.57	52	表様	(28)	0	0.98
23	S J 75	(26)	16	5.33	53	表様	24	20	10.75
24	S J 75	52	18	11.02	54	表様	36	13	6.11
25	S J 76	47	13	7.89	55	表様	49	13	9.01
26	S J 76	(37)	14	7.74	56	表様	32	14	6.30
27	S J 78	(41)	15	8.90	57	S J 119	17	22	19.43
28	S J 81	(56)	12	14.17	58	S J 47	(29)	(31)	12.99
29	S J 82	(41)	(13)	4.57	59	表様	25	21	9.56
30	S J 91	(61)	13	10.50	60	表様	12	11	1.36



第577図 中・近世の新屋敷東遺跡

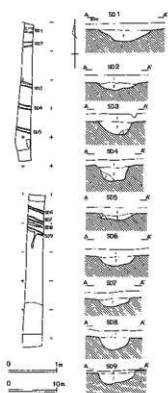
10 中・近世の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物の概観

平安時代後葉の水田跡を残し、人々の痕跡は見られなくなる。再び新屋敷東遺跡に人々の姿が現われるのは、14世紀、鎌倉時代も終ろうとしていたころである。以来、江戸時代に至るまで、人々の痕跡をたどることができる。

遺跡は、大きく2つの領域から構成されている。新田裏遺跡に連続する大きな堀に囲まれた一角と、数条の溝がみられる田畑である。前者は、明治10年の迅速図に見られる大神宮に関連した施設ではないかと思われる。堀・溝・墓塚・井戸・一面庇付獨立柱建物跡などが確認されている。

遺物としては、最も古いもので元弘三年銘のある板碑を始め、輸入陶磁器破片・常滑産大甕破片古瓦・古銭・石臼・砥石などの中・近世特有の遺物が見られる。遺跡の大半は耕地である。遺物の出土は僅少で、新田裏遺跡側から出土しているものがほとんどである。



第578図 中・
近世の遺構(1)

めの溝で調査区の片側では、とざれがちである。出土物はなかった。

第3号溝 幅70cm、深さ25cmの溝で、調査区を横断している。掘り方は「コ」の字形でやや深い。出土物はなかった。

■集落の構成 確認された遺構は、堀2条・溝59条・墓塚44基・井戸5井である。新田裏遺跡に隣接する付近は、迅速図にある大神宮と関係した遺構と考えられる。遺構の重複から、少なくとも堀跡の機能していた段階と、堀が機能的に廃絶してからの二つに分けて考えることができる。新田裏遺跡では、掘立柱建物・墓塚群「コ」の字形の堀が、周到に配置されていた。これに連続する形で堀や墓塚群が確認されている。

しかし集落としての遺構・遺物、掘立柱建物跡や日常雑器の出土量が少ないことから、集落はここより南、あるいは北側に広がっていたものと思われる。

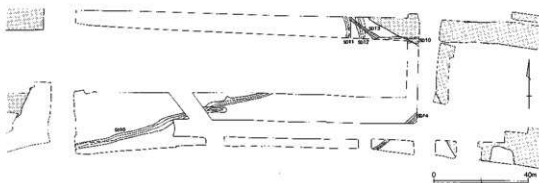
またこの西側には、流路の不定形な溝が多く確認されている。おそらく自然の微地形を明快に利用した水懸かりが、存在していたことであろう。

(2) 遺構各説—遺構構築段階—

(1) 溝跡 新屋敷東遺跡の中近世の溝跡は、48条確認されている。北西隅から遺構番号をふった。新田裏遺跡の溝跡と一致するものもあるが、ここでは別個の遺構番号をふることにした。

第1号溝 幅110cm、深さ23cmの溝で、調査区を横断している。出土物はなかった。

第2号溝 幅80cm、深さ15cmの溝で、調査区を横断している。



第579図 中・近世の遺構全体図(1)

第4号溝 幅70cm、深さ28cmの溝で、調査区を横断している。掘り方は「コ」の字形。やや深い
調査区の片側ではとぎれがち。出土遺物はなかった。

第5号溝 幅70cm、深さ18cmの溝で、調査区を横断している。浅く皿状の掘り方。遺物なし。

第6号溝 幅75cm、深さ15cmの溝で、調査区を横断している。掘り方は皿状。遺物なし。

第7号溝 幅65cm、深さ18cmの溝で、調査区を横断している。掘り方は皿状。第6号溝・第8号溝
と接近している。遺物なし。

第8号溝 幅80cm、深さ25cmの溝で、調査区を横断している。掘り方は皿状。出土遺物なし。

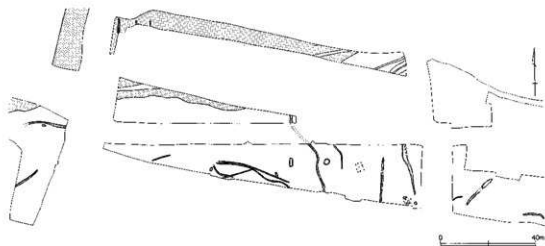
第9号溝 幅75cm、深さ20cmの溝で、調査区を横断している。掘り方はやや皿状。遺物なし。

第1号溝から第9号溝までは、似通った様相を示し、覆土の状況や流れの方向から一連のものと考えられる。新屋敷東遺跡内からは、他に似た様相の遺構は見られないが、おそらく畝作に関係した遺構と考えられる。覆土は、1層 表土層でここには、遺構の掘り込みが見られない。淡い黄褐色土層。2層 遺構内の覆土。粘性のある土層で、細かな鉄分の沈着が随所に見られる。黒色土層。3層 遺構内の覆土。粘性のある土層で、2層に比べ砂質。淡い黒色土層。

畝作遺構は、水田跡の調査とともに、各地で近年発見例が相次ぎ、調査方法や研究課題として注目を浴びてきている。新屋敷東遺跡の畝跡と考えられるこの遺構は、狭い面積であることに加え、梅雨時の調査であったために、満足のいく調査結果は得られていないが、以下のことが分かった。

- ①妻沼低地で始めて確認された畝跡である。
- ②水田跡とともに確認されている。
- ③耕作されていた年代は、出土遺物がないためにわからないが、浅間山B軽石層よりも新しい。
- ④遺構は、等高線に平行している。
- ⑤他に直接関係した用水路等は、確認されていない。

これらから今後こうした遺構が、妻沼低地では、数多く確認されていく可能性がある。類例の充



第580図 中・近世の遺構全体図(2)

突を待ち、相互の関係性を検討していきたい。

第10号溝 幅175cm、深さ58cmの溝で、調査区を東西に縦断している。比較的大形の溝で、西から東にむかって流れていたと考えられる。第11・12・13号溝と重複するようであるが、明確な重複関係は見られない。取水は、上敷免遺跡の東側で、新屋敷東遺跡の西に広がる谷地（自然流路のあった可能性あり）から行なわれていたと考えられる。なおこの溝による区画が、発掘調査前まで残されていた。

出土遺物は、7世紀後半から近世に至るまでであるが、この溝の開削に伴う出土遺物はみることができない。

第11号溝 幅205cm、深さ12cmの溝で、きわめて緩やかな傾斜である。第13号溝よりも新しい。調査区を南北に横断する。調査区の南側では、確認することができなかった。おそらく第10号溝と取配水関係にあるのであろう。第12号溝と平行する。出土遺物はない。

第12号溝 幅380cm、深さ45cmの溝で、幅の割には、きわめて緩やかな傾斜である。第13号溝よりも新しい。調査区を南北に横断する。調査区の南側で確認することができず、第11号溝とともに第10号溝から取配水関係にあるのであろう。

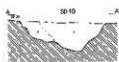
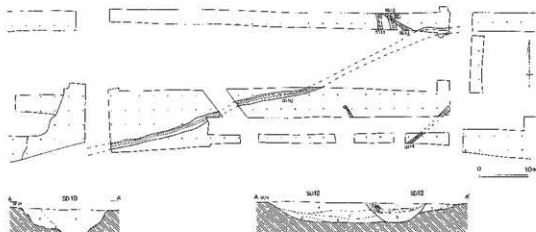
第10号溝は、調査区の設定から重複関係が確認できないが、溝の流れ方向から第11・12号溝と同時に存在していた可能性がある。この2本の溝は、平行して走ることからおそらく中心部は、通路状の施設であったと思われる。そしてこの両側は、水田域として耕作されていたのであろう。年代的な位置付けは難しいが、近世の耕地を潤す溝であろう。第10号溝を幹水路、第11・12号溝を枝水路とした水田経営が考えられる。

第13号溝 幅118cm、深さ43cmを測る。幅に比べ深い溝で、調査区を西北から東南に向かって流れている。第14号溝とは直行するが、調査区内では確認することができなかった。第12号溝よりも新しい。砂質の粘土層が堆積しており、水の流れたことが分かる。出土遺物はない。

第14号溝 幅65cm、深さ17cmを測る。細い溝である。調査区を西南から東北に向かって流れる。第13号溝とは直行するが、調査区内では確認できなかった。第12号溝よりも新しい。砂質の粘土層が



第581図 中・近世の遺構全体図(3)



第10号溝上層説明

1. 暗青灰色土 暗赤褐色粒多き含む。粘性强
2. 暗青灰色土 暗赤褐色粒多き含む。暗赤褐色ブロック多き含む。粘性強。しまり強
3. 暗青灰色土 砂質土層。しまり強。粘性强。礫性質及びパミス全体的に含む

4. 暗褐色土 礫土以下少層含む。炭化粒多き含む。比較的均一。
5. 暗褐色土 礫土以下少層含む。炭化粒以外の遺入物少。比較的均一。

第11号溝上層説明

1. 暗褐色土 暗赤褐色粒多き含む。炭化粒多き含む。粘性強し



第11号溝上層説明

1. 暗褐色土 暗赤褐色粒多き含む。暗赤褐色ブロック多き含む
2. 暗褐色土 暗赤褐色粒多き含む
3. 暗褐色土 暗赤褐色粒多き含む



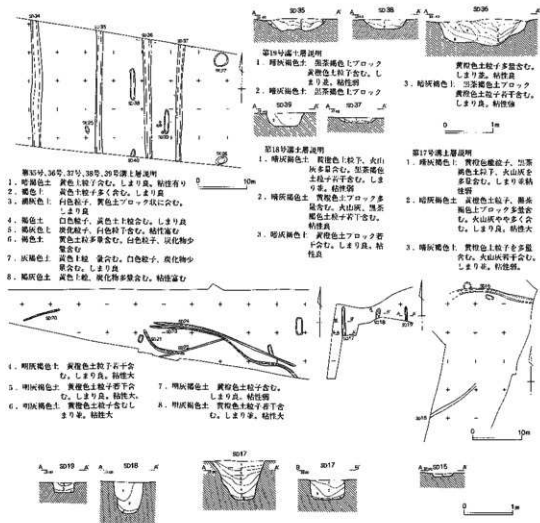
第12号・13号溝土層説明

1. 暗褐色土 火山灰多量混入。粘性強。しまり強
2. 暗褐色土 暗青褐色土 粘土質の粘層。火山灰若干混入
3. 暗褐色土 粘土質の粘層。火山灰ブロック状にオートランダム混入
4. 暗褐色土 3層より若干明るい。粘土質。混入物稀



第582図 中・近世の遺構(2)





第583図 中・近世の遺構(3)

堆積しており、水の流れたことが分かる。出土遺物はない。

両者は直行すること、また溝の形態も近似することから、何らかの関連性をもって考えられよう。とくに開削の時期を示す遺物はないが、近世以降の所産であろう。

このゾーンには、時期の異なる二つの耕作痕跡、とくに水田跡の存在していたことが明らかになった。水田経営に欠くことのできない水の流れは、南西から東北にむかっており、調査区の南西部のある地点に、取水地点を求めることができる。取水に直接関係した河川は、旧小山川ないしは福川と思われる。

第15号溝 幅45cm、深さ5cmを測る。幅に比べ浅い溝である。調査区を南西から北東に向かって流れている。重複関係はみられない。砂質の粘土層が堆積しており、水の流れたことが分かる。きわめて新しい溝で、調査前まで排水路として使用されていた。出土遺物はない。

第16号溝 幅110cm、深さ25cmを測る。幅広だが浅い溝である。調査区を西から東に向かい流れ

る。第15号溝と調査区域外で連結する可能性がある。砂質の粘土層が堆積しており、水の流れたことが分かる。出土遺物はない。

第15・16号溝は、近代の宅地及び、瓦工房に関係した排水路である可能性が高い。それは、調査前、この溝に囲まれた位置に、最近まで操業していた瓦工房があったためである。この工房の雑排水を、従来からあった溝に流していたという。

第17号溝 幅113cm、深さ80cmを測る。幅に比べ深い溝である。調査区を北から南に向かって走る。北側は、終始している。重複関係はみられない。砂質の粘土層と、粘性の大変強い粘土層が、互層となって堆積しており、水は流れたか不明である。出土遺物はない。

第18号溝 幅64cm、深さ65cmを測る。幅に比べ深い溝である。調査区を北から南に向かって走る。北側で溝は終わっている。粘土と砂質粘土の互層は、第17号溝と同様である。出土遺物はない。

第19号溝 幅45cm、深さ20cmを測る。幅に比べ浅い。しかし遺構確認が深かったためもあり、一概に浅いとは言えない。調査区を北から南に向かって走る。北側で溝は終わっている。粘土と砂質粘土の互層は、第17号溝と同様である。出土遺物はない。

第17～19号溝は、溝の終点が、ほぼ等しくさらに方向も等しい。三本が、具体的な関係性をもって存在していたことが分かる。この溝に挟まれた部分は、畝状の遺構が存在したであろうことは予想される。地形は、西から東にむかって緩やかに傾斜している。等高線に平行する形で溝が作られている。

第20号溝 幅25cm、深さ5cmを測る。浅く細い溝である。調査区を南西から北東に向かって流れている。重複関係は見られない。砂質の粘土層が堆積している。出土遺物はない。

第21号溝 幅53cm、深さ25cmを測る。細いが深い溝である。調査区を北から東に向かい、大きくカーブしながら流れる。出土遺物はない。

第22号溝 幅15cm、深さ10cmを測る。浅く細い溝である。調査区を南西から北東に向かって流れている。第22・23・24号溝よりも新しい。砂質の粘土層が堆積している。出土遺物はない。

第23号溝 幅50cm、深さ25cmを測る。細いが深い溝である。調査区を西から蛇行しながら、南に向かい流れる。出土遺物はない。

第24号溝 幅40cm、深さ20cmを測る。浅く細い溝である。調査区を西から東に向かって流れる。第23号溝と部分的に平行しながら流れる。出土遺物はない。

第25号溝 幅50cm、深さ25cmを測る。細いが深い溝である。調査区を南から北へ蛇行しながら流れる。調査の設定によって、二本の溝のように見えるが、一本である。出土遺物はない。

第26号溝 幅35cm、深さ10cmを測る。細いが深い溝である。調査区を南から蛇行しながら、北に向かい流れる。出土遺物はない。第25号溝と平行している。出土遺物はない。

第20～26号溝は、蛇行して流れることや、随所でカーブしていることなどから、近代の屋敷巡りの排水路としての機能をもっていただけと考えられる。とくにキー-274付近で、流れが南北に分かれることは注意しておく必要があろう。

第27号溝 幅58cm、深さ23cmを測る。浅く広い溝である。調査区を南西から北東に向かって流れている。第29号溝よりも新しい。砂質の粘土層が堆積している。出土遺物はない。

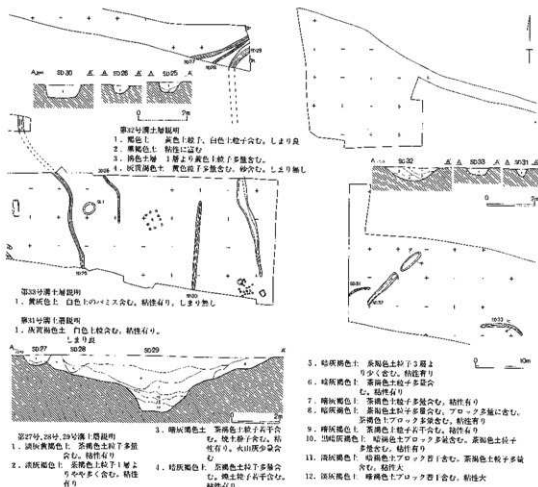
第28号溝 幅53cm、深さ38cmを測る。広く浅い溝である。調査区を南西から北東にむかって流れている。出土遺物はない。

第27・28号溝は、河川跡に平行して作られた溝跡で、現行の農業用水の先駆と考えられる。なお次の第29号溝も第28号溝と一部平行するが、細かなことは分からない。

第29号溝 幅425cm、深さ120cmを測る。広く深い溝である。調査区を南西から北東に向かって流れている。溝のルートが調査区域内では、はっきりしていないが、河川跡にそって北東に流れていくのであろう。第27・28号溝よりも古い。砂質の粘土層が堆積している。出土遺物はない。

第30号溝 幅76cm、深さ24cmを測る。広く浅い溝。北から南に向かって流れる。覆土が淡い灰色粘土で、この溝の成立自体それほど古くはなく、おそらく近年の区画溝であろう。出土遺物はみられなかった。

第31号溝 幅22cm、深さ15cmを測る。浅く細い溝。調査区を西から東に向かって流れる。出土遺物はみられない。



第584図 中・近世の遺構(4)

第32号溝 幅113cm、深さ27cmを測る。広く浅い。土壇状の掘り込みが、連続している。南西から北東に向かって流れている。出土遺物はない。

第26号溝 幅45cm、深さ13cmを測る。細く浅い溝である。調査区を西から蛇行しながら、南に向かい流れる。出土遺物はない。

第31～33号溝には、共通した構成要素はみられなかった。

第34号溝 幅100cm、深さ25cmを測る。広く浅い溝。調査区を南から北にむかってややカーブしながら流れる。出土遺物はみられない。

第35号溝 幅113cm、深さ24cmを測る。広く浅い溝。調査区を南から北にむかって一直線に流れる。出土遺物はない。

第36号溝 幅185cm、深さ55cmを測る。広く浅い溝である。調査区を南から北にむかって一直線に流れる。出土遺物はない。

第37号溝 幅78cm、深さ18cmを測る。広く浅い溝。調査区を南から北にむかって一直線に流れる。出土遺物はみられない。

第34～37号溝にかけては、同規模の溝が、ほぼ等間隔に4本流れていることとなる。これがかいなる遺構を示しているのか判断に苦しむ。しかし同時存在とすれば、畝状の遺構を考えることができよう。

第38号溝 幅90cm、深さ18cmを測る。広く浅い溝。南から北に傾斜する。出土遺物なし。

第39号溝 幅80cm、深さ28cmを測る。広く浅い溝。南から北に傾斜する。出土遺物なし。

第40号溝 幅80cm、深さ20cmを測る。広く浅い溝。南から北に傾斜する。出土遺物なし。

第38～40号溝にかけては、単発的な土壇状の溝で、本来通水のための溝とは考えられない。しかし第36号溝などと方向や形態が似るために、これらの溝と関係させて考えることも全く無意味ではないであろう。

第41号溝 幅34cm、深さ55cmを測る。狭く大変深い溝。南から流れ、大きくカーブし東に向かう。

第1号堀よりも新しく、第1号堀の廃絶後に作られている。。出土遺物なし。

第42号溝 幅55cm、深さ30cmを測る。広く深い溝。第1号堀に平行やや北に振れて、北から南に向かって流れる。途中第3号井戸跡と交叉する。第3号井戸よりも新しい。

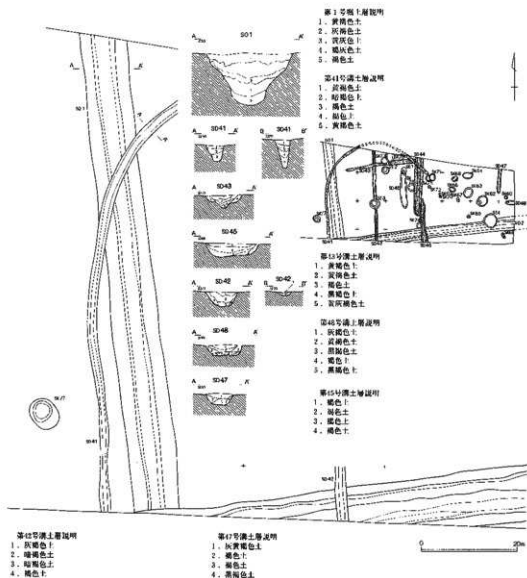
第43号溝 幅72cm、深さ24cmを測る。広く浅い溝。西から東にむかって流れる。第2号堀に平行している。出土遺物はない。

第44号溝 幅76cm、深さ45cmを測る。広く深い溝。第1号堀に平行やや北に振れて、南から東にむかって流れている。第46号溝よりも新しい。

第45号溝 幅130cm、深さ70cmを測る。広く深い溝。第1号堀に平行して北から南にむかって流れる。出土遺物なし。

第46号溝 幅55cm、深さ30cmを測る。広く深い溝。第1号堀に平行やや北に振れて、北から南に向かって流れる。しかし土壇状に途中で遺溝はとぎれているため、はたして通水機能があったのか分からない。出土遺物はない。

第47号溝 幅70cm、深さ23cmを測る。広く浅い溝。第1号堀に平行やや北に振れて、北にむかって



第585図 中・近世の遺構(5)

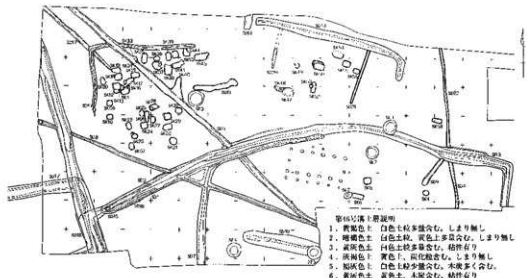
流れる。出土遺物はない。

第48号溝 幅75cm、深さ25cmを測る。広く深い溝。第2号堀に平行や北に振れて、東にむかって流れている。出土遺物はない。

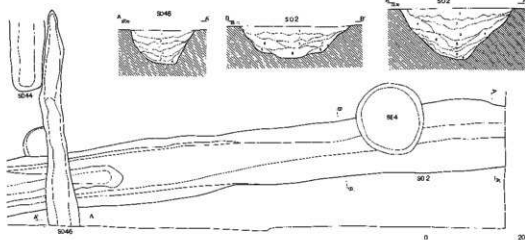
第41号溝から第48号溝に至るまでは、概第1号堀と第2号堀に囲まれたなかに位置する遺構で、新田裏遺跡と大きく関わる遺構と考えられる。

(2)堀跡 新田裏遺跡と接する、新屋敷東遺跡の東端で2条の堀跡が確認されている。大形の堀で、遺跡内を区画する。迅速図にある大神宮と関わる遺構であろうか。

第1号堀 幅380cm、深さ220cmを測る。広く深い堀り、南北にむかって流れている。底部近くに



- 第6号溝土層説明
1. 黄褐色土 白色土粒多量含む。しまり無し
 2. 黄褐色土 白色土粒多量含む。しまり無し
 3. 黄褐色土 白色土粒多量含む。粘付有り
 4. 黄褐色土 黄色土、炭化物含む。しまり無し
 5. 黄褐色土 白色土粒少量含む。木炭多く含む。
 6. 黄褐色土 黄色土、木炭含む。粘付有り



第2号堀土層説明

- | | | |
|--|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黄褐色土 黄色土粒、木炭粒少量含む
しまり良、粘付有り 2. 褐色土 黄色土粒、白色土粒含む
粘土質。しまり良 3. 黄褐色土 白色土粒、黄色土フロック
状に含む。粘土質 | <ol style="list-style-type: none"> 4. 褐色土 白色土粒、黄色土粒含む。 5. 黄褐色土 白色土粒、炭化物含む
粘付に固む 6. 褐色土 黄色土粒多量含む。白色土
粒。炭化物少量含む。粘付
有り | <ol style="list-style-type: none"> 7. 黄褐色土 黄色土粒多量含む。白色土
粒。炭化物少量含む。 8. 黄褐色土 黄色土粒、炭化物多量含む 9. 褐色土 黄色土粒多量含む。粘付有
り。しまり良 |
|--|--|---|

第586図 中・近世の遺構(6)

砂層が存在したことから通水のあったことが分かる。土塁については、覆土中にその痕跡は認めにくい。しかし東側に隣接した場所が、6m程度オープンになっているため、可能性は捨て切れない。出土遺物は、近世の陶磁器破片や、緑泥石片岩製の板碑の破片がみられるが、第2号堀に比べ相対的に少ない。

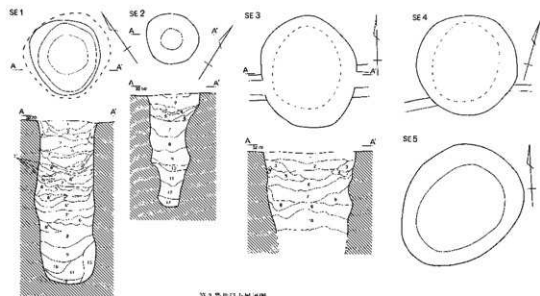
第2号堀 幅470cm、深さ220cmを測る。広く深い掘り方で、東西にむかって流れている。新田裏遺跡第17号溝に続き、中世の主要な遺構の一角を構成する。底部近くに砂層が存在したことから通水のあったことが分かる。土塁については、覆土中にその痕跡は認めにくい。しかし北側に隣接した場所が、6m程度オープンになっているため、可能性は捨て切れない。出土遺物は、近世の陶磁器破片や、内耳鍋、常滑産大甕。緑泥石片岩製の板碑の破片など豊富にみられる。

堀跡に伴う構造物は全く見られないが、新田裏遺跡と共通した遺構、遺物の様相から、『新編武蔵風土記稿』にある大神宮の一角を構成すると思われる。

(3) 井戸 新屋敷東遺跡からは、井戸跡が5井確認されている。4つは東端周辺から、1つは新屋敷東遺跡のほぼ中央から確認されている。

第1号井戸 円形の井戸で、径175cm、深さ400cmである。濁水期に調査を行なったため、井戸底まで調査できた。大変深い井戸である。覆土は砂層と、粘土の互層である。出土遺物はない。

第2号井戸 円形の井戸で、径175cm、深さ278cmである。濁水期に調査を行なったため、井戸底まで調査できた。井戸の断面は、凹凸が激しく、足掛りのものも存在する。粘土と砂の互層で構成されている。出土遺物はない。



第1号井戸土層説明

1. 黄褐色土 白色砂子含む
2. 黄褐色土 白色砂子、焼土含む、しまり良
3. 褐色土 黄色砂子多量含む、しまり良
4. 褐色土 白色砂子、焼土、炭化物少量含む
5. 黄褐色土 褐色土層、炭化物含む、しまり良粘性有り
6. 褐色土 黄色砂子、炭化物少量含む、しまり良粘性有り
7. 褐色土 黄色砂子多量含む、砂質、しまり不良、粘性無し
8. 黄褐色土 黄色土ブロック状を含む、粘性有り、しまり不良
9. 黄褐色土 黄色土ブロック状を含む、粘性有り、しまり不良
10. 黄褐色土 黄色砂子、炭化物少量含む、粘性有り、しまり無し
11. 褐色土 黄色土(ブロック状)、炭化物含む、粘性有り
12. 褐色土 砂質含む、しまり無し
13. 黄褐色土 黄色土ブロック状を含む、粘性有り、しまり無し

第2号井戸土層説明

1. 黄褐色土 木炭粒多量含む、しまり無し
2. 黄褐色土 黄色砂子、少量木炭粒含む、しまり無し
3. 黄褐色土 木炭粒、焼土少量含む、しまり無し
4. 褐色土 地上多量含む
5. 黄褐色土 黄色砂、焼土含む、しまり良
6. 褐色土 黄色砂子多量含む、しまり良
7. 褐色土 黄色砂子、焼土含む、若干粘性有り
8. 黄褐色土 黄色砂子、多く含む、しまり無し、粘性有り
9. 黄褐色土 黄色砂子少量含む、しまり無し、粘性有り
10. 黄褐色土 黄色砂子少量含む、砂質、しまり無し
11. 黄褐色土 黄色砂子少量含む、砂質、しまり無し
12. 黄褐色土 黄色土多量含む、しまり無し粘性有り
13. 黄褐色土 黄色土多量含む、しまり無し、粘性有り

第3号井戸土層説明

1. 黄褐色土 白色砂子、黄色砂子含む
2. 黄褐色土 白色砂子、黄色砂子、木炭粒含む、しまり良
3. 褐色土 黄色砂子多く含む、しまり良
4. 褐色土 黄色砂子多量含む、少量木炭粒有り
5. 褐色土 黄色砂子少量含む、しまり良
6. 黄褐色土 黄色砂子、木炭粒含む、しまり良、粘性有り
7. 褐色土 黄色土ブロック状を含む、木炭有り、粘性有り
8. 黄褐色土 木炭粒、黄色砂子少量含む、しまり良、粘性有り
9. 黄褐色土 黄色土、木炭粒、赤色砂子含む、粘性有り
10. 黄褐色土 黄色土ブロック状を含む、しまり無し、粘性有り

第587図 井戸跡

第3号井戸 円形の井戸で、径275cm深さ200cm以上である。湧水のため井戸底まで掘り切れていない。第42号溝の埋没後に作られた井戸である。粘土と砂の互層によって覆土は構成されている。

第4号井戸 円形の井戸で、径250cm深さ——cmである。湧水のためほとんど掘れなかった。第2号堀の肩部分に存在する井戸で、第2号堀の埋没後に作られた井戸である。粘土と砂の互層によって覆土は構成されている。板碑破片や常滑産大甕の破片が出土している。

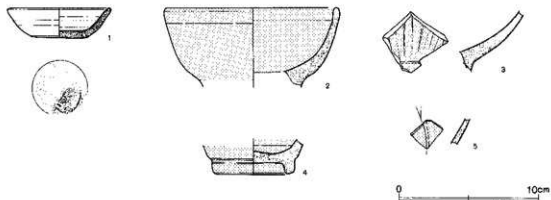
第5号井戸 円形の井戸で、径270cm深さ——cmである。湧水のため井戸底まで掘り切れていない。覆土の状況は不明。出土遺物なし。

井戸は、生活用の汲み水として利用されていたと考えられる。それは、新田裏遺跡との関係や、近世の屋敷跡との関係から追証できる。

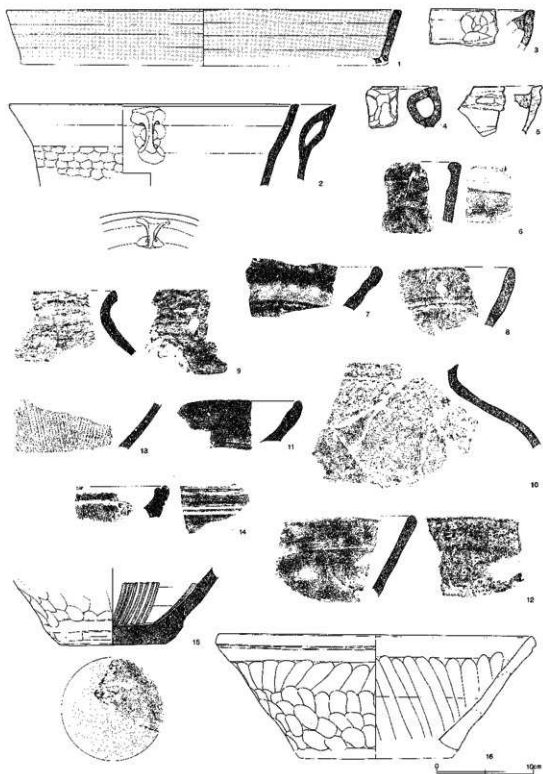
(3) 遺物各説 一窯業製品一

輸入陶磁器(第588図)新屋敷東遺跡から5点の輸入陶磁器が確認されている。1は、底部から口縁部までである坏の破片で、硬質の焼成である。糸切りが残る。2～5は、青磁碗の破片である。2は、濃い緑色の釉がたっぷりとかかっている。高台の付く碗形の器形で、高台の部分は欠損している。口径123mmを測る。口縁部が僅かに膨らむ。底部は厚い。3は、外面に連続した蓮弁を配する碗で、濃い緑色である。2葉分が残る。底部は太い。4は、高台の付いた碗で、外面・高台の内側・内面には、緑色の釉がたっぷりとかかっている。器厚は太い。5は、連弁碗の小破片である。内外面に薄く緑色の釉が、たっぷりとかかっている。器厚は大変薄い。すべて第2号堀の覆土中から出土している。

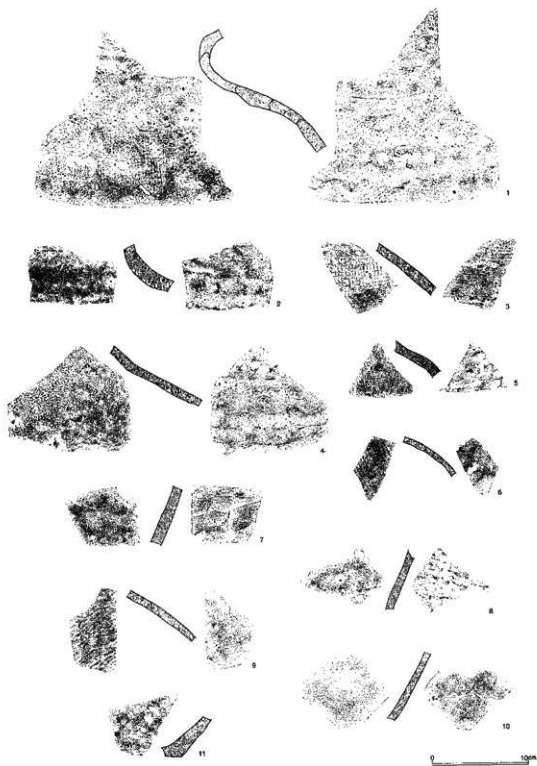
内耳土器(第589図1～5)内耳土器は、浅い扁平なものと深いバケツ形のものの確認されている。1は、大形の内耳土器で、把手部分は確認されていない。内外面ともに黒色である。2は、深いバケツ形の内耳土器で、把手部分は、扁平化し菱形状である。口縁部はロクロヨコナデ、胴部以下は指押えて作られている。3～5は、内耳土器の把手部分で、円形に大きく作られている。おそ



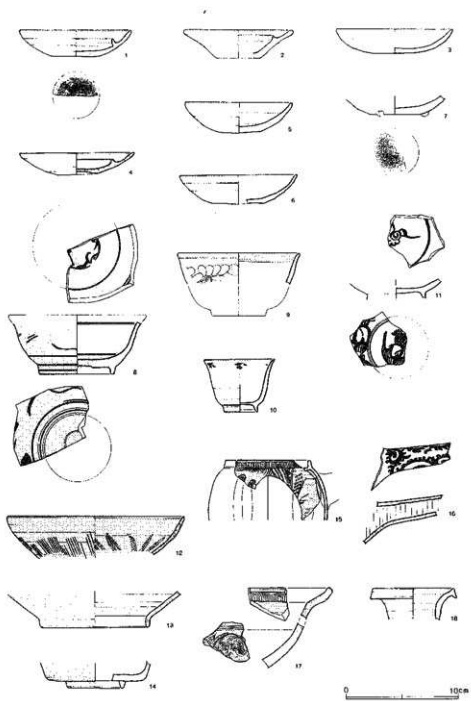
第588図 輸入陶磁器



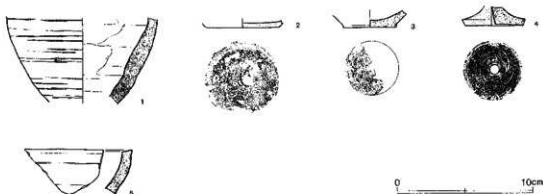
第 589 图 在地産軟質土器



第 590 图 常滑烧大甕



第 501 图 近世陶磁器(1)



第592図 近世陶磁器(2)

らく1のような平底の器形に付くものであろう。なお把手部分の接合は、紐状の粘土を器壁に貼付しただけである。粘土紐を器壁を貫通させた穴を通して、仕上げたものではない。

甕形軟質土器 甕形の軟質土器は、2点確認されている。口縁部はないが、頸部から胴部にかけての破片資料がみられる。くの字形に頸部は曲がり、緩やかなカーブを描く胴部と繋る。器壁は厚く、結晶片岩の粒が所々にみられる。焼成は余り良くない。第2号堀を中心とし、付近の溝中から出土している。

握ね鉢・すり鉢 12・13・14は、搬入品のすり鉢で、6・7・8・11・15・16は、在地産の握ね鉢・すり鉢である。14は、口縁部の形態から備前系のすり鉢と考えられる。15は、握りの深い刻み目が、底部付近に櫛歯状工具による平行線によって作られている。16は、全面指押えのあと内面を斜めに撫で上げている。口縁部外面には、浅い沈線がみられる。第2号堀を中心とし、付近の溝中から出土している。

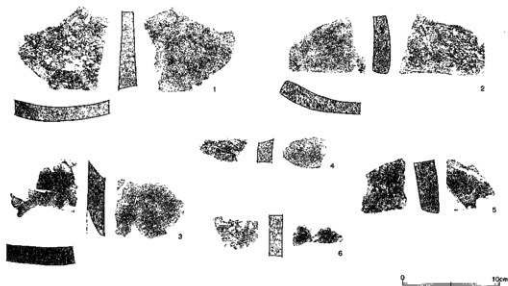
常滑焼大甕(第590図) 常滑焼大甕の破片が、第2号堀から出土している。しかし個体を復元できるまでの破片はなく、大形のもの、特徴的なものを掲載しておいた。口縁部の資料はない。1は大形の破片で頸部から肩部にかけてのもの。3は外面にタタキのあとが明瞭に残っている。2～6・9までが頸部から肩部にかけての破片資料。7・8・10は胴下半の破片資料。11は底部資料である。

近世陶磁器 近世陶磁器は、復元(作図)できるものとしては、23点があった。

灯明皿(1～7) 1・3・5は、瀬戸・美濃の製品で、鉄軸がかけられている。1は、油受けをもっている。2は志戸呂で、鉄軸がかけられている。油受けをもつ。4・6・7は、京都・信楽の灯明皿で、白地に灰軸が掛かっている。4は、油受けをもつ。

飯碗・湯飲み碗(8～11) 10以外は、飯碗である。8・9は、外面に僅かに模様の一部、草の壘状のものが描かれているに過ぎない。瀬戸・美濃系。10は、小形の湯飲み碗で、外面口縁部に字が書かれている。瀬戸・美濃系。11は、底部・内面・外面に草文が書かれている。肥前系。

碗② 外面に縦ハケメ、内面に波状のハケメの押さえがみられる。内外面ともに薄緑がかかった灰色の釉がたっぷり掛けられている。中国系。



第593図 近世瓦

急須形19 急須状の製品のごく一部分しか確認されていない。外面には、5か所のへこみがみられる。淡い紫色で草文が書かれている。肥前系か。

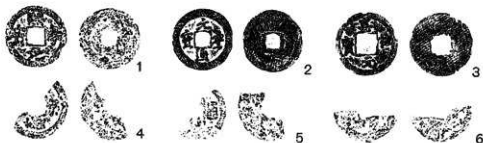
瓶10 瓶の口頸部である。外面に胡唐草を描いている。

その他 13は、底部の抜けている形態で、外面には濃い緑色の釉が掛かる。14は、鉄釉の掛かる瀬戸・美濃系の碗である。17は、志戸呂の大皿である。18は、長頸の瓶の口縁部である。(592図) 1は、瀬戸・美濃系の瓶の胴部である。4は、蓋か。5は、鉢形の口縁部。

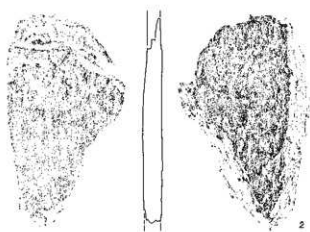
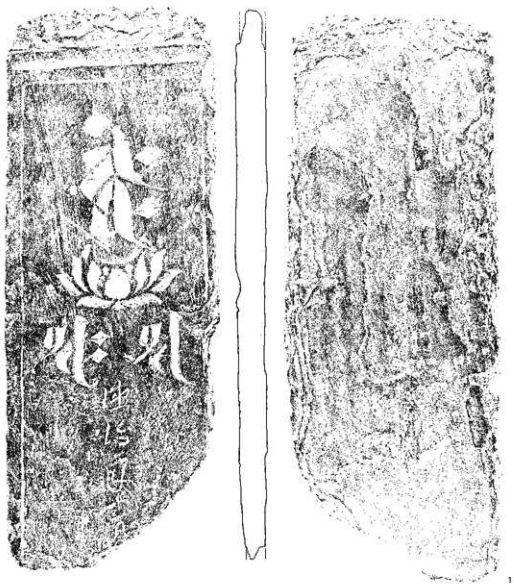
近世陶磁器は、第44号溝から全て出土している。

(4) 遺物各説 一近世瓦・古銭・板碑・そのほかの石製品一

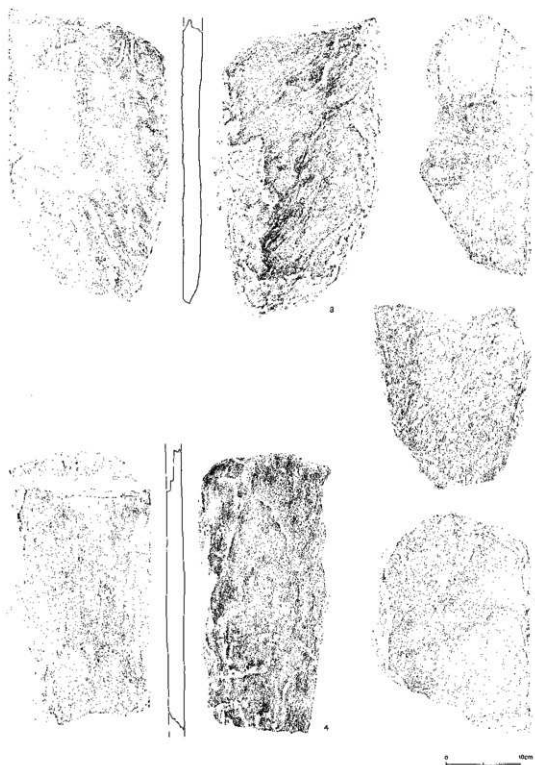
近世瓦 新屋敷東遺跡からは、小片の近世の瓦が出土している。これらは、第2号堀及びその周辺から出土しており、迅速図にある大神宮との関わりが注目される。図示したものは、平瓦の小破



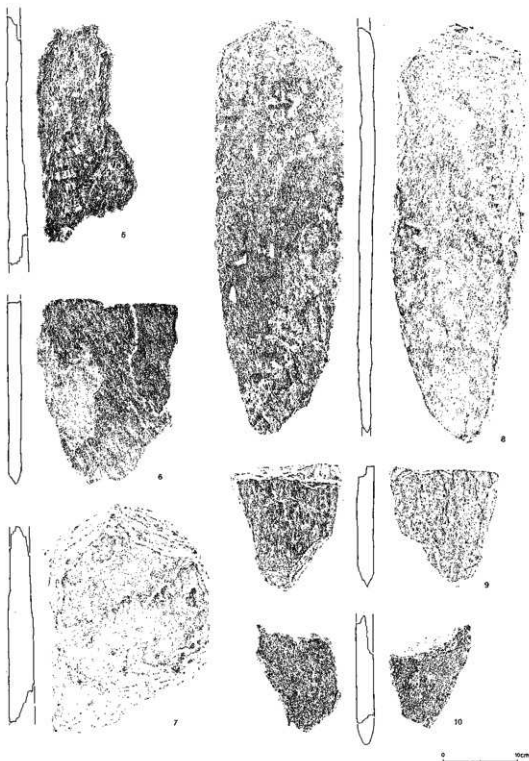
第594図 古銭



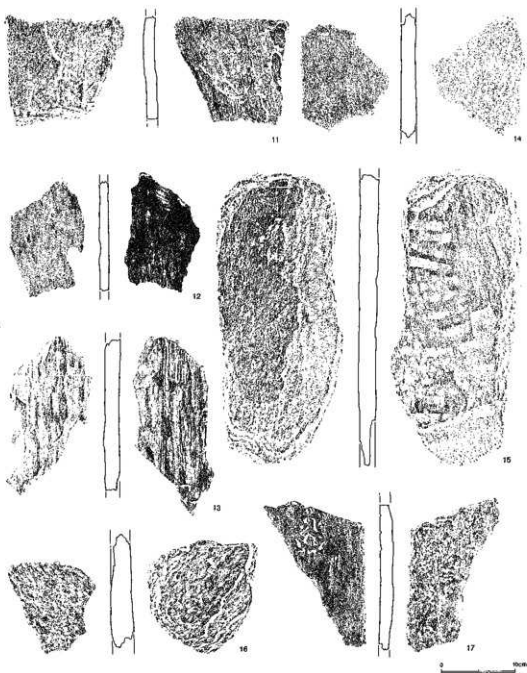
第 595 图 板碑(1)



第 596 图 板碑(2)



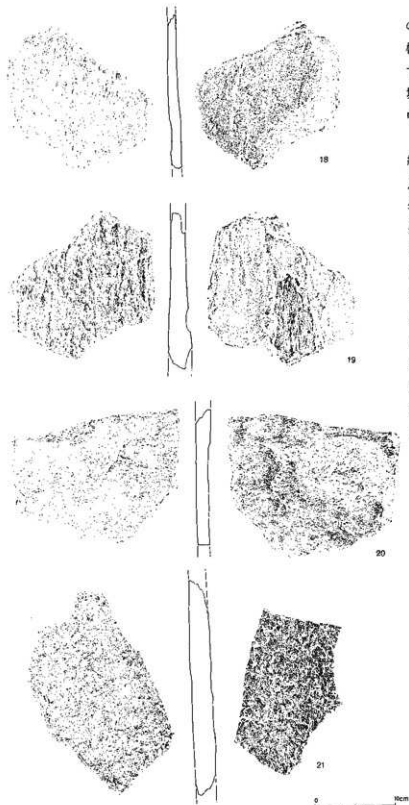
第 597 图 板碑(3)



第598図 板碑(4)

片のみである。全て外面には、ナデの痕跡が確認できる。1は淡い赤褐色で、比較的大形の破片である。3は側面部を確認することができた。金属器で削り落している。

古銭 6枚の古銭が出土している。1～3は、残存状態が良い。1は、熙寧元宝。初鑄は、北宋の1068年である。2は、元豊通宝。初鑄は、北宋の1078年である。3は、嘉祐元宝。初鑄は、北宋



第 599 図 板碑(5)

の1056年である。他の3枚は判読不可能である。すべて第1号堀と第2号堀に囲まれた部分の表土中から出土している。

板碑 図示したのは、紀年銘の判読が可能な7点を含む21点である。紀年銘は一覧表に記した。全て1号堀と2号溝に囲まれたなかから出土している。1が最も残りが良く、銘文も判読が容易である。上端と下端を欠損している。3は上半分を欠損するものの、銘文は残りが良い。8は完形である。全て石材は緑泥石片岩である。

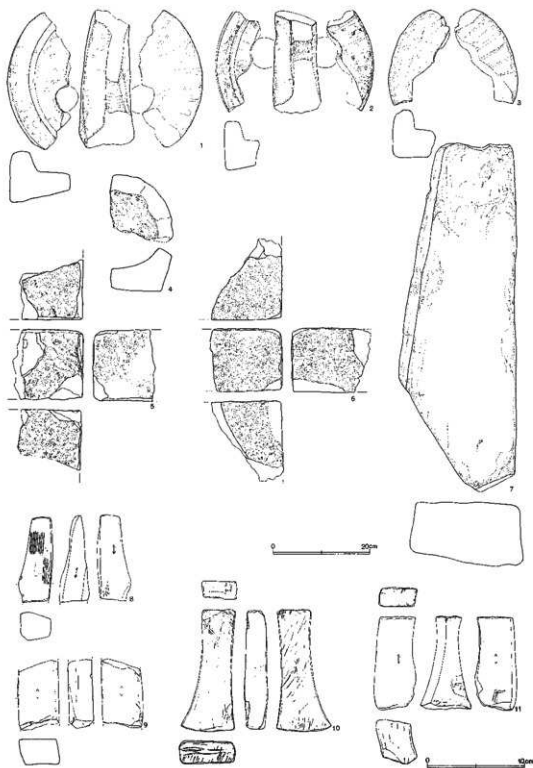
第245表 板石塔婆一覧

番号	出土遺構	法 量			紀 年 銘	備 考		
		現高mm	幅mm	厚さmm				
1	第5号溝	650	240	35	阿弥陀三尊「徳治二年十一月(欠)」 (1307年)	上部と下部が欠落。 二条線と額線あり。		
2	第5号溝	233	135	22	阿弥陀三尊(主尊種子欠) 「延文二年八月日」 「 妙心禅尼 惠安二年八月 晦日 」	観音・勢至のみ明瞭。 (1357) 中心線あり。 種子部分欠落。		
3	第5号溝	375	200	25				
4	第5号溝	370	190	24				
5	第5号溝	330	150	24	阿弥陀如来「□□月□」	一部のみで他欠損。		
6	第9号溝	243	190	17	阿弥陀如来	種子部分のみ。		
7	第9号溝	260	200	34				
8	第20号溝	540	170	19				
9	第20号溝	160	130	20				
10	第12号溝	145	100	23				
11	第3号溝	135	155	13				
12	第3号溝	100	145	12				
13	第3号溝	200	105	18				
14	第3号溝	165	120	20				
15	第3号溝	395	155	24			主尊種子(種類は摩滅し不明瞭)	二条線の一部が残る。
16	1号井戸	150	110	28			阿弥陀三尊(勢至欠)銘分欠	
17	1号井戸	192	120	17				
18	15号土塊	190	180	13				
19	15号土塊	195	180	22				
20	15号土塊	165	205	15				
21	15号土塊	265	155	25				

石臼 石臼は4点出土している。全て破片である。1と2は握り棒を装着する穿孔を残す。裏面には、矢羽状の線刻が明瞭に残る。3も、同様に矢羽状の線刻が明瞭に残っている。4は破片で、残存状態も良くない。4点とも安山岩である。第2号堀からの出土である。

面取り石材 面取り加工された石材が3点出土している。5・6は、おそらく同一種の製品の一部であろう。5は凝灰岩で破損も激しく、面取り加工された部分には、のみ痕跡が残る。6は角閃石安山岩で、残存状態は良い。ていねいに面取り加工されている。両者とも左右面と上面はていねいに二次加工されているが、下面は粗削りの一次加工のみである。さらに上部のコーナーは、丸く加工されている。石塔の一部であろうか。7は、大形の石材で、四面をていねいに加工され、部分的に火を受けている。第2号堀からの出土である。

砥石 四点砥石が出土している。良く使い込まれており、必ず一面以上に数条の傷が残る。表土層中の出土である。



第 600 図 石臼・面取り石材・砥石等

IV 自然科学的分析 —土師器の胎土分析—

（獨）第四紀地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

(1) 試料 分析に供した試料は第246表の胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は、断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバークロームペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

(2) X線回折試験 土器胎土に含まれる粘土鉱物及び、造岩鉱物の固定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02° , 計数時間: 0.5SEC.

(3) 電子顕微鏡観察 土器胎土の組織、粘土鉱物及び、ガラス生成の度合についての観察は、電子顕微鏡に依って行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、 $35 \cdot 350 \cdot 750 \cdot 1500 \cdot 5000 \cdot$ の5段階で行い、写真撮影をした。35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及び、ガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第246表胎土性状表に示す通りである。

第246表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物及び、造岩鉱物の組成が示して有り、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び、造岩鉱物の各々に記載される数字は、チャートの中に見られる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）を m/m 単位で測定したものである。

電子顕微鏡に依って得られたガラス量と、X線回折試験で得られた、ムライト (Mullite)、クリストバーライト (cristobalite) 等の組成上の組合せとに依って、焼成ランクを決定した。

(1) 組成分類

(a) Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、のX線回折試験に於けるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mo}/(\text{Mo} + \text{Mi} + \text{Hb}) \cdot 100$ でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1~4は Mo, Mi, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表わしている。

(b) Mo-CH, Mi-Hb, 菱型ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)、のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、c) Mi、Hb、の2成分が含まれないの3例がある。

菱型ダイアグラムは、Mont-Ch、Mica-Hb の組合せを表示する。Mont-Ch、Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表す。例えば、Mo/Mo+Ch*100と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し記載する。

菱型ダイアグラム内にある1~7は Mi、Hb、Ch の4成分を含み、各辺は Mo、Mi、Cb、Ch、のうち3成分、各頂点は二成分を含んでいることを示す。

(2) 焼成ランク 焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行なった。ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と、電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

第246表 胎土性状表

No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)										ガラス			
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch (Fe)	Ch (Mg)	Kaol	K-fels	Qt	Pl	Cr		Mu		
1	J	II~III	7	20			95	83						2173	749	309		中~粗
2	J	II~III	7	20			72	64						2283	300	180		中~粗
3	E	III	5	20				95						2471	390			中
4	N	II~III	11	20	170									1643	1769			中~粗
5	M	II~III	10	17	170	113				117				1186	479	233		中~粗
6	R	III	14	20										1343	762	249		中
7	R	III	14	20										1878	1321	254		中
8	J	III	7	20			112	97						2131	706	291		中
9	E	III	5	20				151						1497	617			中
10	L	III	8	20			120							1210	938	232		中
11	R	II~III	14	20										1753	644	197		中~粗
12	C	III	1	16	158	116	100							2198	715	137		中
13	E	II~III	5	20				63						2179	908	145		中~粗
14	E	II~III	5	20				110						1425	603	181		中~粗
15	H	II~III	6	20			97	110						1853	783			中~粗
16	R	III	14	20										2859	344	124		中
17	J	III	7	20			119	87			229			2792	358			中
18	I	III	7	9			152	97	195					1697	423			中

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト Ha: ハロイサイト Hy: 紫蘇輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリストバーライト Mu: ムライト Au: 普通輝石

焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則である。胎土の材質、すなわち、粘土の良し悪しによってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も、分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せと、いくぶん異なる焼成ランクが出現することになる。

(3) タイプ分類 タイプ分類は各々の土器胎土の組織分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は位置分類の数字組合せも同じはずである。タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合にである。尚、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

(1) タイプ分類 タイプ分類は、樋詰・小敷田・新屋敷東・北島・村後・若宮台・広面・宿東の8遺跡の土器胎土を分析し、これら全体について行った。その結果は、第2表タイプ分類一覧表に示す通りである。新屋敷東遺跡の土器については、第246表胎土性状表に示すように、焼成ランクに基づいてC(1)、E(4)、H(1)、I(1)、J(4)、L(1)、M(1)、N(1)、R(4)の9タイプに分類された。第2表に示すように、7つの遺跡を通して最も検出頻度の高いものは、7～9のIタイプ、ついで14～20のRタイプ、5～20のEタイプ、6～10のGタイプ、7～20のJタイプ、6～20のHタイプとなり、その他のものは検出頻度が低い。

新屋敷東の土器は、7C前半の坏16個、高坏2個であり、器種的には共通している。これらの土器は18個の分析に対して9タイプに分類され、全体に分散傾向にあるのが特徴である。特に多いタイプとしては、E、J、Rタイプが各3個あり、これらで全体の2/3を占める。他のタイプは各1個である。第2表に示すように、とくに個体数が多いタイプであるEとRの2タイプと、Jタイプで構成されている点は、全体の傾向とよく対比される。

電子顕微鏡による分析でガラスは、中～粗粒で焼成ランクがⅡ～Ⅲと比較的高いものと、焼成ランクがⅣのものに分かれる。両者の比率は、ほぼ半々である。土器に使用されている胎土は、細粒の石英と斜長石を混入する砕屑性粘土で、新屋敷東—6～10の5個は、凝灰質のように見受けら

れるのが特徴である。

次に新屋敷東遺跡の土器のタイプ分類について検討する。

Cタイプ…新屋敷東-12 Mont、Mica、hb の3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。

Eタイプ…新屋敷東-3、9、13、14 Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Ch の3成分に欠ける。個体数は4個で個体数の多さから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性のある(宿東遺跡で多く検出されるタイプ)。

Hタイプ…新屋敷東-15 Mica、Hb の2成分を含み、Mont、Ch の2成分に欠ける。

Iタイプ…新屋敷東-18 Mica、Hb、Ch の3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Jタイプ…新屋敷東-1、2、8、17 Mica、Hb の2成分を含み、Mont、ch の2成分に欠ける。個体数の多いことから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。Hタイプとは組織的によく似ており、ピーク強度の違いにより位置番号が異なっているもので、同種のものと考えられる。

Lタイプ…新屋敷東-10 Mica 1成分を含み、Mont、Hb、Ch の3成分に欠ける。

Mタイプ…新屋敷東-5 Mont、Mica の2成分を含み、Hb、Ch の2成分に欠ける。

Nタイプ…新屋敷東-4 Mont 1成分を含み、Mica、Hb、Ch の3成分に欠ける。

Rタイプ…新屋敷東-6、7、11、16 Mont、Mica、Hb、Ch の4成分に欠ける。おもに、アルミナゲル ($n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$) で構成される。個体数は4個で、数が多いことから推察すると、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

タイプ分類では9タイプに分類され、HタイプがGタイプと組織が類似することから、8タイプと見なしても、18個の分析に対して8タイプとは多すぎるように思える。E、J、Rの3タイプは個体数の多いことから在地あるいは在地近傍の可能性が高いとしたが、余りにも分散傾向が高く、はっきりしない。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は、粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは、個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態に於ける各地の砂は、個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば各地域における砂は、各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

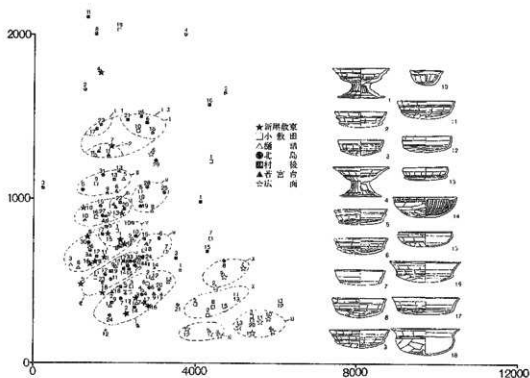
この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、前記のように各々の集団が有する固有の技術の一端である。

第5図 Qt-Pl 相関図には、新屋敷東、小敷田、樋詰、北島、村後、若宮台、広面の7つの遺跡の土器を記載してある。

図からも明らかなように、土器はI~XIIのグループと、「その他」に分類された。

全体的な傾向として、石英の強度は1000~4000の範囲のもの、4000~6000の範囲のものに分か

れる。斜長石の強度は、石英が1000~4000の範囲では、層状に積み重なるように分布している。この特徴が何を意味するものかといえば、斜長石の強度が高いものは母岩からの距離が近く、強度の低いものは距離が遠いということになる。斜長石は風化に対して比較的弱く、河川の下流に行くにしたがって減少するという特徴がある。この観点にたつて第5図を見ると、斜長石の強度が高いものは上流域、低いものは下流域に属するものと推察される。斜長石の強度が1200より高い領域には村後遺跡の土器が多く分布し、1200以下の領域では強度の高い方から低い方に向けて、村後、小敷田、樋詰、若宮台遺跡の一部が共存するグループ（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）、新屋敷東を主体とし村後と北島遺跡の土器が共存するグループ（Ⅴ）、北島遺跡を主体とし小敷田と村後、新屋敷東が共存するグループ（Ⅵ）、樋詰、新屋敷東、北島が共存するグループ（Ⅶ）、などに分かれている。この結果から判断すると、上流域には村後遺跡があり、ついで若宮台遺跡が続く。新屋敷東、樋詰、北島は比較的好似しているが、Ⅴグループに新屋敷東の土器が集中することから推察して、新屋敷東の方が高い斜長石の強度を持つのではなかろうか。新屋敷東に次いで北島、樋詰の順と推察される。石英の強度が4000~6000に分布するものは明らかに4000以下のものとは異なっており、この部分には広面と小敷田遺跡の土器が分布してグループを形成している。斜長石の強度の高いものから順に広面（Ⅸ）、小敷田（Ⅹ）、広面（Ⅺ）、広面と小敷田の共存（Ⅻ）、となっている。この分布の特徴は広面遺跡と小敷田遺跡の土器が明らかに異なるグループを形成していると言うことである。



第 601 図 Qt-Pe 相関図

全体としてはⅠ～Ⅷのグループが認められるが、これらのグループに属さない「その他」のものが存在する。「その他」に属するものは、斜長石の強度が高いものに多く、土器としては村後遺跡の土器が多いのが特徴である。石英の強度が、4000～5000の範囲にあるもので斜長石の強度が、6000以上の範囲にある「その他」も村後遺跡の土器が多い。このように観てみると「その他」の大半は村後遺跡の土器となる。また北島遺跡の土器で「その他」に属しているものがあり、斜長石の強度が1000以上で特に多いように見受けられる。

次に各グループに於ける特徴を述べる。各グループにおける土器の器種と胎土の組成を示すタイプを記載したものが第3表である。この表に乗っ取って各グループを検討する。

〈Ⅰグループ〉このグループはⅠ-1～Ⅰ-3の3つのグループに細分されるようである。Ⅰ-1グループは北島の壺、Ⅰ-2グループは新屋敷東、樋詰、若宮台の坏、Ⅰ-3グループは小敷田の壺、北島の甕、村後の長甕、鉢などの比較的大きい器種で構成される。Ⅰグループに属する土器の胎土はJ(3)、I(2)、G(2)のように比較的多いタイプで構成される。

〈Ⅱグループ〉壺、甕、坏など器種的には統一性が余りなく、胎土はC(2)、G(2)、R(2)となっている。小敷田、樋詰、北島、村後、若宮台の土器が混在する。

〈Ⅲグループ〉坏を主体とし、壺と甕が一点ずつ混在する。胎土としてはGタイプのもので、10個の内4個あるのが特徴である。新屋敷東、小敷田、北島、村後、若宮台の土器が混在する。

〈Ⅳグループ〉坏と甕が混在し、胎土としてはGタイプが2個認められるのが特徴と言える。小敷田、樋詰、北島の土器が混在する。

〈Ⅴグループ〉新屋敷東の坏が7個と高坏1個が集中し、新屋敷東の土器で特徴付けられるようである。樋詰の坏(3個)北島の坏(2個)と壺、村後の坏(2個)と甕(2個)、若宮台の壺で構成される。土器胎土はRが5個、JとGがともに3個が主体となっている。

〈Ⅵグループ〉坏が3個、甕と長甕が各1個で構成され、土器胎土も統一性がなく、小敷田、北島、村後、若宮台の土器が各一個ずつ混在する。

〈Ⅶグループ〉北島の壺(4個)と坏(2個)が集中し、北島遺跡の土器で特徴付けられるようである。また北島の土器胎土は、Iタイプが5個認められ、典型的な特徴も認められる。新屋敷東の坏は2個でそのうち1個はIタイプである。小敷田と村後の土器は壺、鉢、長甕などで比較的大きなものが混在する。樋詰の坏も1個認められる。村後の坏もIタイプであり、このグループはIタイプが多く集中するのが特徴である。

〈Ⅷグループ〉このグループは新屋敷東の坏(4個)樋詰の坏(5個)北島の壺(4個)が集中し、この3遺跡の土器で特徴付けられる。そのほかにも小敷田の甕と坏、村後の坏、若宮台の坏が混在し、坏が多く集中している。土器胎土としてはIタイプが6個と最も多く、次いでJタイプの4個となっており、Iタイプを主体とするものと考えられる。

〈Ⅸグループ〉このグループは広面遺跡の土器だけで構成されるもので、器種としては壺が2個、坏が1個、器台が1個である。土器胎土としてはRタイプが2個あり、Rタイプで特徴付けられるようである。

〈Xグループ〉このグループは小敷田遺跡の土器だけで構成されるもので、器種としては壺が1個、甕が2個、鉢が2個である。土器胎土としてはIタイプが3個あり、1タイプで特徴付けられる。器種的には比較的大きなもので構成される。

〈XIグループ〉このグループは広面遺跡の土器だけで構成されるもので、器種的には壺で特徴付けられる。土器胎土としては全部Rタイプで構成されている。

〈XIIグループ〉小敷田と広面の土器が混在する。小敷田は壺と甕、広面は壺が3個、器台1個、埴1個である。土器胎土としてはIとRタイプが各2個あり、RとIタイプで特徴付けられる。器形的には比較的大きなもので構成される。

〈その他〉その他における特徴は、斜長石の強度が高い部分では村後の甕が多く認められ、小敷田では壺(2個)、甕など比較的大きいもので、ばらつきが認められる。北島では高坏、新屋敷東でも高坏があり、高坏が多いように見受けられるが、北島-2と新屋敷東-4は接近して居り、高坏のグループを形成するのかも知れない。又村後-2、と11はともに甕で接近しており、ここでも1つのグループが形成される可能性があるが、個体数が少ないため「その他」に入れてある。同様の現象は小敷田-7の壺と村後-15の甕でも認められる。又、斜長石の強度が異常に高いものとしての共通性は村後-11の坏と小敷田-19の坏で認められる。

次に、新屋敷東遺跡の土器における土器と各グループの関係について述べる。

Iグループ…新屋敷東-7 樋詰の坏と若宮台の坏と共存し、I-2グループを形成する。このグループは器種的には坏で、胎土はGタイプを主体とする。



第 602 図 Qt-Pe 相関図関係遺跡

Ⅲグループ…新屋敷東-10、13、このグループの中では左と右に分かれて分布する。石英の強度の低い新屋敷東-10は若宮台の環、小敷田の環と近く、石英の強度が高い新屋敷東-13は村後の環と環、若宮台の環と近い関係にある。前者は環、後者は混在である。このグループも2つに分かれるかも知れない。

Vグループ…新屋敷東-1、6、8、9、11、12、14、15このグループの中に新屋敷東の土器は8個と最も多く、個体数の多さから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。石英の強度が低い左側には新屋敷東-6、11、9、14の4個があり、樋詰の環、若宮台の環、村後の環と共存する。石英の強度が高い右側には新屋敷東-1、8、12、15が集中し、樋詰の環と村後の環と共存する。このように見て来ると、このグループも2つに分かれるかも知れない。このグループの中にある土器のタイプを見ると、E、J、Rの各タイプのものが2個ずつあり、タイプ分類の項で述べた在地近傍の可能性が高いとした傾向とよく一致する。

Ⅶグループ…新屋敷東-5、18 この2個はグループの中では斜長石の強度が低く、もしかするとこのグループに入らないのかも知れない。

Ⅷグループ…新屋敷東-2、16、17 Vグループについて個体数の多いグループで個体数は4個ある。樋詰の環、小敷田の環、若宮台の環、北島の環と共存する。このグループも個体数の多いことからして在地あるいは、在地近傍の可能性が高い。土器胎土のタイプもE、J(2)、Rで構成され、タイプ分類の在地あるいは在地近傍とした結果の傾向と一致する。

「その他」…新屋敷東-4 この土器は斜長石の強度が高くどのグループにも属さない。北島-2は高環で、この土器と非常に近い。器種も同じ高環で、もしかするとここに1つのグループがあるのかも知れない。

第5図にみられる土器の分布状況と土器胎土との関係から推察すると次のようになる。在地あるいは在地近傍の可能性が高いものはVグループの土器とⅧグループの土器である。このグループに属する土器はその大半がE、J、Rの3タイプのいずれかであり、タイプ分類の項で述べた結果とよく一致する。このように考えてくると、新屋敷東-4、5、7、18の4個は異質のように見受けられる。また新屋敷東-10、13は村後あるいは若宮台遺跡との関連性が高いのかも知れない。乳白色あるいは明灰色の新屋敷東-6～10の6、8、9は同じグループに属し、新屋敷東-7は若宮台と樋詰の環に近く、新屋敷東-10は若宮台の環に近く、両者はともに若宮台との関連性を示唆しているようである。新屋敷東-15は比企型環であるが、組成的にはJタイプに似ており、Vグループに属していることからすれば、在地あるいは在地近傍で模倣した可能性もある。新屋敷東-16、17はともにⅧグループにあり、胎土の組成も在地あるいは在地近傍のJとRのタイプであり、樋詰、北島の土器と共存することから推察して在地近傍で模倣された可能性が推察される。

4 まとめ

i) 土器胎土は18個の分析に対して9タイプに分類された。E、J、Rの各タイプは4個ずつあり、これら3タイプで全体の2/3を占めており、個体数の多さから在地あるいは在地近傍の可能性が高いとした。石英と斜長石の相関でも、VグループとⅧグループに土器が集中し、このグループ

の土器は在地あるいは在地近傍の可能性が高いとした。このグループに属する土器の大半はE、J、Rの3タイプで構成されていることから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

ii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスが中～粗粒の焼成ランクがⅡ～Ⅲと幾分高いものと、中粒のガラスで構成される焼成ランクがⅢのものとかだいたい半々である。焼成ランクがⅡ～Ⅲのものには、クリストバーライトが生成している。

iii) 石英と斜長石の相関ではVグループとⅥグループに土器が集中し、18個のうち12個、全体の2/3が両者のうちいずれかに属している。この比率はタイプ分類の在地あるいは在地近傍の比率と同じである。新屋敷東-14～18は器型的に在地のものとは異なるものであるが、新屋敷東-14～17はVグループかⅥグループに属し、土器胎土もE、J、Rの3タイプとJタイプに類似するHタイプで構成され、在地あるいは在地近傍で模倣された可能性が高い。

V 考察 一古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡一

- | | |
|-----------------|--------------------|
| はじめに | 2) 埼玉への窯業製品の供給システム |
| 1、北武蔵の集落の動態 | 3) 土師器生産と6・7世紀の武蔵 |
| 2、窯業生産の展開と北武蔵 | 3、古代の開発と石製模造品 |
| 1) 東国の窯業生産の前提条件 | まとめ |

はじめに

新屋敷東遺跡は、古墳時代後期の典型的な東国の集落遺跡である。カマドをもつ竪穴式住居跡が、一定の範囲に集中的に構築されている景観と、窯業製品の大部分を土師器で賄う東国の形態は、掘立柱建物跡と須恵器で構成される西国的形態とはさきわめて対照的である。

この東国的形態の集落が、6・7世紀という日本の古代国家の成立への準備段階に、どのような役割を果たしたか、新屋敷東遺跡及び周辺の諸集落の動態を検討することから導いてみたい。ここでは得てして古墳や寺院・郡衙、あるいは畿内地方からの搬入土器などから、上部構造の交通の現象形態(石母田 1971)から評価されがちな西高東低的な中央集権的關係はひとまず置いて、在地の手工業生産の展開、とくに窯業生産の展開と流通の過程のなかに新たな展開を見出そうとするものである。

とくに北武蔵は、武蔵国造をめぐる内紛に見られる在地秩序の変転、新興首長層の台頭の著しい地域であり、集落の動態もよりドラマテックに進行したと思われる。

そこで本稿では、二つの視点から北武蔵の中の新屋敷東遺跡を見つめ直していく。その一つは、窯業生産の展開であり、一つは集落の動態である。

なおここでは、便宜的に本稿で集落の展開を裏付けた土師器の変化を軸に、この変化に他の集落の土師器を対応させることによって、北武蔵における古墳時代後期の集落の大まかな動態をつかむこととする。ここでは食膳具が土師器の中心となる段階以降、北島型暗文土器の出現までのおよそ200年間を対象としたい。個々の器形の細かな型式変化は、本文中で述べているので、古墳時代後期土器の諸特徴と、変化の方向性と画期について触れ、その画期をもって集落編成の動態を明らかにしていく。

1 北武蔵の集落の動態

まず本文中で検討した新屋敷東遺跡の発達段階に則り、他の北武蔵の集落遺跡の発達段階との併行関係を発掘調査の成果を基に示しておく(註1)。ただし、各集落の分析方法は、互いに異なり、型式として考えるスパンも異なるため、ここで示す併行関係は、あくまでも大まかな指標に過ぎない。そのため、強引に新屋敷東遺跡の発達段階に併行させ、一部は各報告段階で設定した段階を越え該当させた。

ここで検討した集落は、全て旧荒川以北の古墳時代後期の37集落跡である。この資料の選択は、

①新屋敷東遺跡と地理的にも隣接し、耕作や水利など生産活動を互いの集落が、共有する可能性の大きい資料であること。②竪穴式住居跡が30軒以上調査されていること。③6・7世紀にいわゆる比企型環を主体として供給を受けていない集落であること（一部を除く）。④境は、北を利根川、西を神流川とした。しかし上毛野・下毛野・下総の各集落とは、不可分の関係が考えられる。

この分析の目的は、新屋敷東遺跡が、北武蔵の古墳時代後期の他の集落の動態にいかに関わり、展開したかを探ることにある。作業前提37遺跡として児玉・大里・埼玉の令制下の大郡におおむね匹敵する3グループに分割して考えることとする（註2）。

37遺跡の古墳時代から古代にかけての集落に何軒の竪穴式住居が構築されたか、その推移を2160軒について検討すると、第803・604図のような構築数の増減図が確認された。しかも隣接する集落間は、構築数のピークが異なることに気付いた。この現象は、各集落の維持する耕地の潜在的生産能力と農業水準に関わり、集落内の人口増加や耕地の拡大によって変移したためと考えられる。ただし地力の低下が、隣接する非可耕地へ、集落ごと丸抱えの移動の前提的条件ではない。集落の再編成には、様々な在地の要因と外的要因、さらに自然の営為力が起因している。

集落跡の調査は、調査された範囲内（調査区）という限定付きだが、普遍的な遺構である竪穴式住居の構築数が最高になる段階は、次の5つを設定できる。またその特徴を示す北武蔵の集落遺跡は、以下の通りである。

第247表 北武蔵の集落のピーク

	児 玉	大 里	埼 玉
第1のピーク (初期・I期)	石宮台・真鏡寺裏・後張・ミカド・夏目・下田・山根・古川端	六反田	中三谷
第2のピーク (II期・II期)	台・後張・南大通り案内・麻生神社前	上敷免・新屋敷東	
第3のピーク (IV期)	川越田・夏目・社具路・山根・東谷	砂田前・道ヶ谷戸	小針
第4のピーク (V期・VI期)	台・高野谷戸・天神林・中道・宇佐久保・真鏡寺裏・古川端・村後・秋山東	新屋敷東・ニヶ尻天王	
第5のピーク (8世紀前期)	若宮台・天神林・社具路・田郷下	六反田・内出・白山・東川端・樋ノ上・大津・北島	水沢

このうち新屋敷東遺跡を始め、台・若宮台・真鏡寺裏・六反田遺跡等の各集落は、2回のピークを迎える。調査区内の所見ではあるが、集落の占地が古墳時代後期中に回帰的な現象が認められる。集落の占地（註3）は、耕地への水利（用排水の確保）を基礎に、公私共利の地を巡り、隣接する他の集落と活発な開発行為がされたことが予想される。この現象は、以下にまとめられる。

A集落が増加にある段階には、近隣のB集落は衰退する。一方新たにA集落の内部からC集落が周辺部に出現し、衰退期のB集落の構成員を巻き込み成長するサイクルを、集落の再生産と仮定する。ただし各集落遺跡の発掘調査の事例から、安易にその動態を読み取ることはできない。たとえ隣接するA・Bの集落のピークが、AからBへと続くとしても実際に理論通りに移動したかは疑問である。

そこで一案として、各集落間の動態を探るために距離によるネットワークを考えることとした

(註4)。A・Bの集落間の距離が、4 km以内の場合——、10kmまでを——とし、10kmを越える場合は結ばない。また増段階の集落を●で表わし、出現期・衰退期の集落を○で表わすこととした。さらに両者の関係を――で表わすこととする。なお○は、該期の竪穴式住居跡が確認されなかった遺跡である。

これを各段階ごとに作図すると、第605・606図のように変化していくことが分かった。以下略述する。

〔和泉期〕和泉期の集落が、それ以前の集落とどのような関係にあるか、本稿では深く立ち入らない。しかし和泉期の集落が大規模に展開した児玉と埼玉に挟まれた大里では、現在のところ明確な集落の資料は提示されていない。児玉型のネットワークを大里に想定することは困難である。大里には、5世紀代の大形古墳も築かれておらず、児玉型の在地首長層は存在しなかったと考えられる。

児玉型のネットワークとは、女堀川や小山川が形成した氾濫原と自然堤防を耕地として開発する後張・六反田・夏目・山根遺跡等の集落遺跡が、近接した場所に展開する実態に反映されている。とくに出土土器の検討から後張遺跡は、五瀬期から継続して展開していたことが明らかである。和泉期に後張遺跡を軸として、空閑地である台地上や氾濫原等の公私共利の地へ進出したといえよう。また台地奥部へ進出した遺跡(真鏡寺裏遺跡等)が、その後急速に収束しミカド遺跡等に吸収されていく。

〔第Ⅰ期〕第Ⅰ期に入っても、児玉の優位性は変わらない。しかも各集落の規模は、それぞれ肥大化する。また衛星的に存在していた新生集落が大型化し、さらに周辺に小集落を生む。前段階のネットワークは、より緊密に拡大する。これらの集落は、女堀川や小山川に沿い、水利を共有していたことは注目に値する(鈴木 1984)。後張遺跡を軸に六反田・山根・古川端・下田・川越田遺跡等の各集落が拡大していく。丘陵よりに出現したミカド・蕨神社前遺跡等の集落も規模を拡大している。

どこの竪穴式住居跡にもカマドが付設され、新たな煮沸形態が急速に普及したことが分かる(中村 1984)。カマドをめぐる調理と食事の体系的変化は、古代を貫徹する文化事象となる。

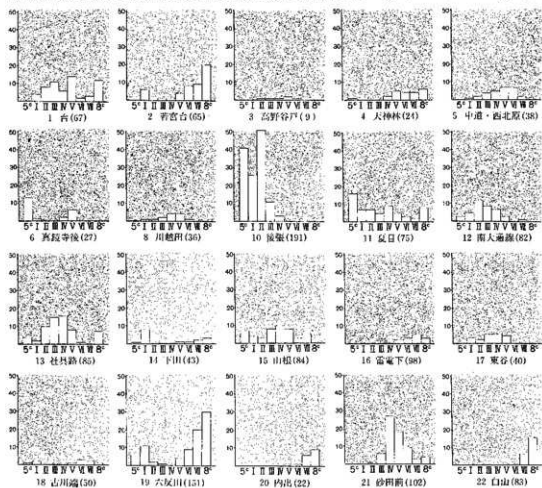
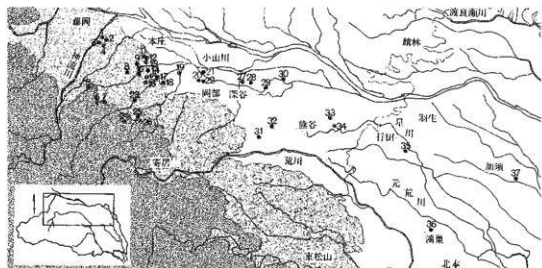
第Ⅰ期は、新屋敷東遺跡の出現期でもある(註5)。大里では、明確な集落跡が他に報告されていない。しかし大里の集落が児玉から、衛星的な集落として出現したのではない。この点は、妻沼低地内の集落跡の調査・報告が進めば、次第に明らかにされてこよう。

埼玉の中三谷遺跡は、この段階最も規模を拡大する。

〔第Ⅱ期〕児玉のネットワークが変形してくる。女堀川を挟んだネットワークは解体し、本庄台地側の集落に集中する傾向にある。後張・社具路・南大通り線内遺跡等の集落は、衰退傾向にある東谷山根・六反田等の各集落を吸収し急成長を遂げる。上毛野との境に近い中道・台遺跡では、神流川左岸の集落と、ネットワークを保ち続けながら成長する。

新屋敷東遺跡は、この段階に急速な成長を遂げる。大里では唯一の集落の例である。砂田前遺跡の萌芽が見られる。児玉と大里を結ぶ位置に登場する。

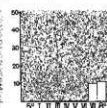
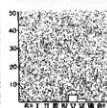
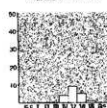
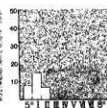
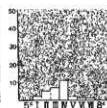
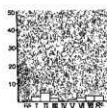
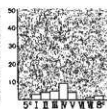
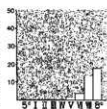
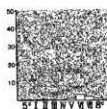
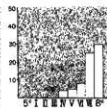
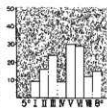
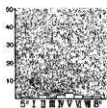
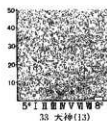
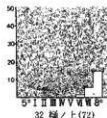
中三谷遺跡は、衰退の方向に向かっている。埼玉では、稲荷山古墳の造営を始めとする埼玉古墳群が形成され、北武蔵に新秩序が出現した。最近の調査で明らかになりつつある行田市若小玉古墳



第 603 図 北武蔵の集落の動態①

- | | |
|----------|---------------|
| 1 台遺跡 | 20 内池遺跡 |
| 2 若宮台遺跡 | 21 砂田街遺跡 |
| 3 高野谷戸遺跡 | 22 杉山遺跡 |
| 4 天神遺跡 | 23 竹張遺跡 |
| 5 中道遺跡 | 24 朝山東遺跡 |
| 6 宮崎遺跡 | 25 数計神社遺跡 |
| 7 ミカド遺跡 | 26 宇佐久保遺跡 |
| 8 川越田遺跡 | 27 上敷先遺跡 |
| 9 東山遺跡 | 28 新屋敷東遺跡 |
| 10 後張遺跡 | 29 東川端遺跡 |
| 11 夏目遺跡 | 30 道ヶ谷戸・飯塚南遺跡 |
| 12 南大邊遺跡 | 31 ニヶ尻穴遺跡 |
| 13 春日路遺跡 | 32 橋の上遺跡 |
| 14 下州遺跡 | 33 大神遺跡 |
| 15 山根遺跡 | 34 北島遺跡 |
| 16 雲谷下遺跡 | 35 小針遺跡 |
| 17 東谷遺跡 | 36 中一谷遺跡 |
| 18 吉川端遺跡 | 37 水原遺跡 |
| 19 八坂川遺跡 | |

番号は地図と一致し、折弧内は
検討した住居跡数



第 604 図 北武蔵の集落の動態②

群内の北大竹遺跡のように、和泉期から比企型環の初現段階まで続く集落が、古墳群の形成(MT15 型式併行)とともに忽然と収束している状態は無視できない(中島

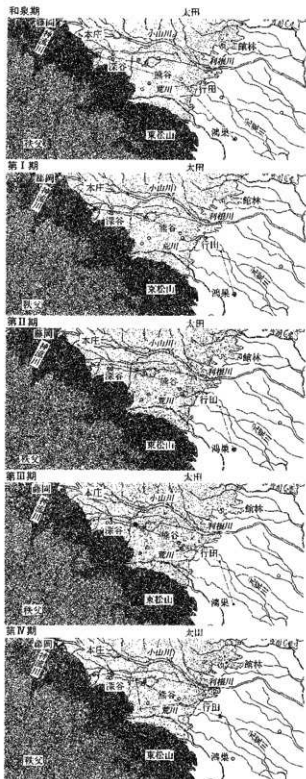
1991)。また埼玉古墳群に隣接する陣馬遺跡でも、比企型環を主体とした住居跡(栗原・駒宮 1990)が確認されているが、古墳群の開始以降に築る比企型環の集落は見出すことが難しい。

埼玉古墳群出現に伴う北武蔵の新秩序は、①児玉では従来のネットワークに修正が行なわれ、②大里では新屋敷東遺跡の成長をみることが出来る。しかし③埼玉では資料的制約から動態を考えることは難しい。

【第三期】児玉では、衰退途上の山根遺跡が再生する一方、隣接する後張遺跡は、極度に低迷化する。しかしその他の集落は、第二期と変わらない集落編成である。小山川流域の小規模化した集落は衰退し、みられなくなる。

ところが児玉の外縁部に当たる、中道・台遺跡あるいは大里の新屋敷東遺跡などは盛行する。埼玉の中三谷遺跡も急速に衰退し、後張遺跡などと歩調を併せている。しかし児玉のように周辺に大形集落は確認されておらず、その後の動向は不明瞭である。

第三期の集落間のネットワークは、第二期のそれを温存しつつ、台地上に展開した新生集落をパネ



第605図 北武蔵の集落のネットワーク①

に発達した関係である。埼玉の集落の相対的な低下は、比企の各集落の盛行と関係があるのであろう。その意味で両者の緩衝地帯である大里の新屋敷東遺跡が、この段階に隆盛することは大きな意義を認められる。

とくにこの段階に、割山埴輪窯の操業が開始され、新屋敷東遺跡を控える木の本古墳群や、増田古墳群に供給されていることは、決して無関係ではないであろう。これは、中三谷遺跡の衰退と、相反して成立する生田塚埴輪窯跡群の操業開始と密接に関わっていよう。生田塚埴輪窯跡群は、埼玉古墳群の大形古墳に供給するために経営された埴輪窯である。埼玉古墳群の形成と深く係わり、その集落の一部も確認されている。大形古墳の埴輪窯が、それまであった集落の移動と前後して操業を開始したことの意義は大きい。

また埼玉古墳群の近隣に、埼玉古墳群を直接支えたと考えられる小針遺跡が登場したことも見逃すことはできない。埼玉で、さきに表わしたように比企型環をもつ集落が、急激に衰退し、代わって小針型環をもつ集落が出現してくる過渡期にこの段階は該当している。

このように急速な集落の変化のみられる埼玉に比べ、児玉の各集落のネットワークの変化の傾斜は、緩やかであると言えよう。

〔第IV期〕 児玉のネットワークは、第IV期に入ると再び、夏目・山根・社具路・南大通り線内遺跡を核として、周囲とくに小山川の上流にむかい、集落

の大溝は、溝底から階段状の足掛りをもち、溝底にまとまった第Ⅴ期に相当する有段口縁坏が、大量に発見されている。

埼玉では、この段階にかかる大形の集落は確認されていない。

〔第Ⅵ期〕第Ⅴ期に成立したネットワークが、継承・発展された段階である。川越田・社貝路・東谷遺跡等は軒並み下降し、山根・古川端・六反田・麻苧神社前・秋山東遺跡等の集落は、規模を増加させる。集落存続の分かれ目は、経営基盤の確保の有無による。

丘陵地への積極的な進出は、鈴木徳雄氏も指摘する畠作への大きな依存（鈴木 1984）や、養蚕と桑木栽培等の対価価値の高い農村製品の質的向上と生産量の増加が考えられる。河川の集中する六反田遺跡のような集落の再出現は、河川氾濫や耕作人の移転で、荒蕪地化した「原」「野」等の低地の再開発事業である。

大里では、新屋敷東遺跡に代表される集落が、荒川や小山川の自然堤防上に展開していた。一方東川端・飯塚南・北島遺跡・樋の上遺跡等の第Ⅶ期に爆発的に発展する集落の萌芽がみられる。大里では、大形前方後円墳の造墓や丘陵を埋める群集墳の形成が緩やかだったため、前方後円墳体制の秩序の崩壊をバネとして、集落が拡散する前提条件は整っていたのである。

埼玉では、この段階の集落の資料は乏しい。しかし第Ⅶ期に併行する古墳は、多く確認できる。

〔第Ⅷ期〕第Ⅶ期に入ると、各集落の交代は現実化する。大里の各集落や埼玉の水深遺跡で顕著な新興集落の出現には、古墳時代的な集落間の結び付きを越え、集落構成員の移住を伴う律令時代的な集落ネットワークへの胎動が見られる。それは新たな在地内の諸関係の再編成を狙い、行政的な国の分割的発展である郡（評）の成立を背景にしていた。

奈良時代には、比企・入間・半島系の人々を移住（入植）させ、在地内の集落と再編成し、高麗新羅郡の立郡に及んだ。これと同様の措置が、大里・児玉にも存在していたと推定できる。渡来系の人々は別にして、畿内系暗文土器の在地生産（北島型暗文土器）の開始と流通は、畿内の土器生産者の系譜を引く土器製作者の移住、ないしは伝習を予測させる。生産の中心は、今のところ深谷市上敷免遺跡に求められる。

児玉では、中道・古川端遺跡などが衰退傾向にあり、逆に雷電下遺跡などが増加傾向にある。大里では、砂田前・新屋敷東遺跡が衰退傾向にある集落がある。一方、上敷免遺跡を始めとし、白山・内出・東川端・樋の上・北島遺跡などのように、急速に成長する遺跡がある。ただ新屋敷東遺

第248表 新屋敷東遺跡と各遺跡の併行関係①（右が新屋敷東遺跡）

若宮台遺跡 (大和 1983)	後張遺跡 (立石 1983)	六反田遺跡 (浅野 1981)	中三谷遺跡 (富田 1989)	台遺跡 (中村 1980)	南大通り線内遺跡 (増田 1989)
P	後張Ⅳ ↔ P	六反田Ⅱ ↔ P	中三谷Ⅰ ↔ P	P	南大通り線内Ⅰ・Ⅱ ↔ P
鬼高Ⅰ ↔ I	後張Ⅴ ↔ I	七反田Ⅲ ↔ P・I	中三谷Ⅱ ↔ P	I	南大通り線内Ⅲ・Ⅳ ↔ I
鬼高Ⅱ ↔ II	後張Ⅵ ↔ II	六反田Ⅳ ↔ I・II	中三谷Ⅲ ↔ I	児玉Ⅰ ↔ II	南大通り線内Ⅴ ↔ II
鬼高Ⅲ ↔ III	後張Ⅶ ↔ III	六反田Ⅴ ↔ II・III	中三谷Ⅳ ↔ II・III	児玉Ⅱ ↔ III	南大通り線内Ⅵ・Ⅶ ↔ III
鬼高Ⅳ ↔ IV・V	後張Ⅷ ↔ III	六反田Ⅵ ↔ III	小三谷Ⅴ ↔ III	児玉Ⅲ ↔ IV	南大通り線内Ⅷ ↔ IV
鬼高Ⅳ ↔ V・VI	後張Ⅷ ↔ IV	六反田Ⅶ ↔ V・VI	IV	児玉Ⅳ ↔ V・VI	南大通り線内Ⅷ・Ⅹ ↔ V
鬼高Ⅴ ↔ V	IV	六反田Ⅷ ↔ VII	V	児玉Ⅴ ↔ VII	南大通り線内Ⅸ ↔ V
真間Ⅰ ↔ A	VI	六反田Ⅸ ↔ A	VI	児玉Ⅵ ↔ A	南大通り線内Ⅹ ↔ VI

跡は、衰退の傾向ではなく、掘立柱建物跡群（倉庫群）を集落の内部に編成し、構造的質的な転換があったと考えられる。

埼玉では、急速に成長した水深遺跡がある。各地で集落の質的転換が図られたこの段階に、土器生産にかかわる集落が、忽然と出現するのは、埼玉の内的諸矛盾を危機に急成長したためであろう。埼玉の質的転換は、後述する生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給のシステムの瓦解にほかならない。それは凡庸東的な埴輪生産の停止と同時に作用した。この空白を埋める紐帯は、小敷田遺跡出土出芽木簡のような動産の蓄積を背景としていた。

ところで、北島型暗文土器は、白山遺跡を西限、水深遺跡を東限とする令制下の榛沢・幡羅・大里・男衾・埼玉の各郡の新生集落へ供給された。これらの集落は、一斉に急成長する各集落へ共通に供給され使用されていた。それは暗文土器の存在から荒川・小山川の乱流地帯に、強力な畿内地方からの侵入が推定される。大里は、未だに児玉や利根川の対岸の上毛野のように、集落が拡散的に一定水準まで分解した地域ではない。未開拓の土地は、一定の排水処理を大規模に展開すれば、営農が可能な原・野等の開ける地域である。古墳時代以来の経営方式から、小敷田遺跡出土木簡にみられる収奪方法を始めとする動産の蓄積による経営方式が、耕地の拡大の前提条件を生んでいた。

[8世紀前葉] 児玉の各地に積極的に展開していた7世紀からの各集落は、停止の傾向が伺える。本庄台地から櫛引台地へと成長した集落のネットワークが、直線的となる。これは律令制度、とくに垂直的文書伝達の迅速化に伴う交通網の整備、ここでは東山道及びその枝官道といった、交通路に沿い結果する集落、郡衙等の機構を支える近隣集落が成立する。

こうした官衙集落と、それまでの古墳時代以来の在内地内の内的編成秩序によって作られてきた集落を弁別することは難しい（田中 1991b）。第Ⅶ期の新生集落（能登 1983・1986）が、交通網に沿う集落の原初形態を採るとすれば、郡衙機構の充実に共に8世紀中葉には、成熟していたといえる（山中 1984）。そればかりか北武蔵のこの地域だけではなく、関東地方一般の律令社会への傾斜のなかでとらえられる（註7）。

児玉では台・若宮台・天神林・夏日・社具路・下田・六反田・内出・白山遺跡、大里では東川端・樋の上・天神・北島遺跡、埼玉では水深遺跡等の集落である。

第249表 新展敷東遺跡と各遺跡の併行関係②

内出遺跡 (殿田野 1986)	白山遺跡 (中村 1989)	6世紀後半→Ⅳ 7世紀前半→Ⅴ 7世紀後半→Ⅵ
内出Ⅰ→Ⅶ 内出Ⅱ→Ⅷ	白山Ⅰ→Ⅶ 白山Ⅱ→Ⅷ	8世紀初頭→Ⅶ 8世紀中葉→Ⅷ
樋の上遺跡 (小川 1986)	精進場遺跡 (高橋 1976)	小針遺跡 (斎藤 1984)
樋の上Ⅰ→Ⅶ 樋の上Ⅱ→Ⅷ	6世紀前半→Ⅰ 6世紀中葉→Ⅲ	10号住居跡→Ⅲ 6号住居跡→Ⅲ・Ⅳ 2号住居跡→Ⅳ

交通に偏った集落の成長は、その交通機能の低下、すなわち文書主義行政の遅滞がおこると、横の交通関係である在地の集落間の連絡が密となる（石母田 1971）。そして再び在地勢力による動産の集中といった再生産が始まる。8世紀前葉の集落は、その転換の可能性を常に秘めていた。

このように北武蔵の各集落間の動態を探ると、児玉・大里・埼玉に一定の地域

的な方向性が読み取られる。比較的安定した開発基盤をもち、台地・丘陵への耕地の拡大をバネに成長した児玉の集落。荒川・小山川の乱流地帯で、排水を中心とした治水事業を大規模に展開し、耕地の拡大を図った大里の集落。比企をバックボーンとする埼玉古墳群の勢力。国造級の在地首長層のもとに、家産経済を支える足立郡北部を含めた埼玉の集落。そして地域的な特徴を払拭する状態、つまりこの三地域を破る集落の出現、それが第Ⅶ期の北島型暗文土器を伴う集落なのである。

2 窯業生産の展開と北武蔵

(1) 東国の窯業生産の前提条件

次に在地の集落間の諸関係を最も表わす窯業生産について考えておく。ここで窯業生産が、なぜ地方の上部構造の問題にまでも迫りえるかを若干記しておきたい。

古墳時代後期の窯業生産は、須恵器と土師器に二分されることは周知の事実である。この二つは、生産時における製作者の労働形態や生産組織・需要者の違いを含むあらゆる点で異なっている。このことは、須恵器出現以前や施釉陶器登場以後の窯業形態との比較を通じ、より明らかになってくる。

土師器の生産組織にかかわる問題は、これまで文献史学の検討を中心に行なわれてきている。浅香山木氏が、土師器の生産を須恵器と比較し、「土師器の場合には、必ずしも政治権力の介入を不可欠の条件とせず、ほとんどが、自給生産に近い形で確保されている」と結びように、土師器生産は集落内で自給生産的形態が中心とされている(浅香 1971)。

土師器の生産は、6・7世紀までに各戸毎の生産から各集落ないしは特定集落による生産にすでに転換していたらしい(田中 1991a)。彼らの生産は、集落あるいは数集落からの需要に応じて、必要数量が製作される「在庫なき生産」と考えられる。当然彼らは、供給を受ける集落や各集落間の首長から保護を受けることとなる。ここに言う保護関係は、力役や徭役等の免除や形を変えた首長層・集落への労働の奉仕であった(磯崎 1980)。この奉仕活動が、新たな豊饒に転化するために献納という体制を採るのである。

埴輪の生産および生産者は、この土師器生産を前提とし、首長層への献納を前提として、首長

層・集落から保護を受ける関係にあったと考えられる。古墳築造の負担(力労)は、そのまま律令国家の徭役制度に変形されながら引き継がれる(石母田 1956、浅香 1971)。しかし埴輪生産は、一定の技術的専門性を前提とするため、増産は、個人的な負担に転化する。埴輪生産者が、等質的製品を生み出し得るのは、生産者に伝習を経た土師器工人を主体として、埴輪の生産を展開していたからである。

ところで埴輪生産にみる東国的形態とは、須恵器の生産者が埴輪生産へ関与することが、緩いことである。つまり埴輪生産者の集団構成は、埴輪製作技術の

第250表 古墳時代後期の窯業

	埴輪	土師器	須恵器
東海西部	○少	○少	○多
中部高地	○少	○多	○少 ⁽¹⁾
関東東部	○多 ⁽¹⁾	○多	○少
東海東部	○少	○多	○少
北陸西部	○少	○少	○多
北陸東部	●?	○多	○少
東北南部	○少	○多	○少

(1) 相模を除く

(2) 天龍川流域を除く

保持者（土師器製作者内の特定埴輪製作技術者）と、一般集落から力勞を提供する非技術者から構成されている。

この東固的形態は、古墳時代後期の窯業生産（埴輪・土師器・須恵器）、生産量から窯業の展開と、一般集落からの労働力の結果形態が、導き出されるはずである。

② 埼玉への窯業製品の供給システム

埼玉古墳群へ供給された埴輪は、おおむね埼玉以南の各埴輪窯跡群から供給されたものである（山崎 1981）。河川輸送を前提条件とした場合、埼玉古墳群へは、河川を遡って搬送されたことになる。

なぜ大里・児玉からは、埼玉古墳群へ埴輪が供給されなかったのだろうか。

その答は、武蔵の各集落から出土する土師器が教えてくれる。埼玉古墳群集辺の集落は元米、北大竹・陣場遺跡が提示するように、和泉式土器の段階から比企型坏へ繋る系譜をもつ土器群で構成されていた。その後この地域は、須恵器坏蓋模倣坏（比企型坏を含む）の段階（TK23～TK47段階）を経て、白色系の小針型坏が展開する。ところが埼玉以西では、黒色土器系の有段口縁坏が展開し、独自の土師器の供給圏を形成していく。この背反関係は、5世紀以来の伝統的な土師器生産者のもつ経済圏の現われである。

この小針型坏の供給圏は、生出塚埴輪窯跡群の供給圏と一致し、いわば「埼玉経済圏」を形成する。この経済圏は、埼玉古墳群のもつ首長権（国造権）の影響範囲と政権の内部構造を示すかもしれない。

生出塚埴輪群で焼成された埴輪は、次の法則で供給されている（註8）。

1 大形前方後円墳 国造を継承し、畿内政権と交通関係をもつ被葬者の古墳

埼玉古墳群……二子山古墳・鉄砲山古墳・愛宕山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・将軍山古墳
笠原……………天王山塚古墳

2 小規模前方後円墳・帆立貝式古墳 1を支援し、1もしくは自己の造墓にあたり、構成員の労働力を差発権の及ぶ範囲で差発・提供する各地の在地首長の古墳

井川古墳・川田谷ひさご塚古墳・南大塚4号墳・小沼耕地1号墳（註10）・東浦古墳

3 円墳 埴輪生産を直接支え、埴輪生産の労働力を力役として直接提供する集落の小首長 安養寺古墳群・笠原古墳群・箕田古墳群・生出塚古墳群の各小円墳

なお3は、生出塚以外で埴輪生産を行なう際に、技術指導的な役割を果たした可能性がある。

生出塚埴輪窯跡群から供給された埴輪による権力構造の推定が成立すれば、その生産構造は、次のように解釈できる。生出塚埴輪窯跡群を中心に、近隣の集落から埴輪生産に直接力役が提供され、また周辺の集落からは、造墓の際の盛り土や下草刈りなど埴輪生産外の力役が提供され、この力役を提供した在地の首長層へは、生出塚の埴輪の提供が承認されるシステムが存在していた。だから河川を遡るところに構築された小前方後円墳へも埴輪は供給されたのである。

そしてこのシステムを直接運用するのが、埼玉古墳群である。その経済圏は、本来いわゆる比企型坏の供給圏がその権力基盤であった。生出塚の埴輪生産機構と埴輪の需給関係に反映される「生出土師器体制」は、小針型坏の出現を契機に大規模埴輪窯業を展開させた。新しい在地社会の結果方法

であった。

また小針型環が、次の集落・古墳から出土している。行田市小針遺跡・埼玉5号墳・瓦塚古墳・鉄砲山古墳・鴻巣市生田塚1号墳・笠原古墳群・騎西町小沼耕地1・2号墳・桶川市八幡耕地遺跡・浦和市北宿遺跡・伊奈町大山遺跡等である。生田塚埴輪窯跡の製品の供給先とオーバーラップしている。

小針型環は、埼玉古墳群中の稲荷山古墳と二子山古墳に挟まれた、小円墳群の形成過程に変化する現われる段階に出現する。小円墳群は、稲荷山古墳の構築に掛かり、TK47の須恵器蓋環を出土した梅塚古墳を始め、3・4・6・7号墳が、築造されたと推定される。これらの周溝中からは、TK23~47の須恵器蓋環を模倣した土師器環が出土している。

ところが6号墳と2号墳（梅塚古墳）の間に造られた5号墳へは、小針型環が供給されている。また5号墳のブリッジは、墳丘に対してほぼ南北である。しかし他はN-30°-Eを指している。埼玉古墳群中の前方後円墳の長軸方向は、細かな規格性のあったことが、増田氏の分析（増田1987）から分かっている。埼玉古墳群の中では、ほかに小針型環を使用する古墳は、鉄砲山古墳・瓦塚古墳等であるが、二子山古墳は不明である。しかし二子山古墳の埴輪を焼成した鴻巣市生田塚窯跡からも小針型環が出土しており、供給されていた可能性はある。

また小沼耕地1号墳の場合、くびれ部の周溝底と前方部前端に圧着した状態で小針型環が、5点セットで出土している。いわゆる供献土器として選択された土器である。武蔵の後期古墳から出土する土師器を検討した結果、古墳から出土する土師器は、5世紀後半から7世紀前半では、在地の型式の土師器を供給（供献）しているという結論を得ることができた（田中1992）。小沼耕地1号墳の場合も、在地の集落と共通した土師器が供給されるとするならば、埼玉県東部の古墳時代後期の集落跡で使用されていた土師器の推定も可能である。

小針型環が、生田塚埴輪窯跡群の埴輪の供給、とくに埼玉古墳群の新たな展開とかかわりがあったと考えるならば、これは、窯業における互換性に他ならない。埼玉古墳群での小針型環の出現は、埼玉5号墳への供献の開始期に求められる。伴出する須恵器からMT15~TK10の段階とされる。一方、小針遺跡ではTK47の須恵器の伴出する段階には未だ出現しておらず、次の段階に成立する（斎藤1984）。また生田塚埴輪窯の埴輪生産の開始期は、B横橋ハケの円筒埴輪を欠くことや、出土した土師器などから6世紀の第Ⅱ四半期をさかのぼらないことが、山崎氏により検討されている（群馬県考古学談話会他1985）。

本来の比企型環の食膳具集団の居住域に、強引に成立した小針型環の食膳具集団は、生田塚埴輪の成立を背景としていた。しかし比企型環の食膳具集団の支援なくしては、埼玉古墳群も成立しなかったことは、彼らが営んだであろう南大塚4号墳や川田谷ひさご塚古墳・井刈古墳などへ、円筒埴輪の供給はなかったと考えられる。これらの小前方後円墳の被葬者層である首長（在地首長層）を内部に編成し、中央とのパイプ役を果たしたのが埼玉古墳群であろう。

さて新原敷東遺跡のある埼玉以西のいわゆる狭義の北武蔵・秩父の地域（荒川が、現在の星川の流路を流れ北流していたとすれば、この流路を東の限界として神流川を西の限界とした地域）は、どのように埼玉へ奉仕していたのか、あるいはそうした関係はなかったのだろうか。

第251表 埴輪生産の指数累積

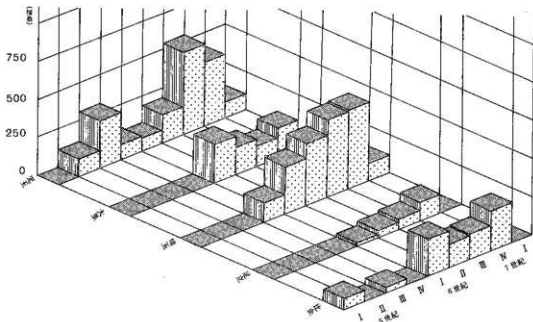
西暦	期	見玉	大里	埼玉	北足立	比企
5	I					78.0
	II	111.2				
	III	318.1				31.3
	IV	97.7		120.0		
6	I	79.8	262.2	307.6	11.9	250.4
	II	184.3	157.8	413.2	47.2	183.4
	III	547.5	136.1	502.7	64.5	187.3
	IV	421.4	191.2	513.2	119.8	265.5
7	I	109.1		104.0		

そこで埴輪の生産量の推移から分析を加えた。この作業は、埴輪生産の量的拡大が、どのように土師器生産に跳ね返ってきているかを探ることを目的としている。本来は、埴輪生産遺構群からの推定を試みるべきだが、工房等の埴輪生産の諸施設が整っているのは、現在のところ生田塚・桜山埴輪窯跡群の各工房群に限られている。そのため埴輪の確認された古墳から推定していく。

しかし各古墳が、全て発掘調査を経ているわけではなく、公約数的情報は、墳丘長と墳丘形態と埴輪の出土の有無だけである。そこで円筒埴輪の特徴を年代観の指標とし、円筒埴輪の樹立を芯々間距離 O 、埴輪列一周と仮定し、墳丘周長が埴輪の樹立個数を反映するものとする。

とすれば前方部幅 $2 \cdot$ 後円部径 $2 \cdot$ 全長 $1 + \sqrt{3}$ の比率の前方後円墳は、 $2\pi - \pi/3 + 4$ で求められ、同様に径 $1 + \sqrt{3}$ の円墳は $(1 + \sqrt{3})\pi$ で求められる。円墳は、前方後円墳の1.08倍円筒埴輪が必要となる。そこで墳丘長から単位数を導き、その単位数の累積から生産量を推定する。

埴輪の生産量の推移を作業前提として、さきの古墳時代後期の地域区分に従い、生産量の推移を



第608図 北武蔵の埴輪生産量の推移

確認したのが第608図である。これから埴輪生産量の推移を検討すると、6世紀前半の量的な拡大をどの地域でも確認できる。窯窯焼成技術の導入といった技術革新もさることながら、この技術の獲得の背景に、在地に埴輪の樹立を必要とする古墳が急激に増加したこと、さらにそれを支える在地の集落間のネットワークが活発化し、生産域を拡大していたことが上げられる。

埴輪の需要層の拡大は、急激な埴輪の大量需要に繋る（森田 1991）。元来埴輪の生産は、古墳の造墓を契機に展開していたと解釈すべきで、窯窯焼成技術の導入後も生産の契機は、造墓を前提にしていたと考えられる。ここで問題となるのが、大量需要を支えるための生産のシステムの開発である。このシステムは、おそらく今まで埴輪生産にかかわっていた製作者を中心に、周辺集落から非技術者を大量動員し、埴輪製作者集団として編成し、首長層への奉仕を集団として位置付ける。この集団は、生出塚古墳群・安養寺古墳群・笠原古墳群などに埋葬された者たちが形成した集団であった。

ところが、生出塚のような大規模埴輪窯の展開しなかった、言葉を変えて言えば、国造級の首長の介入のない埴輪窯では、製品の殆どが、中小の前方後円墳から群集墳の一円墳へ行き渡ることとなる。そのため凸帯紋2～4段の小形円筒埴輪の生産が、急激に必要とされた。この二つの生産体制がともに展開していったところに、武蔵の埴輪生産の特徴を見出すことができる。

一方、狭義の北武蔵の埴輪の生産体制のあり方はどうであろう。この地域では、従来から埴輪窯20基前後の小規模窯が、大里・児玉を中心とした地域に展開されていたことが確認されている（群馬県考古学談話会他 1985）。この埴輪の生産は、各集落における土師器の製作者集団を、小規模ながら再編成して展開し、主に近隣の古墳群へ供給していた。その生産の契機は、造墓を契機に展開した。この地域の埴輪窯が小規模なのは、供給された埴輪が小形製品に限られていることや、編成された工人の数によるのであろう。

小規模埴輪窯の経営は、各集落の首長層に委ねられていた。小規模埴輪窯でも形象埴輪の生産は、土師器製作者を媒体としていたため、種々な製品に陥らず安定した技術保持が図られていた（山崎 1981）。省力化は、より簡易なテクニックを求め続けた円筒埴輪が背負ったのである。

土師器製作者が、埴輪生産に関与していたことは、改めて述べるまでもない。再三述べるように生出塚体制は、埼玉古墳群では二子山古墳段階に出現した窯業体制の新秩序であり、比企型環の土師器生産体制のうえに覆い被さるよう出現した小針型環の体制である。この体制の出現は、北武蔵の埴輪生産に少なからず影響を与え、小規模窯の増加と生産量増進を生み、妻沼低地で出現した有段口縁環の広域的な生産と供給へと繋るのである。

ところで5世紀に起こった窯業革命は、窯業製品そのものの質的転換を巻き起し、東国の食糧具需要を急速に高めた。東国の生産と再分配の構造は、陶器に代表される須恵器の集中的生産と、整った流通機構で形成された畿内の形態ではなく、各集落に窯業生産が委ねられていたとされる。また流通機構も異なる形態といわれる。

しかも東国といえども前述したように、各地域によって埴輪・須恵器・土師器の窯業製品の需要に相違があり、必ずしも須恵器生産の有無・多少から文化的な優劣を語る、あるいは畿内との遠近関係を示す指標とは成りえない。ここでは新屋敷東遺跡の土師器が成立していくプロセスを解明す

るために、関東（坂東）の特質を探っておく。しかも関東も一括りにその特徴をつかむことは難しく、さらに細かな地域性が見出せる。この地域的特徴を武器に、各集落間の社会的関係を考えていきたい。

関東的特質、それは6世紀に急激に需要の高まる埴輪の生産を、人海戦術的打開方法によって乗り切り、小門埴にまでも優秀な形象埴輪を樹立させる。しかし埴輪の製作者は、所詮、農閑期に余剰労働として、首長への奉仕で集められた者達である。埴輪の生産の呪縛が解けると、自己のあるいは所属する集落の実益的部門（耕地の拡大・群集埴内部の分化）へ転化する可能性を常に秘めていた。

しかしさきに集落の動態で見たように、埴輪生産の急速に低下した7世紀初頭を境に、こうした積極的開発を裏付ける資料は決して多くはない。むしろ新屋敷遺跡に見たように、第V・VI期に集落の内部の堅穴式住居跡が急激に増加する現象に、その兆候を見ることができよう。つまり埴輪生産の停止による余剰労働力の集落への還元は、集落内部の蓄積として現われ、次の段階の新生集落を生み出す原動力として保存されていた。

埴輪の生産の停止が、他の窯業形態の質的転換にかかわらず、6世紀的な土師器・須恵器の生産として、7世紀にも引き続き展開していた。これは埴輪の生産が、他の窯業経営を侵さない経営手段で営まれていたためと考えられる。それは、土師器の生産と埴輪の生産は、異なる季節・時期（契機）に行なわれたか、異なる製作者によって生産されていたためである。ただし後者は、埴輪製作者を専業者として考えなければならず、地域的特色の強い埴輪の製作が、果たして専業的な工人を生み出すまでに至っていたか疑問である。

そこで製作の契機の違いが、8世紀の土師器生産形態を7世紀に引き継ぐ背景にあったと考えておきたい。むしろ埴輪生産の解体がもたらしたものは、集落内部の再生産力の増長と個別的な所有の拡大、そして更なる再生産へ向けての群集埴の積極的な造墓の展開であった。

(3) 土師器生産と6・7世紀の武蔵

古墳時代の土師器生産の特色を考察した諸論考は、残された文献資料を手掛りとして、王権と畿内の生産者にかかる問題が中心であった（浅香 1971、田中 1966、横山 1961等）。しかしそれは、窯業生産の大半を須恵器が占め、土師器は煮沸具や一部の食膳具に限定される、畿内的な窯業生産を前提とする考察であったことは言うまでもない。煮沸具はもちろん食膳具をも土師器で構成する関東的形態とは、自ら異なった生産形態がとられていたことは予測される。ここでは土師器生産の関東的特色を考えておきたい。

関東の土師器の生産の特色は、第一義的に集落の需要を満足させ、第二義的に集落間の上部（首長層）の食器を支え、第三義的に土師器型式枠外の周辺集落へ交通関係の明かしとして供給することを目的とする。またその副産物として、墳墓や祭祀遺跡等に使用される。関東の土師器生産は、需要を見込んだ生産や、製品の備蓄といった畿内の須恵器のもつ流通システムへは移行しなかった。集落や首長層は、土師器工人が、このシステムへの転身を要求しなかったためである。

ところで関東地方では、須恵器を巧妙に模倣する土師器が製作されたことは、関東の土師器工人

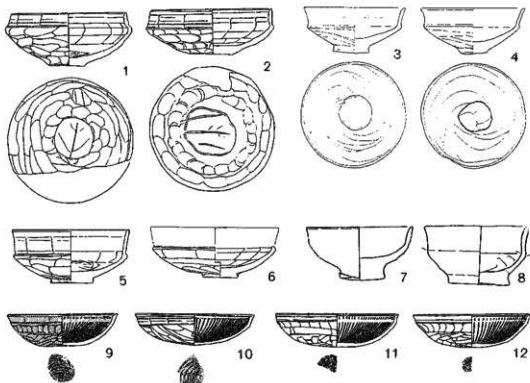
達が、技術的に劣っていたことを否定する。食膳具の製作技法を確認することで、それを証明しておきたい。

第Ⅰ工程〔成形〕 底部を削り落さず焼成した製品から、成形の手法を観察できる(第609図)。殆どの食膳具の底部は、暗文土器を除き木炭痕跡が見られる。まず木の葉の上に粘土塊を載せ、底部を成形する(註11)。この底部の縁に粘土紐を巻きつけ圧延し肩部まで碗形に作り上げる。木の葉が台との摩擦を調節し、成形を補助する。(橋本1987)。

第Ⅱ工程〔口縁部調整〕 口縁部・口唇部を調整し、器形を整える。この時点で食膳具の型式(同一の食膳具をもつことによる集団関係の確認)が決定される。武蔵では、6・7世紀の食膳具に口縁部の成形手法から4形式を設定できる。

- | | | |
|---|---------------------|---------------------|
| a | 口縁部の調整技法を欠いた粗製土器 | ①M形土器 |
| b | 口縁部の細かな成形・調整を経た精製土器 | ②須恵器环蓋模倣土器(有段口縁を含む) |
| | ” | ③須恵器环身模倣土器 |
| | ” | ④須恵器の形態に関わらない土器 |

口縁部は、全てヨコナデされ、器面が平滑に仕上げられる。ただし口縁調整のように口縁部を



1・2 新羅敏東遺跡92号作例跡 3・4 長尾路遺跡14号作例跡
 5 新羅敏東遺跡22号作例跡 6 新羅敏東遺跡21号作例跡
 7 長尾路遺跡20号作例跡 8 新羅敏東遺跡9号作例跡
 9-11 新羅敏東遺跡121号作例跡 12 新羅敏東123号作例跡
 ※1-8は底部削り残し(乾状) 9-12は磨止素器(灰)

第609図 土師器の底部調整

一気にヨコナデしているのではなく、器面の観察から断続的に数単位に分けてヨコナデ（断続ヨコナデ）している。口唇部は、凹状の面をもってつくり、外縁も巧妙につくられている。端部までも形態的に模倣され続けた。

第Ⅲ工程 [器面調整] 器面の仕上げとして底部及び内面に施される調整

a ヘラケズリ 木葉痕の付いた高台状の部分を作り出し、器壁を薄く造るために、不要な粘土を刀子などの金属器等で削り落とす。その手法は、まず一定方向に削り落とす（底部ヘラケズリ）。その後周辺部を数回にわたって回しながら削り落とす（周辺ヘラケズリ）。口縁部を持ちながら行なうため、口縁部にままだ爪跡が残る。このとき薄過ぎて穴が明いたものもある。

b ヘラミガキ 乾燥の直前に棒状工具やヘラの背などで、主に内面の器表をこすり光沢をもたせ

第252表 6・7世紀の関東地方北西部の食膳具

型式	出現	器種	ヘラミガキ	法量	仕上げ	分布域	消滅
内斜口縁環	TK208	碗・環A・B・高環	斜行放射状	一定	黒色処理(少)	西毛～児玉	MT15
須恵器模倣環	TK208	模倣身・模倣環蓋・高環	—	変化	褐色粘土	上野～武蔵	TK217
有段口縁環	TK10～	模倣身・環蓋A・B・C・高環	放射状(底部外面あり)	変化	黒色処理(多)	東毛～北武蔵	8世紀中葉
小針型環	MT15	模倣身・模倣蓋	—	変化	灰白色粘土	東武蔵	TK43
比企型環	TK208	模倣身・模倣蓋・環身・高環	放射状	変化	赤色塗彩	南武蔵	8世紀中葉
大谷口型環	MT15	模倣身・環身・高環	放射状	変化	褐色粘土	下総北部	TK43
噴文土器	TK46	環・碗・鉢・盤・高環	放射状・雷状・螺線状	分化	黒色処理(少)	児玉除く北武蔵	8世紀中葉
内屈口縁環	TK46	環	—	分化	褐色粘土	関東地方全般	8世紀

る。斜行放射状や、花卉状・螺線状・雷状等がある。形式による文様の選択がある。

第Ⅳ工程 [焼成・彩色] この工程では、焼成後の食膳具の色調が、如何なる色に焼き上がるかが問題となる。製品の色調が、使用する集団間の共通性を浮き彫りにさせるためである。方法は次の3

第253表 北島型噴文土器と有段口縁環

手法がある。

		北島型噴文土器		
		I	II	III
青	IV		小角田前163住 白山19住 東川端26住 東川端28住 東川端35住 樋の上50住	
		甘柿野4住 東川端36住		
段	口	樋の上19住 北島5-24住	白山20住 山63住	東川端4住 東川端32住
		北島5-28住	東川端6住	内出9住
緑	V		東川端26住 東川端34住 東川端37住 東川端38住 東川端39住 東川端内形 周溝器 下辻12住 飯塚南23住	

a 粘土選択 焼き上りの色調を見込んだ粘土を選択し使用する

b 黒色処理 焼成方法の開発により、表面を黒色に仕上げる

c 赤彩処理 焼成後、器表に赤色の顔料を塗彩し仕上げる

このように例え口縁部を使用せずとも、口唇部形態や外縁・器厚等を几帳面に模倣する技法が、発達している。須恵器との違いは、胎土と焼成技法だけである。以上の特徴を個々の食膳具に照らして考えたとき、次のような型式観を見ることができる。

食膳具の各型式間の併行関係を述べておく。

須恵器模倣環は、基本的には須恵器環蓋の型式変化に

第254表 有段口縁環と比企型環

期	遺跡・遺構	比企型環
I	歌舞伎17住	II
	船田C10住	II
	中田8住	II
	多摩川台3号墳	II
II	高峰S B11	II
	小角田前110住	III 1
	宇佐久保4住	III 1
	水川神社北方3住	III 1
	水川神社北方25住	III 1
	高峰S B127住 曾谷3住	III 1
III	宇佐久保4住	III 2・3
	船田B49住	III 2・3
	上の台Y62住	III 2・3
	上の台U57住	III 2・3
	上の台2A65住	III 2・3
	上の台2A49住	III 2・3
	上神明17住	III 2・3
IV	神山2住	III 2・3
	入間城山5住	IV
	金井55住	IV
	弁天池北S B 8	IV
	金井6住	IV
V	駒籠11住	III 1
	飛田給S119	IV
VI	金井35住	IV
	金井3住	落川9住

産を5つの画期をもとに発達段階を説明したい。先の植輪生産の部分と重複する部分もあるが、土師器生産の発達段階を探るために記しておく。

第1の画期 食器の中心が、高環から環へ転換する段階。供膳具から食膳具への転換。環の急激な需要量の上昇は、系譜の異なる土師器工人達が、在来の器種の環を拡大生産することで賚

一致するためここでは省く。小針型環は斎藤分類（斎藤 1984）、比企型環は水口分類（水口 1989）、内屈口縁環は赤熊分類（赤熊 1988）、大谷口型環（註12）は、房総古文化研究会分類（房総古文化研究会 1987）、有段口縁環と暗文土器は筆者の分類（田中 1991 a・b）を使用し、各型式の併行関係を一覧表によって確認しておくこととする。

内斜口縁環に限り、型式学的な確認を行なっておく。

内斜口縁は、口唇部を斜めにS字状に仕上げ、内面に稜をもつ口縁部の形態を指す。しかしここでは広義に内斜口縁環をとらえ、内面に斜行放射状ヘラミガキを施す一群を指す。口唇部形態によりa・b・c類に分類することができる。a類 外面に緩い凸状を成す。b類 緩いS字状となる。c類 特殊な形態を成さず素口縁。また形式的には、環・塚・須恵器環蓋模倣環とこれらを環部とした高環の器種を設定することができる。変化の方向性は、口縁部の形態変化、ヘラミガキの消滅化である。

第253～257表から関東地方北西部の古墳時代後期の土師器の型式学的な変化を読むことができる。そこでこれらの型式の土師器の生

第255表 内斜口縁環と須恵器の伴出関係（各報告書から）

須恵器	環 a	環 b	環 c	塚
TK 208	荒砥北原7住	荒砥北原7住 温井10住 荒砥島原E区7住 後張50住	荒砥北原7住 温井10住	
TK 23	諏訪49住 後張88住○	小神明九科48住 後張88住○ 穴池12住 後張4住 後張92住 後張45住	小神明九科48住 諏訪49住	
TK 47		正観寺45住 生原善龍寺S B5 後正間2区土器だまり 井出村東108住 芦田貝戸FA水田 黒井峰系紀跡	正観寺45住 生原善龍寺S B5	生原善龍寺S B5 後正間2区土器だまり
MT 15		引間32住 温井7住 井出村東15住	引間32住 温井7住 温井14住	引間32住

註 ○は、内面にヘラミガキの施されていないもの。
榛名山二ツ岳墳出火山灰層（FA）の埴積をここでは、TK47～MT15としておく。

第256表 在地須恵器と北島型暗文土器の共存関係

		北島型暗文土器			
		I	II	III	IV
在 地 須 恵 器	I	八幡太神南1住			
	II		清水谷18住		
	III	白山20住 樋の上19住			
	IV	新屋敷東115住 北島5-30住 水深42住	飯塚南23住 飯塚南SK08 東川端5住 東川端15住 東川端28住 白川71A住 台61区18住 三ツ木217住	東川端SK54	電燈下49住
	V	白山47住	水深40住 水深40住 新ヶ谷戸1住 下上12住 下上19住 白山52住 東前65住	若宮向60住 北島5-9住 白山8住 白山50住 上敷免2住 下上14住 東川端45住 樋の上54住 吉井戸121住	
	VI		東川端SK1	水深23住 三ツ木239住 東川端32住 下上18住 内出9住 内出15住 の野南2住	清水谷15住 北島14住 電燈下2住 若宮向80住 白山62住 白山35住 白山17住 東川端47住

なわれていた。ただし窯業体制は、既存の生産の一部門を拡大しただけで抜本的な変革は訪れていない。

布留式土器と和泉式土器の関係や伴出須恵器などから、TK73~TK208前後であろう(坂口1986)。【新屋敷東遺跡第I期】

第2の画期 食膳具の多量需要は、ついに在地の食膳器の生産を飽和状態にする。この需要を満たし、安定供給を続けるため、在地の土師器生産は、器形の画一化による大量生産に突入した(田中1992)。武蔵では、須恵器「坏蓋」を細部まで精緻に模倣し、食膳具の中心に位置付けた。須恵器の模倣は、すでに第I期にも見られるが、主要型式として確立するまでには至らなかった。

例え須恵器の模倣が、畿内文化への憧憬でも、画一的な器種の生産を様々な系譜の工人等に課したのは、首長層の強権による土師器工人の再編成にほかならない。

しかも坏模倣が、「蓋主身徒」の原則を守っ

第257表 有段口縁坏と須恵器の共存関係

期	遺跡・遺構	器種	型式	上の台2D34住		柴崎5次11代		高坪磯部	
				坏身	TK209	坏身	TK43	坏身	TK217
I	飯塚南25住	坏蓋	TK10	東谷14住	坏身	TK43	藤原神社28住	坏身	TK217
	遺ヶ谷戸10住	坏蓋	TK10	下瀬17住	坏身	TK43	矢作8住	坏身	TK217
	田嶋10住	有蓋高坏	TK10	大久保A170住	坏身	TK43			
	三ツ木28住	有蓋高坏	TK10	松野	坏蓋高坏	TK43			
	舟橋1住	有蓋高坏	TK10	海行ASB28	坏身	TK43	矢作5住	坏身・蓋	TK209
	上の台2Q-46	坏身	TK10	有古1A5B28	坏身	TK209	宇佐久保2b住	蓋	TK209
	南大通り線内80住	坏蓋高坏	TK43	村殿14住	坏身	TK209	新ヶ谷戸1号墳	ガラスコ	TK217
	光輝敷17住	高坏	TK43	小室C100住	坏身	TK209	柳久保37住	坏蓋	TK217
	社員路49住	無蓋高坏	TK43	荒砥二の塚54住	点坏	TK306	樋の上22住	坏身	TK46
				大井東山8住	坏蓋・身	TK306	白山20住	坏身	TK46
II	鍛ヶ谷35住	有蓋高坏	TK10	大井東山109住	坏身	TK209	北島5-10住	坏身	TK46
	社員路20住	点坏	TK43	歌舞伎7住	短卵壺	TK209	柳久保86住	坏身	TK46
	中道SB01A	坏蓋	TK43	歌舞伎71住	高坏	TK306	荒田給S119	坏蓋	TK46
	歌舞伎A49住	坏身	TK43	歌舞伎A55住	高坏	TK209	方井35住	坏蓋	TK46
	永川神社北方25住	坏蓋	TK43	光輝敷1S住	坏蓋	TK209	芳賀11-126	長頸壺	7末~8初
	小島田前45住	高坏	TK43	椎名崎75住	坏身	TK209	歌舞伎A78	坏身	7末~8初
	大井東山54住	坏身	TK43	有古195住	坏身	TK306	東川端28住	坏蓋	7末~8初
	新川7A5住	高坏	TK43	上神明23住	坏蓋	TK306	東川端39住	坏身	7末~8初
	上の台V60住	高坏	TK43	舞台D96住	短頸壺	TK209	下上12住	坏身	7末~8初
	小島田前26住	高坏	TK209	引込坂17住	坏身	TK209			
小島田前130住	高坏	TK209							

たことは、東関東や東北・北陸・中部高地・東海の土師器生産とは抜本的に異なり、首長層の結集形態や経済圏の違いを反映するものである。坏蓋の本来の機能を土師器工人たちが錯綜し、坏身として模倣したなどという牧歌的なものではない。模倣される須恵器坏蓋の形式からTK23~47前後であろう。

[新屋敷東遺跡第Ⅱ・Ⅲ期]

第3の画期 坏蓋模倣坏の成立から程なく、南武蔵(比企から多摩)と東武蔵(埼玉)に系譜の異なる食膳具が成立する。比企型坏、小針型坏の登場である。

比企型坏は、韓半島の赤焼き土器から系譜を引くとも、在来の和泉式土器から成立したとも言われる。薄い造りの土器で、内面と外面の口縁部を赤色に塗彩することを特徴とする(水口 1989b)。すでに第Ⅱ期にその萌芽が見られる。小針型坏は、坏蓋模倣坏の系譜を引き、須恵器坏の大形化と前後して出現した。口縁部は外反しつつ立ち上がり、白色に焼き上がった硬質の食膳具。

比企型坏は、広範な地域に長期に及び供給された。これは土師器生産を揺るがず政治的結集体がなく、動揺をいざなう土器が出現せず、在地の土器生産が強固だったためであろう。比企型坏の場合、坏・小形壺・甕・高坏から円筒埴輪に至るまで、赤色顔料が用いられている。たとえ自然に豊富に産するものであっても、これを定量貯うための供給のシステムがこの経済圏には、完備してはならない。そのルートの確保から採出量の調節まで、在地首長層を媒体とした交通関係が利用されていたと考えられる(石部 1965)。なお古墳時代後期の関東地方の赤彩土器は、南武蔵と房総で見られる。

[新屋敷東遺跡第Ⅲ期]

第4の画期 北武蔵では、小針型坏の出現にやや遅れ、利根川の乱流地帯を中心に有段口縁坏が成立する。外面は漆塗ではないが、黒色処理され、東北地方の黒色土器の影響を受けている。北武蔵の坏蓋模倣坏の供給圏と重なり、比企型坏の供給圏には、ほとんど確認できない。

第4の画期は食膳具の供給圏が、明確化する段階である。東武蔵の白、北武蔵の黒、南武蔵の赤の土器の供給圏が、埼玉古墳群を要に成立していた。しかし有段口縁坏の登場後、白の小針型坏は急速に生産量を低下させる。そして黒と赤の土器の対峙する食膳具の供給圏が成立する。和田吉野川一元荒川-江戸川をむすんだラインが境となる。

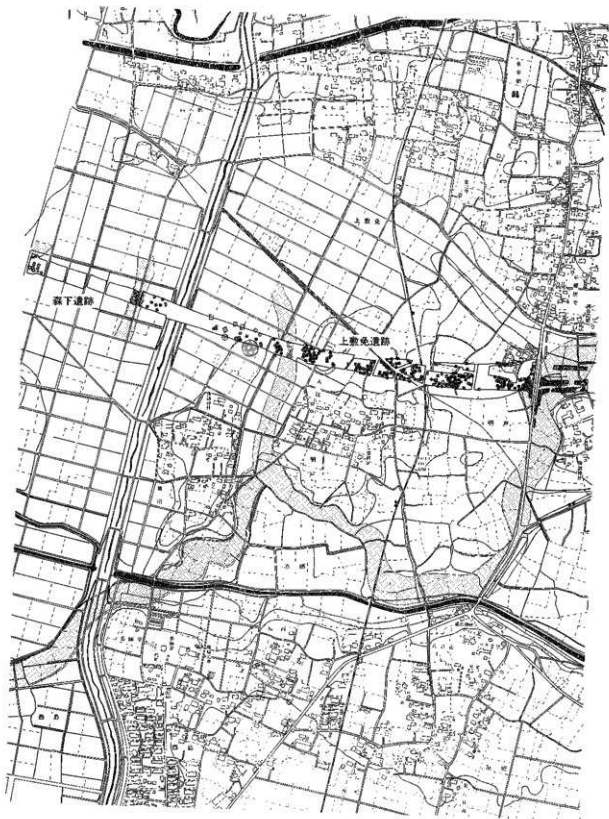
有段口縁坏は、上毛野の平野部の食膳具の生産体制までも巻き込み、在地の諸関係を内部から歪曲させた。それは、在地首長層間の動揺が、古墳の造墓として反映されている。この状態は、TK10~TK43から始まりTK217~TK46まで続く。

[新屋敷東遺跡第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期]

第5の画期 第4の画期以降、在地の土器生産は、安定的な傾向が見られた。しかし7世紀後半になると北武蔵の特定の地域、大里・幡羅・埼玉・榛沢で暗文土器の生産が開始される。

畿内とくに宮都の暗文土器からテクニックの連携が見られる。飛鳥・平城分類の坏C、盤・鉢を主に模倣し、内面に放射状の暗文のみ施文する。しかし暗文土器の生産は、在来の土師器の生産体制を転覆させるまでは至らず、食膳具の2~4割程度を隋うに留まった。工人は畿内から直接招来し、在地の工人と再編成されて成立した生産体制で生産された。

武蔵の他の地域では、暗文土器の補充はなく、在来の型式の土師器と、内屈口縁坏(真間式土器)による食膳具を構成していた。やや遅れて児玉・末野・南比企・南多摩等の各須恵器窯が、大量生産を開始し、各集落へ製品を供給し始める。土師器の工人たちは、須恵器の工人として一部は





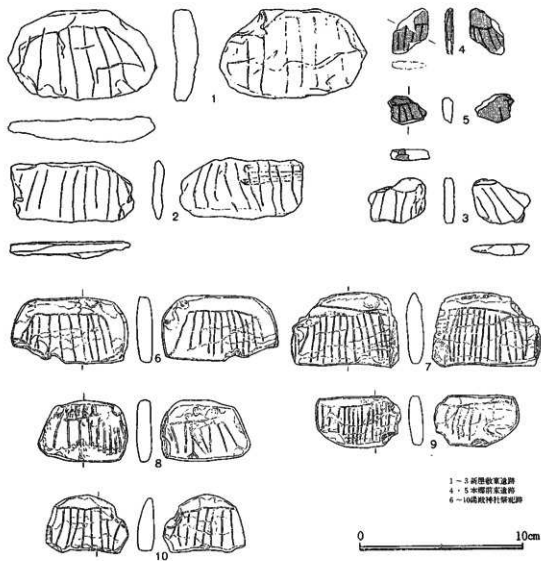
第 610 図 新屋敷東遺跡と周辺の発掘調査と古墳時代以降の遺構

再編成された。土師器は、煮沸具中心の生産へ徐々に変質していく。だが土師器の生産は、私拭されることはなかった。

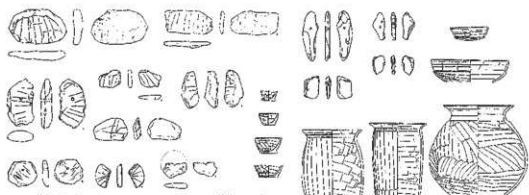
在地の経済圏が明瞭だった古墳時代後期的な様相は後退し、在地内窯業への国家の介入・製品のコントロール（特定商品の生産・流通機構への関与・工人の派遣等）が露骨になった（田中 1991）。

第V期は、大振りの台付坑やリング状つまみ蓋等の伴出から、7世紀後葉、天武・持統朝から8世紀初頭を考慮しておきたい。 [新屋敷東遺跡第VII期]

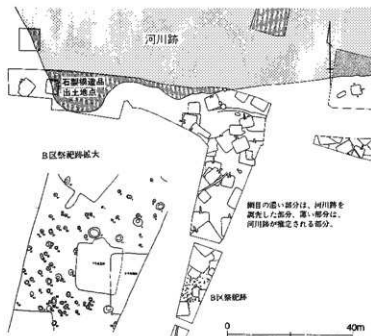
さて、共通の型式の食膳具で結ばれた集落は、土師器の生産・消費が、共通の媒体（流通機構）であったと考えられる。つまり集落間に取り結ばれた首長層への貢献の分担・協力体制を背景とす



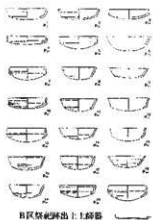
第611図 横櫛形石製模造品



横櫛形石製模造品及び伴出石製模造品 伴出した手摺お土器



横櫛形石製模造品出土器



B区祭祀跡出土器類



B区祭祀跡出土石製模造品

第 612 図 横櫛形石製模造品出土地点周辺の遺構と遺物

る経済圏が、土師器の供給圏を通して成立していたと想定できる。

この経済圏は、水田への用水系や共通する耕地条件等から醸成された集落を、古墳時代後期に再編成し成立している。一方、多量の環を必要とする食器形態は、「春時祭田」のような短期間に集中的に労働力を確保した実態を反映する供餐等を示すのであろう。

3 古代の開発と石製模造品

新屋敷東遺跡で発見された石製模造品は、①河川跡の縁辺部で確認されている、②7世紀前半の土器（新屋敷東遺跡第Ⅵ期）が伴出している、③成形が粗雑で何を模造したのか分かりにくい、④本郷前東遺跡で確認された遺構・遺物（川口 1989）と関連する、⑤石製模造品の組成は、刀・鉄鎌・有溝円板に加え、櫛形・馬形が存在する等から、7世紀の水利にかかわる再生を祈願した行為（水の祭祀）が、新屋敷東遺跡を軸に行なわれていたことを示す。

他の石製模造品はともかく、櫛形・馬形の石製模造品は、奈良時代以降に井戸や溝等から畜串等と伴い発見される牛馬骨・土馬・櫛等のいわゆる律令的祭祀の先駆的形態を示している。とくに横櫛形石製模造品の発見例は、熊谷市湯殿神社祭祀跡で確認されているに過ぎず、櫛そのものの変遷、横櫛の成立を考えるうえで重要な資料であろう（註13）。

注目すべきは、湯殿神社祭祀跡と新屋敷東遺跡の「水の祭祀」の共通性である。湯殿神社祭祀跡の石製模造品は、熊谷市別府の湯殿神社裏の湧水堀から出土し、櫛引台地縁辺部の崖面の湧水を対象とした祭祀遺跡とされている（大場・小沢1963）。しかしこの考え方を否定するわけではないが、福川が形成した三ヶ月湖である別府沼が、福川の流路の度々変転によって形成されていたことを考えると、旧福川のある河道が、用排水として古代の開発に関わった可能性は大きい。とくに深谷市清水上遺跡などで確認されている耕作痕跡は、それを裏付けることはあっても否定することはない。

新屋敷東遺跡も旧福川の一支流が、集落の北側を流れ、集落の成立と深く関わっていた。水利を背景にした再生の祭祀が行なわれたことは推定される。B区祭祀跡とされるこの空間は、群在する小さな柱穴状の落ち込みによって、幾ね方形に区画され、刀・鉄鎌・有溝円板に加え、櫛形・馬形の石製模造品が出土している。またこの区画からは、多量の環型土器が出土している。その内訳は、有段口縁環（15）坏身模倣環（6）土師器製の口縁部破片からなる。

一方、新屋敷東遺跡の石製模造品が確認された場所は、河川跡が大きく南にえぐり込まれ緩い入り江状になったところである。この部分に集中して今回報告した石製模造品が出土している。相伴する遺物は、食器は少なく、2点の煮沸具と2点の貯蔵具（須臾器・土師器1点づつ）から構成される。また鉢形をした手捏ね土器が、4点組成に加わっている。

出土した土師器の相伴関係や両遺構の距離等から、両者が一つの完結した行為の痕跡と考えて良い。その行為を復元すれば次のように推定される。B区祭祀跡を石製模造品を媒体とした共食の跡とし（川口 1989）、今回の資料を祭具の河川への投棄の痕跡とする。石製模造品が、7世紀まで集落の祭祀に関与していたことを示す。ここで大宝令の解釈書である古記の「春時祭田」条に見られる「郷飲酒礼」の記載が、喚起されないわけにはいかない。

大町健氏は、酒肴を振る舞い労働力を差発する形態を、延暦9年(790)4月16日太政官符より検討し、「共同体の祭祀における飲食が労働力編成の契機として重要であったこと」を解いている(大町 1986)。つまり「春時祭田」の「郷飲酒礼」的な儀礼を通じた、耕地拡大や古墳の造墓を含めた労働力の結果が、大化前代から存在していたことを示唆してくれる。

一方、出原恵三氏は、西日本の水辺に展開された祭祀跡をⅠ～Ⅴ類型に分類し、義江彰夫氏の村落祭祀と公出卒制の考え方(義江 1986)から引用し、「Ⅰ類→Ⅱ～Ⅴ類への変化は、在地における生産力の発展に照応した祭祀形態の変化として把握すべきものであり、Ⅵ類の成立と展開は、特権的司祭者による共同体成員の統合の新たな段階を示すものである。(中略)在地の共同体単位で行なわれたⅣ類祭祀の解体・形態化の過程の中にこそ、統合の段階を読み取らなければならない」と結ばれている(出原 1990)。

古墳時代後期の集落の一定空間から、食膳具を中心とした大量の土器が出土する場合がままあり、川湖・海の岸辺等で、執り行われた「祭祀」と報告される場合が多い。出原氏の行なった資料操作は、西日本の資料から導き出されたために、直訳的に東国の集落には反映できない。

これを受けた辻本和美氏は、福知山市石本遺跡出土の土器群の分析を通し、「畿内政權と結び付くことにより、新たな技術や思想を導入し、それによって農業生産の増大と村落共同体成員間の統率を図ろうとした在地首長層の要請にあったものと思われる。」と、畿内政權の周辺部に位置する集落の性格を祭祀と関連し述べられている。

新屋敷東遺跡で確認された石製横造品も、河川跡に臨む水辺の儀礼・祭祀を支える重要なファクターの一つではなかったろうか。しかし、「春時祭田」条をめぐる解釈は、義江彰夫氏をはじめ、多くの人々によって行なわれているが、考古学的な資料を駆使したものは、漸く途に付いたばかりである。

まとめ

以上、新屋敷東遺跡について、北武蔵・北西関東、そして東国の6・7世紀を、窯業生産と集落の動態というフィルターを通して考えてきた。北武蔵という地域の内的動態を分析し、新屋敷東遺跡がどのような地域内の変容のなかで存在していたかを考えた。

東国的窯業形態が、食膳具の独自の展開から裏付けられ、その供給圏の集団関係は、6・7世紀の具体的な境界意識を反映していよう。この境界が、果たして6・7世紀のクニを前提とするものであるかは明らかではない。しかし少なくとも新屋敷東遺跡が、6世紀後葉をターニング・ポイントとして、再編成される実態を如実に示しており、この事実は、埼玉古墳群を含めた武蔵内部の変動に反映している。

埼玉古墳群に代表される在地の諸関係と、『日本書紀』の安閑期の武蔵国造をめぐる記載が、在地の土器生産にどのように関係するか次に記しておきたい。

安閑天皇元年閏十二月条記事は、以下の点に要約される。

1 「武蔵国造」を笠原直使主と小忰が争奪する

国造権が在地首長層の同族間の争いになるまで、在地内の諸関係に重要な権益を持っていた。

2 上毛野君小熊が小杵を支援、朝廷が使主を支援

在地首長層間に有事の際の支援体制が成立している。畿内の権威化された紐帯を持つ。

3 使主が「四処屯倉」を朝廷の管理下に置く

屯倉的経営の開始を武蔵国造の内紛と関係させた形で掲載。

これが、書紀の編者による屯倉設置の安閑天皇紀への編集作業であったとしても、この記事は、古墳時代後期の武蔵・上毛野における在地首長層間の諸問題を的確に表現していると考えられる。

必ずしも比企型環と須恵器模倣環との相克に、この争いを此定するわけではない。しかし比企型環の供給圏内に、6世紀第Ⅱ四半期、突如として小針型環が登場し、生出塚輪窯体制が成立するこの局面は、武蔵の内部に在来の諸秩序を再編成させる動きがあったことを裏付けている。

奇しくも埼玉5号墳から、埼玉古墳群の内的変化が始まることと一致している。「四処屯倉」の信憑性はともかくとして、各屯倉の比定地は、比企型環の供給圏内に当たる。新たな経営方式である屯倉的経営を南武蔵・比企（横浮）へ導入したことは、生出塚体制の政策的一面ではなかったろうか。この生出塚体制が果たして畿内から直接導入されたものかどうかは明らかではないが、埴輪の製作技法の点検・生産体制の類型化から明らかにされていくことだろう。

一方、この段階（第Ⅳ期）に北武蔵のとくに児玉・大里の各集落で、竪穴式住居跡の構築数が減少する傾向は、無視することのできな事実である。この事実が、埼玉古墳群の展開と不可分の関係にあったことは繰り返し述べている。

在地首長層間の紐帯の実態を示す埴輪の生産と供給体制、それを前提付ける土師器の生産と供給体制の存在は、互いに不可分の関係にあり、その発達は、集落内部の発達と首長層間の交通関係に求められることを確信する。

本稿をまとめるに当り、以下の方々にお世話になった。記して礼に代えたい。

新井 端・斎藤国夫・坂口 一・澤出見越・寺社下博・鈴木徳雄・塚田良道・坂井秀弥
酒井清治・森田克行・高橋一夫・鳥羽正之・平田重之・宮瀧交二・山崎 武・渡辺 一

註

- 1 かつて古墳時代後期の集落論の展開は、集落内の個々の遺構（竪穴式住居跡等）の単独的調査では不十分で、集落の全体に及ぶ調査の必要性が解かれてきた。その後大規模開発に伴い、台地全体や周辺の耕地に及ぶ調査が行なわれ、集落内の面的な構造が明らかになってきた。一方、黒井峰遺跡や中筋遺跡など、火山灰や火砕礫に覆われた遺跡が調査され、一集落の具体的状況が解明されつつある。しかし各地で行なわれた大規模発掘をもとに、集落を横に結ぶ研究は、それほど進展したとはいえない。ここでは新屋敷東遺跡を中心とした北武蔵の集落の横の関係を、蓄積された資料をもとに再検討する。
- 2 作業前提としての地域区分は、便宜的に令制下の郡をもとに考えることとする。

児玉一加美・那珂・児玉

大里一大里・男衾・榛沢

埼玉・埼玉・足立

- 3 古墳時代後期の集落の占地は、以下の特徴を与えられる。すでに古墳時代前期（5世紀）までに水稲可耕最適地（簡便な用排水路の設置によって、耕作を可能とする場所）の開発が終了し、畑作・桑作をふくめた耕地の拡大を開始していた。この耕地の拡大は、水利を媒体に数集落の共同による大規模開発である。新生集落の空閑地への出現は、耕地の拡大を前提と考えられる。その点で古墳時代後期集落は、水利権を左右する在地酋長層の主導による計画村落と考えられる（石母田 1971）。ただし後の条里制や在園の成立、柵の設置等にもなう国家権力や貴族層が主導し、編成した「計画村落」（直木 1965）とは異なり、在地内の諸関係の新展開として出現してくる集落である。そこでここでは「古墳時代後期型の計画村落」と呼ぶ。
- 4 実長が、集落間の社会的な距離を示さないことは百も承知のうえで、敢えて距離による分析を試みたのは、水利の徭役賦課権や、耕地開発・新生集落の興起に伴う労働力の提供が、隣接する集落間のネットワークから成立するためと考えたからである。
- 5 新屋敷東遺跡の分析による第1期は、さらに細かく分類が可能だが、資料的に少ないためここでは敢えて大まかな分類にとどめた。古墳時代後期的な土器組成の出現段階に当っては、隣接する集落遺跡の上敷免遺跡で、良好な資料が見られるためこちらの分析に譲りたい。現在、整理事業中。
- 6 新屋敷東遺跡は、第IV期に衰退的傾向というよりも、壑穴式住居跡の長軸方向の統一・等間隔的占地など計画性に富み、既存の集落の「再編成」とすることが妥当である。
- 7 この傾向は、千葉県日秀西遺跡で顕著に確認されている。日秀西遺跡では、鬼高期の集落を移管し、相馬郡衛の正倉を編成している。
- 8 山崎武氏ご教示。（山崎 1987）。
- 9 第607図の土師器は、以下の遺跡から出土している。1 埼玉5号墳、2・3 埼玉瓦塚古墳、4・5 埼玉鉄砲山古墳、6・7 鴻巣市出塚1号墳 9、8～10 行田市小針遺跡、11・12 鴻巣市笠原古墳群、
- 10 （財）埼玉埋蔵文化財調査事業団1989年発掘調査。1990年度整理。
- 11 田中琢氏の言う「木の葉」手法に共通する。また橋本澄朗氏による木の葉底の研究は、土器生産の季節性や生産集団の問題等、大いに示唆に富むものである。
- 12 田中 1991bで下総型とした一群である。以後、代表的な遺跡である大谷口遺跡の名前を使い、執筆していくこととする。
- 13 壑穴の資料は、全国各地からとくに古墳を中心に確認されている。しかし古墳時代の横櫛の例はきわめて少ない。ムネの部分が、半円形となる新屋敷東遺跡の石製模造品のタイプは、木更津市金鈴塚古墳から出土している木製品があるだけである。また飛鳥川原寺下層から出土した横櫛は、奈良時代のそれへ続くムネの水平なタイプである。湯殿神社祭祀跡の調査からは、横櫛は、8世紀の土器が混入していたことから不明瞭であった。しかし新屋敷東遺跡の資料を含め考察する限りでは、ムネが半円形のタイプの横櫛は、少なくとも7世紀前葉まで遡る可能性が見い出せた。

参考文献

- 赤熊浩一 1986『暗文土器の分析—8世紀を中心として—』『古井戸・将監塚』（財）埼玉県埋文事業団
- 浅香年木 1971『日本古代手工業史の研究』叢書歴史学研究 法政大学出版局
- 甘粕 健 1970『武蔵国造の反乱』『古代の日本』7—関東—角川書店
- 飯塚卓二 1986『埼玉古墳群の出現と毛野地域政権』『研究紀要』3（財）群馬県埋文事業団
- 飯塚武司 1984『北武蔵における埴輪生産の展開』『法政考古学』第9集 法政考古学会
- 石井清司・伊賀高弘 1991『京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪産』『考古学ジャーナル』第331号
- 石岡豪雄・浅野晴樹 1981『六反田遺跡』埼玉県歴史資料館
- 石田広美 1983『下総における8世紀代の搬入土器』『房総における奈良・平安時代の土器』
- 石戸啓夫 1984『大原太道跡出土の畿内系土器器について』『大原太道跡の発掘調査』青山学院大学
- 石部正志・堀田啓一 1965『古墳後期の手工業製品の流通について』『ヒストリア』42号
- 石母田正 1956『古代社会と物質文化—「形」の組織について—』『古代末期政治史序説』下巻
- 石母田正 1971『日本の古代国家』岩波書店
- 磯崎 一 1980『土器生産に関する二、三の問題』『飯沼神社前遺跡—本松古墳』埼玉県遺跡調査会
- 井上唯雄 1982『歌舞伎遺跡における土器の編年』『歌舞伎遺跡』（財）群馬県埋文事業団
- 井上 肇 1980『7世紀の埴形土器について』『紀要』第6号 埼玉県立博物館
- 今井賢一・金子郁容 1988『ネットワーク組織論』岩波書店
- 上野純司 1985『嵐高式の細分をめぐって』『論集日本原始』
- 上野純司 1980『千葉県安孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 大江正行 1988『後田遺跡Ⅱ』（財）群馬県埋文事業団
- 大木伸一郎 1985『出土土器について』『小角田前遺跡』（財）群馬県埋文事業団
- 大場啓雄・小沢国平 1963『新発見の祭祀遺物』『史跡と美術』第338号
- 大町 健 1986『日本古代国家と在地官長制』校倉書房
- 小笠原好彦 1989『民衆のムラ』『古墳時代の王と民衆』古代史復元6
- 小川貴司・寺田良喜 1985『等々力溪谷2号横穴にみる交流について』『古代』第78・79号
- 小川良祐 1986『加 結語』『埴の上遺跡』（財）埼玉県埋文事業団
- 鹿沼栄輔 1990『長根羽田倉遺跡』（財）群馬県埋文調査事業団
- 金子真土 1982『北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について—』『研究紀要』第4号 埼玉県歴史資料館
- 神谷佳明 1987『暗文土器』『下東西遺跡』（財）群馬県埋文事業団
- 亀井正道 1988『海と川の祭り』『古代を考える—沖ノ島と古代祭祀—』吉川弘文館
- 川口 潤 1989『本郷前東』（財）埼玉県埋文事業団
- 菊地康明編 1961『律令制祭祀論考』塙書房
- 榎木謙周 1989『律令期における手工業発展の特質』『北陸の古代手工業生産』
- 久保哲三 1986『古墳時代における毛野・埴』『岩波講座 日本考古学』5—文化と地域性—岩波書店
- 栗原文蔵・駒宮史朗 1990『行田市陣場遺跡の調査』『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- 群馬県考古学談話会地 1985『埴輪の変遷』第6回三県シンポジウム

- 鴻巣市 1989『鴻巣市史』資料編1 考古
- 小林敏夫 1977『埴町下瀬名における遺跡の調査』『まえあし』22号 東国古文化研究所
- 古墳時代土器研究会 1984『古墳時代土器の研究』
- 小森哲也 1986『烏森遺跡』栃木県文化振興事業団
- 埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1985『鉄砲山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第2集
- 埼玉県教育委員会 1985『愛宕山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第3集
- 埼玉県教育委員会 1986『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第4集
- 埼玉県教育委員会 1987『鉄砲山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集
- 埼玉県教育委員会 1988『丸基山古墳・埼玉1～7号墳・行軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集
- 埼玉県教育委員会 1989『奥の山古墳・中の山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集
- 斎藤國夫 1984『埼玉古墳群をめぐる諸問題』『原始古代社会研究』6 原始古代社会研究会
- 斎藤國夫 1990『まとめ』『小針遺跡』—第3次調査報告書—行田市遺跡調査会
- 酒井清治 1986『北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜について』『研究紀要』埼玉県歴史資料館
- 酒井清治 1989『古墳時代の須恵器生産の開始と展開』『研究紀要』第11号 埼玉県歴史資料館
- 坂口 一 1986『古墳時代後期の土器編年』『群馬文化』208号 群馬地域文化研究協議会
- 坂口 一 1990『5世紀代における集落の拡大現象』『古代文化』第42巻第2号 (財)古代学協会
- 坂本美夫 1981『甲斐型の土器について』『シンポジウム壺状杯』
- 佐久間豊 1983『斜格子状暗文杯を有する土師器杯について』『史館』第15号
- 桜岡正信 1989『群馬県内出土の暗文土器について』『群馬県史研究』第30号
- 澤出晃越 1985『上敷免遺跡(第2次)・上敷免北遺跡』深谷市教育委員会
- 澤出晃越 1991a『深谷市内遺跡Ⅲ』深谷市教育委員会
- 澤出晃越・古池普祿 1991b『明戸南部遺跡群Ⅰ』深谷市教育委員会
- 塩野 博 1978『馬室埴輪窯跡群』埼玉県教育委員会
- 塩野 博・山崎武 1991『生出塚と馬室埴輪製作跡』『考古学ジャーナル』第311号
- 白石真理 1991『馬渡埴輪製作遺跡・小幡北山埴輪製作遺跡』『考古学ジャーナル』第311号
- 榎山林勉 1991『律令期直前の祭祀』『律令制祭祀論考』塙書房
- 榎山林勉 1981『石製模造品』『神道考古学講座』第三巻 雄山閣
- 鈴木徳雄 1984『いわゆる北武蔵系土師器杯の動態』『土曜考古』第9号
- 高梨 修 1986『古代集落の堅穴住居址に大量廃棄された土器群が意味するもの』『法政史論』第14号 法政大学大学院日本史学会
- 高橋一夫 1979『計雨村落について』『東国古代集落の検討』古代を考える会
- 田口一郎 1988『Ⅱ 調査成果と提訴された問題』『海行A・B遺跡』箕郷町教育委員会
- 田中広明 1989a『上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産』『東国土器研究』第2号
- 田中広明 1989b『緑泥片岩を運んだ道』『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1991a『古墳時代後期の土師器生産と集落への供給』『埼玉考古論集』

- 田中広明 1991b 「東国の在地産暗文土器」『埼玉考古』第28号
- 田中広明 1992 「武蔵地域の泉高式土器」『考古学ジャーナル』第342号
- 田中 琢 1987 「古代・中世窯業生産の地域的特質—(4)畿内—」『日本の考古学』VI河出書房新社
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
- 辻本和美 1991 「6世紀後半の土器粗製からみた石本遺跡」『京都府埋蔵文化財論集』第2集
- 堤 隆 1987 「畿内系暗文を有する土師器坯について」『佐久考古通信』第41号
- 出原惠三 1990 「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』第36巻第4号
- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』第5号
- 外山政子 1991 「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ッ寺Ⅱ遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 外山政子 1990 「羽田倉遺跡の煮湯具の観察から」『長根羽田倉遺跡』(財)群馬県埋文事業団
- 直木孝次郎 1965 「古代国家と村落」『ヒストリア』第42号
- 中島 宏 1981 「清水谷・安光寺・北坂」(財)埼玉埋文事業団
- 中島洋一 1991 「北大竹遺跡(若小玉古墳群)の調査」『第24回 遺跡発掘調査報告会—発表要旨—』埼玉考古学会・埼玉会館、(財)埼玉県埋文事業団・埼玉県教育委員会
- 中村倉司 1979 「児玉郡における泉高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会
- 中村倉司 1984 「器種組成の変遷と時期区分」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 中村倉司 1987 「下辻遺跡」(財)埼玉県埋文事業団
- 中村倉司 1989 「白山遺跡」埼玉県教育委員会
- 並木高換 1977 『生産管理』丸善株式会社
- 奈良国立文化財研究所 1973 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」
- 西山 元 1963 「善光寺平の土師器」『大学紀要』第8集 和洋女子大学
- 西 弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
- 西山克己 1884 「東国出土の暗文を有する土器(上)・(下)」『史館』第17・18号史館同人
- 日本村落史講座編集委員会 1991 「日本村落史講座」4政治Ⅰ—原始・古代・中世—雄山閣
- 能登健・石坂茂・徳江秀夫・小島敦子 1983 「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』第35巻4号
- 能登健・内田恵治 1985 「峰岸遺跡—里棲み集落の調査—」新里村教育委員会
- 能登 健 1986 「里棲み集落の研究」『内陸の生活と文化』
- 橋本博文 1981 「埴輪研究の動静を遡って」『歴史公論』第63号
- 橋本澄朗 1987 『稲荷原・大野原』
- 長谷川厚 1987・1988 「古墳時代後期土器の研究(1)・(2)」『神奈川考古』第23号・第24号
- 長谷川厚 1989 「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』第2号
- 長谷川厚 1991 「土師器の編年 7 関東」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器 雄山閣
- 原 明芳 1990 「信濃における平安時代の黒色土器」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 原田信男 1987 「食事の体系と共食・饗宴」『日本の社会史』第8巻 岩波書店
- 原秀三郎 1973 「日本古代国家論の理論的前提」『歴史学研究』第400号
- 梁木 誠 1987 『稲荷塚・大野原』栃木県教育委員会

- 林部 均 1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻1号
- 比田井克仁 1985「7世紀における多摩地方の土器様相」『研究論集』Ⅲ (財)東京都埋文センター
- 榎田健司 1978「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻3号
- 房総古文化研究会 1987「房総における古墳時代後期土師器の年代と地域性」総括シンポジウム
- 堀口万吉 1981「関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地盤変動」『地質学論集』第20号
- 堀口万吉・角田史雄・町田明夫・屋間明 1985「埼玉県深谷バイパス遺跡で発見された古代の“噴砂”について」『埼玉大学教養部紀要(自然科学編)』第21巻
- 堀口万吉 1986「埼玉県北部で見られる古代の噴砂について」『歴史地震』第2号 東京大学地質研究所
- 増田逸朗 1970「大里郡妻沼町発見の土師器」『埼玉考古』8号 埼玉考古学会
- 増田逸朗 1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往來社
- 増田一祐 1987「社員路遺跡」本庄市教育委員会
- 水口由紀子 1989a「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 水口由紀子 1989b「古墳時代後期における土師器の一分析」『東国土器研究』2
- 宮田 毅 1981「太田市駒形神社埴輪窯跡城輪集積場」『考古学ジャーナル』第331号
- 宮藤文二 1989「古代村落の飲食器」『立教日本史論集』第4号 立教大学日本史研究会
- 茂木由行 1984「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬考古学談話会
- 茂木由行 1987「群馬県における鬼高式土器の編年Ⅱ」『群馬文化』211号 群馬県地域文化研究協議会
- 森田克行 1991「新池埴輪製作遺跡」『考古学ジャーナル』第331号
- 山崎 武 1981『生出土塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会
- 山崎 武 1987『鴻巣市遺跡群Ⅱ-生出土塚遺跡A地点-』鴻巣市教育委員会
- 大和 修 1983『若宮台』(財)埼玉県埋文事業団
- 山中敏史 1984「国衙機構の構造と変遷」『講座日本歴史』2 岩波書店
- 山本 晴 1991「利根川南岸地域の前方後円墳の展開」『専修考古学』久保哲三先生追悼号
- 横山浩一 1986「土器生産」『日本の考古学』Ⅴ 古墳時代下 河出書房新社
- 義江彰夫 1972「律令制下の村落祭祀と公出挙制」『歴史学研究』380号
- 若松良一 1990「造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第3号 さきたま資料館
- 若松良一・山川守男・金子彰男 1987『叢訪山33号墳の研究』
- 和島純一・甘粕健 1958「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』第1巻